

レ・ミゼラブル

LES MISERABLES

第五部 ジャン・ヴァルジャン

青空文庫

第一編 市街戦

一 サン・タントアーヌとタンプルとの両防寨ぼうさい

社会の病根を観察する者がまずあげ得る最も顕著な二つの防寨は、本書の事件と同時代のものではない。その二つの防寨は、異なつた二つの局面においていずれも恐るべき情況を象徴するものであつて、有史以来の最も大なる市街戦たる一八四八年六月の宿命的な反乱のおり、地上に現われ出たのである。

時として、主義に反し、自由と平等と友愛とに反し、一般投票に反し、万人が万人を統べる政府に反してまでも、その苦悩と落胆と欠乏と激昂と困窮と毒氣と無知と暗黒との底から、絶望せる偉人ともいふべき賤民せんみんは抗議を持ち出すことがあり、下層民は民衆に戦いをいどむことがある。

無頼の徒は公衆の権利を攻撃し、愚衆は良民に反抗する。

それこそ痛むべき争闘である。なぜかなれば、その暴行のうちには常に多少の権利があり、その私闘のうちには自殺が存するからである。そして無頼の徒といひ賤民といひ愚衆といひ下層民という侮辱的なそれらの言葉は、悲しくも、苦しむ者らの罪よりもむしろ統治する者らの罪を証し、零落者らの罪よりもむしろ特権者らの罪を証明する。

しかして吾人は、それらの言葉を発するに悲痛と敬意とを感じざるを得ない。哲学はそれらの言葉に相当する事実の底を究むる時、悲惨と相並んで多くの壮大さがあるのをしばしば見いだすからである。アテネは一つの愚衆であつた。無頼の徒はオランダを造つた。下層民は一度ならずローマを救つた。そして賤民せんみんはイエス・キリストのあとに従つていた。

いかなる思想家といえども、時として下層の偉観をながめなかつた者はない。

聖ゼロームが心に向けていたのは、疑いもなくこの賤民へであつた。「都市の泥濘でいねいこそ地の大法なり」と神秘的な言葉を発した時、彼の心が考えていたのは、使徒や殉教者らが輩出したそれらの貧民や浮浪の徒やみじめな者らのことをであつた。

苦しみそして血をしぼつてるこの多衆の激怒、おのれの生命たる主義に反するその暴行、権利に反するその暴挙、などは皆下層民の武断政略クーデターであつて、鎮圧されなければならぬ

ものである。正直なる者はそういう鎮圧に身をささげ、多衆を愛するがゆえにかえつてそれと戦う。しかしながら彼は、対抗しながらもいかにそれを宥ゆうじよ恕すべきものであるかを感じ、抵抗しながらもいかにそれを貴とうとんでいることであろう！ おのれのなすべきところをなしながら、足を引き止むるようなある不安な何物かを感じる稀有けうな時期は、かかるころから到来する。人は固執する、固執しなければならぬ。しかし本心は満足しながらも悲しんでいる。そして義務の遂行のうちに、ある痛心の情が交じってくる。

直ちに言を進めるが、一八四八年六月の暴動は特殊の事実であつて、ほとんど歴史哲学のうちにおいて他と同類に置くことのできないものである。吾人が上に発した言葉はすべて、おのれの権利を要求する労働の聖なる焦慮が感ぜらるるこの異例の暴動に関しては、排除しなければならぬ。この暴動を人は鎮圧しなければならなかつた、それは義務であつた、なぜならこの暴動は共和を攻撃したから。しかし根底においては、一八四八年六月は何であつたか。それは民衆のおのれ自身に対する反抗であつた。

主題から目を離しさえしなければ、決して岐路に陥るものではない。それでちよつとの間、上にあげたまつたく独特な二つの防ぼうさい寨に読者の注意を向けさせることを、ここに許していただきたい。その二つの防寨こそ、一八四八年六月の反抗の特質を示すものである。

一つはサン・タントアーヌ郭外の入り口をふさいでいた、一つはタンブル郭外を防護していた。六月の輝く青空の下にそびえた、この内乱の恐るべき二つの傑作は、見る者に忘るべからざる印象を与えた。

サン・タントアーヌの防寨は雄魁ゆうかいなものだった。高さは人家の三階に及び、長さは七百尺に及んでいた。その郭外の広い入り口すなわち三つの街路を、一方から他方までふさいでいた。凹凸おうとつし、錯雑さくさつし、鋸形のこぎりをし、入り組み、広い裂け目を銃眼とし、それぞれ稜角りやうかく堡ほうをなす多くの築堤でささえられ、そこここに突起を出し、背後には人家の大きな

二つの突出部が控えていて、既に七月十四日（一七八九年）を経てきたその恐るべき場所の奥に、巨大なる堤防のようにそびえていた。そしてこの大親たる防寨の後ろには、各街路の奥に十九の小防寨が重なっていた。その郭外のうちにある広大なる半死の苦しみは、困窮が最後の覆滅を望むような危急な瞬間に達していることが、防寨を一目見ただけで感ぜられた。しかも防寨は何でできていたか。ある者の言によれば、七階建ての人家を三つことさらに破壊して作ったものだといひ、ある者の言によれば、あらゆる憤怒の念が奇蹟的に作り上げたものだという。そして憎悪ぞうおのあらゆる手段をもって築かれた痛むべき光景、倒壊の趣を持っていた。だれがそれを建設したか、とも言い得らるれば、だれがそれを破

壊したか、とも言い得られた。沸騰せる熱情が即座に作ったものであった。扉、鉄門、庇、
かまち 框、こわれた火鉢、ひばち 亀裂した鍋、きれつ すべてを与え、すべてを投げ込み、すべてを押し入れこ
ろがし掘り返し破壊しくつがえし打ち砕いたのである。舗石、泥土、梁、鉄棒、ぼろ、
ガラスの破片、腰のぬけた椅子、青物の芯、錠前、屑、および呪詛の念などから成つてい
た。偉大であり、また卑賤であつた。渾沌たるものが即座に作った深淵であつた。大
塊に小破片、引きぬかれた一面の壁にこわれた皿、あらゆる破片の恐るべき混和、シシフ
オス（訳者注 地獄の中にて絶えず大石を転がす刑に処せられし人―神話）はそこにおの
れの岩を投げ込み、ヨブはそこにおのれの壇の破片を投げ込んでいた。要するにまったく
恐ろしいものだつた。浮浪の徒の堡壘だつた。くつがえされた多くの荷馬車はその斜面を
錯雑さしていた。大きな大八車が一つ、車軸を上にして横ざまに積まれて、紛糾した正面
に一つの傷痕をつけてるかのようだつた。乗り合い馬車が一つ、砦の頂にむりやりに引
き上げられ、あたかも荒々しい砦の築造者らが恐怖に悪戯を添えんと欲したかのよう
に、その轆をいたずらにある空中の馬に差し出してるかと思われた。その巨大な堆積、暴動の
積層は、あらゆる革命がオツサ山とペリオン山とを積み重ねたものかと（訳者注 ジュピ
テルに反抗した巨人らが天に攻め上らんとするために重ねたテッサリーの二つの山）見る者の心

に思わせた。八九年（一七一）の上に積み重ねた九三年（一七一）、八月十日（一七九二年）の上に積み重ねた共和熱月九日（一七九四年七月二十七日）、一月二十一日（一七九三年）の上に積み重ねた共和霧月十八日（一七九九年十一月九日）、共和草月（一七九五年五月）の上に積み重ねた共和檣月（一七九五年十月）、一八三〇年の上に積み重ねた一八四八年であった。場所の要害はその努力にふさわしいものであり、防寨はバステューの牢獄の消えうせた場所に出現して恥ずかしくないものであった。もし大洋が堤防を築くとするならば、おそらくかかる防寨を築くであろう。狂猛な怒濤の跡はその畸形な堆積の上に印せられていた。しかもその怒濤は、下層の群集だったのである。その喧囂の状の化石が見えるかと思われた。急激な進歩の暗い大きな蜂の群れがおのれの巢の中で騒いでるのが、この防寨の上に聞こえるかと思われた。それは一つの藪であったか、酒神の祭であったか、それとも一つの要塞であったろうか。眩惑の羽ばたきによって作られたものかと思われた。その角面堡のうちには一種の塵芥の山があり、その堆積のうちには一種のオリンポスの殿堂があった。その絶望に満ちた混乱のうちに見らるるものは、屋根の椽木、色紙のはられた屋根部屋の断片、砲弾を待ち受けて物の破片のうちに立てられるガラスのついた窓の扉、引きぬかれた煙筒、戸棚、テーブル、腰掛け、上を下への

乱雑な堆積、それから乞食こじきさえも拒むような無数のがらくた、そのうちには狂猛と虚無とが同時にこもっていた。民衆のぼろ屑くず、木材と鉄と青銅と石とのぼろ屑であつて、サン・タントアーヌ郭外が巨大な箒の一扫きでそれらを戸口に押しやり、その悲惨をもつて防禦となしたかのようなだつた。首切り盤のような鉄塊、引きち切られた鎖、絞首台の柱のような角材、物の破片の中に横倒しに置かれてる車輪、それらのものはこの無政府の堂宇に、民衆が受けてきた古い苛責かしゃくの陰惨な相貌そうぼうを交じえさしていた。実にこのサン・タントアーヌの防禦は、すべてのものを武器としていた。内乱が社会の頭に投げつけ得るすべてのものは、そこに姿を現わしていた。それは一つの戦いではなくて、憤怒の発作だつた。その角面堡をまもつてるカラビン銃は、中に交じつた数個の霰弾銃さんだんじゅうとともに、瀬戸物の破片や、骨片や、上衣のボタンや、また銅がはいつてゐるために有害な弾となる寢室のテーブルの足についてゐる小車輪までも、やたらに発射した。防禦全部がまったく狂乱してゐた。名状し難い騷擾そうじょうの声を雲の中まで立ち上らしてゐた。ある瞬間には、軍隊に戦いをいどみながら、群集と騷乱とでおおわれてしまった。燃ゆるがような無数の頭が、その頂をおおい隠した。蟻ありのような群集がいっぱいになつてゐた。その頂上には、銃やサーベルや棍棒こんぼうや斧おのや槍やりや劍銃などがつき立つてゐた。広い赤旗が風にはためいてゐた。号

令の叫び、進撃の歌、太鼓の響き、婦人の泣き声、餓死の暗黒な哄笑、などがそこに聞かれた。防寨はまったく常規を逸したもので、しかも生命を有していた。あたかも雷獣の背のように電光の火花がほとぼり出ていた。神の声に似た民衆の声がうなっている。その頂は、革命の精神から発する暗雲におおわれていた。異常な荘厳さが、巨人の屑籠をくつがえしたようなその破片の堆積から発していた。それは塵芥の山であり、またシナイの山（訳者注 モーゼがエホバより戒律を受けし所）であった。

上に言つたとおり、この防寨は革命の名においてしかも革命を攻撃したのである。偶然であり、無秩序であり、狼狽であり、誤解であり、未知数であったこの防寨は、立憲議会と民衆の大権と普通選挙と国民と共和とを向こうにまわしたのである。それはマルセイエーズ（フランス国歌）にいどみかかるカルマニヨールの歌（革命歌）であった。

狂乱せるしかも勇壮なる挑戦であった。なぜなれば、この古い郭外は一個の英雄だからである。

郭外と角面堡とは互いに力を合わせていた。郭外は角面堡の肩にすがり、角面堡は郭外に身をささえていた。広い防寨は、アフリカの諸將軍の戦略をも拉ぐ断崖のごとく横たわっていた。その洞窟、その瘤、その疣、その隆肉などは、言わば顔を擧めて、硝煙

の下に冷笑していた。霰弾さんだんは形もなく消えうせ、榴弾りゅうだんは埋まり没しのみ込まれ、破裂弾はただ穴を明け得るのみだった。およそ混沌こんとんたるものを砲撃しても何の効があろう。戦役の最も荒々しい光景になれていた各連隊も、猪いのししのごとく毛を逆立て山のごとく巨大なその角面堡かくめんぼうの野獣を、不安な目でながめたのである。

そこから約四半里ばかり先、シャトー・ドーの近くで大通りに出てるタンプル街の角かどで、ダルマーニュという商店の少しつき出た店先から思いきつて頭を出してみると、遠くに、運河の向こうに、ベルヴィルの坂道を上つてる街路の中、坂道を上りきった所に、人家の三階の高さに達する不思議な障壁が見られた。それはあたかも左右の軒並みを連ねたがようで、街路を一挙にふさぐために最も高い壁を折り曲げたがようだった。しかしその壁は、実は舗石しきいしで築かれていたのである。まっすぐで、規則正しく、冷然として、垂直になつており、定規をあて墨繩すみなわを引き錘鉛すいえんをたれて作られたものようだった。もとよりセメントは用いられていなかったが、しかもローマのある障壁に見らるるように、そのため建築上の強固さは少しも減じていなかった。高さから推してまた奥行も察せられた。上層と地覆ちふくとはまったく数学的な平行を保っていた。灰色の表面には所々に、ほとんど目につかないくらいの銃眼の列が黒い糸のように見えていた。各銃眼の間には一定の等しい距離

が置かれていた。街路には目の届くかぎり人影もなかった。窓も扉も皆しめ切つてあつた。そして奥に立っている防壁のために、あたかも袋町のようになつていた。防壁は不動のまま静まり返つていた。何らの人影も見えず、何らの音も聞こえなかつた。一つの叫び声もなく、一つの物音もなく、息の音さえもなかつた。まったく一つの墳墓だつた。

六月のまぶしい太陽は、その恐るべき物の上に一面の光を浴びせていた。

これが、タンブル郭外の防寨であつた。

この場所に行つてそれをながむると、最も豪胆な者でもその神秘的な出現の前に考え込まざるを得なかつた。それはよく整い、よく接合し、鱗形に並び、直線をなし、均斉を保ち、しかも凄惨な趣があつた。学理と暗黒とがこもつていた。防寨の首領は、幾何学者かもしくは幽鬼かと思われた。人々はそれをながめ、そして声低く語り合つた。

時々、兵士が将校かあるいは代議士かだれかが、偶然その寂しい大道を通りかかると、鋭いかすかな音がして、通行者は負傷するか死ぬかして地に倒れた。もし幸いにそれを免れる時には、閉ざされた雨戸か、素石の間か、壁の漆喰かの中に、一発の弾がはいり込むのが見られた。時とするとそれはビスカイヤン銃のこともあつた。防寨の人々は多く、一端を麻屑と粘土とでふさいだ鑄鉄のガス管二本で、二つの小さな銃身をこしらえてい

た。ほとんど火薬をむだに費やすことはなかった。弾はたいてい命中した。そこここに死体が横たわって、舗石しきいしの上には血がたまっていた。また著者は、一匹の白い蝶ちようが街路を飛び回ったことを記憶している。さすがに夏の季節だけは平然としていた。

付近の大きな門の下には、負傷者がいっぱいはいっていた。

そこでは、姿を隠してるだれかから常にねらわれるような感があった。明らかに街路中どこでもねらい打ちにされるらしかった。

タンブル郭外の入り口に運河の円橋がこしらえてる驢馬ろばの背中ほどの空地の後ろに、攻撃縦列をなして集まつてる兵士らは、そのものすごい角面堡かくめんほうを、その不動の姿を、その冷然たる様を、しかも死を招くその場所を、まじめな考え込んだ様子で偵察ていさつしていた。ある者らは、帽子が向こうに見えないように注意しながら、穹窿きゆうりゅうけい形の橋の上まで腹ばいになって進んでいった。

勇敢なるモンテナール大佐は、身を震わしながらその防寨を嘆賞した。彼はひとりの代議士に言った。「うまく築いたものだ！ 一つの不ぞろいな舗石もない。まるで磁器ですぬ。」その時、一発の弾は、彼の勲章を打ち砕いた。彼は倒れた。

「卑怯者ひきょうものめ！」とある者は言った、「姿を現わせ、見える所に出てこい。それができな

いのか。隠れてばかりいるのか！」

しかしこのタンプル郭外の防寨は、八十人の者に守られ一万の兵に攻撃されて、三日の間持ちこたえた。四日目に、ザアチャーやコンスタンティーヌの都市になされたのと同様の方法が用いられ、人々は人家をうがち、または屋根に伝わり、そしてついに防寨は占領された。八十人の「卑怯者」らのうちひとりとして逃げようとはしなかった。皆そこで戦死を遂げた。ただひとり首領のバルテルミーだけは身を脱したが、彼のことはすぐ次に述べるとおりでである。

サン・タントアーヌの防寨は雷電のはためきであり、タンプルの防寨は沈黙であった。この二つの角面堡の間には、獐猛と凄惨との差があった。一つは顎のごとく、一つは仮面のごとくであった。

この六月の巨大な暗黒な反乱が一つの憤怒と一つの謎とでできていたとすれば、第一の防寨のうちには竜が感ぜられ、第二の防寨の背後にはスフィンクスが感ぜられた。

この二つの砦は、クールネとバルテルミーというふたりの男によって築かれたものである。クールネはサン・タントアーヌの防寨を作り、バルテルミーはタンプルの防寨を作った。どちらの防寨も、築造者の面影を帯びていた。

クールネは高いたいく体軀たいくの男であつた。大きな肩、赤い顔、力強い拳こぶし、大胆な心、公正な魂、まじめな恐ろしい目をそなえていた。勇敢で、元気で、激しやすく、猛烈だつた。最も眞実な男であり、最も恐るべき勇士だつた。戦争、争鬪、白兵戦、などは彼の固有の空気であり、彼の気を引き立たした。かつて海軍士官だつたことがあり、その身振りや声をもても、大洋から出てき暴風雨を経てきたことが察せられた。彼は戦いのうちにもなお暴風をもたらしした。神性を除いてはダントンのうちにヘラクレス的なものがあつたように、天才を除いてはクールネのうちにダントンのようなものがあつた。

バルテルミーは、やせた、虚弱な、色の青い、寡黙かもくな男で、一種の悲壯な浮浪少年であつた。ある時ひとりの巡査からなぐられて、その巡査をつけねらい、待ち受け、殺害し、そして十七歳で徒刑場に送られた。徒刑場から出てきた彼は、右の防寨ぼうさいを作つたのである。

その後彼らはふたりとも追放されてロンドンに亡命していたが、何の因縁か、バルテルミーはクールネを殺した。痛ましい決闘だつた。その後しばらくして、色情のからんだある秘密な事件に巻き込まれ、フランスの法廷は情状の酌量を認むるがイギリスの法廷は死をしか認めないある災厄のうちに、バルテルミーは死刑に処せられた。一個の知力をそな

え確かに剛毅ごうぎな人物でありまたおそらく偉大な人物だったかも知れないこの不幸な男は、社会の痛ましい制度の常として、物質上の欠乏のためにまた精神上の暗黒のために、フランスにおいて徒刑場より始め、イギリスにおいて絞首台に終わったのである。バルテルミ―はいかなる場合にも、一つの旗をしか掲げなかった。それは黒い旗であった。

二 深淵しんえん中の会談

暴動の陰暗な教育を受くること満十六年に及んだので、一八四八年六月は一八三二年六月よりもはるかに知力が進んでいた。それでシャンヴルリー街の防寨は、上に概説した二つの巨大な防寨に比ぶれば、一つの草案に過ぎず一つの胎児に過ぎなかった。しかし当時にあつては、それでも恐るべきものであつた。

マリユスはもはや何物にも注意を向けていなかったので、暴徒らはただアンジョーラひとりの監視の下に、暗夜に乗じて仕事をした。防寨は修繕されたばかりでなく、なお大きくされた。上の方へも二尺ほど高められた。舗石しきいしの中に立てられた鉄棒は、槍やりをつき立てたようだった。方々から持つてきて加えられたあらゆる種類の物の破片は、ますますそ

の外部を錯雑していた。いかにも巧妙に築かれた角面堡かくめんぼうで、内部は壁のごとく、外部は藪やぶのようだった。

城壁のように上に上つてる舗石の段は、再び築き直された。

人々は防寨ぼうさいを整え、居酒屋の下の広間を片付け、料理場を野戦病院となし、負傷者に繃帯ほうたいを施し、床ゆかやテーブルの上に散らかつてゐる火薬を集め、弾丸を鑄、弾薬をこしらえ、綿めん撒糸さんしを裂き、落ち散つた武器を分配し、角面堡の内部を清め、破片を拾いのけ、死体を運んだ。

死体はなお手中にあるモンデトウル小路のうちに積み重ねられた。その舗石はその後長い間まつかになつていた。戦死者のうちには、四人の郊外国民兵があつた。アンジョーラは彼らの軍服をわきに取つて置かした。

アンジョーラは二時間の睡眠を一同に勧めた。彼の勧告は命令に等しかった。けれどもその命に應じて眠つた者は、わずか三、四人に過ぎなかつた。ファイイーはその二時間のすきを利用して、居酒屋と向かい合つた壁の上に次のような銘を刻み込んだ。

民衆万歳！

その四文字は、素石の中に釘くぎで彫りつけたものであつて、一八四八年にもなお壁の上に

明らかに残っていた。

三人の女どもは、その夜間の猶予の間にもまったく姿を隠してしまった。ために暴徒らはいっそう自由な気持ちになることができた。

彼女らはやかくして、どこか近くの人家に投げ込んだのだった。

負傷者らの大部分は、なお戦うことができ、またそれを欲していた。野戦病院となった料理場の蒲団ふとんや藁わら 蓆むしろの上には、五人の重傷者がいたが、そのうちふたりは市民兵だった。市民兵は第一に手当を受けたのである。

下の広間のうちにはもはや、喪布をかけられてるマブーフと柱に縛られてるジャヴェルとのほかだれもいなかった。

「ここは死人の室だ。」とアンジョーラは言った。

室の内部、一本の蠟燭ろうそくがかすかに照らしてる奥の方に、死人のテーブルが横棒のようになつてその前に柱が立っていたので、立つてるジャヴェルと横たわつてるマブーフとは、ちようど大きな十字架のようになつて漠然ぼくぜんと見えていた。

乗り合い馬車の轆ながえは、一斉射撃いっせいしやげきのために先を折られたが、なお旗を立て得るくらいは立ったまま残っていた。

首領の性格をそなえていて口にするところを必ず実行するアンジヨウラは、戦死した老人の血にまみれ穴のあいてる上衣を轆の棒に結びつけた。

食事はいつさいできなかつた。パンも肉もなかつた。防寨ぼうさいの五十人の男は、やってきてからその時まで十六時間のうちに、居酒屋にあつたわずかな食物をすぐに食いつくしてしまつた。死守する防寨ぼうさいはすべて、一定の時を経れば必然にメデューズ号の筏いかだ（訳者注メデューズ号の難破者らが乗り込んで十三日間大洋の上を漂つていた筏）となるものである。人々は飢餓に忍従しなければならなかつた。サン・メーリーの防寨では、パンを求むる暴徒らにとり巻かれたジャンヌが、「食物！」と叫んでいる声に対して、「何で食物があるか、今は三時だ、四時には皆死ぬんだ、」と答えた。そういう悲壮な六月六日の日が、到来したばかりの時だつたのである。

もう食物を得ることができなかつたので、アンジヨウラは飲み物を禁じた。葡萄酒ぶどうしゆを厳禁して、ただブランデーだけを少し分配してやつた。

居酒屋あなぐらの窖あなぐらの中で、密封した十五本ばかりの壘びんが見いだされた。アンジヨウラとコンプフェールとはそれを調べてみた。コンプフェールは窖から出て来ながら言った。「初め香料品あきなを商つていたユシユルしい爺じいさんの昔の資本もとだ。」するとボシユエは言った。「本物の

葡萄酒ぶどうしゆに違いない。グランテールが眠つてるのは仕合わせだ。奴やつが起きていたら、なかこのまま放つておきはすまい。「種々不平の声をもらす者もあつたが、アンジョーラはその十五本の壘に最後の断案を下して、だれの手にも触れさせないで神聖な物としておくために、マブーフ老人が横たわつてるテールの下に並べさせた。

午前二時ごろ人数を調べてみると、なお三十七人いた。

夜は明けかかつてきた。舗石しきいしの箱の中に再びともしていた炬火たいまつを、人々は消してしまつた。街路から切り取つた小さな中庭のような防寨の内部は、やみに満たされて、払ふつぎ

暁ようの荒涼たる微明のうちに、こわれた船の甲板に似寄つていた。行ききする戦士の姿は、まつ黒な影のように動いていた。そしてその恐るべき闇やみの巢窟そうくつの上には、黙々たる幾階もの人家が青白く浮き出していた。更に上の方には、煙筒がほの白く立っていた。空は白とも青ともつかない微妙な色にぼかされていた。小鳥は楽しい声を立てながら空を飛んでいた。防寨ぼうさいの背景をなしている高い人家は、東に向いていたので、屋根の上に薔薇色ばらいろの反映が見えていた。その四階の軒窓には、殺された門番の灰色の頭髮が、朝の微風になぶられていた。

「炬火たいまつを消したのはうれしい。」とクールフェーラックはファイイーに言った。「風に揺

らめいてるあの光はいやでならなかった。まるで何かをこわがってるようだった。炬火の光というものは、卑怯者の知恵みたいなものだ。いつも震えてばかりいて、ろくに照らしもしないからね。」

曙あけぼのは小鳥を目ざめさせるとともに、人の精神をもさませる。人々はみな話しはじめた。

ジヨリーは樋との上をぶらついてる一匹の猫ねこを見て、それから哲学を引き出した。

「猫とはいかなるものか知ってるか。」と彼は叫んだ。「猫は一つの矯きよう正せい物ぶつだ。神様は鼠ねずみをこしらえてみて、やあこいつはしくじったと言って、それから猫をこしらえた。猫は鼠ねずみの正誤表だ。鼠ねずみプラス猫、それがすなわち天地創造の校正なんだ。」

コンブフェールは学生や労働者らに取り巻かれて、ジャン・ブルーヴェールやバオレルやマブーフやまたル・カブユクのことまで、すべて死んだ人々のことを話し、またアンジヨラの厳肅な悲哀のことを語っていた。彼はこう言った。

「ハルモディオスとアリストゲイトン、ブルツス、セラアス、ステファヌス、クロンウエル、シャーロット・コルデー、サント、なども皆、手を下した後に一時悲哀を感じたのだ。人の心はたやすく傷いたむものであり、人生は至って不思議なものである。公德のための殺害の場合でも、もしありとすれば救済のための殺害の場合でも、ひとりの者を仆たおしたという

悔恨の念は、人類に奉仕したという喜びの情より深いものだ。」

そして話は種々のことに飛んだが、やがてジャン・ブルーヴェールの詩のことから一転して、ゼオルジック（訳者注 ヴイルギリウスの詩）の翻訳者らの比較を試み、ローとクールナンとを比べ、クールナンとドリユーとを比べ、マルフライートルが訳した数節、ことにシーザーの死に関する名句をあげたが、そのシーザーという言葉から、話はまたブルツスの上に戻った。

「シーザーの覆滅は至当である。」とコンブフェールは言った。「キケロはシーザーにきびしい言葉を下したが、あれは正当だ。あの酷評は決して悪口ではない。ゾイルスがホメロスを嘲り、メヴィウスがヴィルギリウスを嘲り、ヴィゼがモリエールを嘲り、ポーブがセークスピヤを嘲り、フレロンがヴォルテールを嘲ったのは、昔からよくある嫉妬しつとと憎みからきたのである。天才は嘲ちやうしやう笑を受け、偉人は多少人から吠ほえらるるのが常である。しかしゾイルス輩とキケロとはまったく別者だ。キケロは思想による審判者である。あたかもブルツスが剣による審判者であるのと同じだ。僕に言わすれば、後者の審判すなわち剣によるものは好ましくない。しかし古代はそれを許していた。ルビコンを渡ったシーザーは、民衆から来るもろもろの地位をおのれから出るもののように人に授け、元老院に姿

を現わさず、エウトロピウスが言ったように、王のごときまたほとんど暴君のごときことを行なつた。そして彼は偉人であつたために、それだけ不幸ともまた幸とも言える。なぜなれば、彼が偉人であつただけにいつそうその教訓は高遠となつたから。しかし僕の目から見れば、彼が受けた二十三の傷は、イエス・キリストの額に吐きかけられた唾つばほどの痛切さを持たない。シーザーは元老院の議員らから刺されたが、キリストは下男らから侮辱され頬ほおを打たれた。侮辱がより大なるがゆえに、人は神を感じるのだ。」

積み重ねた舗しきいし石の上からそれらの会談者らを見おろしながら、ボシユエはカラビン銃を手にしたまま叫び出した。

「おお、シダテネオム、ミリノス、プロバリンテよ、エアンチデの三女神よ！ ああたれかわれをして、ラウリオムやエダプテオンのギリシヤ人のごとくに、ホメロスの詩を誦ずせしむる者があるか！」

三 光明と陰影

アンジヨールは偵察ていさつに出かけていた。彼は軒下に沿つてモンデトゥール小路から出て

行った。

ちよつとことわっておくが、暴徒らは皆希望に満ちていた。たやすく前夜の襲撃を撃退したので、夜明けの襲撃をも前もってほとんど軽蔑するような気になっていた。彼らはその襲撃を微笑しながら待ち受けていた。彼らはおのれの主旨を確信するとともに、成功をもはや疑わなかった。その上援兵もきつつあるに違いないと思っていた。彼らはそれをあてにしていた。光明的な樂觀をもつて前途を速断するのは、フランス戦士の力の一つである。彼らはきたらんとする一日を三つの局面に分かつて、それを確信していた。すなわち、朝六時には「かねて手を入れておいた」一個連隊が裏切ってくる、正午にはパリ市が立ち上がる、日没の頃には革命となる。

サン・メーリーの警鐘が前日絶えず鳴り続けているのが聞こえていた。それは、も一つの大きな防寨ぼうさい、すなわちジャンヌの防寨が、なお支持してる証拠であった。

それらの希望は、蜂はちの巣における戦いの騒音のように、一種の快活なまた恐ろしいささやきとなつて、人々の群れから群れへとかわされていた。

アンジョーラは再び姿を現わした。彼は外部の暗黒の中をひそかに驚わしのように翔かけり回つて戻ってきたのである。彼はしばし、両腕を組み片手を口にあてて、人々の喜ばしい話を

聞いていた。それから、しだいに白んでゆく曙あけぼのの色の中にいきいきした薔薇ばらのような姿で言った。

「パリーの全兵士が動員している、その三分の一はこの防寨ぼうさいに押し寄せてくるんだ。その上国民兵も加わっている。僕は歩兵第五連隊の帽子と国民兵第六連隊の旗とを見て取った。攻撃までには一時間ばかりの余裕しかない。人民の方は、昨日は沸き立っていたが、今朝は静まり返っている。今はもう待つべきものも希望すべきものもない。郭外も連隊も共にだめだ。われわれは孤立だ。」

その言葉は、人々の騒々しい話声の上に落ちかかって、蜂はちの巣の上に落ちてくる暴風雨の最初の一滴のような結果を生じた。皆口をつぐんでしまった。死の翔り回るのが聞こえるような名状し難い沈黙が、一瞬間続いた。

それはごくわずかの間だった。

群集の最も薄暗い奥の方から、一つの声がアンジョーラに叫んだ。

「よろしい。防寨を二丈の高さにして皆で死守しよう。諸君、死しかばね屍ばねとなっても抵抗しようではないか。人民は共和党を見捨てるとしても、共和党は人民を見捨てないことを、示してやろうではないか。」

その言葉は、すべての者の頭から個人的な心痛の暗雲を払い去った。そして熱誠な拍手をもって迎えられた。

右の言葉を発した男の名前は永久に知られなかった。それはある労働服を着た無名の男であり、見知らぬ男であり、忘れられた男であり、過ぎ去ってゆく英雄であつた。かかる無名の偉人は、常に人類の危機と社会の開闢かいびやくとに交じつていて、一定の時機におよんで断乎だんことして決定的な一言を発し、電光のひらめきのうちに一瞬間民衆と神とを代表した後、またたちまち暗黒のうちに消えうせるものである。

不屈の決心は、一八三二年六月六日の空気に濃く漂つていた。右のこととほとんど同時に、サン・メーリーの防寨ぼうさいのうちでは、暴徒らが次の喊声かんせいを上げた。それは史上にも残り、当時の判定録にもしるされたものである。「援兵が来ると否とは問うところでない！ われわれは最後のひとりまでここで戦死を遂げるんだ。」

読者の見るとおり、両防寨は實際上孤立してはいたが、精神は互いに通い合つていたのである。

四 五人を滅じひとりを加う

「死^{しかばね}屍の抵抗」を宣言した無名の男が、共通の魂の言葉を発した後、一同の口から何とも言えぬ満足した恐るべき叫びが出てきた。その意味は沈痛であつたが調子は勇壮であつた。

「戦死万歳！ 全員ここにふみ止まろう。」

「なぜ全員だ？」とアンジョーラは言った。

「全員！ 全員！」

アンジョーラは言った。

「地の理はよく、防寨は堅固だ。三十人もあれば充分だ。なぜ四十人を全部犠牲にする必要があるか？」

人々は答え返した。

「ひとりも去りたくないからだ。」

「諸君！」とアンジョーラは叫んだ。その声はほとんど激^{げつこう}昂に近い震えを帯びていた。

「共和は無用な者まで犠牲にするほど豊富な人数を有しない。虚栄は浪費である。ある者にとつては立ち去ることが義務であるならば、その義務もまた他の義務と同様に果たすべ

きではないか。」

主義の人なるアンジョーラは、絶対のものから来るような偉力を同志の上に有していた。しかしその絶対的権力にもかかわらず、人々はなお不平をもらした。

徹頭徹尾首領たるアンジョーラは、人々がつぶやくのを見て、なお主張した。彼は昂然として言った。

「ただ三十人になることを恐れる者はそう言え。」

不満のつぶやきはますます高まった。

「それに、」とある群れの中から声がした、「立ち去ると口で言うのは容易だが、防寨ぼうさいは包圍されてるんだ。」

「市場町の方は開いている。」とアンジョーラは言った。

「モンデトゥール街は自由だ、そしてプレーシユール街からインノサン市場へ出られる。」

「そしてそこで捕つかまる。」と群れの中から他の声がした。「戦列兵か郊外兵かの前ぜんしょう哨しょうに

行き当たる。労働服をつけ縁無し帽をかぶって通ればすぐ向こうの目につく。どこからきたか、防寨からではないか、と問われる。そして手を見られる。火薬のにおいがする。そのまま銃殺だ。」

アンジヨラはそれに答えないで、コンブフェールの肩に触れ、ふたりで居酒屋の下の広間にはいつて行つた。

彼らはまたすぐそこから出てきた。アンジヨラは両手にいっばい、取つて置いた四着の軍服を持っていた。後に続いたコンブフェールは、皮帯と軍帽とを持っていた。

「この服をつけてゆけば、」とアンジヨラは言つた、「兵士の間交じつて逃げる事ができる。りつぱに四人分ある。」

そして彼は、舗石しきいしをめぐられた地面の上に四つの軍服を投げ出した。

堅忍なる聴衆のうちには身を動かす者もなかつた。コンブフェールは語り出した。

「諸君、」と彼は言つた。「憐憫れんびんの情を少し持たなければいけない。ここで何が問題であるか知つてゐるか。問題は婦人の上にあるんだ。いいか。妻を持つてゐる者はないか。子供を持つてゐる者はないか。足で揺籃ゆりかごを動かしたくさんの子供に取り囲まれてゐる母親を持つてゐる者はないか。君らのうちで、かつて育ての親の乳房ちゆうぶさを見なかつた者があるならば、手をあげてみたまえ。諸君はここで死にたいと言う。諸君に今語つてゐる僕もここで死にたい。しかし僕は、腕をねじ合せて嘆く婦人の幻を自分の周囲に見たくはない。欲するならば死にたまえ。しかし他の人をも死なしてはいけない。ここでやがて行なわれんとす

る自滅は莊嚴なものである。しかしその自滅は範圍をせばめて、決して他人におよぼしてはいけない。もしそれを近親の者にまでおよぼす時には、自滅ではなくて殺害となる。金髪の子供らのことを考えてみ、白髪の老人らのことを考えてみるがいい。聞きたまえ、今アンジョーラが僕に話したことを。シーニユ街の角に、光のさす窓が一つ見えていた、六階の粗末な窓に蠟燭ろうそくの光がさしていた、その窓ガラスには、一晚中眠りもしないで待つてゐるらしい年取つた女の頭が、ゆらゆらと映つていた。たぶん君らのうちのだれかの母親だろう。でそういう者は、立ち去るがいい。急いで行つて、母親に言うがいい、お母さんかあただ今帰りましたと。安心したまえ、ここはあとに残つた者だけで充分だ。自分の腕で一家をささえてる者には、身を犠牲にする権利はない。それは家庭を破滅させるといふものだ。また娘を持つてゐる者、妹を持つてゐる者、そういう者はよく考えて見たまえ。自分の身を犠牲にする、自分は死ぬ、それはかまわぬ、しかし明日は？　パンに窮する若い娘、それは恐ろしいことではないか。男は食を乞うが、女は身を売る。あああのうるわしいやさしい可憐な娘かれんら、花の帽子をかぶり、歌いさええずり、家の中に清らかな氣を満たし生きたる香のようであり、地上における処女の純潔さで天における天使の存在を証する者、ジャンヌやリーズやミミ、諸君の恵みであり誇りである愛すべき正直なる者、彼女らが飢えん

とするのである。ああ何と言つたらいいか。世には人の肉体の市場がある。彼女らがそこにはいるのを防ぐのは、彼女らのまわりにうち震える諸君の影の手がよくなし得るところではない。街路に、通行人でいっぱいになつてゐる舗石しきいしの上に、商店の前に、首筋をあらわにし泥にまみれてさまよう女のことを考えて見たまえ。その女どももまたもとは純潔だつたのだ。妹を持つてゐる者は妹のことを考えてみるがいい。困窮、淫売いんばい、官憲、サン・ラザール拘禁所、そういう所に、あのうるわしい、たおやかな娘らは、あの五月のライラックの花よりもなおさわやかな貞節と温順と美とのもろい宝は、ついに落ちてゆくのだ。ああ諸君は身を犠牲にする、諸君はもはや生きていない。それは結構だ。諸君は民衆を王権から免れさせようと欲したので。しかもまた諸君は自分の娘を警察の手に渡すのである。諸君、よく注意したまえ、あわれみの心を持ちたまえ。婦人らのことを、不幸なる婦人らのことを、われわれは普通あまり念頭に置いていない。婦人らが男のごとき教育を受けていないことに自ら得意となり、彼女らの読書を妨げ、彼女らの思索を妨げ、彼女らが政治に干渉するのを妨げている。そこで今晚彼女らが、死体公示所へ行つて諸君の死屍ししを見分けんとするのを、初めからさせないようにしてはどうか。家族のある者はわれわれの言に従い、われわれと握手して立ち去り、われわれをここに残して自由に働かしてくれてはど

うか。むろん立ち去るには勇氣が必要である。それは困難なことだ。しかし困難が大なるほど、価値はますます大である。諸君は言う、俺は銃おれを持っていて、俺は防寨ぼうさいにきている、どうでも俺は去らないと。どうでもと、そう口で言うのはたやすい。しかし諸君、明日というものがある。その明日には、諸君はもう生きていないだろうが、諸君の家族はまだ残っているだろう。そしていかに多くの苦しみがやってくるか！ここにひとりの健康なかわいい子供がいるとする。林檎りんごのような頬ほおをし、片言交じりにしゃべりさえずり笑い、脣くちづけをすればそのいきいきした肉体が感ぜらるる。ところが彼が見捨てられた時、どうなりゆくか考えてみたまえ。僕はそういう子供をひとり見たことがある。まだ小さなこれくらいな児だった。父親が死んだので、貧しい人たちが慈悲心から拾い上げた。しかし彼ら自身もパンに窮していた。子供はいつも腹をすかしていた。ちようど冬だった。子供は泣きもしなかった。彼はストーヴに寄ってゆくが、そこには火もなく、煙筒には黄色い土が塗りつけてあるばかりだ。子供はその土を小さな指先で少しはがして、それを食べていた。呼吸は荒く、顔はまっさおで、足には力がなく、腹はふくれていた。一言も口をきかなかった。話しかけても返事をしなかった。そしてついに死んだ。ネットケルの救済院に連れて行って死なしたのだ。そこで僕は子供を見た。僕は当時その救済院に寄宿してい

たんだ。今諸君のうちに、父親たる者があるならば、頑がんじょう丈な手に子供の小さな手を引いて日曜日の散歩を楽しみとしてる父親があるならば、右の子供はすなわち自分の子供にほかならないと想像してもらいたい。僕はそのあわれな子供のことをよく覚えていて、今も目に見るような気がする。裸のまま解剖台の上に横たわっていた時、その肋骨ろっこつは墓場の草の下の土饅頭どまんじゅうのように皮膚の下に飛び出していた。胃袋の中には泥どろのようなものが見いだされた。齒の間には灰がついていた。さあ胸のうちに目を向けて、心の声に耳を傾けようではないか。統計の示すところによると、親のない子供の死亡率は五十五パーセントにおよんでいる。僕は繰り返して言う、問題は妻の上に、母親の上に、若い娘の上に、頑がんぜ是ぜない子供の上にある。諸君自身のことを言うのではない。諸君自身のごときはよくわかつている。諸君が皆勇敢であることはよくわかつている。諸君が皆心のうちに、大義のために身を犠牲にするの喜びと光栄とを持つてゐることは、よくわかつてゐる。諸君は有益なまたみごとな死を遂げんがために選ばれたる者であることを感じており、各人皆勝利の前を欲しておることは、よくわかつてゐる。まさにそのとおりである。しかし諸君はこの世においてひとりではない。考えてやらなければならぬ他の人たちがいる。利己主義者であつてはならないのだ。」

人々は皆沈鬱ちんうつな様子をして頭をたれた。

最も莊嚴なる瞬間における人の心の不思議な矛盾さよ！ かく語ったコンブフェール自身孤児ではなかった。彼は他人の母親のことを思い出していたが、自分の母親のことは忘れていた。彼はおのれを死地に置かんとしていた。彼こそ「利己主義者」であつた。

マリユスは飲食もせず、熱に浮かされたようになり、あらゆる希望の外にいで、悲痛の洲すに乗り上げ、最も悲惨な難破者となり、激越な情緒に浸され、もはや最後が近づいたことを感じて、人が自ら甘受する最期の時間の前に常に来る幻覺ぼんぜん的な惘然ぼうぜんさのうちに、しだいに深く沈み込んでいた。

生理学者が今彼の様子を觀察したならば、科学上よく知られ類別されてる熱性混迷のしだいに高まる徴候を見て取り得たであろう。この熱性混迷が苦悩に対する關係は、あたかも肉体的歡樂が快感に対するようなものである。絶望にもまたその恍惚こうこつたる状態がある。マリユスはそういう状態に達していた。彼はすべてのことを、外部から見るとながめていた。前に言つたとおり、眼前に起こつた事物も、彼には遠方のもののように思へた。全体はよく見て取れたが、些細ささいな点はわからなかつた。行ききする人々は炎の中を横ぎつてゐるがようであり、人の話し声は深淵しんえんの底から響いてくるがようだつた。

しかしながらただ今のことは彼の心を動かした。その情景のうちには鋭い一点があつて、それに彼は胸を貫かれ呼びさまされた。彼はもはや死ぬという一つの観念しか持つていず、それから気を散らされることを欲していなかつた。しかし今や彼はその陰惨な夢遊のうちにあつて、自ら身を滅ぼしながらも他人を助けることは禁じられていないと考えた。

彼は声を上げた。

「アンジヨラとコンブフェールとの意見は正当だ。」と彼は言った。「無益な犠牲を払うの要はない。僕はふたりの意見に賛成する。そして早くしなければいけない。コンブフェールは確かな事柄を言ったではないか。諸君のうちには、家族のある者がいるだろう、母や妹や妻や子供を持つてる者がいるだろう。そういう者はこの列から出たまえ。」

だれも動く者はなかつた。

「結婚した者および一家の支柱たる者は、列外に出たまえ！」とマリユスは繰り返した。彼の権威は偉大なものだった。アンジヨラはもとより防寨ぼうさいの首領であつたが、マリユスは防寨の救済主であつた。

「僕はそれを命ずる！」とアンジヨラは叫んだ。

「僕は諸君に願う！」とマリユスは言った。

その時、コンブフェールの言葉に動かされ、アンジョーラの命令に揺られ、マリユスの懇願に感動されて、勇士らは、互いに指摘し始めた。「もつともだ。君は一家の主人じゃねえか。出るがいい。」とひとりの若者は壮年の男に言った。男は答えた。「むしろお前の方が。お前はふたりの妹を養つてゆかなくちやならねえんだろう。」そして異様な争いが起こった。互いに墳墓の口から出されまいとする争いだった。

「早くしなけりやいけない。」とコンブフェールは言った。「もう十五、六分もすれば間に合わなくなるんだ。」

「諸君、」とアンジョーラは言った、「ここは共和である、万人が投票権を持っている。諸君は自ら去るべき者を選ぶがいい。」

彼らはその言葉に従った。数分の後、五人の男が全員一致をもって指名され、列から前に進み出た。

「五人いる！」とマリユスは叫んだ。

軍服は四着しかなかった。

「ではひとり残らなくちやならねえ。」と五人の者は言った。

そしてまた互いに居残ろうとする争いが、他の者に立ち去るべき理由を多く見いださん

とする争いが始まった。寛仁な争いだった。

「お前には、お前を大事にしてる女房がいる。——お前には年取った母親おふくろがいる。——お前には親父おやじも母親もいねえ、お前の小さな三人の弟はどうなるんだ。——お前は五人の子供の親だ。——お前は生きるのが本当だ、十七じゃねえか、死ぬには早え。」

それら革命の偉大な防蹇ぼうせんは、勇壮の集中する所であつた。異常なこともそこでは当然だつた。勇士らはそれを互いに驚きはしなかつた。

「早くしたまえ。」とクールフェラツクは繰り返した。

群れの中からマリユスに叫ぶ声がした。

「居残る者をあなたが指定して下さい。」

「そうだ、」と五人の者は言った、「選んで下さい。私もはあなたの命令に従う。」

マリユスはもはや自分には何らの感情も残っていないと思つていた。けれども今、死ぬべき者をひとり選ぶという考えに、全身の血は心臓に集まつてしまった。彼の顔は既に青ざめていたが、更に一抹いちまつの血の気けもなくなつた。

彼は五人の方へ進んだ。五人の者は微笑して彼を迎え、テルモピレの物語の奥に見らるるあの偉大なる炎に満ちた目をもつて、各自彼に叫んだ。

「私を、私を、私を！」

マリユスは惘然^{ぼうぜん}として彼らをながめた。やはり五人である！ それから彼の目は四着の軍服の上に落ちた。

その瞬間、第五の軍服が天から降ったかのように、四着の軍服の上に落ちた。

五番目の男は救われた。

マリユスは目を上げた。そしてフオーシユルヴァン氏の姿を認めた。

ジャン・ヴァルジャンはちようど防寨^{ぼうさい}の中にはいつてきたところだった。

様子を探つてか、あるいは本能によつてか、あるいは偶然にか、彼はモンデトゥール小路からやつてきた。国民兵の服装のおかげでたやすくこれまで来ることができた。

反徒の方がモンデトゥール街に出しておいた哨兵^{しょうへい}は、ひとりの国民兵のために警報を発することをしなかった。「たぶん援兵かも知れない、そうでないにしろどうせ捕虜になるんだ、」と思つて、自由に通さしたのである。時機はきわめて切迫していた。自分の任務から気を散らし、その見張りの位置を去ることは、哨兵にはできなかつた。

ジャン・ヴァルジャンが角面堡^{かくめんぼう}の中にはいつてきた時、だれも彼に注意を向ける者はいなかつた。すべての目は、選ばれた五人の男と四着の軍服との上に注がれていた。ジャ

ン・ヴァルジャンもまたそれを見それを聞き、それから黙って自分の上衣をぬいで、それを他の軍服の上に投げやった。

人々の感動は名状すべからざるものだった。

「あの男はだれだ？」とボシユエは尋ねた。

「他人を救いにきた男だ。」とコンブフェールは答えた。

マリユスは莊重な声で付け加えた。

「僕はあの人を知っている。」

その一言で一同は満足した。

アンジョーラはジャン・ヴァルジャンの方を向いた。

「よくきて下すつた。」

そして彼は言い添えた。

「御承知のとおり、われわれは死ぬのです。」

ジャン・ヴァルジャンは何の答えもせず、救い上げた暴徒に手伝って自分の軍服を着せてやった。

五 防寨ぼうさいの上より見たる地平線

この危急の時この無残な場所における一同の状態には、その合成力としてまたその絶頂として、アンジョーラの沈痛をきわめた態度があつた。

アンジョーラのうちには革命の精神が充満していた。けれども、いかに絶対なるものにもなお欠けたところがあるとおり、彼にも不完全なところがあつた。あまりにサン・ジュスト的などころが多くて、アナカルシス・クローツ的などが充分でなかつた（訳者注 両者共に大革命時代の人）。けれど彼の精神は、ABCの友の結社において、コンブフェールの思想からある影響を受けていた。最近になつて、彼はしだいに独断の狭い形式から脱し、広汎こうはんなる進歩を目ざすようになり、偉大なるフランスの共和をして広大なる人類の共和たらしむることを、最後の壮大な革新として受け入れるに至つた。ただ直接現在の方法としては、激烈な情況にあるために、また激烈な処置を欲していた。この点においては彼は終始一貫していた。九三年（一七九三年）という一語につくされる恐るべき叙事詩的一派に、彼はなお止まつていた。

アンジョーラはカラビン銃の銃口に片肱かたひじをついて舗石しきいしの段の上に立つていた。彼は

考え込んでいた。そしてある息吹を感じたかのように身を震わしていた。死のある所には、神占の凡のごとき震えが起こるものである。魂の目がのぞき出てる彼の眸からは、押さえつけた炎のような輝きが発していた。と突然彼は頭をもたげた。その金髪は後ろになびいて、星を鏤めた暗澹たる馬車に駕せる天使の頭髪のように、また後光の炎を発する怒った獅子の鬣のようであった。そしてアンジヨウラは声を張り上げた。

「諸君、諸君は未来を心に描いてみたか。市街は光に満ち、戸口には緑の木が茂り、諸国民は同胞のごとくなり、人は正しく、老人は子供をいつくしみ、過去は現在を愛し、思想家は全き自由を得、信仰者は全く平等となり、天は宗教となり、神は直接の牧師となり、人の本心は祭壇となり、憎悪は消え失せ、工場にも学校にも友愛の情があふれ、賞罰は明白となり、万人に仕事があり、万人のために権利があり、万人の上に平和があり、血を流すこともなく、戦争もなく、母たる者は喜び楽しむのだ。物質を征服するは第一歩である。理想を実現するは第二歩である。進歩が既に何をなしたか考えてみよ。昔最初の人類は、怪物が過ぎ行くのを恐怖に震えながら眼前に見た、水の上になりゆく怪蛇を、火を吐く怪竜を、鷲の翼と虎の爪とをそなえてかける空中の怪物たるグリフォンを。それらは皆人間以上の恐るべき獣であった。しかるに人間は、罨を、知力の神聖なる罨を張り、つ

いにそれらの怪物を捕えてしまったのである。

吾人は怪蛇かいだを制御した、それを汽船という。吾人は怪竜かいりゆうが制御した、それを機関車という。吾人はまさにグリフォンを制御せんとしている、既に手中に保っている、それを軽気球という。そしてこのプロメテウスのごとき仕事が成就する日こそ、すなわち怪蛇と怪竜とグリフォンとの三つの古代の夢想を、ついにおのれの意志に馴致じゆんちし終わる日こそ、人間は水火風三界の主となり、他の生ある万物に対しては、いにしえの神々が昔人間に対して有していたような地位を、獲得するに至るだろう。奮励せよ、そして前進せよ！ 諸君、吾人はどこへ行かんとするのであるか。政府を確立する科学へである、唯一おおよけの公の力となる事物必然の力へである、自ら賞罰を有し明白に宣揚する自然の大法へである、日の出にも比すべき真理あけぼのの曙へである。吾人は各民衆の協和へ向かつて進み、人間の統一へ向かつて進む。もはや虚構を許さず、寄食を許さぬ。真実なるものによって支配されたる現実、それが目的である。文化はその審判の廷を、ヨーロッパの頂に、後には全大陸の中心に、知力の大議会のうちに、開くに至るだろう。これにやや似たものは既に行なわれた。古代ギリシャの連邦議員は、年に二回会議を開き、一つは神々の場所たるデルフにおいてし、一つは英雄の場所たるテルモピレにおいてした。やがては、ヨーロッパもこの連邦議

員を有し、地球全体もこの連邦議員を有するに至るだろう。フランスは実に、この崇高なる未来を胸裏にいだいている。それが十九世紀の懷妊である。ギリシヤによつて描かれたその草案は、フランスによつて完成されるに恥ずかしくないものである。僕の言を聞け、フイー、君は勇敢な労働者、民衆の友、諸民衆の友だ。僕は君を尊敬する。君は明らかに未来を洞^{どうけん}見した、君のなすところは正しい。君は、フイー、父もなく母も持たなかつた、そして、仁義を母とし権利を父とした。君はここに死なんとしている、すなわち勝利を得んとしてるのだ。諸君、今日の事はいかになりゆこうとも、敗れることによつてまた打ち勝つことによつて、われわれがなさんとするのは一つの革命である。火災が全市を輝かすように、革命は全人類を輝かす。しかもわれわれはいかなる革命をなさんとするのか。それは今言うとおり真実なるものの革命である。政治的見地よりすれば、ただ一つの原則あるのみだ、すなわち人間が自らおのれの上に有する主権である。この自己に対する自己の主権を自由という。この主権の二個もしくは数個が結合するところに国家がはじまる。しかしその結合のうちには何ら権利の減殺はない。個々の主権がその多少の量を譲歩するのは、ただ共同的権利を造らんがためである。その量は各人皆同等である。各人が万人に対してなすこの譲歩の同一を、平等と言う。共同的権利とは、各人の権利の上に光り

輝く万人の保護にほかならない。各人に対するこの万人の保護を、友愛という。互いに結合するあらゆる主権の交差点を、社会という。その交差は一つの接合であって、その交差点は一つの結び目である。かくて社会的関係が生じてくる。ある者はそれを社会的約束という。しかし両者は同一のものである、約束なる語はその語原上より言っても関係という観念で作られたものである。われわれはこの平等ということをよく了解しておかなくてはならない。なぜなれば、自由を頂点とするならば、平等は基底だからである。平等とは諸君、同じ高さの植物を言うのではない、大きな草の葉や小さな櫨かしの木の仲間を言うのではない。互いに滅殺し合う一連の嫉妬しつとを言うのではない。それは、民事上よりすれば、あらゆる能力が同等の機会を有することであり、政治上よりすれば、あらゆる投票が同等の重さを有することであり、宗教上よりすれば、あらゆる本心が同等の権利を有することである。平等は一つの機関を持つ、すなわち無料の義務教育である。アルファベットに対する権利、まずそこから始めなければならぬ。小学校を万人に強請し、中学校は万人の意に任せる、それが定法である。同一の学校から同等の社会が生ずる。そうだ、教育の問題である。光明、光明！ すべては光明より発し、光明に返る。諸君、十九世紀は偉大である、しかし二十世紀は幸福であるだろう。二十世紀にはもはや、古い歴史に見えるようなものは一つ

もないだろう。征服、侵略、篡奪さんだつ、武力による各国民の競争、諸国王の結婚結合よりくる文化の障害、世襲的暴政を続ける王子の出生、会議による民衆の分割、王朝の崩壊による国家の分裂、二頭の暗黒なる山羊やぎのごとく無限の橋上において額をつき合わせる二つの宗教の争い、それらもはや今日のように恐るるに及ばないだろう。飢饉ききん、不正利得、困窮から来る売淫ばいいん、罷工から来る悲惨、絞首台、剣、戦争、および事変の森林中におけるあらゆる臨時の追剥おいはぎ、それらもはや恐るるに及ばないだろう、否もはや事変すらもないとさえ言い得るだろう。人は幸福になるだろう。地球がおのれの法則を守るごとく、人類はおのれの大法を守り、調和は人の魂と天の星との間に立てられるだろう。惑星が光体の周囲を回るとく、人の魂は真理の周囲を回るだろう。諸君、われわれがいる現在の時代は、僕が諸君に語っているこの時代は、陰惨なる時代である。しかしそれは未来を購うあがなべき恐ろしい代金である。革命は一つの税金である。ああかくて人類は、解放され高められ慰めらるるであろう！ われわれはこの防寨ぼうさいの上において、それを人類に向かつて断言する。愛の叫びは、もし犠牲の高処からでないとするれば果たしてどこからい得るか。おお兄弟諸君、ここは考える者らと苦しむ者らとの接合点である。この防寨は、舗石しきいしからもしくは角材からもしくは鉄屑てつくずからできてるのではない。二つの堆積からできてるの

だ、思想の堆積と苦難の堆積とからである。ここにおいて悲惨は理想と相会する。白日は暗夜を抱擁して言う、予は今汝と共に死せんとし汝は今予と共に再生せんとする。あらゆる困苦を抱きしむることから信念がほとぼり出る。苦難はここにその苦痛をもたらし、思想はここにその不滅をもたらししている。その苦痛とその不滅とは相交わつて、われわれの死を形造る。兄弟よ、ここで死ぬ者は未来の光明のうちに死ぬのである。われわれは曙の光に満ちたる墳墓の中にはいるのである。」

アンジョーラは口をつぐんだ、というよりもむしろ言葉を途切らした。彼の唇は、なお自分自身に向かつて語り続けているかのように、黙々として動いていた。ために人々は、注意を凝らしなおその言を聞かんがために彼をながめた。何らの喝采も起こらなかったが、低いささやきが長く続いた。言葉は息吹である。それから来る知力の震えは木の葉のそよぎにも似ている。

六 粗野なるマリユス、簡明なるジャヴエル

マリユスの脳裏に起こったことを一言しておきたい。

彼の心の状態を読者は記憶しているだろう。彼にとってすべてはもはや幻にすぎなかったとは、前に繰り返したところである。彼の識別力は乱れていた。なお言うが、瀕死ひんしの者の上にひろがる大きい暗い翼の影にマリユスは包まれていた。彼は墳墓の中にはいつたように感じ、既に人生の壁の向こう側にいるような心地がして、もはや生きてる人々の顔をも死人の目でしかながめていなかった。

いかにしてフォーシウルヴァン氏がここへきたのか、何ゆえにきたのか、何をしにきたのか？ それらの疑問をもマリユスは起こさなかった。その上、人の絶望には特殊な性質があつて、自分自身と同じく他人をも包み込んでしまうものである。すべての人が死ににきたといふことも、マリユスには至つて当然なことに思われた。

ただ彼は、コゼットのことを考えては心を痛めた。

それにまたフォーシウルヴァン氏は、マリユスに言葉もかけず、マリユスの方をながめもせず、マリユスが声を上げて「僕はあの人を知っている」と言つた時にも、その声を耳にしたような様子さえしなかつた。

マリユスにとつては、フォーシウルヴァン氏のそういう態度は意を安んぜさせるものであつた。そしてもし言い得べくんば、ほとんど彼を喜ばせるものであつた。彼にとつてフ

オーシユルヴァン氏は怪しいとともにまたいかめしい謎なぞのごとき人物であつて、いつも言葉かけることは絶対に不可能のような気がしていた。その上会つたのはよほど以前のこどだつたので、元來臆病で内気なマリユスはいつそう言葉をかけ難い気がした。

選ばれた五人の男は、モンデトゥール小路の方へ防寨ぼうさいを出て行つた。彼らはどう見ても国民兵らしく思われた。そのうちのひとり涙を流しながら去つていった。防寨を出る前に彼らは残つてゐる人々を抱擁した。

生命のうちに送り返される五人の男が出て行つた時、アンジョーラは死に定められてゐる男のことを考えた。彼は下の広間にはいつていつた。ジャヴェルは柱くに括くられたまま考え込んでいた。

「何か望みはないか。」と彼にアンジョーラは尋ねた。

ジャヴェルは答えた。

「いつ俺おれを殺すのか。」

「待つておれ。今は弾薬の余分がないんだ。」

「では水をくれ。」とジャヴェルは言つた。

アンジョーラは一杯の水を持つてき、彼がすっかり縛られてるので自らそれを飲まして

やった。

「それだけか。」とアンジヨラは言った。

「この柱では楽でない。」とジャヴェルは答えた。「このまま一夜を明かさせたのは薄情だ。どう縛られてもかまわんが、あの男のようにテーブルの上に寝かしてくれ。」

そう言いながら頭を動かして彼はマブーフ氏の死体をさした。

読者の記憶するとおり、弾を鑄たり弾薬をこしらえたりした大きなテーブルが室の奥にあつた。弾薬はすべてでき上がり火薬はすべて用い尽されたので、そのテーブルはあいていた。

アンジヨラの命令で、四人の暴徒はジャヴェルを柱から解いた。解いてる間、五番目の男はその胸に銃剣をさしつけていた。両手は背中に縛り上げたままにし、足には細い丈夫な鞭むちなわ繩なわをつけておいた。それで彼は絞首台に上る人のように、一足に一尺四、五寸しか進むことができなかった。室へやの奥のテーブルの所まで歩かせて、人々はその上に彼を横たえ、身体からだのまんなかをしつかと縛りつけた。

なおいつそう安全にするために、脱走を不可能ならしむる縛り方をした上、首につけた繩なわで、監獄むながいにおいて鞅むながいと呼よばるる縛り方を施した。繩を首の後ろから通して、胸の所で十

字にし、それから^{また}勝手の間を通し、後ろの両手に結びつけるのである。

人々がジャヴェルを縛り上げてる間、ひとりの男が室の入り口に立って、妙に注意深く彼をながめていた。ジャヴェルはその男の影を見て、頭を^{めぐ}回らした。それから目をあげて、ジャン・ヴァルジャンの姿を認めた。ジャヴェルは別に驚きもしなかった。ただ^{ごうぜん}傲然と目を伏せて、自ら一言言った。「ありそうなことだ。」

七 局面の急迫

夜は急に明けてきた。しかし窓は一つも開かれず、戸口は一つも^{ゆる}弛められなかった。夜明けではあつたが、目ざめではなかった。防^{ぼうさい}寨に相對してるシャンヴルリー街の一端は、前に言つたとおり、軍隊の撤退したあとで、今やまったく自由になつたかのように、気味悪い静けさをして人の通行を許していた。サン・ドウニ街は、スフィンクスの控えてるテーベの大道のようにひっそりしていた。四つ辻^{つじ}は太陽の反映に白く輝いていたが、生あるものは何もいかなかった。寂^{せきぜん}然たる街路のその明るみほど、世に陰気なものはあるまい。

何物も目には見えなかつたが、物音は聞こえていた。ある距離をへだてた所に怪しい運

動が起こっていた。危機が迫つてゐることは明らかだった。前夜のように哨兵しょうへいらが退いてきた、しかし今度は哨兵の全部だった。

防寨は第一の攻撃の時よりいっそう堅固になつていた。五人の男が立ち去つてから、人々は防寨をなお高めていた。

市場町の方面を見張つていた哨兵の意見を聞いて、アンジョーラは後方から不意打ちされるのを氣使い、一大決心を定めた。すなわちその時まで開いていたモンデトゥール小路の齒状堡しじょうぼうをもふさがした。そのためになお数軒の人家にわたる舗石しきいしがめくられた。かくて防寨は、前方シャンヴルリー街と、左方シーニュ街およびプティート・トリュアンドリー街と、右方モンデトゥール街と、三方をふさいで、實際ほとんど難攻不落に思われた。彼らはまったくその中に閉じ込められた。正面は三方に向いていたが、出口は一つもなかった。「要塞ようさいにしてまた鼠ねずみ毘みか、」とクールフェーラックは笑いながら言つた。アンジョーラは居酒屋の入り口の近くに三十ばかりの舗石しきいしを積ました。「よけいにめくつたもんだ、」とボシユエは言つた。

攻撃が来るに違ひないと思われた方面は、今やいかにも深く静まり返つていた。でアンジョーラは一同をそれぞれ戦闘位置につかした。

ブランドーの少量が各人に分配された。

襲撃に対する準備をしてる防^{ぼうさい}寨ほど不思議なものはない。人々は芝居小屋にでもはいったかのように各自に自分の位置を選む。あるいは身体をよせかけ、あるいは^{ひじ}肱をつき、あるいは肩でよりかかる。舗石を立てて特別の席をこしらえる者もある。邪魔になる壁のすみからはなるべく遠ざかる。身をまもるに便利な凸^{とつかく}角があればそれにこもる。左ききの者は調法で、普通の者に不便な場所を占むる。多くの者は腰をおろして戦列につく。樂に敵を殺し^{そげき}気持ちよく死ぬことを欲するからである。一八四八年六月の悲惨な戦いにおいては、狙撃の巧みなひとりの暴徒が平屋根の上で戦ったが、一個の安樂椅子を持ち出していた。そしてそれに腰掛けたまま霰^{さんだん}弾にたおれた。

指揮者が戦闘準備の命令を下すや否やすべて無秩序な運動は止む。もはや不和もなく、寄り集まりもなく、陰口もなく、離れた群れもない。人々の頭の中にあるものはみな一つに集中し、ただ敵の襲撃を待つ^の念だけに変わってしまった。防寨は危険が来る前までは混乱であるが、危険に陥れば規律となる。危急は秩序を生ずる。

アンジョーラが二連発のカラビン銃を取って、自分の場所として一種の狭間^{はざま}に身を置^しくや、人々は口をつぐんでしまった。多くの小さな鋭い音が舗^{しきいし}石の壁に沿ってごったに

起こった。それは銃を構える音だった。

また人々の態度は、深い勇氣と信念とを示していた。極度の犠牲心はかえって力を生ぜさせる。彼らはもはや希望を持たなかったが、しかし絶望を持っていた。絶望は時として勝利を与える最後の武器であるとは、ヴァーヅルの言ったところである。最上の手段は最後の決心から生まれってくる。死の船に乗り込むのは、往々にして難破から脱する方法となる。柩ひつぎの蓋ふたは身をまもる板となる。

前夜のとおり人々の注意は、今や明るくなつて見えてきた街路の先端に向けられた、というよりそこに倚よりかかったと言つてもよい。

待つ間は長くなかつた。どよめきの音がサン・ルーの方面にまたはつきり聞こえ始めた。しかしそれは第一回の攻撃のおりの運動とは異なつていた。鎖の音、大集団の恐ろしいざわめき、舗石の上に当たる青銅の音、一種のおごそかな響き、それらはあるすごい鉄器が近づいてくるのを示していた。多くの利害と思想とが交通するためうがち設けられ、恐ろしい戦車を通すために作られたのではない、それらの平和な古い街路のうちに、一つの震動が起こつてきた。

街路の先端に据えられてた戦士らの瞳ひとみは、ものすごくなつた。

一門の大砲が現われた。

砲手らが砲車を押し進めてきた。大砲は発射架の中に入れられていた。前車ははずされ
ていた。砲手の二人は砲架をささえ、四人は車輪の所に添い、他の者らはあとに続いて弾
薬車を引いていた。火のついた火繩ひなわの煙が見えていた。

「打て！」とアンジョーラは叫んだ。

防寨ぼうさいは全部火蓋ひふたを切った。その射撃は猛烈だった。雪崩なだれのような煙は、砲門と兵士ら
とをおおい隠した。数秒ののち煙が散ると、大砲と兵士らとが再び見えた。砲手らは静か
に正確に急ぎもせず、砲口を防寨の正面に向けてしまっていた。弾にあたった者は一人も
いなかった。砲手長は砲口を上げるため砲尾に身体をもたせかけ、望遠鏡の度を合わせる
天文学者のように落ち着き払って、照準を定め始めた。

「砲手、あつぱれ！」とボシユエは叫んだ。

そして、防寨の者は皆拍手した。

一瞬間の後には、大砲は街路のまんなかに溝をまたいでおごそかに据えられ、発射する
ばかりになっていた。恐るべき口は防寨の上に開かれていた。

「さあこい！」とクールフェラックは言った。「ひどい奴やつだな、指弾しっぺいの後に拳骨げんこつか。

軍隊は俺^{おれ}たちの方に大きな足を差し出したな。こんどは防寨も本当に動くぞ。小銃は掠^{かすめ}ばかりだが、大砲はぶつつかる。」

「新式の青銅の八斤砲だ。」とコンブフェールはそれに続いて言った。「あの砲は、銅と錫^{すず}とが百に十の割合を越すとすぐに破裂する。錫が多すぎれば弱くなって、火門の中に幾つもすき間ができる。その危険を避けしかも装薬を強くするには、十四世紀式に戻^{たが}って箍^{たが}をはめなくちやいけない。すなわち砲尾から砲耳までつぎ目なしの鋼鉄の輪をたくさんはめて外から強くするんだ。さもなければどうにかして欠点を補うんだ。猫捜器で火門の中にできたすきまがわかる。しかし最もいい方法は、グリボーヴアルの発明した動星器を用いることだ。」

「十六世紀には、」とボシユエは言った、「砲身内に旋条を施していた。」

「そうだ、」とコンブフェールは答えた、「そうすれば弾道力は増すが、ねらいの正確さは減^へずる。その上、短距離の射撃には、弾道は思うようにまっすぐにまっすぐにならず、抛物線^{ほうぶつせん}は大きくなり、弾は充分まっすぐに飛ばなくて中間の物を打つことができなくなる。しかし実戦においては中間の物を打つ必要があつて、敵が近くにおり発射を急ぐ場合には、ますますそれが大切となる。十六世紀の旋条砲の弾道が彎^{わんきよく}曲するその欠点は、装薬の弱さ

からきている。そして装薬を弱くするのは、この種の武器では、たとえば砲架を痛めないようにというような発射の方の必要からきている。要するにこの専制者たる大砲も、欲することを何でもやれるわけではない。力には大なる弱点がある。砲弾は一時間に六百里しか走れないが、光線は一秒に七万里走る。それがすなわち、イエス・キリストのナポレオンに勝るところだ。」

「弾をこめ！」とアンジョーラは言った。

防寨の面は砲弾の下にどうなるであろうか。砲弾に穴をあけられるであろうか。それが問題であった。暴徒らが銃に再び弾をこめてる間に、砲兵らは大砲に弾をこめていた。

角面堡内の懸念はすこぶる大きかった。

大砲は発射された。轟然たる響きが起こった。

「ただ今！」と快活な声が出た。

砲弾が防寨の上に落ちかかると同時に、ガヴローシユが防寨の中に飛び込んできた。

彼はシーニ街の方からやってきて、プティート・トリユアンドリー小路に向いてる補助の防寨を敏捷に乗り越えてきたのだった。

砲弾よりもガヴローシユの方が防寨の中に騒ぎを起こした。

砲弾は雑多な破片の堆うずたかい中に没してしまった。せいぜい乗り合い馬車の車輪を一つこわしアンソウの古荷車を砕いたに過ぎなかった。それを見て人々は笑い出した。

「もつと打て。」とボシユエは砲兵らに叫んだ。

八 大砲の真の偉力

人々はガヴローシユの周囲に集まった。

しかし彼は何も物語る暇がなかった。マリユスは駭がいぜん然として彼を横の方に招いた。

「何しに戻ってきたんだ。」

「なんだって！」と少年は言った。「お前の方はどうだ？」

そして彼はおごそかな厚かましきでマリユスを見つめた。その両の目は心中にある得意の情のために一際ひとときわ大きく輝いていた。

マリユスはきびしい調子で続けて言った。

「戻ってこいとだれが言った！ 少なくとも手紙はあて名の人に渡したのか。」

手紙のことについてはガヴローシユも多少やましいところがないでもなかった。防塞に

早く戻りたいので、手紙は渡したというよりもむしろ厄介払いをしたのだった。顔もよく見分けないで未知の男に託したのは多少軽率だったと、彼は自ら認めざるを得なかった。実際その男は帽子をかぶってはいなかったが、それだけでは弁解にならなかつた。要するに彼は、手紙のことについては少し心苦しい点があつて、マリユスの叱責しつせきを恐れていた。でその苦境をきりぬげるために、最も簡単な方法を取つて、ひどい嘘うそを言った。

「手紙は門番に渡してきた。女の人は眠っていたから、目がさめたら見るだろう。」
マリユスはその手紙を贈るについて二つの目的を持っていた、コゼットに別れを告げることと、ガヴローシユを救うこと。で彼は望みの半分だけが成就したことで満足しなければならなかつた。

手紙の送達と、防寨ぼうさいの中にフォーシユルヴァン氏の出現と、その二つの符合が彼の頭に浮かんだ。ガヴローシユにフォーシユルヴァン氏をさし示した。

「あの人を知っているか。」

「いや。」とガヴローシユは言った。

実際ガヴローシユは、今言つたとおり、暗夜の中でジャン・ヴァルジャンを見たに過ぎなかつた。

マリユスの頭の中に浮かんできた漠然たる不安な推測は、ガヴローシユの一語に消えうせた。フォーシユルヴァン氏の意見はわからないが、おそらくは共和派だろう。そうだとすれば、彼が防寨の中に現われたのも別に不思議はないわけだった。

そのうちにもうガヴローシユは、防寨の他の一端で叫んでいた。「俺の銃をくれ！」
クールフェーラツクは銃を彼に返してやった。

ガヴローシユは彼のいわゆる「仲間の者ら」に、防寨が包囲されてることを告げた。戻つて来るのは非常に困難だった。戦列歩兵の一隊がプティート・トリユアンドリーに銃を組んでシーニユ街の方を監視しており、市民兵がその反対のプレーシユール街を占領していた。そして正面には軍勢の本隊が控えていた。

それだけのことを知らして、ガヴローシユは加えて言った。

「俺が許すから、奴らにどかんと一つ食わしてくれ。」

その間、アンジョーラは自分の狭間の所にあつて、耳を澄ましながら様子をうかがつていた。

襲撃軍の方は、砲弾の効果に不満だったのであろう、もうそれを繰り返さなかった。

一中隊の戦列歩兵が、街路の先端に現われて砲車の後ろに陣取った。彼らは街路の舗

石をめぐり、そこに舗石の小さな低い障壁をこしらえた。それは高さ一尺八寸くらいなもので、防寨に向かつて作った一種の肩墻だつた。肩墻の左の角には、サン・ドウニ街に集まつてる郊外国民兵の縦隊の先頭が見えていた。

向こうの様子をうかがっていたアンジョーラは、弾薬車から霰弾の箱を引き出すような音を耳にし、また砲手長が照準を変えて砲口を少し左へ傾けるのを見た。それから砲手らは弾をこめ始めた。砲手長は自ら火繩桿を取つて、それを火口に近づけた。

「頭を下げる、壁に寄り沿え！」とアンジョーラは叫んだ。「皆防寨に沿つてかがめ！」ガヴローシユがきたので、部署を離れて居酒屋の前に散らばつてた暴徒らは、入り乱れて防寨の方へ駆けつけた。しかしアンジョーラの命令が行なわれない前に、大砲は恐ろしい響きとともに発射された。果たしてそれは霰弾だつた。

弾は角面堡の切れ目に向かつて発射され、その壁の上にはね返つた。その恐ろしいはね返しのために、ふたりの死者と三人の負傷者とが生じた。

もしそういうことが続いたならば、防寨はもうささえ得られない。霰弾は内部にはいつて来る。

狼狽のささやきが起こつた。

「ともかくも第二発を防ごう。」とアンジョーラは言った。

そして彼はカラビン銃を低く下げ、砲手長をねらった。砲手長はその時、砲尾の上に身をかがめて、照準を正しく定めていた。

その砲手長はりっぱな砲兵軍曹で、年若く、金髪の、やさしい容貌の男だったが、恐怖すべき武器として完成するとともに、ついには戦争を絶滅すべきその武器に、ちようどふさわしい^{れいり}伶俐な様子をしていた。

アンジョーラのそばに立つてるコンブフェールは、その男をじつとながめていた。

「まったく遺憾なことだ！」とコンブフェールは言った。「こういう^{さつりく}殺戮は実に恐ろしい。ああ国王がいなくなれば、戦いももうなくなるんだ。アンジョーラ、君はあの軍曹をねらっているが、どんな男かよくはわからないだろう。いいか、りっぱな青年だ、勇敢な男だ、思慮もあるらしい。若い砲兵は皆相当な教育を受けてる者どもだ。あの男には、父があり、母があり、家族があり、意中の女もあるかも知れない。多くて二十五歳より上ではない。君の兄弟かも知れないんだ。」

「僕の兄弟だ。」とアンジョーラは言った。

「そうだ、」とコンブフェールも言った、「また僕の兄弟でもある。殺すのはやめようじ

やないか。」

「僕に任してくれ。なすべきことはなさなければならぬ。」

そして一滴の涙が、アンジョーラの大理石のような頬ほおを静かに流れた。

と同時に、彼はカラビン銃の引き金を引いた。一閃いつせんの光がほとぼしった。砲手長は二度ぐるぐると回り、腕を前方に差し出し、空気を求めてるように顔を上にあげたが、それから砲車の上に横ざまに倒れ、そのまま身動きもしなかった。背中がこちらに見えていたが、そのまんなかからまっすぐに血がほとぼしり出ていた。弾は胸を貫いたのである。彼は死んでいた。

彼を運び去って代わりの者を呼ばなければならなかった。かくて実際数分間の猶予が得られたのである。

九 昔ながらの射撃の手腕

防寨ぼうさいの中では種々の意見がかわされた。大砲はまた発射されようとしていた。その霰ざん弾んだんを浴びせられては十五、六分しか支持されない。その力を殺そぐことが絶対に必要だつ

た。

アンジヨラは命令を下した。

「蒲団ふとんの蔽おほいをしなくちやいけない。」

「蒲団はない、」とコンブフェールは言った、「皆負傷者が寝ている。」

ジャン・ヴァルジャンはひとり列から離れて、居酒屋の角かどの標石に腰掛け、銃を膝ひざの間にはさんで、その時まで周囲に起こつてゐることに少しも立ち交わらなかつた。「銃を持つていて何にもしねえのかな、」とまわりの戦士らが言う言葉をも、耳にしながつた。

ところがアンジヨラの命令が下されると、彼は立ち上がった。

読者は記憶しているだろうが、一同がシャンヴルリー街にやってきた時、ひとりの婆ばあさんは弾の来るのを予想して、蒲団ふとんを窓の前につるしておいた。それは屋根裏の窓で、防ぼうぎ寨さいの少し外にある七階建ての人家の屋根上になつていた。蒲団は斜めに置かれ、下部は二本の物干し竿さおに掛け、上部は二本の綱でつるしてあつた。綱は屋根部屋の窓縁に打ち込んだ釘くぎに結わえられ、遠くから見ると二本の麻糸のように見えた。防寨からながめると、その二本の綱は髪の毛ほどの細さで空に浮き出していた。

「だれか私に二連発のカラビン銃を貸してくれ。」とジャン・ヴァルジャンは言った。アンジョーラはちょうど自分のカラビン銃に弾をこめたところだったので、それを彼に渡した。

ジャン・ヴァルジャンは屋根部屋の方をねらって、発射した。

蒲団の綱の一方は切れた。

蒲団はもはや一本の綱で下がってるのみだった。

ジャン・ヴァルジャンは第二発を発射した。第二の綱ははね返って窓ガラスにあたった。蒲団は二本の竿の間をすべって街路に落ちた。

防寨の中の者は喝采かつさいした。

人々は叫んだ。

「蒲団ができた。」

「そうだ、」とコンプフェールは言った、「しかしだれが取りに行くんだ？」

実際蒲団は防寨の外に、防御軍と攻囲軍との間に落ちたのである。しかるに砲兵軍曹の死に殺気立った兵士らは、少し以前から、立てられた舗石しきいしの掩蔽線えんぺいせんの後ろに腹ばいになり、砲手らが隊伍を整えてる間の大砲の沈黙を補うため、防寨ぼうさいに向かって銃火を開い

ていた。暴徒らの方は、弾薬をむだにしないようにそれには応戦しなかった。銃弾は防寨に当たって砕け散っていたが、街路はしきりに弾が飛んで危険だった。

ジャン・ヴァルジャンは防寨の切れ目から出て、街路にはいり、弾丸の雨の中を横ぎり、蒲団ふとんの所まで行き、それを拾い上げ、背中に引っかけ、そして防寨の中に戻ってきた。

彼は自らその蒲団を防寨の切れ目にあてた。しかも砲手らの目につかぬよう壁によせて掛けた。

かくして一同は霰弾さんだんを待った。

やがてそれはきた。

大砲は轟然ごうぜんたる響きとともに一発の霰弾を吐き出した。しかしこんどは少しもはね返らなかつた。弾は蒲団の上に流れた。予期の効果は得られた。防寨の人々は無事であった。

「共和政府は君に感謝する。」とアンジョーラはジャン・ヴァルジャンに言った。ボシユエは驚嘆しかつ笑った。彼は叫んだ。

「蒲団にこんな力があるのは怪けしからん。ぶつかる物に対するたわむ物の勝利だ。しかしとにかく、大砲の勢いをそぐ蒲団は光栄なるかなだ。」

十
黎明^{れいめい}

ちようどこの時刻に、コゼットは目をさました。

彼女の室は狭く小ぎれいで奥まっていた。家の後庭に面して、東向きの細長い窓が一つついていた。

コゼットはパリーにどんなことが起こってるか少しも知らなかった。彼女は前夜外に出なかつたし、「騒ぎがもち上がってるようでございますよ」とトウーサンが言った時には、もう自分の室^{へや}に退いていた。

コゼットは少しの間しか眠らなかつたが、その間は深く熟睡した。彼女は麗しい夢を見た。それはおそらく小さな寝台が純白であつたせいも多少あろう。マリユスらしいだけれが、光のうちに彼女に現われた。彼女は目に太陽の光がさしたので目ざめた。そして初めはそれもなお夢の続きのような気がした。

夢から出てきたコゼットの最初の考えは、喜ばしいものだった。彼女の心はすっかり落ち着いていた。数時間前のジャン・ヴァルジャンと同じく彼女も、不幸を絶対にしりぞけようとする心的反動のうちにあつた。なぜともなく全力をつくして希望をいだきはじめた。

それから突然悲しい思いが起こってきた。——この前マリユスに会ってからも三日になつていた。しかし彼女は自ら考えた。マリユスは自分の手紙を受け取つたに違いない、自分のいる所を知つたはずである、知恵のある人だから、どうにかして自分の所へきてくれるだろう。——そしてそれも確かに今日だろう、今朝かも知れない。——もうすっかり明るくなつていたが、日の光は横ざまに流れていた。まだごく早いだろうと彼女は思った。けれどもとにかく起きなければならなかつた、マリユスが来るのを迎えるために。

彼女はマリユスなしには生きておれないような気がした。そしてそれでもう充分だつた。マリユスはきつと来るだろう。こないという理由は少しも認められなかつた。来ることは確かだつた。三日間も苦しむのは既に恐ろしいことだつた。三日もマリユスに会わせないと神様もあまりひどすぎた。けれど今は、神の残酷な悪戯たる試練もきりぬけてきたし、マリユスはきつといい消息を持つてきつつあるに違ひなかつた。実に青春とはそうしたものである。青春はすぐに目の涙をかわかす。悲しみを不用なものとして、それを受け入れない。青春はある未知の者の前における未来のほほえみである、しかもその未知の者は青春自身である。それが幸福であるのは自然である。その息はあたかも希望でできてるかのようにである。

その上コゼットは、マリユスがやってこないのはただ一日だけだというそのことについて、彼がどんなことを言ったか、またどんな説明をしたか、それを少しも思い出すことができなかった。地に落とした一個の貨幣がいかに巧みに姿を隠すか、そしていかにうまく見えなくなってしまうかは、人の皆知るところである。観念のうちにもそういうふうな人をたぶらかすものがある。一度頭脳の片すみに潜んでしまえば、もうおしまいである、姿が見えなくなってしまう、記憶で取り押さえることができなくなる。コゼットも今、記憶を働かしてみたが少しも効がないのにじれていた。マリユスが言った言葉を忘れてしまったのは、不都合なことであり済まないことであると、彼女は思った。

彼女は寢床から出て、魂と身体と両方の齋戒を、すなわち祈祷きとうと化粧とをした。

やむを得ない場合には読者を婚姻へやの室へやに導くことはできるが、処女の室へやに導くことははばかられる。それは韻文においてもでき難いことであるが、散文においてはなおさらである。

処女の室は、まだ開かぬ花の内部である、闇やみの中の白色である、閉じたる百合ゆりのひそやかな房へやで、太陽の光がのぞかぬうちは人がのぞいてはならないものである。蕾つぼみのままである婦人は神聖なものである。自らあらわなるその清浄な寢床、自らおのれを恐れる尊い半

裸体、上靴うわぐつの中に逃げ込む白い足、鏡の前にも人の瞳ひとみの前かのように身を隠す喉のどもと二元、器具の軋きしる音や馬車の通る音にも急いで肩の上に引き上げられるシャツ、結わえられたりボン、はめられた留め金、締められた紐ひも、かすかなおののき、寒さや貞節から来る小さな震え、あらゆる動きに対するそれとなき恐れ、気づかわしいものないおりにも常に感ずる軽やかな不安、暁の雲のように麗しいそれぞれの衣服の襞ひだ、すべてそれらのものは語るにふさわしいものではない。それを列挙するだけで既に余りあるのである。

人の目は、上りゆく星に対するよりも起き上がる若き娘の前に、いつそう敬けいけん虔けんでなければならぬ。手を触れることができるだけに、いつそうそつとしておくべきである。桃の実の絨じゆうもう毛もう、梅の実の粉毛、輻射状ふくしやじょうの雪の結晶、粉羽におおわれてる蝶の翼、などさえも皆、自らそれと知らない処女の純潔さに比ぶれば、むしろ粗雑なものにすぎない。若き娘は夢にすぎなくて、まだ一つの像ではない。その寝所は理想のほの暗い部分のうちうちに隠れている。不注意な一瞥いちべつはその漠ぼくたる陰影を侵害する。そこにおいては観照も冒ぼうと流くとなる。

それでわれわれは、コゼットが目をさましたおりのその香ばしい多少取り乱れた姿について、少しも筆を染めないでおこう。

東方の物語が伝えるところによると、薔薇ばらの花は神からまつ白に作られたが、まさに開かんとする時アダムにのぞかれたので、それを羞はじて赤くなったという。われわれは若き娘と花とを尊むがゆえに、その前においては無作法な言を弄ろうし得ないのである。

コゼットは急いで装いをし、髪を梳すきそれを結んだ。当時の婦人は、入れ毛や芯しんなどを用いて鬢まげや鬢びんをふくらすことをせず、髪の中に座型を入れることはなかったので、髪を結うのもごく簡単だった。それからコゼットは窓をあけ、方々を見回して、街路の一部や家の角かどや舗しきいし石の片すみなどを見ようとし、マリユスの姿が現われるのを待とうとした。しかし窓からは表は少しも見えなかった。その後庭はかなり高い壁でとり囲まれて、幾つかの表庭が少し見えるきりだった。コゼットはそれらの庭を憎らしく思い、生まれて始めて花を醜いものに思った。四つ辻つじの溝みぞの一端でも今は彼女の望みにいつそう叶かなうものだったろう。彼女は気を取り直して、あたかもマリユスが空から来るとでも思ってるように空をながめた。

すると、たちまち彼女は涙にくれた。変わりやすい気持ちのせいではなくて重苦しいものに希望の糸が切られたからだだった。彼女はそういう地位にあった。彼女は何とも知れぬ恐怖を漠ばくぜん然と感じた。実際種々のことが空中に漂っていた。何事も確かなことはわから

ぬと思ひ、互いに会えないことは互いに失うことだと思つた。そしてマリユスが空から戻つて来るかも知れないという考えは、もはや喜ばしいものではなく悲しいもののように思われた。

それから、かかる暗雲の常として、静穩の気が彼女の心にまた起こつてき、希望の念と、無意識的なそして神に信頼した微笑とが、心に起こつてきた。

まだ家中は眠つていた。あたりは田舎いなかのように静かだつた。窓の扉とびらは一つも開かれていず、門番小屋もしまつていた。トウーサンはまだ起きていなかつたし、父も眠つてゐるのだとコゼットは自然思つた。彼女は非常に苦しんだに違ひない、また今もお苦しんでゐたに違ひない、なぜなら、父が意地悪いことをしたと考へてゐたからである。しかし彼女はマリユスが必ず来ると思つてゐた。あれほどの光明が消えうせることは、まつたくあり得べからざることだつた。彼女は祈つた。ある重々しい響きが時々聞こえてゐた。こんな早くから大門を開けたりしめたりするのはおかしい、と彼女は言つた。しかしそれは、防寨ぼうさいを攻撃してゐる大砲の響きだつた。

コゼットの室へやの窓から数尺下の所、壁についてゐるまっ黒な古い蛇腹じゃばらの中に、燕つばめの巢ねが一つあつた。巢のふくれた所が蛇腹から少しつき出ていて、上からのぞくとその小さな巢

園の中が見られた。母親は扇のように翼をひろげて雛をおおうていた。父親は飛び上がった。出て行き、それからまた戻ってきては、嘴の中に餌と脣づけをもたらしていた。朝日の光はその幸福な一群を金色に輝かし、増せよ殖えよという自然の大法はそこにおごそかにほほえんでおり、そのやさしい神秘は朝の光栄に包まれて花を開いていた。コゼットは朝日の光を髪に受け、魂を空想のうちに浸し、内部は愛に外部は曙に輝かされ、ほとんど機械的に身をかがめて、同時にマリユスのことを思つてゐるのだとは自ら気づきもせず、それらの小鳥を、その家庭を、その雌雄を、その母と雛とを、小鳥の巢から乙女心を深く乱されながらうちながめ始めた。

十一 人を殺さぬ確実なる狙撃

襲撃軍の射撃はなお続いていた。小銃と霰弾とはこもごも発射された。しかし実際は大なる損害を与えなかつた。ただコラント亭の正面の上部だけはひどく害を受けた。二階の窓や屋根部屋の窓は、霰弾のために無数の穴を明けられて、しだいに形を失つてきた。そこに陣取つていた戦士らは身を隠すのやむなきに至つた。けれども、それは防塞攻撃の

戦術上の手段であつて、長く射撃を続けるのも、暴徒らに応戦さしてその弾薬をなくすためだった。暴徒らの銃火が弱つてき、もはや弾も火薬もなくなつたことがわかる時に、よいよ襲撃をやろうというのだった。しかしアンジョーラはその畏わなにかからなかつた。防ほ寨さいは少しも応戦しなかつた。

兵士らの射撃が来るたびごとにガヴローシユは舌で頬ほをふくらました。それは傲然ごうぜんたる軽蔑を示すものだった。

「うまいぞ、」と彼は言った、「どしどし着物を破つてくれ。俺われたちは繃帶ほうたいがいるんだ」。

クールフェーラツクは効果の少ない霰弾さんだんを嘲あざけつて、大砲の方へ向かつて言った。

「おい、大変むだ使いをするね。」

戦いにおいても舞踏会におけるがごとく、人は相手をほしがるものである。角面堡かくめんぼうがかく沈黙してゐることは、攻撃軍に不安を与え、何か意外の変事が起こりはしないかと心配させ始めたらしい。そして彼らは、舗石しきいしの砦とりでの向こうを見届けたく思い、射撃を受けながら応戦もしないその平然たる障壁の背後には、どういふことが行なわれてるか知りたく思つたらしい。暴徒らはふいに、近くの屋根の上に日光に輝く一つの兜帽かぶとぼうを見いだし

た。ひとりの消防兵が高い煙筒に身を寄せて、偵察ていさつをやってるらしかった。その視線は
ま上から防寨の中に落ちていた。

「あそこに困った偵察者が出てきた。」とアンジョーラは言った。

ジャン・ヴァルジャンはアンジョーラのカラビン銃を返していたが、なお自分の小銃を
持っていた。

一言も口をきかずに彼は消防兵をねらった。そして一瞬の後には、その兜帽は一弾を受
けて音を立てながら街路に落ちた。狼狽した兵士は急いで身を隠した。

第二の観察者がその後に見われた。それは将校だった。再び小銃に弾をこめたジャン・
ヴァルジャンは、その将校をもねらい、その兜かぶとぼう帽を兵士の兜帽と同じ所に打ち落とした。
将校もたまらずにすぐ退いてしまった。そしてこんどは、ジャン・ヴァルジャンの考
えが向こうに通じたらしかった。もうだれも再び屋根の上に現われなかった。防寨ぼうさいの中
をうかがうことはやめられた。

「なぜ殺してしまわないんだ？」とボシユエはジャン・ヴァルジャンに尋ねた。

ジャン・ヴァルジャンは返事をしなかった。

十二 秩序の味方たる無秩序

ボシユエはコンブフェールの耳にささやいた。

「あの男は僕の言葉に返事をしない。」

「射撃をもつて好意を施す男だ。」とコンブフェールは言った。

既に昔となつてゐるその当時のことをまだ多少記憶してゐる人々は、郊外からきた国民兵らが暴動に対して勇敢であつたことを知つてゐるであらう。彼らは特に一八三二年六月の戦いに熱烈で勇猛だつた。パンタンやヴェルテユやキュネットなどの飲食店の主人のうちには、暴動のために「営業」を休まなければならなくなり、舞踏室が荒廃したのを見て憤激し、飲食店の秩序を保たんがために、ついに戦死した者もあつた。かく中流市民的にしてまた勇壮なるこの時代には、種々の思想にもそれに身をささぐる騎士がいてともに、種々の利益にもそれをまもる勇士がいた。動機の卑俗さは何ら行動の勇壮さを減殺しはしなかつた。蓄積された貨幣の減少を回復せんがためには、銀行家らもマルセイエーズを高唱した。勘定場のためにも叙情詩的な血が流された。人々はスパルタ的な熱誠をもつて、祖国の微小縮図たる店頭を防御した。

根本においては、それらのものの中にこもっていた意義は皆まじめなものであつたと言ふべきである。すなわち社会の各要素が、平等の域にはいる前にまず、闘争の域にはいつていたのである。

なおこの時代のも一つの特徴は、政府主義（きちようめんな一党派に対する乱暴な名前ではあるが）のうちに交じつて無政府主義であつた。人々は不規律をもつて秩序の味方をしていた。国民軍の某大佐の指揮の下に勝手な召集の太鼓はふいに鳴らされた。某大尉は自分一個の感激から戦いに向かつた。某国民軍は「思いつき」で勝手な戦いをした。危急の瞬間に、「騒乱」のうちに、人々は指揮官の意見よりもむしろ多く自己の本能に従つた。秩序を守る軍隊の中に、真の単独行動の兵士が数多あつた、しかもフアンニコのごとく剣による者もあれば、アンリ・フォンフレードのごとくペンによる者もあつた。

一群の主義によつてよりもむしろ一団の利益によつて当時不幸にも代表されていた文明は、危険に陥つていた、あるいは陥つてると自ら信じていた。そして警戒の叫びを発していた。各人は自ら中心となり、勝手に文明をまもり助け庇つていた。だれも皆社会の救済をもつておのれの任務としていた。

熱誠のあまり時としては塵殺を事とするに至つた。国民兵の某隊は、その私権をもつ

て軍法会議を作り、わずか五分間のうちにひとりの捕虜の暴徒を裁断して死刑に処した。ジャン・プルーヴェールが殺されたのも、かかる即席裁判によってだった。実に狂猛なるリンチ法（私刑の法）であつて、それについてはいずれの党派も他を非難する権利を有しない。なぜならそれは、ヨーロッパの王政によつて行なわれたとともにまたアメリカの共和政によつても行なわれたからである。そしてこのリンチ法には、また多くの誤解が含まつていた。ある日の暴動のおり、ポール・エーメ・ガルニエというひとりの若い詩人は、ロアイヤル広場で兵士に追跡されてまさに銃剣で突かれんとしたが、六番地の門の下に逃げ込んでようやく助かった。「サン・シモン派のひとりだ」と兵士らは叫んで、彼を殺そうとしたのである。彼はサン・シモン公の追想記を一冊小わきにかかえていた。ひとりの国民兵がその書物の上にサン・シモンという一語を見て、「死刑だ！」と叫んだのだった。（訳者注 サン・シモン公は社会主義者サン・シモンとは別人）

一八三二年六月六日、郊外からきた国民兵の一隊は、上にあげたファンニコ大尉に指揮されて、自ら好んで勝手に、シャンヴルリー街で大損害を受けた。この事実はいかにも不思議に思えるが、一八三二年の反乱後に開かれた法廷の審問によつて証明されたものである。ファンニコ大尉は性急無謀な中流市民で、秩序の別働者とも称すべき男で、上に述べ

たような種類の人々のひとりであり、熱狂的な頑強がんきょうな政府党であつて、時機がこないのに早くも射撃をしたくてたまらなくなり、自分ひとりですなわち自分の中隊で防塞ぼうさいを占領しようという野心に駆られた。赤旗が上げられ、次いで古い上衣が上げられたのを黒旗だと思い、それを見てまた激昂げつこうした。將軍や指揮官らは会議を開いて、断然たる襲撃の時機はまだきていないと考え、そのひとりの有名な言葉を引用すれば、「反乱が自ら自分を料理する」まで待とうとした時、彼は声高にそれを非難した。彼から見れば、防塞はもう熟していたし、熟したものは落ちるべきはずだったので、彼はあえて行動したのだつた。

彼が指揮していた一隊も、彼と同じく決意の者どもであつて、一実見者の言うところによると、「熱狂者ども」であつた。彼の中隊は、詩人ジャン・プルーヴェールを銃殺した中隊で、街路の角かどに置かれてる大隊の先頭になつていた。最も意外な時機に、大尉は部下を防塞ぼうさいに突進させた。その行動は、戦略よりもむしろ多くほしいままな心からなされたもので、ファンニコの中隊には高価な犠牲をもたらした。街路の三分の二も進まないうちに、防塞からの一斉射撃いっせいしやげきを被つた。先頭に立つて走つていた最も大胆な四人の兵は、角面堡かくめんぼうの足下でねらい打ちにされた。そしてこの国民兵の勇敢な一群は、皆豪勇な者ら

ではあつたが戦いの粘着力を少しも持つていなかったの、しばらく躊躇ちゆうちよした後、舗し石きいしの上に十五の死体を遺棄しながら、退却のやむなきに至つた。その躊躇の暇は、暴徒らに再び弾をこめる余裕を与えた。そして避難所たる角に達しないうちに、第二の一斉射撃を受けてまた大なる損害を被つた。一時彼らは敵味方の射撃の間にはさまれた。砲兵は何の命令も受けないのでなお発射を続けていたから、その霰さんだん弾をも受けたのである。大胆無謀なファンニコは、霰弾にたおれたひとりだつた。彼は太砲すなわち秩序から殺されたのである。

その激しいというよりむしろ狂乱的な攻撃は、アンジヨウラを激昂げつこうさせた。彼は言つた。

「ばか野郎！ 下らないことに、部下を殺し、俺おれたちに弾薬を使わせやがる。」

アンジヨウラは暴動の真の将帥だつたが、言葉もそれにふさわしかった。反軍と鎮定軍とは同等の武器で戦つてゐるのではない。反軍の方は早く力を失いやすいものであつて、発射する弾薬にも限りがあり、犠牲にする戦士にも限りがある。一つの弾薬盒だんやくこうが空になり、ひとりの戦士がたおれても、もはやそれを補充すべき道はない。しかるに鎮定軍の方には、軍隊が控えて人員には限りがなく、ヴァンセンヌ兵機局が控えていて弾薬には限りがない。

鎮定軍には、防寨の人員と同数ほどの連隊があり、防寨の弾薬囊と同数ほどの兵器廠がある。それゆえ常に一をもつて百に当たるの戦いであつて、もし革命が突然現われて戦いの天使の炎の剣を秤ばかりの一方に投ずることでもない限りは、防寨ぼうさいはついに粉碎さるるにきまつている。しかし一度革命となれば、すべてが立ち上がり、街路の舗石しきいしは沸き立ち、人民の角面堡かくめんぼうは至る所に築かれ、パリーはおごそかに震い立ち、天意的なものが現われきたり、八月十日（一七九二年）は空中に漂い、七月二十九日（一八三〇年）は空中に漂い、驚くべき光が現われ、うち開いてる武力の顎おとがいはたじろぎ、獅子のごとき軍隊は、予言者フランスがつつ立つて泰然と構えているのを、眼前に見るに至るのである。

十三 過ぎゆく光

一つの防寨を守る混沌こんとんたる感情と情熱とのうちには、あらゆるものがこもっている。勇気があり、青春があり、名誉の意気があり、熱誠があり、理想があり、確信があり、賭と博者ばくしゃの熱があり、また特に間歇かんけつ的な希望がある。

この一時の希望の漠然ばくぜんたる震えの一つが、最も意外な時に、シャンヴルリーの防寨を

突然過ぎつた。

「耳を澄まして見ろ、」となお様子をうかがっていたアンジョーラはにわかに叫んだ、
「パリーが覚醒してきたようだ。」

実際六月六日の朝、一、二時間の間、反乱はある程度まで増大していった。サン・メーリーの頑強な警鐘の響きは、逡巡してゐる者らを多少奮い立たした。ポアリエ街とグラヴィリエ街とに防寨が作られた。サン・マルタン凱旋門の前では、カラビン銃を持つたひとりの青年が、単独で一個中隊の騎兵を攻撃した。掩蔽物もない大通りのまんなかで、彼は地上にひざまずき、銃を肩にあて引き金を引いて、中隊長を射殺し、それから振り向いて言った。「これでまたひとり悪者がなくなつた。」彼はサーベルで薙ぎ倒された。サン・ドウ二街では、目隠し格子の後ろからひとりの女が、市民兵に向かつて射撃をした。一発ごとに、目隠し格子の板が動くのが見えた。ポケットにいっぱい弾薬を入れてゐる十四歳の少年がひとり、コソンヌリ一街で捕えられた。多くの衛舎は攻撃を受けた。ベルタン・ポアレ街の入り口では、カヴェーニヤク・ド・バラニーユ將軍が先頭に立って進んでいた一個連隊の胸甲兵が、まったく不意の激しい銃火にむかえ打たれた。プランシユ・ミブレー街では、屋根の上から軍隊を目がけて、古い皿の破片や什器などが投げら

れた。それははなはだよくない徴候で、スールト元帥にその事が報告された時、昔ナポレオンの参謀だった彼もさすがに考え込んで、サラゴサの攻囲のおりシューシエが言った言葉を思い起こした、「婆さんどもまでが燂瓶しびんのものをわれわれの頭上にぶちまけるようになっては、とてもだめだ。」

暴動は一局部のことと思われていた際に突然現われてきた各所の徴候、優勢になつてきた憤怒の熱、パリイ郭外と呼ぶる莫ばくだい大な燃料の堆積の上にあちらこちら飛び移る火の粉、それらのものは軍隊の指揮官らに不安の念を与えた。彼らは急いでそれらの火災の始まりをもみ消そうとつとめた。そしてモーブユエやシャンヴルリーやサン・メーリーなどの各防寨ぼうさいは、最後に残して一挙に粉碎せんがために、各所の火の粉を消してしまふまで、その攻撃を延ばした。軍隊は沸き立った各街路に突進し、あるいは用心して徐々に進み、あるいは一挙に襲撃しながら、右に左に、大なるものは掃蕩そうとうし、小なるものは探査した。兵士らは銃を発射する人家の扉とびらを打ち破った。同時に騎兵も活動を始めて、大通りの群集を駆け散らした。そしてこの鎮圧はかなりの騒擾そうじょうを起こし、軍隊と人民との衝突に特有な騒々しい響きを立てた。砲火と銃火との響きの間々にアンジョーラが耳にしたのは、その騒ぎの音であった。その上彼は担架にのせられた負傷者らが通るのを街路の先端に認

めて、クールフェーラックに言った、「あの負傷者らはわが党の者ではない。」

しかしその希望は長く続かなかつた。光明は間もなく消えてしまった。三十分とたたないうちに、空中に漂つてたものは消散しつくした。あたかも雷を伴わない電火のようなものだった。孤立しながら固執する者らの上に人民の冷淡さが投げかける鉛のような重い一種の外套がいとうを、暴徒らは再び身に感じた。

漠然ぼくぜんと輪郭だけができかかつてきたらしい一般の運動は、早くも失敗に終わってしまつた。今や陸軍大臣の注意と諸將軍の戦略とは、なお残つてる三、四の防寨の上に集中されることになつた。

太陽は地平線の上の上つてきた。

ひとりの暴徒はアンジョーラを呼びかけた。

「われわれは腹がすいてる、実際こんなふうにも何にも食わずに死ぬのかね。」

自分の狭間はざまの所ひじになお肱ひじをついていたアンジョーラは、街路の先端から目を離さずに、頭を動かしてうなずいた。

十四 アンジョーラの情婦の名

クールフェーラックはアンジョーラの傍そばの舗しきいし石の上にすわって、大砲をなお罵倒ばとうし続けていた。霰弾さんだんと呼ぶる爆発の暗雲が恐ろしい響きを立てて通過するたびごとに、彼は冷笑の声を上げてそれを迎えた。

「喉のどを痛めるぞ、ばかな古ふるためき狸めが。気の毒だが、大声を出したってだめだ。まったく、雷鳴かみなりとは聞こえないや、咳せきくらいにしか思われない。」

そして周囲の者は笑い出した。

クールフェーラックとボシユエは、危険が増すとともにますます勇敢な上きげんさになつて、スカロン夫人のように、冗談をもつて食物の代用とし、また葡萄酒ぶどうしゆがないので、人々に快活の気分を注いでまわつた。

「アンジョーラは豪い奴だ。」とボシユエは言った。「あのびくともしない豪勇さはまったく僕を驚嘆させる。彼はひとり者だから、多少悲観することがあるかも知れん。豪いから女ができないんだといつもこぼしてる。ところがわれわれは皆多少なりと情婦を持つてゐる。だからばかになる、言い換えれば勇敢になる。虎とらのように女に夢中になれば、少なくとも獅子ししのように戦えるんだ。それは女から翻弄ほんろうされた一種の復讐ふくしゅうだ。ローラン

はアンゼリックへの面^{つらあて}当に戦死をした。われわれの勇武は皆女から来る。女を持たない男は、撃鉄のないピストルと同じだ。男を勢いよく発射させる者は女だ。ところがアンジヨールは女を持つていない。恋を知らないで、それでいて勇猛だ。氷のように冷たくて火のように勇敢な男というのは、まったく前代未聞だ。」

アンジヨールはその言葉をも耳にしないかのようだった。しかし彼の傍にいた者があつたら、彼が半ば口の中でパトリア（祖国）とつぶやくのを聞き取つたであろう。

ボシユエはなお冗談を言い続けていたが、その時クールフェーラックは叫んだ。

「またきたー！」

そして来客の名を告げる接待員のような声を出して付け加えた。

「八斤砲でございます。」

実際新しい人物がひとり舞台上に現われてきた。第二の砲門だった。

砲兵らはすみやかに行動を開始して、第二の砲を第一の砲の近くに据えつけた。

それによつて、防^{ぼうさい}寨の最後はほぼ察せられた。

しばらくすると、急いで操縦された二個の砲は、角^{かくめんほう}面堡に向かつて正面から火蓋^{ひぶた}を切つた。戦列歩兵や郊外国民兵らの銃火も、砲兵を掩護^{えんご}した。

ある距離をへだてて他の砲声も聞こえた。二門の砲がシャンヴルリー街の角面堡に打ちかかったと同時に、他の二門の砲はサン・ドウ二街とオーブリー・ル・ブーシユ街とに据えられて、サン・メーリーの防寨を攻撃したのである。四個の砲門は互いに恐ろしく反響をかわした。

それら陰惨な闘犬の吠え声は、互いに応え合ったのである。

今やシャンヴルリー街の防寨を攻撃してる二門の砲のうち、一つは霰弾さんだんを発射し、一つは榴弾りゅうだんを発射していた。

榴弾を発射していた砲は、少し高く照準されて、防寨の頂の先端に弾が落下するようにねらわれたので、そこを破壊して、霰弾の破裂するような舗石しきいしの破片を暴徒らの上に浴びせた。

かかる砲撃の目的は、角面堡の頂から戦士らを追いしりぞけ、その内部に集まらせようとするにあった。言い換えれば、突撃の準備だった。

一度戦士らが、榴弾のために防寨の上から追われ霰弾のために居酒屋の窓から追われるれば、襲撃隊はねらわれることもなくまたおそらく気づかれることもなく、その街路には入り込むことができ、前夜のようににわかに関面堡をよじ上ることもでき、不意を襲って占

領し得るかも知れなかつた。

「どうしてもあの邪魔な砲門を少し沈黙させなければいけない。」とアンジジョーラは言つた。そして叫んだ。「砲手を射撃しろ！」

一同は待ち構えていた。長く沈黙を守っていた防寨ぼうさいは、おどり立って火蓋ひふたを切つた。

七、八回の一斉射撃いっせいしやげきは、一種の憤激と喜びとをもって相次いで行なわれた。街路は濃い硝煙しょうえんに満たされた。そして数分間の後、炎の線に貫かれたその霏もやをおして、砲手らの三分の二は砲車の下にたおれてるのがかすかに見られた。残つてる者らはいかめしく落ち着き払つて、なお砲撃に従事していたが、発射はよほどゆるやかになつた。

「うまくいった。成功だ。」とボシユエはアンジジョーラに言つた。

アンジジョーラは頭を振つて答えた。

「まだ十五、六分間しなければ成功とはいえない。しかもそうすれば、もう防寨には十個ばかりの弾薬しか残らない。」

その言葉をガヴローシユが耳にしたらしかつた。

十五 外に出たるガヴローシユ

クールフェーラックは防寨のすぐ下の外部に、弾丸の降り注ぐ街路に、ある者の姿を突然見いだした。

ガヴローシユが、居酒屋の中から壇びんを入れる籠かごを取り、防寨ぼうさいの切れ目から外に出て、
角面堡かくめんほうの裾すそで殺された国民兵らの弾薬盒だんやくごうから、中にいっぱいまつてる弾薬を取つては、平然としてそれを籠の中に入れてるのだつた。

「そこで何をしてるんだ！」とクールフェーラックは言った。

ガヴローシユは顔を上げた。

「籠をいっぱいにしてるんだ。」

「霰さん弾だんが見えないのか。」

ガヴローシユは答えた。

「うん、雨のようだ。だから？」

クールフェーラックは叫んだ。

「戻ってこい！」

「今すぐだ。」とガヴローシユは言った。

そして一躍して街路に飛び出した。

読者の記憶するとおり、ファンニコの中隊は退却の際に、死体を方々に遺棄していた。

その街路の舗石しきいしの上だけに、二十余りの死体が散らばっていた。ガヴローシユにとつては二十余りの弾薬盒であり、防寨にとつては補充の弾薬であった。

街路の上の硝煙は霧のようだった。つき立った断崖だんがいの間の谷合に落ちてる雲を見たことのある者は、暗い二列の高い人家にいつそう濃くなされて立ちこめてるその煙を、おおよそ想像し得るだろう。しかも煙は静かに上つてゆき、絶えず新しくなっていた。そのために昼の明るみも薄らいで、しだいに薄暗くなつてくるようだった。街路はごく短かかったけれども、その両端の戦士は互いに見分けることがほとんどできなかった。

かく薄暗くすることは、防寨ぼうさいに突撃せんとする指揮官らがあらかじめ考慮し計画したことだったろうが、またガヴローシユにも便利だった。

その煙の下に隠れ、その上身体が小さかったので、彼は敵から見つけられずに街路のかなり先まで進んでゆくことができた。まず七、八個の弾薬盒だんやくこは、大した危険なしに盗んでしまった。

彼は平たく四つばいになつて、籠かごを口にくわえ、身をねじまげすべりゆきはい回つて、

死体から死体へと飛び移り、猿が胡桃の実をむくように、弾薬盒や弾薬囊を開いて盗んだ。

防寨の者らは、彼がなおかなり近くにいたにかかわらず、敵の注意をひくことを恐れて、声を立てて呼び戻すことをし兼ねた。

ある上等兵の死体に、彼は火薬筒を見つけた。

「喉のかわきにもってこいだ。」と彼は言いながら、それをポケットに入れた。

しだいに先へ進んでいって、彼はついに向こうから硝煙が見透せるぐらいの所まで達した。

それで、舗石の防壁の後ろに潜んで並んでる狙撃戦列兵や街路の角に集まってる狙撃国民兵らは、煙の中に何かが動いてるのを突然見いだした。

ある標石の傍に横たわってる軍曹の弾薬をガヴローシュが奪っている時、弾が一発飛んできてその死体に当たった。

「ばか！」とガヴローシュは言った、「死んだ奴をも一度殺してくれるのか。」

第二の弾は彼のすぐ傍の舗石に当たって火花を散らした。第三の弾は彼の籠をくつがえした。

ガヴローシユはそちらをながめて、弾が郊外兵から発射されてるのを認めた。彼は身を起こし、まっすぐに立ち上がり、髪のを風になびかし、両手を腰にあて、射撃してゐる国民兵の方を見つめ、そして歌った。

ナンテールではどいつも醜い、

罪はヴォルテール

バレーゾーではどいつも愚か、

罪はルーソー。

それから彼は籠かごを取り上げ、こぼれ落ちた弾薬を一つ残らず拾い集め、なお銃火の方へ進みながら、他の弾薬を略奪しに行つた。その時第四の弾がきたが、それもまたそれだ。ガヴローシユは歌った。

公証人じゃ俺おれはないんだ、

罪はヴォルテール、

俺は小鳥だ、小さな小鳥、

罪はルーソー。

第五の弾がまたそれで、彼になお第三齣せつを歌わせた。

陽気なのは俺おれの性質、

罪はヴォルテール、

みじめなのは俺の身じたく、

罪はルーソー。

そういうことがなおしばらく続いた。

その光景は、すさまじいとともにもまた愉快なものだった。ガヴローシユは射撃されながら射撃を愚弄ぐんろうしていた。いかにもおもしろがってる様子だった。あたかも獵人くちばしを嘴くちばしでつつついでる雀すずめのようだった。群が来るごとに彼は一連の歌で応じた。絶えず射撃はつづいたが、どれも命中しなかった。国民兵や戦列兵も彼をねらいながら笑っていた。彼は地に伏

し、また立ち上がり、戸口のすみに隠れ、また飛び出し、姿を隠し、また現われ、逃げ出し、また戻つてき、嘲弄で霰弾に応戦し、しかもその間に弾薬を略奪し、弾薬盒を空にしては自分の籠を満たしていた。暴徒らは懸念のために息をつめ、彼の姿を見送っていた。防寨は震えていたが、彼は歌っていた。それはひとりの子供でもなく、ひとりの大人でもなく、実に不思議な浮浪少年の精であった。あたかも傷つけ得べからざる戦いの侏儒であった。弾丸は彼を追っかけたが、彼はそれよりもなお敏捷だった。死を相手に恐ろしい隠れんぼをやつてるかのようで、相手の幽鬼の顔が近づくと指弾を食わしていた。

しかしついに一発の弾は、他のよりねらいがよかつたのかあるいは狡猾だったのか、鬼火のようなその少年をとらえた。見ると、ガヴローシユはよろめいて、それからぐたりと倒れた。防寨の者らは声を立てた。しかしこの侏儒の中には、アンテウス（訳者注 倒れて地面に触るるや再び息をふき返すという巨人）がいた。浮浪少年にとっては街路の舗石に触れることは、巨人が地面に触れるのと同じである。ガヴローシユは再び起き上がらんがために倒れたまでだった。彼はそこに上半身を起こした。一条の血が顔に長く伝つていた。彼は両腕を高く差し上げ、弾のきた方をながめ、そして歌い始めた。

地面の上に俺はおれころんだ、

罪はヴォルテール、

溝みぞの中に顔つき込んだ、

罪は……。

彼は歌い終えることができなかつた。同じ狙撃者の第二の弾が彼の言葉を中断させた。こんどは彼も顔を舗石の上に伏せ、そのまま動かかなかつた。偉大なる少年の魂は飛び去つたのである。

十六 兄は父となる

ちょうどその時リユクサンブールの園に——事変を見る目はどこへも配らなければならぬから述べるが——ふたりの子供が互いに手を取り合っていた。ひとりには七歳くらいで、ひとりは五歳くらいだった。彼らは雨にぬれていたで、日の当たる方の径みちを歩いていた。

年上の方は年下の方を引き連れていたが、二人ともぼろをまとい顔は青ざめ、野の小鳥のような様子をしていた。小さい方は言っていた、「腹がすいたよ。」

年上の方はほとんど保護者といったようなふうで、左手に弟を連れながら、右の手には小さな杖つえを持っていた。

園の中には他に人もいなかった。園は寂せき然ぜんとしており、鉄門は反乱のため警察の手で閉ざされていた。そこに露營していた軍隊は戦いに招かれて出かけていた。

ふたりの子供はどうしてそこにいたのか？ あるいは風紀衛兵の衛舎のすき間から逃げてきたのかも知れない。あるいは付近に、アンフェール市門か天文台の丘か、産表に包まれたる嬰兒おさなご（訳者注 幼児キリストのこと）を彼らは見いだしぬという文字のある破風のそばに近くの四つ辻つじかに、ある興行師の小屋があつて、そこから逃げ出してきたのかも知れない。あるいは前日の夕方、園の門がしめられる時番人の目をのがれて、人が新聞などを読む亭の中に一夜を過ごしたのかも知れない。それはとにかく事実を言えば、彼らは戸外に迷った身でありまた一見自由らしい身であつた。しかし戸外に迷ってしかも自由らしいというのは、棄すてられたということである。あわれなふたりの子供は実際棄てられた者であつた。

このふたりの子供は、ガヴローシユが世話してやったあの子供たちで、読者は記憶しているだろう。テナルデイエの児で、マニヨンに貸し与えられ、ジルノルマン氏の児とされていたが、今は根のない枝から落ちた木の葉となり風のまにまに地上に転々していたのである。

マニヨンの家にいた当時はきれいで、ジルノルマン氏に対する広告とされていたその着物も、今ではぼろとなっていた。

その後彼らは、「宿無し児」という統計のうちにはいることとなり、パリーの街路の上で、警察から調べられ捨てられまた見つけられるというような身の上になっていた。

そのみじめな子供らがリユクサンブルの園の中にいたのも、かかる騒乱の日のおかげだった。もし番人らに見つかつたら、ぼろ着物の彼らは追い出されたに違いない。貧しい子供は公の園えんゆうにはいることを許されていない。けれども、子供として彼らは花に対する権利を持っていることを、人はまず考うべきではないだろうか。

ふたりの子供は、鉄門がしめられていたためそこにいることができた。彼らは規則を犯していた。園の中に忍び込みそこに止まっていた。鉄門が閉じたとして番人がいなくなるわけではなく、なお見張りは続けられているはずであるが、しかしおのずから気がゆるんで

怠りがちになるものである。それに番人らもまた世間の騒ぎに心をひかれ、園の中よりも外の方に気を取られて、もう内部に注意していなかったもので、従って二人の違犯者がいることにも気づかなかつた。

前日雨が降り、その日の朝も少し降った。しかし六月の驟雨しゅううは大したことではない。暴風雨があつても、一時間とたつうちには、どこに雨が降ったかというようになり晴れてしまう。夏の地面は、子供の頬ほおと同じくすぐにかわきやすい。

夏至に近いま昼の光は刺すがようである。それはすべてを奪い取る。執拗しつように地面にしがみついてすべてを吸い取る。太陽も喉がかわいてるかと思われる。夕立ちも一杯の水にすぎない。一雨くらいはすぐに飲み干される。朝はすべてに水がしたたつていても、午後にはすべてが砂塵さじんにおおわれる。

雨に洗われ日光に拭ぬぐわれた緑葉ほどもごとなものはない。それは暖かい清涼である。庭の木も牧場の草も、根には水を含み花には日を受け、香炉のようになって一時にあらゆるかおりを放つ。すべてが笑いのぞき出す。人は穏やかな酔い心地になる。初夏は仮りの樂園である。太陽は人の心をものびやかにする。

そして、世にはこれ以上を何も求めない者がいる。ある気楽者らは、空の青いのを見て、

これで充分だと言う。ある夢想家らは、自然の驚異に没頭して、自然を賛美するのあまり、善悪に対して無関心となる。ある宇宙の観照者らは、恍惚として人事を忘れて、人は樹下に夢想し得るにかかわらず、甲の飢えや乙の渴きや、貧しき者の冬の裸体、子供の脊髓の淋巴性彎曲、煎餅蒲団、屋根裏、地牢、寒さに震える少女のぼろ、など種々のことになぜ心をわずらわすか、そのゆえんを了解しない。しかしそれらは、平穩なしかも恐ろしいしかも無慈悲にもひとり満足せる精神である。不思議にも彼らは、無限なるもののみをもつて充分としている。人の最も必要とする抱擁し得らるるものを、有限なるものを、彼らは知らない。崇高な働きたる進歩をなし得る有限なるもの、彼らは考えない。無限なるものと有限なるものとの人為的および神為的結合から生ずる名状し難いものを、彼らは看過する。ただ無辺際なるものに面してさえおれば、彼らはほほえむ。かつて愉快を知らないが、常に恍惚としている。沈湎することがその生命である。人類の歴史も彼らにとっては、ただの一些事にすぎない。その中にすべては含まっていない。真のすべては外部にある。人間という些事に心を勞して何の役に立つか。人間は苦しんでいるというが、あるいはそうかも知れない。しかしとにかく、アルデバラム星の上りゆくのをながめてみよ。母親は乳が出ず赤児は死にかかっているというが、そのようなことは自

分の知るところではない。まあとにかく、一片の樅もみの白木質が顕微鏡下に示すあの驚くべき薔薇形ばらがたの縞しまをながめてみよ。でき得るならば最もうるわしいマリーンのレースをそれに比較してみるがいい！とそう彼らは言う。それらの思索家は愛することを忘れてるのである。獣帯星座は彼らをして、泣く児に目を向けることを得ざらしむる。神は彼らの魂をおおい隠す。それは微小にして同時に偉大なる一群の精神である。ホラチウスはそのひとりであり、ゲートはそのひとりであり、ラ・フォンテーヌもおそらくはそのひとりであった。実に無限なるもののみを事とする壮大なる利己主義者であり、人の悲しみに対する平然たる傍観者であつて、天気さえ麗しければネ口のごとき暴君をも意に介せず、日の光をのみ見て火刑場を眼中に置かず、断頭台上の処刑をながめてもただ光線の作用のみを気にし、叫び声もすすりなきの声も瀕死ひんしのうめきも警鐘の響きも耳にせず、五月であればすべてをよく思い、紅色と金色との雲が頭上にたなびく限りは満足だと称し、星の光と小鳥の歌とのつきるまでは幸福であるべく定められている。

輝いたる暗黒なる人々である。彼らは自らあわれむべき者であるとは夢にも思わない。しかし彼らはまさしくあわれむべき者らである。涙を流さぬ者は目が見えない。眉まゆの下に両眼を持たず額の中央に一個の星を持っている、夜と昼とで同時にできてる者を、あわれ

みかつ賛嘆し得るとするならば、彼らこそあわれみかつ賛嘆すべき者らである。

それら思想家の無関心は、ある者の説によれば、高遠なる哲理から来るものであるという。あるいはそうであるとしても、しかしその高遠さのうちには不具なる点がある。人は不死であるとともに跛足びつこであり得る。神ヴルカヌスはその例である。人は人間以上であるとともに人間以下であり得る。自然のうちには広大なる不完全さも存する。太陽が盲目でないか否かをだれが知ろうぞ。

しからばおよそ何を信賴すべきであるか。太陽は虐偽なりとあえて言い得べきか。天才も、最高の人も、恒星たる人も、誤ることがあり得るのか。いと高きにある者、最高点にある者、頂にある者、中天にある者、地上に多くの光を送る者、彼らの目もわずかしか見えないのか、よく見えないのか、あるいはまったく見えないのか。それでは絶望のほかはないではないか。否。しからば太陽の上に何が存するのか。曰くいわ、神。

一八三二年六月六日の午前十一時ごろ、人影もない寂しいリユクサンブールの園は麗しい様さまを呈していた。五目形に植えられた樹木や花壇の花は、日光のうちに香氣や眩惑げんわくの気を送り合っていた。ま昼の光に酔うた枝々は、互いに相抱こうとしているがようだった。シコモルの茂みの中には頬ほお白しろが騒いでおり、雀すずめは勇ましい声を立て、啄木鳥きつつきはマロニエ

の幹をよじ上つて、樹皮の穴を軽く啄き回っていた。花壇のうちには百合の花が、もろもろの花の王らしく咲き誇っていた。それも至当である、香気のうちにも最も尊厳なるものは純白から発するかおりである。石竹の鋭い匂いも漂っていた。マリー・ド・メデイチの愛した古い小鳥も、高い樹木の中で恋を語っていた。チューリップの花は日の光を受けて、金色に紅色にまたは燃ゆるがようになり、あたかも花で作られた種々の炎に異ならなかつた。その群咲きのまわりには蜂が飛び回つて、炎の花から出る火花となつていた。すべては優美と快活とにあふれ、次に来たるべき雨さえもそうだった。再び来るその雨も、鈴蘭や忍冬が恵みをたれるのみで、少しも心配なものではなかつた。燕は見るも不安なほどみごとに低く飛んでいた。そこにある者は幸福の氣を呼吸し、生命はよきかおりを発し、自然はすべて純潔と救助と保護と親愛と愛撫と曙とを発散していた。天より落ちて来る思想は、人が脣づけする小児の小さい手のようにやさしいものであつた。

木の下に立つてる裸体のまっ白な像は、点々と光の落ちた影の衣服をまどつていた。それらの女神は日光のぼろをまどつていたのである。光線はその四方へたれ下がっていた。大きな池のまわりは、焼けるかと思えるまでに地面がかわききっていた。わずかに風があつて、所々に塵の渦を立てていた。去年の秋から残つてる少しの黄色い落葉が互いに愉快

げに追っかけ合つて、戯れてるがようだった。

豊かな光には何となく人の心を安らかならしむるものがあつた。生命、樹液、暑気、蒸発気などは満ちあふれていた。万物の下にその源泉の大きさが感ぜられた。愛に貫かれてるそれらの息吹いぶきの中に、反射と反映との行ききの中に、光の驚くべき濫費らんびの中に、黄金の液の名状し難い流出の中に、無尽蔵者の浪費が感ぜられた。そしてその光輝のうしろには、炎の幕のうしろにおけるがように、無数の星を所有する神がかすかに認め得らるのであつた。

砂がまかれてるために一点の泥土もなかつた、また雨が降つたために一握の塵埃じんあいもなかつた。草木の茂みは洗われたばかりの所だった。あらゆる種類のピロッドや繻子しゆすや漆うるしや黄金は、花の形をして地からわき出て、一点の汚れも帯びていなかった。壮麗であるとともに瀟洒しやうしやだった。楽しい自然の沈黙が園に満ちていた。その天国的な沈黙とともに、巢の中の鳩はとの鳴き声、群蜂ぐんぼうの羽音、風のそよぎなど、無数の音楽が聞こえていた。季節の調和は全体を一団の麗しいものに仕上げていた。春の来去は適当な順序でなされていた。ライラックの花は終わりに近づき、素馨ジャスミンの花は咲きそめていた。ある花が遅れていると、その代わりにある昆虫が早めに出ていた。六月の前衛たる赤い蝶ちようとうは、五月の後衛たる

白い蝶と相交わっていた。篠懸すずかけは新しい樹皮をまどつていた。マロニエのみごとな木立ちは微風に波打っていた。実にそれは光り輝いた光景であった。近く of 兵營の一老兵士は、鉄門から園の中をのぞいて言った、「正装した春だ。」

自然はすべて朝食にかかっていた。万物は食卓についていた。今はちようどその時刻だった。青い大きな卓布が空にかけられ、緑の大きな卓布が地にひろげられていた。太陽は煌々こうこうと輝いていた。神はすべてに食事を供していた。あらゆるものは各自の秣まぐさや餌えを持っていた。山鳩やまばとには麻の実があり、鶉ひわには黍きびがあり、金雀かなりやには藜はこべがあり、駒鳥こまどりには虫があり、蜂はちには花があり、蠅はえには滴虫しめがあり、蠅しめには蠅はえがあつた。彼らは互いに多少相食はみ合っていた。そこに善と悪との相交わる神秘がある。しかし彼らは一つとして空腹ではなかつた。

ふたりの見捨てられた子供は、大きな池のそばまできていたが、それら自然の光輝に多少心を乱されて、身を潜めようとしていた。人と否とを問わずすべて壮麗なるものに対するあわれな者弱い者の本能である。そして彼らは白鳥の小屋のうしろに隠れていた。

間を置いて方々に、叫びよびの聲、騷擾そうじょうの音、銃火の騷然たる響き、砲撃の鈍いとどろきなどが、風のまにまに漠然ぼくぜんと聞こえていた。市場町の方面には屋根の上に煙が見えて

いた。人を呼ぶような鐘の音が遠くに響いていた。

ふたりの子供は、それらの物音にも気づかないかのようだった。弟の方は時々半ば口の中で繰り返した。「腹がすいたよ。」

ふたりの子供とほとんど同時に、別のふたり連れが大きな池に近づいてきた。五十歳ばかりの老人とそれに手を引かれてる六歳ばかりの子供とであった。確かに親子であろう。子供は大きな菓子パンを持っていた。

後に廃されたことであるが、その当時は、マダム街やアンフェール街などのセーヌ川に沿ったある家には、リククスンブールの園の鍵かぎをそなえることが許されていて、借家人らは、鉄門が閉ざされた時でも自由に出入りし得られた。この親子はきつとそういう家の人であつたに違いない。

ふたりの貧しい子供はその「紳士」がやって来るのを見て、前よりもなお多少身を潜めた。

それはひとりの中流市民であつた。以前にマリユスがやはりその池のそばで、「過度を慎む」ようにと息子に言つてきかして一市民の言葉を、恋の熱に浮かされながら耳にしたことがあつたが、あるいはそれと同じ人だったかも知れない。その様子は親切と高慢と

を同時に示していて、その口はいつも開いてほほえんでいた。その機械的な微笑は、頤あごが張りすぎてるのに皮膚が少なすぎるためにできるのであつて、心を示すというよりむしろ歯を示してるだけだった。子供はまだ食い終えないでいるかじりかけの菓子パンを持ったまま、もう腹いっぱいになつてゐるような様子だった。暴動があるために子供の方は国民兵服をつけていたが、父親は用心のために平服のままだった。

父と子とは二羽の白鳥が浮かんでる池の縁に立ち止まった。その市民は白鳥に対して特殊な賛美の心をいだいてゐるらしかった。彼はその歩き方の点ではまったく白鳥に似寄つていた。

しかし今白鳥は泳いでいた。游泳は白鳥の主要な才能である。それはすこぶるみごとだった。

もしふたりの貧しい子供が耳を傾けたならば、そして物を理解し得るだけの年齢に達していたならば、彼らはそこに一個のまじめな男の言葉を聞き取り得たであろう。父は子にこう言つていた。

「賢い人は少しのものに満足して生きてゐる。私を見なさい。私ははなやかなことを好まない。金や宝石で飾り立てた着物を着たことはない。そんな虚飾は心の劣つた者のするこ

とだ。」

その時、強い叫び声が鐘の音と騒擾の響きとを伴って、市場町の方から突然聞こえてきた。

「あれはなに？」と子供は尋ねた。

父は答えた。

「お祭だよ。」

すると突然彼は、白鳥の緑色の小屋のうしろに身動きもしないで隠れてるぼろ着物のふたりの子供を見つけた。

「あんなのがそもそも始まりだ。」と彼は言った。

そしてちよつと黙った後に言い添えた。

「無政府主義がこの園にまで入り込んできてる。」

そのうちに子供は、菓子パンをかじったが、それをまた吐き出し、急に泣き出した。

「何で泣くんだい。」と父は尋ねた。

「もうお腹がすいていないんだもの。」と子供は言った。

父親の微笑はなお深くなった。

「お菓子を食べるには何もお腹がすいてなくてもいい。」

「このお菓子はイヤだ。固くなってるから。」

「もう欲しくないのか？」

「ええ。」

父は白鳥の方をさし示した。

「あの鳥に投げてやりなさい。」

子供は躊躇ちゆうちよした。もう食べたくないからと言って、それで他の者にくれてやる理由

とはならない。

父は言い続けた。

「慈悲の心を持ちなさい。動物をもあわれまなければいけない。」

そして彼は子供の手から菓子を取って、それを池の中に投げやった。

菓子は岸の近くに落ちた。

白鳥は遠く池の中程にいて、他の餌えを漁あさっていた。そして市民にも菓子パンにも気がつかなかつた。

市民は菓子がむだに終わりそうなのを感じ、その徒いたずらな難破なんぱに心を動かされて、激しい

合い図の身振りをしたので、ようやく白鳥の注意をひいた。

二羽の白鳥は何か浮いてるのを見つけ、まさしく船のように岸へ方向を変じ、菓子パンの方へ静かに進んできた。白い動物にふさわしいかにもゆったりした威風だった。

「シーニユ（白鳥）にはシーニユ（合い図）がわかる。」と市民はその頓知とんちを得意そうに言った。

その時、遠くの騒擾の響きはまた急に高まった。こんどはすごいように聞こえてきた。同じく一陣の風にも特にはつきりと意味を語るものがある。その時吹いてきた風は、太鼓のとどろきや鬨とぎの声や一隊の兵の銃火の音や警鐘と大砲との沈痛な応答の響きなどを、はつきりと伝えていた。それとちようど一致して、一団の黒雲がにわかには太陽を蔽うた。

白鳥はまだ菓子パンに達していなかった。

「帰ろう。」と父は言った。「テユイルリーの宮殿が攻撃されてる。」

彼はまた子供の手を取った。それから言い添えた。

「テユイルリーとリュクスンブルとは、皇族と貴族との間ぐらいしか離れていない。間は遠くない。鉄砲の弾が雨のように飛んでくるかも知れない。」

彼は空の雲をながめた。

「そしてまた本当の雨も降りそうだ。空までいつしよになつてる。ブランシュ・カデットは（若い枝は——ブルボン分家は）挫くじかれる。早く帰ろう。」

「白鳥がお菓子を食べる所が見たいなあ。」と子供は言った。

父は答えた。

「そうしては不用心だ。」

そして彼は自分の小さな市民を連れていった。

子供は白鳥の方を残り惜しがって、五目形の植え込みの角かどに池が隠れるまで、その方を振り返つてながめた。

そのうちに、白鳥と同時にふたりの浮浪の子供が菓子パンに近寄つてきた。菓子は水の上に浮いていた。弟の方は菓子をながめ、兄の方は去つてゆく市民をながめていた。

父と子とは入りくんだ道をたどつて、マダム街の方へ通ずる段をなした木の茂みにはいつていった。

彼らの姿が見えなくなると、すぐに兄は、丸みをもった池の縁に腹ばいになり、左手でそこにしがみつきながら、ほとんど水に落ちそうになるほど身を乗り出し、右手を伸ばしてその杖を菓子の方へ差し出した。白鳥は競争者を見て急いだ。しかし急ぎながら胸をつ

き出したので、小さな漁夫にはそれがかえって仕合わせとなった。水は二羽の白鳥の前に揺られて退いた。そのゆるやかな丸い波紋の一つのために、菓子は静かに子供の杖の方へ押しやられた。白鳥がやってきた時に、杖は菓手に届いた。子供は一つ強くたいてそれを引きよせ、白鳥をおどかし、菓子をつかみ取り、そして立ち上がった。菓子はぬれていたが、ふたりは腹がすき喉がかわいていた。兄はその菓子パンを、大きいのと小さいのと二つに割り、自分は小さい方を取り、大きい方を弟に与えて、こう言った。

「それをつめ込んでしまえ。」

十七 死せる父死なんとする子を待つ

マリユスは防寨ぼうさいから外に飛び出した。コンブフェールもそのあとに続いた。しかしもう間に合わなかった。ガヴローシユは死んでいた。コンブフェールは弾薬の籠かごを持ち帰り、マリユスはガヴローシユの死体を持ち帰った。

彼は思った。ああ、父親が自分の父にしてくれたことを、自分は今その子に報いているのだ。ただ、テナルデイエは生きた自分の父を持ち帰ってくれたが、自分は今彼の死んだ

子を持ち帰っているのか。

マリユスがガヴローシユを胸にかかえて角面堡かくめんほうに戻ってきた時、少年の顔と同じく彼の顔も血にまみれていた。

ガヴローシユを抱き取るうとしてかんだ時、一弾が彼の頭をかすめた。彼はそれから気づかなかつた。

クールフェーラツクは自分の首飾りを解いて、マリユスの額を結わえてやった。

人々はマブーフと同じテーブルの上にガヴローシユを横たえ、二つの死体の上に黒い肩掛けをひろげた。それは老人と子供とをおおうに足りた。

コンブフェールは持ち帰った籠かごの弾薬を皆に分配した。

各人に十五発分ずつあつた。

ジャン・ヴァルジャンはやはり標石の上に腰掛けたままじっとしていた。

コンブフェールが十五発の弾薬を差し出した時、彼は頭を振った。

「まったく珍しい変人だ。」とコンブフェールは低い声でアンジョーラに言った。「この防寨ぼうさいにおいて戦おうともしない。」

「それでも防寨を守つてはいる。」とアンジョーラは答えた。

「勇壯の方面にも奇人がいるわけだな。」とコンブフェールは言った。

それを聞いたクールフェーラックも口を出した。

「マブーフ老人とはまた異なつた種類の男だ。」

ここにちよつと言つておかなければならないが、防寨は銃弾を浴びせられながら、その内部はほとんど乱されていなかった。こういう種類の戦いの旋風を横切つたことのない者は、その動乱に交じつて妙に静穩な瞬間があることを、おそらく想到し得ないだろう。人々は行ききたり、語り、戯れ、ぶらぶらしている。霰弾さんたんの中でひとりの兵士が、「ここはまったく独身者ひとりものの朝飯のようだ」と言つたのを、實際耳にした男をわれわれは知つている。繰り返して言うが、シャンヴルリー街の角面堡かくめんほうの中は、至つて静穩らしく見えていた。あらゆる事変や局面は、すべて通過し終わつていた、もしくは通過し終わらんとしていた。状況は危急なものから恐ろしいものとなり、恐ろしいものから更に絶望的なものとなろうとしていた。状況が暗澹あんたんとなるに従つて、勇壯な光はますます防寨ぼうさいを赤く染めていた。アンジョーラは若いスパルタ人が抜き身の剣を陰惨な鬼神エピソードにささげような態度で、おごそかに防寨に臨んでいた。

コンブフェールは腹部に前掛けをつけて負傷者らの手当てをしていた。ボシユエとファイ

イーとはガヴローシユが上等兵の死体から取った火薬筒で弾薬を作っていたが、ボシユエはファイイーにこう言った、「われわれはじきに他の遊星へ旅立つんだ。」クールフエーラツクは自分の場所としておいたアンジョーラの傍の舗石の上に、仕込み杖や銃や二挺の騎馬用ピストルや一挺のポケット・ピストルなどを、まるで武器箱をひっくり返したようにして、若い娘が小さな裁縫箱を片づけるような注意でそれを整理していた。ジャン・ヴァルジヤンは正面の壁を黙ってながめていた。ひとりの労働者はユシユルー上さんの大きな麦稈帽子を頭の上に紐で結わえて、日射病にかかるといけねえなどと言っていた。エークスのクーグールド結社に属する青年らは、最後にも一度田舎言葉を急いで口にしておこうと思ってるかのように、いっしよに集まって愉快そうにしゃべり合っていた。ジョリーはユシユルー上さんの鏡を取ってきて、それに映して自分の舌を検査していた。数人の戦士らは、ある引き出しの中にほとんど黴のはえたパン屑を見つけ出して、貪るようにそれを食っていた。マリユスは死せる父が自分というであろうかと心を痛めていた。

十八 餓食となれる禿鷹

なお防寨ぼうさいに独特な心理的事実を一つ述べておきたい。この驚くべき市街戦の特色は一つたりとも省いてはいけないからである。

上に述べたとおりその内部はいかにも不思議なほど静穏であるけれども、それでも中にいる人々にとっては、防寨はやはり一つの幻のごとく感じられるものである。

内乱の中には黙示録的神秘がある。未知の世界のあらゆる霧もやは荒々しい炎を交じえている。革命はスフィックスである。防寨の中を通った者はだれでも、夢の中を過ぎたかと思ふ。

そういう場所で人が感ずるところのものは、既にわれわれがマリユスについて指摘してきたとおりであり、また結果もやがて述べんとするとおりであるが、実に生せい以上でありまた以下である。一度防寨を出れば、そこで何を見てきたかはもうわからなくなる。恐ろしいものであったが、さて何であったかはわからない。人の顔をして戦つてゐる多くの観念にとりかこまれていた。未来の光明の中に頭をつき込んでいた。死体が横たわり幽霊がつつ立っていた。時間は巨大であつて永劫えいこうが有する時間のようだった。死の中に生きていた。もろもろの陰影が過ぎ去つていった。しかしそれらは何であつたか？ 血の流るる手をも

見た。耳を聳^{ろう}するばかりの恐ろしい響きがあり、また恐怖すべき静寂があつた。叫んでるうち開いた口があり、また沈黙してらうち開いた口があつた。煙に包まれていたし、おそらくやみ夜に包まれていた。測り知られぬ深みから流れ出る凄^{せい}惨^{さん}なものに触れたようでもあつた。爪^{つめ}の中に何か赤いものついでるのが見える。しかしもはや何のことだか思ひ出せないのである。

さて、シャンヴルリー街に戻つてみよう。

突然、二度の一^い斉^{せい}射^し撃^{げき}の間に、時を報ずる遠い鐘の音が聞こえた。

「正午だ。」とコンブフェールは言つた。

その十二の鐘が鳴り終えないうちに、アンジョーラはすつくと立ち上がり、防寨の上からとどろくような声を出して叫んだ。

「舗^{しきいし}石を家の中に運べ。窓や屋根裏にそれをあてろ。人員の半分は射撃にかかり、半分は舗石の方にかかるんだ。一刻も猶予はできない。」

肩^{おの}に斧をかついだ消防工兵の一隊が、街路の先端に戦鬪隊形をなして現われたのだつた。それは一縦隊の先頭にすぎなかつた。そしてその縦隊というのは無論襲撃隊であつた。

防寨^{ぼうさい}を破壊する任務を帯びてる消防工兵は常に、防寨を乗り越える任務を帯びてる兵士

の先に立つべきものである。

一八二二年クレルモン・トンネール氏が「首繩くびなわの一ひねり」と呼んだ危急の瞬間に、人々はまさしく際会していたのである。

アンジョーラの命令は直ちにそのとおり実行された。かく命令が急速に正確に行なわれるのは船と防塞とに限ることで、両方とも脱走することのできない唯一の戦場である。一分間とたたないうちに、アンジョーラがコラント亭の入り口に積ましておいた舗石の三分の二は、二階の屋根裏に運ばれ、次の一分間が過ぎないうちに、それらの舗石は巧みに積み重ねられて、二階の窓や屋根裏の軒窓の半ばをふさいだ。主任建造者たるフイーの考案によつて巧みに明けられた数個の間隙かんげきからは、銃身が差し出されるようになっていた。かく窓を固めることは、霰弾さんだんの発射がやんでいたのでことに容易だった。が今や二門の砲は、襲撃に便利な穴を、あるいはでき得べくんば一つの割れ目を、そこに作らんがために、障壁の中央めがけて榴弾りゅうだんを発射していた。

最後の防物たる舗石しきいしが指定の場所に配置されたとき、アンジョーラはマブーフの死体がのせられてるテーブルの下に置いていた壘びんを、すっかり二階に持つてこさした。

「だれがそれを飲むんだ。」とボシユエは尋ねた。

「奴らが。」アンジョーラは答えた。

それから人々は一階の窓をふさぎ、夜分に居酒屋の扉を内部から締め切ることになってる鉄の横木を、すぐ差し入れるばかりにしておいた。

要塞は完全にでき上がった。防寨はその城壁であり、居酒屋はその櫓だった。残つてゐる舗石で人々は防寨の切れ目をふさいだ。

防寨の守備軍は常に軍需品を節約しなければならぬし、攻囲軍もそれをよく知つてゐるので、攻囲軍はわざわざ敵をあせらすような緩慢な方略を用い、時機がこないのに早くも銃火の中におどり出してみせるような外観だけの策略を事とし、実際はゆっくり落ち着いてゐるものである。襲撃の準備はいつも一定の緩慢さをもつてなされ、次に電光石火の突撃が始められる。

その緩慢な準備の間に、アンジョーラはすべてを検査しすべてを完成するの暇を得た。かかる同志らが死なんとする以上は、その死はりっぱなものでなければならぬ、と彼は思つてゐた。

彼はマリウスに言った。「僕らふたりは主将だ。僕は家の中で最後の命令を与えよう。君は外にいて見張りをしてくれたまえ。」

マリユスは防寨ぼうさいの頂で見張りの位置についた。

読者が記憶するとおり野戦病院となつて料理場の扉とびらを、アンジョーラは釘付けくぎづにさした。

「負傷者らに累を及ぼしてはいけない。」と彼は言った。

彼は下の広間で、簡潔な深く落ち着いた声で、最後の訓令を与えた。ファイイーはそれに耳を傾け、一同を代表して答えた。

「二階に、階段を切り離すための斧おのを用意しておけ。それがあるか？」

「ある。」とファイイーは言った。

「いくつ？」

「普通のが二つと大斧が一つ。」

「よろしい。健全な者が二十六人残っている。銃は何挺なんちようあるか。」

「三十四。」

「八つ余分だな。その八挺にも同じく弾をこめて持っている。サーベルやピストルは帯にはさめ。二十人は防寨につけ、六人は屋根裏や二階の窓に潜んで、舗石しきいしの銃眼から襲撃軍を射撃しろ。ひとりでも手をこまぬいてはいけない。間もなく襲撃の太鼓が聞こえ

たら、階下したの二十人は防寨に走り出る。早い者から勝手にいい場所を占めるんだ。」

そういう手配りをした後、彼はジャヴエルの方を向いて、そして言った。

「きさまのことも忘れやしない。」

そしてテーブルの上に一挺のピストルを置いて、彼は言い添えた。

「ここから最後に出る者が、この間諜スパイの頭を打ちぬくんだ。」

「ここで？」とだれかが尋ねた。

「いや。こんな死体をわれわれの死体に交じえてはいけない。モンデトゥール街の小さな防寨ぼうさいはだれでもまたぎ越せる。高さ四尺しかない。こいつは堅く縛られてる。そこまで連れていって、そこで始末するがいい。」

その際に及んで、アンジョーラよりなお平然たる者があるとすれば、それはジャヴエルであった。

そこにジャン・ヴァルジャンが出てきた。

彼は暴徒らの間に交じっていたが、そこから出てきて、アンジョーラに言った。

「君は指揮者ですか。」

「そうだ。」

「君はさつき私に礼を言いましたね。」

「共和の名において。防寨はふたりの救い主を持っている、マリユス・ポンメルシーと君だ。」

「私には報酬を求める資格があると思いますか。」

「確かにある。」

「ではそれを一つ求めます。」

「何を？」

「その男を自分で射殺することです。」

ジャヴェルは頭を上げ、ジャン・ヴァルジャンの姿を見、目につかぬくらいの身動きを
して、そして言った。

「正当だ。」

アンジョーラは自分のカラビン銃に弾をこめ始めていた。彼は周囲の者を見回した。

「異議はないか？」

それから彼はジャン・ヴァルジャンの方を向いた。

「^{スパイ}間諜は君にあげる。」

ジャン・ヴァルジャンは実際、テーブルの一端に身を置いてジャヴェルを自分のものにした。彼はピストルをつかんだ。引き金を上げるかすかな音が聞こえた。

それとほとんど同時に、ラツパの響きが聞こえてきた。

「気をつけ！」と防寨ぼうさいの上からマリユスが叫んだ。

ジャヴェルは彼独特の声のない笑いを始めた。そして暴徒らをじつとながめながら、彼らに言った。

「きさまたちも俺おれ以上の余命はないんだ。」

「みんな外へ！」とアンジョーラは叫んだ。

暴徒らはどやどやと外に飛び出していった。そして出てゆきながら、背中に——こう言うのを許していただきたい——ジャヴェルの言葉を受けた。

「じきにまた会おう！」

十九 ジャン・ヴァルジャンの復讐ふくしゅう

ジャン・ヴァルジャンはジャヴェルとふたりきりになった時、捕虜の身体のまんなかを

縛つてテーブルの下で結んである繩を解いた。それから立てという合図をした。

ジャヴェルはそれに従つた。縛られた政府の権威が集中してゐるような名状し難い微笑を浮かべていた。

ジャン・ヴァルジャンは鞅をとらえて駄馬を引きつれるように、鞅縛りにした繩を取つて、ジャヴェルを引き立て、自分のうしろに引き連れながら、居酒屋の外に出た。ジャヴェルは足をも縛られていてごく小またにしか歩けなかつたので、ゆっくりと進んでいった。ジャン・ヴァルジャンは手にピストルを持っていた。

ふたりはかくて防寨の中部の四角な空地を通つていった。暴徒らはさし迫つた攻撃の方に心を奪われて、こちらに背中を向けていた。

ただマリユスひとりは、少し離れて防壁の左端に控えていて、ふたりの通るのを見た。死刑囚と処刑人と相並んだありさまは、マリユスの心の中にある死の光で照らし出された。ジャン・ヴァルジャンは一瞬間もとらえた手をゆるめないで、モンデトゥール小路の小さな砦を、ようやくにしてジャヴェルにまたぎ越さした。

その防壁を乗り越えた時、彼らはその小路の中で、まったくふたりきりになった。だれも見てゐる者はなかつた。暴徒らからは人家の角で隠されていた。防寨から投げ捨てられ

た死骸が、数歩の所に恐ろしいありさまをして積み重なっていた。

その死骸の重なった中に、一つのまっさおな顔と乱れた髪と穴のあいた手と半ば裸の女の胸とが見えていた。エポニーヌであった。

ジャヴェルはその女の死体を横目でじつとながめ、深く落ち着き払って低く言った。

「見覚えがあるような娘だ。」

それから彼はジャン・ヴァルジャンの方に向いた。

ジャン・ヴァルジャンはピストルを小わきにはさみ、ジャヴェルを見つめた。その目つきの意味は言葉にせずとも明らかだった。「ジャヴェル、私だ、」という意味だった。

ジャヴェルは答えた。

「復讐するがいい。」

ジャン・ヴァルジャンは内隠しからナイフを取り出して、それを開いた。

「どすか？」とジャヴェルは叫んだ。「もつともだ。貴様にはその方が適當だ。」

ジャン・ヴァルジャンはジャヴェルの首についてる鞅むながいしほ縛りを切り、次にその手首の繩なわを切り、次に身をかがめて、足の綱を切った。そして立ち上がりながら言った。

「これで君は自由だ。」

ジャヴエルは容易に驚く人間ではなかった。けれども、我を取り失いはしなかったが一種の動乱をおさえることができなかつた。彼は茫然ぼうぜんと口を開いたまま立ちすくんだ。

ジャン・ヴァルジャンは言い続けた。

「私はここから出られようとは思っていない。しかし万一の機会に出られるようなことがあつたら、オンム・アルメ街七番地にフォーシユルヴァンという名前で住んでいる。」

ジャヴエルは虎とらのように眉まゆをしかめて、口の片すみをちらと開いた。そして口の中でつぶやいた。

「気をつける。」

「行くがいい。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

ジャヴエルはまた言った。

「フォーシユルヴァンと言つたな、オンム・アルメ街で。」

「七番地だ。」

ジャヴエルは低く繰り返した。「七番地。」

彼は上衣のボタンをはめ、両肩の間に軍人らしい硬直な線を作り、向きを変え、両腕を組んで一方の手で頤あごをささえ、そして市場町の方へ歩き出した。ジャン・ヴァルジャンは

その姿を見送った。数歩進んだジャヴェルは振り向いて、ジャン・ヴァルジャンに叫んだ。「君は俺おれの心を苦しめる。むしろ殺してくれ。」

ジャヴェルはジャン・ヴァルジャンに向かってもうきさまと言っていないのを自ら知らなかった。

「行くがいい。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

ジャヴェルはゆるい足取りで遠ざかっていった。やがて彼はプレーシユール街の角かどを曲がった。

ジャヴェルの姿が見えなくなった時、ジャン・ヴァルジャンは空中にピストルを発射した。

それから彼は防寨ぼうさいの中に戻って言った。

「済んだ。」

その間に次のことが起こっていた。

マリユスは防寨の内部より外部の方に多く気を取られて、下の広間の薄暗い奥に縛られた間謀スパイをその時までよくは見なかった。

しかし、死に行くため防寨をまたぎ越してる間謀スパイをま昼の光で見た時、彼はその顔を

思い出した。一つの記憶が突然頭に浮かんできた。ポントアーズ街の警視のことと、防寨の中で自分が使っている二にちよう挺のピストルはその警視からもらったものであることを、思い起こした。そしてその顔を思い起こしたばかりでなく、またその名前を思い起こした。けれどもその記憶は、彼の他の観念と同じように、おぼろげで乱れていた。それは自ら下した断定ではなく、自ら試みた疑問であった。

「あの男は、ジャヴエルと名乗ったあの警視ではないかしら？」

たぶんまだその男のために調停する時間はあつたらう。しかし、果たしてあのジャヴエルであるかをまず確かめなければならなかった。

マリユスは防寨の向こう端に位置を占めたアンジョーラを呼びかけた。

「アンジョーラ！」

「何だ！」

「あの男の名は何というんだ。」

「どの男？」

「あの警察の男だ。君はその名前を知ってるか。」

「もちろん。自分で名乗ったんだ。」

「何という名だ。」

「ジャヴェル。」

マリユスは身を起こした。

その時、ピストルの音が聞こえた。

ジャン・ヴァルジャンが再び現われて、「済んだ」と叫んだ。

暗い悪寒おかんがマリユスの心をよぎった。

二十 死者も正しく生者も不正ならず

防寨ぼうさいの臨終くもんの苦悶くもんはまさに始まろうとしていた。

その最後の瞬間の悲痛な莊嚴さを、あらゆるものが助成していた。空中に漂つてゐる無数の神秘的響き、見えない街路の中に行動してゐる密集した軍隊の気配けはい、おりおり高まる騎兵の疾駆する音、砲兵の行進する重いとどろき、パリ―街衢がいくに交差する銃火と砲火、屋根の上うへに立ち上つてゆく金色の戦塵せんじん、恐ろしい遠い一種の叫喚の聲、至る所を脅かす電光、今やすすりなきするような調子になつてゐるサン・メーリーの警鐘、季節の穏和、日光と雲

とに満たされた空の輝き、日光の麗しき、人家の恐ろしい沈黙。

前日以来、シャンヴルリー街の両側に並んでる人家は、二つの壁、荒々しい二つの壁となつていたのである。戸は閉ざされ、窓は閉ざされ、雨戸も閉ざされていた。

現在とはいたく異なつてゐる当時にあつては、あまりに長く続いた状態を、特に与えられた法典を、あるいは法治国の美名を、民衆が破り去らんと欲する時間が来る時、一般の憤怒の念が大氣中にひろがる時、都市がその舖石しきいしをはぐに同意する時、反乱がその合い言葉に耳にささやいて市民をほほえます時、その時住民は言わば暴動の氣に貫かれて、戦士の後援者となり、また人家は、よりかかつてくる即座の要塞と相親しんだ。しかし情況がまだ熟さない時、反乱が決定的な同意を得ない時、群集がその運動を好まない時には、戦士らは見捨てられ、都市は反抗の周囲に砂漠さばくと変じ、人の魂は冷却し、避難所は閉ざされ、街路は防寨ぼうさいを占領せんとする軍隊を助ける隘路あいろとなるのだった。

民衆はいかに強いられても、おのれの欲する以上に早く足を運ぶものではない。民衆にそれを強いんとする者こそ禍わざわいである。民衆は他の自由にはならない。そして民衆は反乱をその成り行きに放置する。暴徒らはペスト患者のごとく見捨てられる。人家は断崖だんがいとなり、戸は拒絶となり、家の正面は壁となる。その壁は物を見また聞くけれども、それを欲

しない。多少口を開いて反徒を救うであろうか。否。一の審判者となるのである。反徒らをながめて、彼らに罪を宣告する。それらの閉ざされた人家こそいかに陰惨なるものであるか。一見死んでるように思われるが、実は生きていたのである。生命の流れはそこで切れてるようであるが、実は存続している。もう一昼夜の間だれも出入りしなかったが、人はひとりも欠けてはいない。その巖いわおのように静まり返った家の中では、人が行ききしきが起き臥がしている。家庭をなしている。飲みまた食っている。ただ恐ろしいことには、戦々きようき兢兢きようきとしていよう。その恐怖の念は、反徒らに対するひどい冷淡さを宥ゆうじよ恕するものである。また酌量すべき情況としては狼狽の念もいっしょにある。時としては、そして実際あったことであるが、恐怖は熱情となることもある。慎重が憤激に変わり得るように、恐怖は狂猛に変わり得る。そこから、温和派の熱狂者という意味深い言葉が生じてくる。極度におびえた感情は炎となって、そこからすごい煙のような憤怒の情が生じてくる。「彼ら反徒どもは何を望んでいるのか？ 彼らはかつて満足ということを知らない。彼らは平穩な人々にまで累を及ぼそうとしている。これでもまだ革命が足りないとも思っているのか。ここに何をしに来たのか。勝手に何でもするがいい。終わりはどうせきまっている。自業自得だ。なるようになるだろうさ。われわれの知ったことではない。この街路もかわいそ

うに一面に弾傷を受けるのか。全く無頼漢どもの寄り合いだ。まず第一に戸を開かないことだ。「かくして人家は、墓のようなありさまになる。反徒はその戸の前で、死の苦しみを受ける。霰弾さんだんと抜き身のサーベルとが近づいてくるのを見る。叫んだところで、聞いている者はあるが助けにきてくれる者はないのがわかつている。そこには他を庇護ひごし得る壁もあり、彼らを救い得る人もいる。しかも、壁には聞く耳があるけれども、人には石のような心しかない。

だれを咎とがむるべきであるか？

何人なんびとをも、そしてまたすべての人を。

吾人が属するこの不完全な時代を。

高遠なる理想が、自ら反乱と変化し、哲理上の抗議を武装上の抗議となし、ミネルヴァをパラスとするのは（訳者注 ミネルヴァというは詩の神としての名称であり、パラスというは戦の神としての名称であつて、同一の女神である）、常に自己を危険にさらしていることである。忍耐しきれずに暴動となる理想は、いかなる目に会うかを自らよく知っている。多くは時機が早すぎるものである。それで自ら運命に忍従して、勝利の代わりに破壊を勇ましく甘受する。拒絶を浴びせる者らを恨むことなく、かえって彼らを弁護しながら

彼らに奉仕する。寛大にも見棄てられることに同意する。障害に対しては不屈であり、忘恩に対しては柔和である。

とはいえ、そもそもそれは、忘恩であろうか？

しかり、人類の見地よりすれば。

否、個人の見地よりすれば。

進歩は人間の様式である。人類一般の生命を進歩と称する。人類の集団的歩行を進歩と称する。進歩は前進する。それは天国的なるものおよび神的なるものの方へ向かって、地上的な人間的な大旅行を試みる。けれども落伍者らくごしゃを収容するための休憩所を持っている。ある燦然さんぜんたるカナンの地（訳者注 神がイスラエル人に与うべきことを約束せる土地―旧約）が突然地平線上に現われるのを前にして、瞑想めいそうするための停立所を持っている。眠るべき夜を持っている。そして、人間の魂の上に影がおりているのを見、眠ってる進歩を暗黒のうちに探りあてながらそれをさまし得ないということは、思想家の深い痛心の一つである。

「おそらく神は死んでる」とジェラルド・ド・ネルヴァルは本書の著者に向かつてある時言った。しかしそれは進歩と神とを混同し、運動の中絶をもって運動者の死と見倣みなしての

言である。

絶望する者は誤っている。進歩は必ず目をさます。また進歩は結局眠りながらも前進したと言つてもいい、なぜなら成長したからである。進歩が再び立ち上がる時、その姿は前よりも高くなつてゐる。常に平静であることは、川自身の関するところでないと同じく、進歩自身の関するところではない。決して障壁を築くな、決して岩石を投入するな。障害は水を泡立たしめ、人類を沸騰せしむる。そこに混乱が生ずる。しかしその混乱の後にも多少前進したことが認められる。一般的平和にほかならない秩序が立てられるまでは、調和と統一とが君臨するまでは、進歩はその道程中に革命を持つてであらう。

しからば進歩とは何であるか？ それは上に言つたとおりである。民衆の恒久なる生命である。

しかるに、個人の一時的生命が人類の永遠なる生命に相反することが、時として起こつてくる。

吾人はかく高言することができる。個人は一定の利益を有しており、条件を付してそれを譲り得るものである。現在は宥^{ゆる}し得べき程度の利己心を持っている。一時の生命もその権利を有してゐて、未来のために常に犠牲にせらるべきものではない。現在地上を通るべ

き順番になつてゐる時代は、後に地上を通るべき順番になつてゐる他の時代のために、結局同等な他の時代のために、その命脈を縮めらるべきはずではない。すべての者とよばれるある者がつばやく。「私は存在している。私は年若く恋に燃えてゐる。あるいは、年老い休息を欲してゐる。私は一家の父であり、働き、繁昌はんじやうし、事業に成功し、貸し家を持ち、政府に預けた金を持ち、幸福であり、妻も子も持つており、すべてそれらのものを愛し、生き存まがらえたい。私を静かにさしておいて欲しい。」そういう所から、ある時におよんで、人類の豪俠ごうきやうなる前衛に対する深い冷淡さが生じてくる。

その上また高遠なる理想は、戦いをなしながらその光り輝く天地を去るといふことを、吾人は是認したい。明日の真理なる理想は、昨日の虚偽から、その方法すなわち戦いを借りてくる。未来なる理想は、過去のごとく行動する。純潔なる観念でありながら、自ら違法の行為となる。おのれの勇壮のうちに暴戾をも交じえる。その暴戾については自ら責を負うのが至当である。主義に反したる時宜と便宜との暴戾であつて、必ずその罪を負わなければならぬ。理想がなす反乱も、古い軍法を手にして戦う。間諜かんちやうを銃殺し、反逆者を処刑し、生ける者を捕えて未知の暗黒界に投げ込む。死を使用する。そしてこれは重大なことである。理想はもはや、その不可抗不可朽の力たる光明に信念を持たないがようであ

る。剣をもつて人を打つ。しかるにいかなる剣も単一なるものはない。あらゆる剣は皆両刃である。一方で他を傷つける者は、他方でおのれを傷つける。

以上の制限を付しながらも、しかも嚴重に付しながらも、未来の光榮ある戰士らを、理想の司祭らを、それが成功すると否とを問わず、吾人は賛美せざるを得ないのである。彼らの業が流産に終わろうとも、彼らは尊敬に値する。そしておそらくその不成功のうちにこそ、彼らはいっそうの莊嚴さを持つ。進歩にかなつたる勝利は、民衆の喝采を受くるに足る。しかし勇壯な敗北は、民衆の心を動かすに足る。一つは壮大であり、一つは崇高である。成功よりもむしろ主義に殉ずることを取る吾人に言わすれば、ジョン・ブラウンはワシントンよりも偉大であり、ピサカネはガリバルデイよりも偉大である。

敗者の味方もなければならぬ。

未来を企図する偉大なる者らが失敗する時、人は彼らに対して、多く不正なる態度を取る。

人は革命者らを非難するに、恐怖の念を散布することをもつてする。防寨をすべて暴行と見做す。彼らの所説をとがめ、彼らの目的を疑い、彼らの内心を恐れ、彼らの良心を難ずる。現在の社会状態に対抗して、悲惨と苦惱と不正と悲嘆と絶望とをうずたかく引き

起こし立て直し積み重ね、どん底から暗黒の石塊を引き出して、そこに銃眼を作り戦闘を始めることを、彼らに非難する。そして彼らに向かつて叫ぶ、「汝らは地獄の舗石しきいしをめくつてなのだ！」しかし彼らは答え得るであろう、「それはかえつてわれわれの防塞が善良な意志で作られてる証拠である。」

確かに最善の方法は平和のうちに解決することである。要するに吾人はかく承認する、舗石のめくられるのを見る時には人は熊を思い出す、そして社会が不安を覚ゆるのはかかる意欲に対してである。しかし社会の救済は、社会自身の考えによる。吾人が呼び起こさんとするのは、社会自身の意欲である。激越なる救済策は必要でない。好意をもって弊害を研究し、それは調べ上げ、次にそれを矯正すること、吾人が社会に勧めたいのはそれである。

それはとにかくとして、世界各地のうちで特にフランスに目を据えて、理想の不撓ふとうなる理論をもつて大業を果たさんために戦うそれらの人々は、たとい倒れても、またことに倒れたがゆえに、崇高たるのである。彼らはおのれの生命を進歩に対する純なる贈り物として投げ出す。天の意志を成就し、宗教的行為をなす。一定の時が来れば、台詞せりふ渡しせりふの詩の俳優のような無私むしの心で、神の定めた筋書きに従つて墳墓の中へはいつてゆく。一七八九

年七月十四日に不可抗力をもつて始まった人類の大運動に、世界的な燦然^{さんぜん}たる最上の結果をもたらさんがために、その希望なき戦いと堅忍なる消滅とを甘受する。かかる兵士らはすなわち牧師であり、フランス大革命はすなわち神の身振りである。

そしてまた、他の章において既に指摘しておいた種々の区別のほかに、次の区別をも添加しておくが至当であろう、すなわち、革命と呼ばれる是認された反乱と、暴動と呼ばれる否認された革命とである。破裂したる一つの反乱は、民衆の前に試験を受くる一つの觀念である。もし民衆が黒球を投ずれば、その觀念はむだ花となり、反乱は無謀の拳となる。あらゆる機会に、高遠なる理想が欲するたびごとに、戦いのうちにはいるというものは、民衆のよくなし得るところではない。国民は常住不断に英雄や殉教者の気質を持つてゐるのではない。

国民は實際的である。先天的に反乱をいやがる。第一に、反乱は破滅に終わることが多いからであり、第二に、反乱の出発点は常に抽象的なものだからである。

なぜかなれば、そしてこれはきわめてみごとにことであるが、献身者らが身をささげるのは常に理想のためであり、理想のみのためである。反乱は一つの熱誠である。熱誠は憤怒することがあつて、そのために武器を執るに至る。しかしあらゆる反乱は、一つの政

府もしくは制度に射撃を向けるが、その目標は更に高い所に存する。たとえば、力説すべきことには、一八三二年の反乱の首領らが戦った目標は、ことにシャンヴルリー街の若い熱狂者らが戦っている目標は、必ずしもルイ・フィリップではなかった。打ち明けて言えば、彼らの大多数は、王政と革命との中間なるこの王の資格を、充分によく認めていた。王を憎む者は一人もなかった。彼らは昔シャルル十世のうちにあるブルボン本家を攻撃したごとく、ルイ・フィリップのうちにあるブルボン分家を攻撃したのである。そしてフランスにおける王位をくつがえしつつ、更にくつがえさんと欲したところのものは、前に説明したとおり、人間に対する人間の専横と全世間の権利に対する一部の特権の専横とであつた。パリーに王がなくなれば、その影響として世界に専制者がなくなる。そういうふうには彼らは考えていた。彼らの目的は、まさしく遠いものであり、おそらく漠然たるものであり、努力しても容易におよばないものだったが、しかし偉大なるものであつた。まさしくそうである。そして人はそれらの幻想のために身を犠牲に供する。犠牲者らにとつてはそれらの幻想はたいい幻影に終わるけれども、しかも結局人間的な確信が交じつてゐる幻影である。反徒は反乱を詩化し美化する。自分のなさんとする事柄に心酔しながら、その悲壮な事柄のうちに身を投ずる。結果はわかるものではない、あるいは成功する

かも知れない。同志は少数であり、敵には全軍隊がいる。しかしまもるところのものは、権利、自然の大法、一步も枉まぐることのできない各人の自己に対する主権、正義、真理、などである。そして場合によつては、三百人のスパルタ人（訳者注 テルモピレにおいてレオダニスに率いられし兵士）のごとくに死するであろう。頭に浮かべるのは、ドン・キホーテのことではなくレオニダスのことである。そして彼らは前方に進んでゆく。一度踏み出せばもはや退くことをしない。頭をかめてまっしぐらに突進する。希望として心にくらくところのものは、前代未聞の勝利、完成されたる革命、自由の手に託されたる進歩、人類の成長、世界の救済などである。またいかに失敗しようとも、結局テルモピレに過ぎない。

進歩のためのかかる戦いは、しばしば失敗するものであつて、その理由は上に述べきつたとおりである。群集は冒険騎士の誘導に従わない。重々しい集団は、多衆は、自身の重さのためにかえつてこわれやすいものであつて、冒険を恐れる。理想のうちには多少の冒険がある。

その上、忘れてならないことには、利害の念もそこに交じってくる。利害の念は理想と情操とに親しみ難い。時としては、胃袋は心を麻痺まひさせる。

フランスの偉大と美とは、他の民衆よりも腹に重きを置くところが少ないところにある。フランスは最も平然と自ら腰に麻繩あさなわをまとう。最初に目ざめ、最後に眠る。まっすぐに前進する。実に一つの探求者である。

それはフランスが芸術家だからである。

理想は論理の頂点にほかならない。同様に、美は真なるものの頂にほかならない。芸術家たる民衆は、終始一貫する民衆である。美を愛することは光明を欲することである。それゆえに、ヨーロッパの炬火たいまつは、換言すれば文化の炬火は、まずギリシヤによつて担になわれ、ギリシヤはそれをイタリーに伝え、イタリーはそれをフランスに伝えた。光り輝く神聖なる民衆らよ！ 彼らは生命のランプを人に伝う。

賛美すべき事には、民衆の詩は民衆の進歩の要素である。文化の量は想像力の量によつて測られる。ただし、文化の普及者たる民衆は強健なる民衆でなければならぬ。コリントはそうである。シバリスはそうでない。柔弱に陥るものは衰微する。愛好者であつてもたんのうしや堪能者であつてもいけない。ただ芸術家でなければならぬ。文化の事業においては、織巧ひながたを事としてはいけない、ただ崇高を事としなければいけない。この条件において理想の雛型ひながたは人類に与えらるる。

近代の理想は、その様式を芸術のうちに有し、その方法を科学のうちに有している。科学によつてこそ、詩人の莊嚴なる幻影すなわち社会的美は実現されるであろう。A+Bによつてこそ、エデンの園は再び作られるであろう。文化が到達し得た現在の地点においては、正確は光彩の必要な要素である。芸術的情操は、ただに科学的機能によつて助けられるばかりでなく、またそれによつて完成される。夢も計算の上に立たなければならぬ。勝利者である芸術も、徒歩者たる科学を支柱としなければならぬ。足場の強固さが大切である。近代の精神は、インドの天才を馬車とするギリシヤの天才である、象の上に乗つたるアレクサンデルである。

独断的信条のうちに化石しもしくは利得のために墮落したる人種は、文化の嚮導者きやうどうしやとしては不適當である。偶像もしくは金銭の前に跪坐きざすることは、歩行の筋肉と前進の意志とを萎縮いしゆくさせる。祭儀の業もしくは商売の業に没頭することは、民衆の光を減じ、その水準を低めながらその水平線を低め、世界の目標たる人間的なるとともに神的なる知力、諸国民をして伝教師的たらしむるの知力を、民衆から奪い去る。バビロンは理想を持たず、カルタゴは理想を持たない。アテネとローマとは、数世紀間の暗黒時代を通じてもお、文化の円光を有し維持する。

フランスはギリシャおよびイタリーと同質の民衆である。美によってアテネ的であり、偉大によってローマ的である。その上にまた仁にんきよう侠ぎやくである。フランスは自己を惜しまない。他の民衆よりもしばしば、献身と犠牲との心を起こす。ただその心があるいはきたり、あるいは去るだけである。かくて、フランスがただ歩くことをしか欲しない時に走る者、もしくはフランスが立ち上がりんと欲する時に歩く者、彼らにとつての大なる危険が生ずる。フランスは時に唯物主義に陥る。ある瞬間においては、その崇高なる頭脳を満たす觀念は、もはやフランスの偉大さを思わせるものを少しも持たず、ミズーリ州や南カロライナ州くらいの大ききしか持たない。いかにせん、巨人は侏儒しゆじゆの役を演じ、広大なるフランスは好奇にも些事さじを事とする。策の施しようはない。

それに対しては何も言うことはない。恒星のごとき民衆にも時におのれを蝕しよくするの権利がある。ただ、光が再び現われさえすれば、日蝕が暗夜に終わりさえしなければ、すべてかまわない。曙あけぼのと再生とは同意義である。光の再現は自我の存続と同一である。

これらの事実をそのまま認定しようではないか。防寨ぼうさいの上に死するも、もしくは亡命のうちに倒るるも、それは時の事情による一つの献身として是認さるる。献身の真の名は、公平無私ということである。見捨てらるる者らをして見捨てられしめよ、国を追わるる者

らをして追われしめよ。吾人はただ、偉大なる民衆が退く時には、その後退のあまりに大ならざらんことを希望するに止めよう。再び理性に返り得るというのを口実にしてあまりに深く下降してはいけない。

物質は存在し、一時は存在し、利益は存在し、腹は存在する。しかし腹が唯一の英知であつてはいけない。一時の生命もその権利を持っている、吾人はそれを是認する。しかし恒久の生命もまたその権利を持っている。ただ悲しいかな、高く上つていてもなお墜落することがある。その事實は史上に余りあるほど数多ある。卓越して理想を味わつてゐる国民も、次に泥を囓かんでそれを甘しとする。そしてソクラテスを捨ててフォルスタフを取る理由を尋ねらるる時、彼は答える、為政家を好むからであると。

白兵戦の物語に戻る前、なお一言しておきたい。

今われわれが物語つてゐるような戦いは、理想を求むる一つの瘡けいれん癩てんかん癩かんの発作をなす。この進歩の病いに、内乱に、吾人は途中で出会わざるを得なかつたのである。社会的永罰を受けたる人物を軸とし進歩を眞の表題とするこの劇においては、それは幕中にまた幕間に必ずいできたるべき一局面である。

進歩！

吾人がしばしば発するこの叫びこそ、吾人の考えのすべてである。一編の劇がここまできた以上は、中に含まつてゐる観念はなお多くの試練を受くべきものであるとしても、今吾人は、よしやその帷とばりをまったく掲げることは許されなまでも、少なくともその光を明らかに透かし見せることだけはおそらく許されるであらう。

読者が今眼前にひらいている書物は、中断や例外の個所や欠点はあるとしても、初めから終わりまで、全体においても、局部においても、悪より善への、不正より正への、偽より真への、夜より昼への、欲望より良心への、枯朽より生命への、獸性より義務への、地獄より天への、無より神への、その行進である。出発点は物質であり、到着点は心霊である。怪蛇かいだに始まり、天使に終わるのである。

二十一 勇士

突然、襲撃の太鼓が鳴り響いた。

襲撃は台風くわやみのようだった。前夜暗闇くらやみの中では、兵士らは蟒蛇うわばみのごとくひそかに防塞

に押し寄せた。しかし今は、白日のうちで、そのうち開けた街路の中で、奇襲はまったく不可能だった。その上、強大な武力は明らかに示され、大砲は咆哮ほうこうし始めていた。それで軍隊は一挙に防寨におどりかかった。今は憤激もかえって妙手段であった。強力なる戦列歩兵の一縦隊が、一定の間を置いて徒歩の国民兵と市民兵とを交じえ、姿は見えないがただ足音だけが聞こえる群がり立つた軍勢をうしろにひきつれて、街路のうちに襲歩で現われてき、太鼓を鳴らし、ラツパを吹き、銃剣を交差し、工兵を先頭に立て、弾丸の下に泰然として、壁の上に青銅の梁はりの落ちかかるような重さで、防寨めがけてまっすぐに進んできた。

障壁はよく持ちこたえた。

暴徒らは猛烈な銃火を開いた。敵からよじ登られる防寨は電光の鬣たてがみをふりかぶったかと思われた。襲撃は狂猛をきわめて、防寨の表面は一時襲撃軍をもって満たされたほどだった。しかし防寨は、獅子ししが犬を振るい落とすように兵士らを振るい落とす。あたかも海辺いわおの巖いわが一時泡沫ほうまつにおおわれるがように、襲撃軍におおわれてしまったが、一瞬間の後にはまた、そのつき立つたまっ黒な恐ろしい姿を現わした。

退却を余儀なくされた縦列は街路に密集し、何らの掩護物えんごぶつもなく恐るべきありさまで、

角面堡かくめんぼうに向かつて猛射を浴びせた。仕掛け花火を見たことのある者は、花束と言わるる一束の交差した火花を記憶しているだろう。その花束を垂直でなしに横に置き、各火花の先に小銃弾や猟銃霰さんだん弾やビスカイヤン銃弾があつて、その房ふさぎのような雷電の下に死を振るい出していると想像してみるがいい。防寨ぼうさいは実にそういう銃火の下にあつた。

両軍とも決意のほどは同じだつた。その勇氣はほとんど蛮的であつて、まず自己犠牲より始まる壮烈な擲しつともつ猛さを含んでいた。国民兵までもアルゼリア歩兵のごとく勇敢に戦う時代だつた。軍隊の方は一挙に敵を屠ほふらんと欲し、反乱の方はあくまで戦わんと欲していた。青春と健全とのさなかにおいて死の苦痛を甘受する精神は、勇敢をして熱狂たらしむる。その白兵戦のうちに各人が掉尾とうびの勇を振つた。街路には死屍しかばねが累々と横たわつた。

防寨には、一端にアンジョーラがおり、他の一端にマリユスがいた。全防寨を頭のうちに担になつてるアンジョーラは最後まで身を保とうとして潜んでいた。三人の兵士が、彼の姿も見ないで彼の狭間はざまに相次いで倒れた。マリユスは身をさらして戦つていた。彼は自ら敵の目標となつた。角面堡かくめんぼうの上から半身以上を乗り出していた。感情を奔放さした吝嗇りんしよ家くかほど激しい浪費をなすものではなく、夢想家ほど実行において恐ろしいものはない。マリユスは猛烈でありまた専心であつた。彼は夢の中にあるようにして戦いの中にいた。あ

たかも幽霊が射撃をしてるのかと思われた。

防御軍の弾薬は尽きかかっていたが、その風刺は尽きなかった。墳墓の旋風のうちに立ちながら彼らは笑っていた。

クールフェーラックは帽子をかぶっていないなかった。

「帽子をいっただうした。」とボシユエは彼に尋ねた。

クールフェーラックは答えた。

「奴らが^{やつ}大砲の弾で飛ばしてしまった。」

あるいはまた^{こうぜん}昂然たる言葉をも彼らは発していた。

「わけがわからない、」とファイイーは^{にがにが}苦々しげに叫んだ、「彼等は、（そしてファイイーは、旧軍隊のうちの知名な人や高名な人など、若干の名前を一々あげた、）われわれに加わると約束し、われわれを助けると誓い、名誉にかけて明言し、しかもわれわれの將たるべき者でありながら、われわれを見捨てるのか！」

それに対してコンブフェールは、落ち着いた微笑をしながらただこう答えた。

「世間には、星をながむるようにただ遠方から名誉の法則を観測する者もあるさ。」

防寨の中は、こわれた^{ぼうさい}薬^{やつきょう}莢^まが播き散らされて、雪でも降ったようだった。

襲撃軍には数の利があり、反軍には地の利があつた。反徒らは城壁の上に拠つていて、死体や負傷者らの間につまずき急斜面に足を取られてる兵士らを、ねらい打ちに薙ぎ倒した。前に述べたような築き方をして巧妙に固められてるその防寨は、一握の兵をもつて一軍をも敗走させ得る地の利を實際有していた。けれども襲撃隊は、絶えず援兵を受けて弾丸の雨下する下にもますます数を増し、いかんともすべからざる勢いで寄せてきた。そして今や少しずつ、一步一步、しかも確実に防寨に迫つてきて、あたかも螺旋が圧搾器をしめつけるようなものだった。

襲撃は相次いで行なわれた。危険は刻々に増していった。

その時、この舗石の上において、このシャンヴルリー街のうちにおいて、トロイの城壁にもふさわしい争闘が起こつた。憔悴しぼろをまとい疲れ切つてる防寨の人々は、二十四時間の間一食もせず、一睡もせず、余すところは数発の弾のみとなり、ポケットを探つても弾薬はなく、ほとんど全員傷を受け、黒くよごれた布片で頭や腕をまき、着物は穴があいてそこから血が流れ、武器としては悪い銃と古い鈍ったサーベルにすぎなかつたが、しかもタイタン族のように巨大となつたのである。防寨は十回の余りも攻め寄せられ、襲撃され、よじ登られたが、決して陥落はしなかつた。

この争闘のおおよそのありさまを知らんとするならば、恐ろしい勇気の堆積に火をつけ、その燃え上がるのを見ると思えば大差はない。戦いではなくて火炉の内部であった。口は炎の息を出し、顔は異様な様さまに変わり、人間の形が保たれることはできないかのようである。戦士らは皆燃え上がっていた。そして白兵戦の火坑精らがそのまっかな煙の中に行ききするの、見るも恐ろしい光景だった。その壮大なる殺さつりく戮りくが相次いで各所に起こる光景をここに描写することはやめよう。一戦闘をもつて一万二千の句を満たす（訳者注　イリヤードのごとく）の権利は、ただ叙事詩のみが有するのである。

十七の奈落ならくのうちの最も恐るべきもので、吠陀ヴェダの中で劍葉林と呼ばれてるあのバラモン教の地獄のありさまも、かくやと思われるほどだった。

彼らは敵を間近に引き受け、ピストルやサーベルや拳固げんこで接戦し、遠くから、近くから、上から、下から、至る所から、人家の屋根から、居酒屋の窓から、またある者は害あなぐらにすべり込んでその風窓から、戦った。ひとりをもつて六十人を相手とした。コラント亭の正面は半ば破壊されて、見る影もなくなつた。窓は霰さん弾だんを打ち込まれて、ガラスも窓縁もなぐ、舗石しきいしでむちやくちやにふさがれてるぶかつこうな穴に過ぎなくなつた。ボシユエは殺され、フイイーは殺され、クールフェーラックは殺され、ジョリーは殺され、コンブフ

エールはひとりの負傷兵を引き起こそうとするせつな、三本の銃剣で胸を貫かれ、わずかに空を仰いだだけで息絶えた。

マリユスはなお戦っていたが、全身傷におおわれ、ことに頭部がはなはだしく、顔は血潮の下に見えなくなり、あたかもまっかなハンカチを顔にかぶせたがようだった。

アンジョーラひとりはどこにも傷を受けなかった。武器がなくなった時、左右に手を伸ばして何かをつかみ取ろうとすると、ひとりの暴徒が彼の手に刃物の一片を渡してくれた。マリニャーノの戦いにフランソア一世は三本の剣を使ったが、彼は実に四本の剣を使いつくして、今やその折れた一片を手にしてるのみだった。

ホメロスは言う。「デイオメーデは、麗しきアリスバの地に住みけるテウトラニスの子アクシロスほふを屠り、メシステウスの子エウリアルスは、ドレロス、オフエルチオス、エセポス、および河神アバルバレアが一点の非もなきブコリオンの種を宿して産めるペダソスを討ち取り、オデュツセウスはペルコーテのピヂテスたおを仆し、アンチロクスはアブレロスを仆し、ポリペテスはアチスアロスを仆し、ポリダマスはシレネのオトスを仆し、テウセルはアレタオンを仆しぬ。メガンチオスはエウリピロスの槍やりの下に死しぬ。英雄の王たるアガ멤ノンは、轟々ごうごうたるサトニオの大河に洗われる峻嶮しゅんけんなる都市に生まれたるエ

ラトスを打ち倒しぬ。」フランスの古き武勲詩ゼストの中においては、塔を引き抜いて投げつけながら身をまもる巨人スワンティボール侯を、エスプランディアンは両刃の炎をもつて攻撃した。フランスの古い壁画の示すところによれば、ブルターニュ公とブルボン公とは、武装し紋章をつけ戦いのしるしをつけ、馬にまたがり、鉞まさかりを手にし、鉄の面と鉄の靴くつと鉄の手袋をつけ、一つは黄色の馬飾りを施し、一つは藍色あゐいろの馬衣を置いて、互いに相見まみえた。ブルターニュ公は兜かぶとの両角の間に獅子ししの記章をつけ、ブルボン公は兜まの目ま庇びさしに大きな百合ゆりの記章をつけていた。しかし雄壮たらんがためには、イヴオンのごとく公爵の兜をかぶるの要はなく、エスプランディアンのごとく生ける炎を手に握るの要はなく、ポリダマスの父ファイレスのごとく人間の王エウフェテスから贈られたる美しい甲かっちゆをエフィレより持ち帰るの要はない。ただ一つの確信もしくは一つの忠誠のために身をささぐれば足りる。昨日まではボースヤリムーザンの農夫であり、今日はリュクサンブールの園のかわいい子供らのまわりに短い剣を腰に下げてぶらついている、あの素朴なる可憐な兵士、解剖体の一片や一冊の書物の上に背をかがめ、あるいは鋏はさみで髻ひげをつんでいる、あの金髪きんぱつ蒼顔そうがんなる若い学生、彼ら両者をとらえて、義務の息吹いぶきを少し吹き込み、ブルーシユラー四つ辻つじやプランシユ・ミブレー袋町で向かい合つて立たしめ、そして一方は軍旗

のために戦い、一方は理想のために戦い、両者共に祖国のために戦つてゐるのだと想わしむるならば、その争闘は巨大なものとなるであろう。かくて、人類がもがいてゐる叙事詩的な大野において、相争う一介の兵士と一介の学生とが投ずる影は、猛虎もうこに満ちたりシアの王メガルヨンと諸神に等しい偉大なるアジャクスとが、相格闘しながら投ずる影に、匹敵することができらるであろう。

二十二 接戦

生き残つてゐる首領としてはただ防寨ぼうさいの両端に立つてゐるアンジョーラとマリユスとの二人のみになつた時、クールフェーラックとジョリーとボシユエとフイーとコンブフェールとが長くさきさきえていた中央部は、彼らの戦死とともに撓たわんできた。大砲は都合よい裂け目を作ることはできなかつたけれども、角面堡かくめんぼうの中央を三日月形にかなり広く破壊した。その障壁の頂は砲弾の下に飛び散つて崩れた。そしてあるいは内部にあるいは外部に落ち散つた破片は、しだいに積もりながら、障壁の両側に、内部と外部とに、二つの斜面をこしらえてしまつた。外部の斜面は突入に便利な傾斜を与えた。

力をきわめた襲撃がその点に向かつて試みられた。それは成功した。一面に銃剣を逆立て襲歩で進んできた集団は、不可抗な力をもって寄せてき、襲撃縦隊の密集した先頭は、斜面の上に硝煙しょうえんの中から現われてきた。こんどはもはや最後であった。中央を防いでいた一群の暴徒は列を乱して退却した。

その時、おのれの生命を愛する暗い心はある者のうちに目ざめてきた。森林のごとく立ち並んだ小銃からねらい打ちにされながら、数多の者はもう死ぬことを欲しなかった。自己保存の本能がうなり出し獣性が人間のうちに再び現われてくる瞬間である。彼らは角かくめ面堡めんぼうの背面をなす七階建ての高い人家の方へ押しつけられていた。その家は彼らを救うものともなり得るのだった。それはすっかり締め切られて、上から下まで障壁をめぐらされたようなありさまだった。兵士らが角面堡の内部にはいり込むまでには、一つの戸が開いてまた閉じるだけの時間はあった。それには電光の一閃いっせんほどの間で足りた。突然少しばかり開いてまたすぐに閉ざさるるその家の戸は、それら絶望の人々にとっては生命となるのだった。家のうしろには街路があり、逃走も可能であり、余地があつた。彼らはその戸を、銃床尾でたたき足で蹴けり、呼び、叫び、懇願し、手を合わした。しかしだれもそれを開く者はなかつた。四階の軒窓からは、死人の頭が彼らをながめていた。

しかしアンジョーラとマリユスと七、八人の者は、彼らのまわりに列を作り、挺身して彼らを保護していた。アンジョーラは兵士らに叫んだ、「出て来るな！」そして一將校がその言に従わなかつたので、アンジョーラはその將校を仆してしまった。彼は今や角面堡の内部の小さな中庭で、コラント亭を背にし、一方の手に剣を握り、一方の手にカラビン銃を取り、襲撃者らを食い止めながら、居酒屋の戸を開いていた。彼は絶望の人々に叫んだ。「開いてる戸は一つきりだ、こればかりだ。」そして身をもって彼らをおおい、ひとりで一隊の軍勢に立ち向かいながら、背後から彼らを通さした。彼らは皆そこに走り込んだ。アンジョーラはカラビン銃を杖のよう^{つえ}に振り回し、棒術でいわゆる隠れ薔薇と称する使い方をして、左右と前とに差しつけられる銃剣を打ち落とし、そして最後にはいった兵士らは続いて侵入せんとし、暴徒らは戸を閉ざさんとし、一瞬間恐ろしい光景を呈した。戸は非常な勢いで閉ざされて戸口の中に嵌り込みながら、しがみついていた一兵士の五本の指を切り取り、そのままそれを戸の縁に膠着^{こうちやく}させた。

マリユスは外に残されていた。一発の弾を鎖骨に受けたのである。彼は気が遠くなくなって倒れかかるのを感じた。その時彼は既に眼を閉じていたが、強い手につかみ取らるるような感じを受け、気を失って我を忘れる前にちらと、コゼットのことが最後に思い出され、

それとともにこういう考えが浮かんだ、「捕虜となった、銃殺されるのだ。」

アンジョーラは居酒屋の中に逃げ込んだ人々のうちマリユスがいらないのを見て、同じ考えをいだいた。しかし彼らは皆、自分の死を考えるだけの余裕しかないような瞬間にあった。アンジョーラは戸に横木を入れ、かけがねをし、錠前と海老錠との二重の締まりをした。その間も、兵士らは銃床尾で工兵らは斧で、外部から激しく戸をたたいていた。襲撃者らはその戸めがけて集まっていた。今や居酒屋の包囲攻撃が始まった。

兵士らは憤怒に満ちていたことを、ここに言っておかなければならない。

砲兵軍曹の死は彼らを激げつこ昂さした。次に、いつそういけなかったことには、襲撃に先立つ数時間のうちに、暴徒らは捕虜をすべて虐殺し現に居酒屋の中には頭のない一兵士の死体があるという噂うわさが、彼らの間に言いふらされた。この種の痛ましい風説は、たいてい内乱に伴うものであって、後にトランスノナン街の惨劇を惹し起きしたのは、かかる誤報のゆえであった。

戸の防備ができた時、アンジョーラは他の者らに言った。

「生命を高価に売りつけてやろうよ。」

それから彼はマブーフとガヴローシユが横たわってるテーブルに近づいた。喪布の下に

は、まっすぐな硬こわばった姿が大きいのと小さいのと二つ見えており、二つの顔は経帷きようかたび子の冷ややかな褻ひだの下にぼんやり浮き出していた。喪布の下から一本の手が出て下にたれていた。それは老人の手であった。

アンジョーラは身をかがめて、前日その額くちびるに脣くちびるをあてたように、その尊むべき手に脣くちびるをあてた。

それは彼が生涯のうちにした唯一の二度の脣くちびるつけだった。

さて話を簡単に進めよう。防寨ぼうさいはテーベの市門のごとく戦ったが、居酒屋はサラゴサの人家のように戦った。かかる抵抗は執拗しつようである。身を休むる陣営もなく、軍使を出すことも不可能である。敵を殺す以上は皆死を欲する。シューシエが「降伏せよ」と言う時に、パラフォクスは答える、「弾丸の戦いの後には刃物の戦いのみだ。」（訳者注 一八〇九年サラゴサの攻囲の折のこと）ユシウル居酒屋の襲撃にはあらゆるものが交じっていた。舗石しきいしは窓や屋根から雨のごとく降り、兵士らはそれにたたきつぶされつつ激昂あなぐらした。窰あなぐらや屋根裏から銃弾が飛んだ。攻撃は猛烈であり、防御は激烈であった。最後に、戸が破れた時には、麀殺みなころしの狂猛な蛮行が演ぜられた。襲撃者らはこわされて床ゆかに投げ出された戸の板に足を取られながら、居酒屋の中に突入したが、そこにはひとりの敵もいなかった。

た。螺旋状らせんじょうの階段は斧おのに断ち切られて室へやのまんなかに横たわっており、数人の負傷者らは既に息絶えており、生命のある者は皆二階に上がっていた。階段の入口だったその天井の穴から、恐怖すべき銃火が爆発した。それは最後の弾薬であつた。その弾薬が尽きた時、瀕死ひんしの苦しみのうちにある恐ろしい彼らに火薬も弾もなくなつた時、前に述べたとおりア
ンジョーラが取つて置かした壘びんを各自に二本ずつ取り上げ、そのこわれやすい棍棒こんぼうをも
つて上がってくる兵士らに対抗した。それは葡萄酒ぶどうしゆではなく、硝酸しょうさんの壘びんだつた。われ
われはここに、その殺戮さつりくの陰惨な光景をありのまま語つているのである。包囲された者
はあらゆる物を武器となす。水中燃焼物もアルキメデスの名を汚すものではなく、沸騰せ
る瀝青チャンもバイヤールの名を汚すものではない。戦争はすべて恐怖であり、武器を選ぶの暇
はない。襲撃者らの銃火は不自由でかつ下から上に向かつてなされるものではあつたが、
しかも多くの殺傷を与えた。天井の穴の縁は、間もなく死者の頭にかこまれ、それから煙
を立てる長いまっかな糸がしたたつた。混乱は名状すべからざるありさまだつた。家の中
に閉じこめられた燃ゆるがよ様な煙は、この戦闘の上をほとんど暗夜のおおつてい
た。戦慄せんりつすべき光景もこの程度に達すれば、それを現わす言葉はない。今や地獄の中の
よ様なこの争闘のうちには、もはや人間はいなかつた。もはや巨人と巨獣との戦いでもな

かつた。ホメロスの語るところよりもミルトンやダンテの語るところにいつそう似てるものだった。悪魔が攻撃し幽鬼が抵抗したのである。

それは怪物的な壮烈さであった。

二十三 断食者と酩酊者とのふたりの友

ついに、短い梯子はしごを作り、階段の残骸ざんがいをたよりとし、壁を攀よじ、天井に取りつき、引き戸の縁で抵抗する最後の者らを薙なぎ払いながら、戦列兵と国民兵と市民兵とが入り交じつる二十人ばかりの襲撃者は、その恐ろしい登攀とうはんのうちに大部分は顔の形もわからないまでに傷を受け、血潮のために目も見えなくなり、憤激し、凶猛となつて、二階の広間に侵入した。そこには、立つてる者はただひとりにすぎなかつた。それはアンジョーラだった。弾薬もなく、剣もなく、入り来る者らの頭をなぐつて床尾をこわしたカラビン銃の銃身を手にしてのみだった。彼は襲撃者らを球突台たまつきだいで隔て、室へやの片すみすみに退き、そこで眈まなじりを決し、昂然こうぜんと頭を上げ、筒先ばかりの銃を手にして立っていたが、その姿はなお敵に不安を与え、周囲には空地が残されてだれも近づく者はなかつた。ある者が叫んだ。

「これが首領だ。砲手を殺したのもこの男だ。そこに立つてるのはちようどいい。そのままでいろ。すぐ銃殺してやる。」

「打て。」とアンジョーラは言った。

そしてカラビン銃の断片を投げすて、腕を組んで、胸を差し出した。

みごとな死を遂げる豪胆さは、常に人を感動させるものである。アンジョーラが腕を組んで最期を甘受するや、室の中の争闘の響きはやみ、その混乱はたちまち墳墓のごとき厳肅さに静まり返った。武器をすてて身動きもせず立ってるアンジョーラの威風は、騷そうじ

擾ようを押さえつけてしまったかと思われた。ただひとり一個所の傷も負わず、崇高な姿で、

血にまみれ、麗しい顔をし、不死身なるかのように平然としているこの青年は、その落ちて着いた一瞥いちべつの威厳のみで既に、ものすごい一群の者らをして、彼を殺すに当たって尊敬

の念を起こさしめるかと思われた。彼の美貌びぼうは、その瞬間ききょうしん矜持きやうじの念にいつそう麗しくなつて、光り輝いていた。そして負傷を知らないとともに疲労をも知らない身であるかのよう

うに、恐るべき二十四時間を経きたつた後にもなお、その面おもてあざやは鮮あざやかな薔薇色ばういろをしていた。一証人が、その後軍法会議の前で、「アポロンと呼ぶるひとりの暴徒がいた」と語つたのは、たぶん彼のことを言ったのであろう。アンジョーラをねらっていたひとりの国民兵

は、銃をおろしながら言った、「花を打つような気がする。」

十二人の者が、アンジヨウラと反対の隅いちぐうに並び、沈黙のうちに銃を整えた。

それから一人の軍曹が叫んだ、「ねえ。」

ひとりの将校がそれをさえぎった。

「待て。」

そして将校はアンジヨウラに言葉をかけた。

「目を隠すことは望まないか。」

「いや。」

「砲兵軍曹を殺したのは君か。」

「そうだ。」

その少し前にグランテールは目をさましていた。

読者の記憶するとおりグランテールは、前日から二階の広間で、椅子いすにすわりテーブルによりかかって眠っていたのだった。

彼は「死ぬほどに酔う」という古いたとえを充分に実現していた。アブサントとスタウトとアルコールの強烈な眠り薬は、彼を昏睡こんすいにおとしいれた。彼がよりかかっているテ-

ブルは小さくて、防寨ぼうさいの役には立たなかつたので、そのままにされていた。彼はそのテーブルの上に胸をかがめ、両腕にぐったり頭を押しつけ、杯やコップや壘びんにとりまかれて、常に同じ姿勢のままだった。蟄ちっぶく伏ふくして熊や血を吸いきつた蛭ひるのように、圧倒おさし来る睡魔すいまに襲おそわれていた。小銃の音も、榴りゅうだん弾だんの響ひびきも、窓へやから室むろにはいつてくる霰さんだん弾だんも、襲撃おそげの非常な喧騒けんそうも、何一つとして効果のあるものはなかつた。ただ彼は時々、鼾いびきの聲こゑで大砲の響ひびきに答こたえるのみだった。あたかも目をさます手数なしにそのまま殺ころしてくれる弾たまをそこで待つてようだった。まわりには数名の死骸しがいが横たわっていた。一見したところでは、それら深い永眠えいみんに陥おちつてる者と何らの区別くべつもなかつた。

物音ものおとは泥酔でいすいしや者をさますものではない。泥酔でいすいしや者をさますのは静寂じやうじやくの方かたである。そういう不思議ふしぎはしばしば見らるるところである。あらゆるものが崩落くわんらくする周囲しうゐの物音ものおとは、グランテールの我われを忘れた眠ねりをまします深くした。物の崩壊くわんくわいは彼かれを気持ちよくゆすつてくれた。しかるにアンジョーラの前に喧騒けんそうが急にやんだことは、その重い眠ねりに対する激動げきどうだった。それは全速力ぜんそくりきで走はしつて馬車ばしやがにわかになつたようなもので、馬車ばしやの中なかにうとうとと居眠いびんつてる者は目をさます。グランテールはびっくりして身を起たこし、両腕りやうぶでんを伸ばし、眼まなこを擦こすり、あたりをながめ、欠伸あくびをし、そしていつさいを了解りやくした。

酔いのさめるのは、幕を切つて落とすに似ている。人は一瞥いちべつで一つかみに、酩酊めいていが隠していたすべてを見て取る。万事が突然記憶に浮かんでくる。二十四時間の間に起こったことを少しも知らないでいる酔漢も、眼瞼まぶたを開くか開かないうちに事情を了解する。すべての観念は急に明るくなって蘇ってくる。酩酊めいていの曇りは、頭脳を盲目になしていた一種の煙は、たちまち晴れて、明るい明瞭な現実の姿に地位を譲る。

グランテールは片すみに押しやられ、球突台たまつきだいのうしろに隠れたようになっていたので、アンジョーラの上に目を据えていた兵士らは、少しも彼に気づかなかつた。そして軍曹が「ねらえ」という命令を再び下そうとした時、突然兵士らの耳に、傍から強い叫び声が響いた。

「共和万歳！ 吾輩わがはいもそのひとりだ。」

グランテールは立ち上がっていた。

参加しそこなつて仲間にはいることができなかつた全戦闘の燦然さんぜんたる光は、様子を変えたこの酔漢の輝く目の中に現われた。

彼は「共和万歳！」と繰り返して、しっかりと足取りで室へやを横ぎり、アンジョーラの傍に立つて銃口の前に身を置いた。

「一打ちでわれわれふたりを倒してみろ。」と彼は言った。

そして静かにアンジョーラの方を向いて言った。

「承知してくれるか。」

アンジョーラは微笑しながら彼の手を握った。

その微笑が終わらぬうちに、発射の音が響いた。

アンジョーラは八発の弾に貫かれ、あたかも弾で釘付けくぎづけにされたかのように壁によりかかったままだった。ただ頭をたれた。

グランテールは雷に打たれたようになって、その足下に倒れた。

それから間もなく兵士らは、家の上層に逃げ上がってる残りの暴徒らを駆逐しにかかった。彼らは本格子ほんこうしの間から屋根部屋の中に弾を打ち込んだ。屋根裏で戦いが始まった。

死体は窓から投げ出されたが、中にはまだ生きてる者もあった。こわれた乗り合い馬車を起こそうとしていた軽歩兵のうちふたりは、屋根裏の窓から発射された二発のカラビン銃たおに仆された。労働服をつけたひとりの男は、腹に銃剣の一撃を受けて、その窓から投げ出され、地上に横たわって最後の呻うめきを発した。ひとりの兵士とひとりの暴徒とは、瓦屋根の斜面上にいつしよにすべり、互いにつかみ合った手を離さなかったので、獐どう猛もうな抱

擁のまま地上にころげ落ちた。宥あなぐらの中でも同じような争闘が行なわれた。叫喚、射撃、猛烈な蹂躪じゅうりん、次いで沈黙が落ちてきた。防寨ぼうさいは占領されていた。

兵士らは付近の人家を搜索し、逃走者を追撃し始めた。

二十四 捕虜

マリユスは実際捕虜になっていた。ジャン・ヴァルジャンの捕虜になっていた。

倒れかかった時うしろから彼をとらえた手、意識を失いながらつかまれるのを彼が感じた手は、ジャン・ヴァルジャンの手であった。

ジャン・ヴァルジャンはただそこに身をさらしてるといふほかには、少しも戦闘に加わらなかつた。しかし彼がもしいなくなつたならば、その最後の危急の場合において、だれも負傷者らのことを考えてくれる者はなかつたろう。幸いにして、天恵のごとくその殺戮中の至る所に身を現わす彼がいたために、倒れた者らは引き起こされ、下の室へやに運ばれ、手当てをされた。間を置いて彼は常に防寨の中に現われてきた。しかし打撃や襲撃や、また一身の防御さえも、彼の手では少しもなされなかつた。彼は黙々として人を救っていた。

その上、彼はただわずかな擦過傷かすりきずを受けたのみだった。弾は彼にあたることを欲しなかった。彼がこの墳墓の中にきながら夢想していたものの一部が、もし自殺であったとしたならば、その点では彼はまったく不成功に終わった。しかし宗教に反する行ないたる自殺を彼が頭に浮かべていたかどうかは、われわれの疑いとするところである。

ジャン・ヴァルジャンは濃い戦雲の中でマリユスを見るような様子はしていなかった。しかし実際は、マリユスから目を離さなかった。一発の弾がマリユスを倒した時、ジャン・ヴァルジャンは虎のごとく敏活に飛んでゆき、獲物につかみかかるように彼の上に飛びかかり、そして彼を運び去った。

その時襲撃の旋風は、アンジョーラと居酒屋の戸口とを中心として猛烈をきわめていたので、気を失つてるマリユスを腕にかかえ、防寨ぼうさいの中の舗石しきいしのない空地を横ぎり、コラント亭の角かどの向こうに身を隠したジャン・ヴァルジャンの姿を、目に止めた者はひとりもなかった。

岬みさきのように街路につき出ているその角の事を、読者は覚えていられるだろう。それにさえぎられて数尺の四角な地面は、銃弾も霰弾さんだんもまた人の視線をも免れていた。時としては、火災のまんなかにあつて少しも焼けていない室へやがあり、また荒れ狂つてる海の中にあつて、

岬の手前か袋のような暗礁の中に、少しの静穏な一隅いちくうがある。エポニーヌが最後の息を引き取ったのも、防寨の四角な内部のうちにあるそういうすみにおいてであった。

そこまで行つて、ジャン・ヴァルジャンは立ち止まり、マリユスを地上におろし、壁に背を寄せて周囲を見回した。

情況は危急をきわめていた。

一瞬の間は、おそらく二、三分の間は、その一面の壁に身を隠すことができた。しかしこの殺戮さつりくの場所からどうして出たらいいか？ 八年前ポロンソー街でなした苦心と、ついにそこを脱し得た方法とを、彼は思い出した。それはあの時非常に困難なことだったが、今はまったく不可能なことだった。前面には、七階建てのびくともしない聾つんぼのような家があつて、その窓によりかかつてる死人のほかには住む人もないかのように見えていた。右手には、プティート・トリユアンドリーの方をふさいでるかなり低い防寨ぼうさいがあつた。その障壁をまたぎ越すのはわけはなさそうだったが、しかしその頂の上から、一列の銃剣の先が見えていた。防寨の向こうに配備されて待ち受ける戦列歩兵の分隊だった。明らか
に、その防寨を越すことはわざわざ銃火を受けに行くようなものであり、その舗石しきいしの壁の上からのぞき出す頭は、六十梃ろくじつちようの銃火の的となるのだった。左手には戦場があつた。

壁の角の向こうには死が控えていた。

どうしたらよいか？

そこから脱し得るのはおそらく鳥のみであろう。

しかも、直ちに方法を定め、工夫をめぐらし、決心を堅めなければならなかった。数歩先の所で戦いは行なわれていた。幸いなことには、ただ一点に、居酒屋の戸口に向かつてのみ、すべての者が飛びかかっていた。しかし、ひとりの兵士が、ただひとりでも、家を回ろうという考えを起こすか、あるいは側面から攻撃しようという考えを起こしたならば、万事休するのだった。

ジャン・ヴァルジャンは正面の家をながめ、傍の防寨をながめ、次には、狂乱の体になつてせつぱつまつた猛烈さで地面をながめ、あたかもおのれの目でそこに穴を明けようとしてるかと思われた。

ながめてるうちに、深い心痛のうちにも漠然と認めらるる何かが浮き出してきて、彼の足下に一定の形を取つて現われた。あたかも目の力でそこに望む物を作り出したかのようだった。すなわち数歩先の所に、外部からきびしく監視され待ち受けられてる小さな防寨の根本に、積まれた舗石の乱れてる下に半ば隠されて、地面と水平に平たく置かれ

てる鉄格子てつこうしを、彼は見つけたのである。その格子は、丈夫な鉄の棒を横に渡して作られたもので、二尺四方くらいの大さきだった。それを堅めてる周囲の舗石がめくらられたので、錠をはずされたようになっていた。鉄棒の間からは、煖炉の煙筒か水槽の管のような暗い穴が見えていた。ジャン・ヴァルジャンは飛んでいった。昔の脱走の知識が、電光のように彼の頭が上がってきた。上に重なってる舗石をはねのけ、鉄格子を引き上げ、死体のようにぐつたりとなってるマリユスを肩にかつき、背中にその重荷をつけたまま、ひじ肱とひざ膝との力によつて、幸いにもあまり深くない井戸のような穴の中においてゆき、頭の上に重い鉄の蓋ふたをおろし、その上にまた揺らいでる舗石を自然にくずれ落ちてこさせ、地下三メートルの所にある舗石の面に足をおろすこと、それだけのことを彼は、あたかも狂乱のうちになすかのように、巨人の力と驚わしの迅速じんそくさをもつてなし遂げた。わずかに数分間を費やしたのみだった。

かくてジャン・ヴァルジャンは、まだ氣を失つてるマリユスと共に、地下の長い廊下みたいなものの中に出た。

そこは、深い静穩、まったくの沈黙、やみよ闇夜のみであった。

昔街路から修道院の中に落ちこんだ時に感じた印象が、彼の頭に浮かんできた。ただ、

彼が今になっているのは、コゼットではなくてマリユスであつた。
襲撃を受けてる居酒屋の恐ろしい騒擾そうじょうの響きも、今や漠然ばくぜんたるつぶやきの声のよ
うに、かすかに頭の上方に聞こえるきりだつた。

第二編 怪物の腸

一 海のために瘦やする土地

パリーは年に二千五百万フランの金を水に投じている、しかもこれは比喩ひゆではない。いかにしてまたいかなる方法でか？ 否昼夜の別なく常になされている。いかなる目的でか？ 否何の目的もない。いかなる考えでか？ 否何という考えもない。何ゆえにか？ 否理由はない。いかなる機関によつてか？ その腸によつてである。腸とは何であるか？
曰いわく、下水道。

二千五百万という金額は、その方面の専門科学によつて見積もられた概算のうちの最も低い額である。

科学は長い探究の後、およそ肥料中最も豊かな最も有効なのは人間から出る肥料であることを、今日認めている。恥ずかしいことであるが、われわれヨーロッパ人よりも先に支

那人はそれを知っていた。エツケベルク氏の語るところによれば、支那の農夫で都市に行く者は皆、われわれが汚穢おわいと称するところのものを二つの桶おけにいっぱい入れ、それを竹たけぎ竿おの両端に下げて持ち帰るということである。人間から出る肥料のお陰で、支那の土地は今日なおアブラハム時代のように若々しい。支那では小麦が、種を一粒蒔まけば百二十粒得らるる。いかなる海鳥糞かいちようふんも、その肥沃ひよくさにおいては都市の残滓ざんさいに比すべくもない。大都市は排泄物はいせつぶつを作るに最も偉大なものである。都市を用いて平野を肥こすならば、確かに成功をもたらずだろ。もしわれわれの黄金が肥料であるとすれば、逆に、われわれの出す肥料は黄金である。

この肥料の黄金を人はどうしているか？ 深淵しんえんのうちに掃きすてているのである。多くの船隊は莫ぼくだい大な費用をかけて、海燕やペンギンの糞ふんを採りに、南極地方へ送り出される。しかるに手もとにある無限の資料は海に捨てられている。世間が失っている人間や動物から出るあらゆる肥料を、水に投じないで土地に与えるならば、それは世界を養うに足りるであろう。

標石のすみに積まれてる不潔物、夜の街路を通りゆく泥でい、凜ねいの箱車、塵芥ごみ捨て場のきたない樽たる、鋪石しきいしに隠されてる地下の臭い汚泥おどいの流れ、それらは何であるか？ 花咲く牧場

であり、緑の草であり、百里香や麝香草や鼠尾草であり、小鳥であり、家畜であり、夕方満足の声を立てる大きな牛であり、かおり高い秣であり、金色の麦であり、食卓の上のパンであり、人の血管を流るるあたたかい血液であり、健康であり、喜悅であり、生命である。地にあつては諸の形に現われ、天にあつては諸の象に現われる、神秘的創造は、そうであらんことを望んでいる。

それを取つて大なる坩堝に入るれば、人の豊かなる滋養が流れ出る。平野の養分は人間の養いとなる。

人はかかる富をすてるも自由であり、また吾人のこの意見を笑うも自由である。しかしそれはかえつて大なる無知を表明するにすぎないであろう。

統計によれば、フランス一国のみにて毎年約五億フランの金を、各河口から大西洋に注ぎ込んでいるという。見よ、五億の金があれば歳費の四分の一を払い得るではないか。人間の知恵は、その五億を喜んで溝の中に厄介払いしている。しかもそれは民衆の滋養分であつて、それを初めは一滴一滴と下水道から川に吐き出し、ついには滔々と川から大洋に吐き出している。下水の一流しは千フランをむだにしている。そこから二つの結果が生ずる、すなわち瘦瘠した土地と有毒な水と。飢餓は田地からきたり、疫病は川から来

る。

たとえば、現在テムス川がロンドンを毒しつつあることは、顕著な事実である。

パリールについて言えば、最近下水道の大部分は、下流の方の最後の橋下に移さねばならなかった。

弁と疏通そつうせき堰とを備えて吸い取りまた吐き出す二重管の装置は、人の肺臓のように簡単な初歩の疏水の方法であつて、既にイギリスの多くの村では充分に行なわれてることであるが、それを設けるだけでも、フランスにおいて、田野の清水を都市に導き都市の肥沃な水を田野に送るには充分であろう。そしてごく簡単に容易なその交換は今日捨てられつつある五億の金を回収するであろう。しかるに人はまるで別なことを考えている。

現在の方法は、よくするつもりでかえつて悪いことをしている。意向はよいが、結果は哀れである。都市を清潔にするつもりで、実は住民を萎靡いびさしている。下水道は誤つた考えである。取るものをまた戻すという二重の働きをする疏水工事が、ただ洗い清めるだけでかえつて貧弱ならしむる下水道の代わりに、いたる所に設けらるるならば、その時こそ、新しい社会経済の効果と相伴つて、土地の産物は十倍にもなり、貧苦の問題は著しく軽減されるだろう。その上に寄食の排除をもつてすれば、問題はまったく解決されるだろう。

しかしそれまでは、公衆の富は川に流れ去り、漏泄ろうえいが行なわれる。漏泄とはちようど適した言葉である。ヨーロッパはかくのごとくして疲弊のうちに滅びてゆく。

フランスについては、損失額は上に述べたとおりである。しかるに、パリイはフランス全人口の二十五分の一を有し、パリイ市の糞ふんは最上とされているので、パリイの損失高は、フランスが年々失つて五億のうちの二千五百万フランに当たるとしても、あえて過当の計算ではない。この二千五百万フランを、救済や娯楽の事業に用いたならば、パリイの光輝は倍加するはずである。しかるに市はそれを汚水に投じ去っている。それでかく言うこともできる、パリイの一大浪費、その驚くべき華美、ボージョン（訳者注 十八世紀の大富豪）式の乱行、遊興、両手で蒔まき散らすような金使い、豪奢ごうしゃ、贅ぜい沢たく、華麗、それは実に下水道であると。

かくて誤った盲目な社会経済学のために、万人の幸福は水に溺おぼれ、水に流れ、深淵しんえんのうち失われている。社会の富をすくい取るためにサン・クルーの辺に網でも張るべきであらう。

経済上より言えば、右の事実をかく約言することができ、すなわち、パリイは底のぬけた籠かごであると。

パリーは模範市であり、各国民からまねられる模型的な完全市であり、理想の住む首都であり、発案と衝動と試験との堂々たる祖国であり、あらゆる精神の住所であり中心地であり、宛然えんぜん一国をなす都市であり、未来の発生地であり、バビロンとコリントを結合した驚くべき都であるが、これを上に述べきたった見地から見るとには、南支那の一農夫をして肩を聳そびやかさせるであろう。

パリーを模倣するのは、自ら貧窮に陥ることである。

その上、古来から行なわれてる愚かなその浪費についてはことに、パリー自身も一つの模倣者である。

この驚くべき愚妄事ぐもうじは新しく始まったことではない。それは決して若気のばかきではない。古人も近代人のようなことをしていた。リービツヒは言う、「ローマの下水道はローマの農夫の繁栄をことごとく吸いつくした。」ローマの田舎いなかがローマの下水道によって衰微させられた時、ローマはまったくイタリーを疲弊さしてしまった、そしてイタリーを下水道のうちに投じ去った時、更にシシリーを投じ去り、次にサルチニアを投じ去り、次にアフリカを投じ去ってしまった。ローマの下水道は世界をのみ込んだのである。その呑どんぜ噬いの口を、市と世界とに差し出したのである。全く市と世界とに（訳者注　ローマ法王

の祝祷中にある言葉）である。永遠の都市と、しかも底知れぬ下水道。

他の方面におけると同じくこのことについても、ローマはその実例をたれている。

明知の都市に固有な一種の愚昧さぐまいをもつて、パリイはその実例にならっている。

かくて、今述べきたった事業を完成せんがために、パリイはその地下にも一つパリイを有するに至った。すなわち下水道のパリーである。そこにも街路があり、四つ辻つじがあり、広場があり、袋町があり、動脈があり、汚水の血が流れていて、ただ人影がないばかりである。

何者にも、たとえ偉大なる民衆にも、阿諛あゆの言を弄ろうしてはならないから、吾人はあえて言うのである。すべてがある所には、崇高と相並んで卑賤ひせんも存する。パリイのうちには、光明の町たるアテネがあり、力の町たるチロがあり、勇気の町たるスパルタがあり、奇跡の町たるニニヴェエがあるが、また泥土でいどの町たるルテチア（訳者注 古代のパリー）もある。

けれどその力もまたそこに蔵もろされている。諸の記念物のうちにおいても、パリイの巨大な下水の溝渠こうきよは特に、マキアヴェリやベーコンやミラボーなどのごとき人物によって人類のうちに実現された不思議な理想を、すなわち卑賤ひせんなる壮大さを実現してゐるものである。

パリーの地下は、もし中を透視し得るとするならば、巨大な石蚕せきさんの観を呈しているだろう。古い大都市が立つてゐる周囲六里のこの土地には、海綿も及ばないほど多くの水路や隘路あいろがついてゐる。別に一個の洞窟どうくつをなしてゐる墳墓は別とし、ガス管の入り乱れた格子こうしの目は別とし、給水柱に終わつてゐる上水分配の広大な一連の管は別として、ただ下水道だけできえ、セーヌの兩岸の下に暗黒な驚くべき網の目を作つてゐる。それはまったく迷宮であつて、その傾斜が唯一の道しるべである。

その湿つた靄せやの中には、パリーが産んだかと思える鼠ねずみの姿が見えてゐる。

二 下水道の昔の歴史

蓋ふたを取るようにパリー市を取り去つたと想像すれば、鳥瞰ちようかん的に見らるる下水道の下の網目は、セーヌ川に接木つぎきした大きな木の枝のようにその兩岸に現われてくるだろう。右岸においては、圍繞いじよう溝渠こうきよがその枝の幹となり、その分脈は小枝となり、行き止まりの支脈は細枝となる。

しかしその形は、概略のものでまったく正確というわけにはゆかない。かかる地下の分

枝の角は普通直角をなしているが、植物の枝には直角なのはきわめてまれである。

その不思議な幾何学的図形にいつそうよく似た象を想像しようとするならば、叢のよう
に錯雑した不思議な東方文字を、暗黒面の上に平たく置いたと仮定すればよろしい。その
妙な形の文字は、一見したところ入り乱れて無茶苦茶なようであるが、あるいは角と角と
であるいは一端と一端とで、互いに結び合わされている。

汚水だめや下水道は、中世や後期ローマ帝国や古い東方諸国などにおいて、多大の役目
をなしていた。疫病はそこから発し、専制君主らはそこに死んだ。衆人はその腐敗の床を、
恐るべき死の揺籃を、一種敬虔な恐怖をもつてながめていた。バナレスの寄生虫の巢
窟は、バビロンの獅子の洞にも劣らぬ幻惑を人に与えていた。ユダヤ神学の書物によれ
ば、テグラート・ファラザル（訳者注 古代アッシリアの王）はニニヴェの汚水だめによ
って誓っていた。ライデンのヨハンが偽りの月を出してみせたのは、ムンステルの下水
道からである。このヨハンに相当する東方人でコラサンの隠れた予言者モカナが、偽りの
太陽を出してみせたのは、ケクシエブの汚水井戸からである。

人間の歴史は下水溝渠の歴史に反映している。死体投棄の溝渠はローマの歴史を語つ
ていた。パリーの下水道は古い恐るべきものであった。それは墳墓でもあり、避難所でも

あつた。罪悪、知力、社会の抗議、信仰の自由、思想、窃盗、人間の法律が追跡するまたは追跡したすべてのものは、その穴の中に身を隠していた。十四世紀の木槌暴徒きづちぼうと、十五世紀の外套盗賊がいとうとうぞく、十六世紀のユーグノー派、十七世紀のモラン幻覚派、十八世紀の火傷強盗、などは皆そこに身を隠していた。百年前には、夜中短剣がそこから現われてきて人を刺し、また掏摸すりは身が危うくなるとそこに潜み込んだ。森に洞穴どうけつのあるごとく、パリーには下水道があつた。ゴール語のいわゆるピカルリアという無籍者らは、クール・デ・ミラクル一郭の出城として下水道に居を構え、夕方になると寝所にはいるように、せせら笑つた獐猛どうもつな様子でモーブユエの大水門の下に戻つていった。

ヴィード・グーセ袋町（巾着切袋町）やクープ・ゴルジュ街（首切り街）などを毎日の仕事場としてる者どもが、シユマン・ヴェールの小橋やユルポアの陋屋ろうおくを夜の住居とするのは、至つて当然なことだつた。そのために無数の口碑くひが伝わっている。あらゆる種類の幽鬼がその長い寂しい地郭に住んでいる。至る所に腐爛ふらんと悪気とがある。中にいるヴィヨンと外のラブレート（訳者注 盗賊の仲間にはいったことのある十五世紀の大詩人、および愉快的風刺家であつた十六世紀の文豪）が互いに話し合う風窓が、所々についている。いにしえのパリーにおいては、下水道の中にあらゆる疲憊ひはいとあらゆる企図とが落ち合つ

ていた。社会経済学はそこに一つの残滓ざんさいを見、社会哲学はそこに一つの糟粕そうはくを見る。

下水道は都市の本心である。すべてがそこに集中し互いに面を合わせる。その青ざめた場所には、暗闇くらやみはあるが、もはや秘密は存しない。事物は各、その真の形体を保っている、もしくは少なくとも最後の形体を保っている。不潔の堆積なるがゆえに、その長所として決して他を欺かない。率直がそこに逃げ込んでるのである。バジル（訳者注）ボーマルシエーの戯曲「セヴィールの理髪師」中の人物にて滑稽なる偽善者の典型）の仮面はそこにあるが、しかしその厚紙も糸もそのままに見え、外面とともに内面も見えていて、正直なる泥土でいどが看板となっている。その隣には、スカパン（訳者注 モリエールの戯曲「スカパンの欺罔」中の人物にて巧妙快活なる欺罔者の典型）の作り鼻がある。文明のあらゆる不作法は、一度その役目を終われば、社会のあらゆるものがすべり込むこの真実の溝ふちの中に落ちてゆき、そこにのみ込まれてしまう。しかしそこでは身を隠しはしない。それらの錯雑は一つの告白である。そこでは、偽りの外見もなく、何らの糊塗こともなく、醜し陋ろうもそのシャツをぬぎ、まったくの裸となり、幻や蜃気楼しんきろうは崩壊し、用を終えしものすごい顔つきをしながら、もはやただあるがままの姿をしか保たない。現実と堙滅いんめつとのみである。そこでは、壘びんの底は泥酔を告白し、籠かごの柄は婢僕ひぼくの勤めを語る。そこでは、

文学上の意見を持つていた林檎りんごの種は、再び単なる林檎の種となる。大きな銅貨の面の肖像は素直に緑青ろくしょうで蔽われ、カイファスの唾つばはフォルスタフの嘔吐物おうとぶつと相会し（訳者注 前者はキリストを処刑せしユダヤの司祭、後者はジャンヌ・ダルクに敗られしイギリスの将軍）、賭博場から来るルイ金貨は自殺者の紐ひもの端が下がってる釘くぎと出会い、青白い胎児はこの前のカルナヴァル祭最終日にオペラ座で踊った金ぴか物に包まれて転々し、人々を裁いた法官帽は賤婦せんぶの裳衣せんいだった腐敗物の傍に沈溺ちんできする。それは友愛以上であり、昵近じっきんである。脂粉を塗つていたものもすべて顔を汚す。最後の覆面も引きはがれる。下水道は一つの皮肉家である。それはすべてのことをしやべる。

不潔なるもののかかる誠実さは、吾人を喜ばせ吾人の心を休める。国家至上の道理、宣誓、政略、人間の裁判、職務上の清廉、地位の威厳、絶対に清い法服、などが装ういかめしい様子を、地上において絶えず見続けてきた後、下水道にはいつてそれらのものにふさわしい汚泥おでいを見るのは、いささか心を慰むるに足ることである。

それがまた同時に種々のことを教える。さきほど述べたとおり、歴史は下水道を通じてゆく。サン・バルテルミーのごときあらゆる非道は、鋪石しきいしの間から一滴一滴とそこにしたたる。公衆の大虐殺は、政治上および宗教上の大殺戮は、この文明の地下道を通じて、

そこに死骸^{しかい}を投げ込んでゆく。夢想家の目より見れば、史上のあらゆる虐殺者らがそこにいて、恐ろしい薄暗がりの中に膝^{ひざ}をかがめ、経帷子^{きょうかたびら}の一片を前掛けとし、悲しげにこれらの所業をぬぐい消している。ルイ十一世はトリスタンと共におり、フランソア一世はデュプレーと共におり、シャルル九世は母親と共におり、リシユリユーはルイ十三世と共におり、ルーヴオアも、ルテリエも、エベールも、マイヤールもおり、皆石を爪^{つめ}でかきながら、おのれの行為の跡を消そうと努めている。それらの洞穴^{どうけつ}の中には、幽鬼^{ゆうき}らの箒^{ほうき}の音が聞こえる。社会の災害の大なる悪臭が呼吸される。片すみには赤い反映が見える。そこには血のしたたる手が洗われた恐ろしい水が流れている。

社会観察者はそれらの影の中にはいらなければいけない。それらの影も社会実験室の一部をなす。哲学は思想の顕微鏡である。すべてはそれから逃げようと欲するが、何物もそれから脱することはできない。方々逃げ回つてもむだである。逃げ回りながら人はいかなる方面を示すか？ 不名誉な方面をではないか。哲学は活眼をもって悪を追求し、虚無のうちのがれ去るのを許さない。消滅する事物の塗抹^{とまつ}のうちにも、消え失^うする事物の縮小のうちにも、哲学はすべてを認知する。ぼろを再び緋衣^{ひい}となし、化粧品^{けしょう品}の破片を再び婦人となす。汚水溝渠^{おすいこうきよ}で都市を再び作り出し、泥土^{でいど}で再び風俗を作り出す。陶器の破片を見

ては、壺つぼや瓶びんを結論する。羊皮紙の上の爪つめ跡あとで、ユーデンガスのユダヤ居住地とゲットーのユダヤ居住地との差を見て取る。今残っているもののうちに、かつてありしものを見いだす、すなわち、善、悪、偽、真、宮殿内の血痕けつこん、洞窟どうくつの墨痕ぼくこん、娼家しょうかの蟬せみの一滴、与えられた苦難、喜んで迎えられた誘惑、吐き出された遊樂、りっぱな人々が身をかめつつ作った襷ひだ、下等な性質のために起こる心のうちの汚流おどくの跡、ローマの人夫らの短上衣にあるメツサリナ（訳者注 クラウデイウス皇帝の妃にして淫乱で有名な女）の肱ひじの跡、などを見いだすのである。

三 ブリュヌゾー

パリーの下水道は、中世においては伝説的な状態にあった。十六世紀に、アンリ二世はその測量を試みたが、失敗に終わった。メルシエの立証するところによれば、今から百年足らず前までは、下水道はまったく放棄されていて、なるがままに任せられていた。

そういうふうはこの古いパリーは、論議と不決定と模索とにすべて放任されていた。長い間かなり愚昧ぐまいのままであった。その後、八九年（一七八九年）はいかにして都市に精神

が出て来るかを示した。しかしいにしえにおいては、首府はあまり頭脳を持っていなかった。精神的にもまたは物質的にも自分の仕事を処理する道を知らず、弊害を除去することができないとともに汚物を除去することもできなかった。すべてが妨害となり、すべてが疑問となった。たとえば、下水道はまったく探査することができなかった。市中においては万事わけがわからないとともに、汚水だめの中においては方向を定めることができなかった。地上にては了解が不可能であり、地下にては脱出が不可能だった。言語の混乱の下には洞穴どうけつの混乱があった。迷宮がバベルの塔と裏合わせになっていた。

時とするとパリーの下水道は、あたかも軽視されたナイル川が突然憤ることがあるように、氾濫はんらんの念を起こすことがあった。きたならしいことではあるが、實際下水道の漲ちように、溢いつが幾度も起こった。時々この文明の胃袋は不消化に陥り、汚水は市の喉のど元に逆流し、パリーはその汚泥おでいを反芻はんすうして味わった。そしてかく下水道と悔恨との類似は實際有益だった。それは人に警告を与えた。しかしそれもかえって悪い意味にばかり取られた。市はその泥土の鉄面皮に腹を立てて、不潔が再び戻って来るのを許さなかった。なおいつそうよく追い払おうとした。

一八〇二年の氾濫は、八十歳ほどになるパリー人が今もよく記憶している。汚水は、ル

イ十四世の銅像があるヴィクトール広場に縦横にひろがり、またシャン・ゼリゼーの下水道の二つの口からサン・トノレ街へはいり、サン・フロランタンの下水道からサン・フロランタン街へ、ソンヌリーの下水道からピエール・ア・ポアソン街へ、シユマン・ヴェールヴェールの下水道からポパンクール街へ、ラップ街の下水道からロケツト街へはいった。シャン・ゼリゼーの石樋いしどいをおおうこと、三十五センチの高さにおよんだ。そして南の方は、セーヌ川への大水門から逆行して、マザリーヌ街やエシヨーデ街やマレー街まではいり込み、百九メートルの距離の所、ちょうどラシーヌが昔住んでいた家の数歩前の所で、ようやく止まった。十七世紀に対しては国王（ルイ十四世）よりも詩人（ラシーヌ）の方を尊敬したわけである。その深さはサン・ピエール街が最高で、水口の舗石しきいしの上三尺に達し、その広さはサン・サバン街が最高で、二百三十八メートルの距離にひろがった。

十九世紀の初めにおいても、パリーの下水道はなお神秘的な場所であつた。およそ泥土でいどは決して令名を得るものではないけれども、当時はその悪名が恐怖を起こさせるほどに高かつた。パリーは漠然ぼくぜんと、自分の下に恐ろしい洞穴どうけつがあるのを知っていた。一丈五尺もある百足虫むかでが群れをなし、怪獣ベヘモスの浴場にもなり得ようという、テーベの奇怪な沼のように人々はそれを思っていた。下水掃除人らの長靴ながぐつも、よく知られてるある地点よ

り先へは決して踏み込まなかつた。サント・フォアとクレキ侯とがその上で互いに親交を結んだというあの塵芥掃除人の箱車が、下水道の中にそのまま空けられていた時代、それからあまり遠くない時代だったのである。下水道の浚渫はまったく豪雨にうち任せであつたが、雨水はそれを掃除するというよりも閉塞することの方が多かつた。ローマは汚水の溝渠に多少の詩味を与えてゼモニエ（階段）と呼んでいたが、パリイはそれを侮辱してトルー・プネー（臭気孔）と呼んでいた。科学も迷信も同じ嫌悪の情をいदैいていた。臭気孔は、衛生にとつても伝説にとつても共に嫌悪すべきものだつた。大入道がムーフタールの下水道の臭い穹窿の下に閉じ込められていた。マルムーゼら（訳者注）ルイ十五世の時陰謀をはかつた青年諸侯の死体はバリユリーの下水道に投ぜられていた。ファゴンの説によると、一六八五年の恐ろしい熱病は、マレーの下水道にできた大きな割れ目から起こつたものとのことである。その割れ目は、一八三三年まで、サン・ルイ街の風流馬車の看板が出てる前の方に、大きく口を開いたままであつた。またモルテルリ街の下水道の口は、疫病の出口として有名だつた。一列の歯に似て先のとがつた鉄棒の格子がついてる様は、その痛ましい街路の中にあつて、あたかも地獄の気を人間に吹きかける怪竜の口かと思われた。民衆の想像は、パリイの陰暗な下水道に、ある無窮的な

恐ろしいことどもを付け加えていた。下水道は底なしであった。バラトロム（訳者注）アテネにて死刑囚を投げ込みし深淵）であった。その恐ろしい腐爛ふらんの地域を探険しようという考えは、警察の人々にも起こらなかつた。その未知の世界を検しらべることに、その闇やみの中におもり錘おもりを投ずること、その深淵しんえんの中に探査に行くこと、だれがそれをあえてなし得たろうか。それこそ戦慄せんりつすべきことだつた。けれども、やってみようという者もいた。汚水の溝こうき渠よにもそのクリストフ・コロンプスがいた。

一八〇五年のある日、例のとおり珍しく皇帝がパリにやってきた時、ドウクレスだつたかクレテだつたか時の内務大臣がやってきて、内謁ないえつを乞うた。カルーゼルの広場には、大共和国および大帝国の偉大なる兵士らのサーベルの音が響いていた。ナポレオンの戸口は勇士らでいっぱいになっていた。ラインやエスコーやアジェエやナイルなどの戦線に立つた人々、ジューベールやドウゼーやマルソーやオーシュやクレベルらの戦友、フルーリユスの気球兵、マイヤンスの擲弾兵てきだんへい、ゼノアの架橋兵、エジプトのピラミッドをも見てきた軽騎兵、ジュノーの砲弾から泥どろを浴びせられた砲兵、ゾイデルゼーに停泊してゐる艦隊を強襲して占領した胸甲兵、また、ボナパルトに従つてロデイの橋を渡つた者もあり、ムユラーと共にマントアの塹壕ざんこう中にいた者もあり、ランヌに先立つてモンテベロの隘路あいろ

を進んだ者もいた。当時の軍隊はすべて、分隊または小隊で代表されて、テユイルリー宮殿の中庭に並び、休息中のナポレオンを護衛していた。大陸軍が過去にマレンゴの勝利を持ち前途にアウステルリッツの勝利を控えてる燦然^{さんぜん}たる時代だった。内務大臣はナポレオンに言った、「陛下、私は昨日帝国において最も勇敢な男に会いました。」「どういう男だ？　そしてどういふことをしたのか、」と皇帝はせき込んで言った。「ある事をしたいと申すのです。」「何を？」「パリーの下水道にはいつてみようと申します。」「その男は実在の人物で、ブリュヌゾーと言う名前であった。

四　世に知られざる事がら

その探険はやがて行なわれた。恐るべき戦陣だった、疫病と毒ガスとに対する暗黒中の戦いだった、同時にまた発見の航海だった。その探険隊のうちでまだ生き残ってるひとりで、当時ごく若い伶俐^{れいり}な労働者だったひとり、公文書の文体に適せぬので警視総監への報告中にブリュヌゾーが省略しなければならなかった不思議な事実を、今から数年前まで人に語ってきかしていた。当時の消毒方法はきわめて初歩の程度だった。ブリュヌゾーが地下

の網目の最初の支脈を越すか越さないうちに、二十人の一隊のうち八人の者はもう先へ進むことを拒んだ。仕事は複雑で、探険とともに浚^{しゅんせつ} 漂^{せつ}の役をも兼ねていた。潔^{きよ}めながらまた同時に種々の測量をしなければならなかった。すなわち、水の入り口を調べ、鉄格^{てつこう}子^しおよび穴を数え、支脈をきわめ、分岐点の水流を見、種々のたまりに関する区画を見て取り、主要水路に続いている小水路を探り、各隧^{すいどう}道^{どう}の要^{かなめいし}石^しの下の高さ、穹^{きゆう}窿^{りゆう}の彎^{わん}曲^{きよく}部^ぶと底部とにおける広さ、などを測定し、終わりに、各水口と直角に水面線を、底部と街路の地面と両方からの距離で定めるのであった。前進は遅々として困難だった。下降用の梯子^{はしご}が底の泥^{でい}中^{ちゆう}に三尺も没することは珍しくなかった。角灯はガスのためによく燃えなかった。気絶した者を時々運び出さなければならなかった。ある所は絶壁のようになつていた。地面はくずれ、石畳は落ち、下水道はすたれ井戸のようになっていた。堅い足場は得られなかった。ひとりの者が突然沈み込み、それを引き上げるのも辛うじてだった。化学者フールクロアの注意に従つて、十分に潔めた場所には樹脂に浸した麻屑^{あさくず}をいっばいつめた大きな籠^{かご}に火をともしていった。壁には所々、腫^{はれもの}物^{もの}とも言えるような妙な形の菌^{きの}様^{ごよう}のものが、一面に生じていた。呼吸もできないほどのその場所では、石まがが病気になつてるかと思われた。

ブリュヌゾーはその探険において、かみ上から下へと進んでいった。グラン・ユルールの二つの水路が分かれてる所で、彼はつき出た石の上に一五五〇という年号を読み分けた。その石はフィリベール・ドウロムがアンリ二世の命を受けて、パリーの下水道を探険した時、最後に到着した地点を示すもので、下水道にしるされた十六世紀の痕跡こんせきだった。またブリュヌゾーは、一六〇〇年から一六五〇年の間に上をおおわれた二つ、ポンソーの水路とヴィエイユ・デュ・タンプル街の水路との間に、十七世紀の手工を見いだし、一七四〇年に切り開かれて上をおおわれた集合溝渠しゅうこうきよの西部に、十八世紀の手工を見いだした。その二つの穹窿きゆうりゆう、ことに新しい方の一七四〇年ののは、いじょうこうきよ圍繞溝渠の漆喰工事しつくいこうじよりもいつそう亀裂きれつや崩壊がはなはだしかなかった。圍繞溝渠は一四一二年に成ったもので、その時メニルモンタンの小さな水流はパリーの大下水道に用いられて、農夫の下男が国王の侍従長になったほどの昇進をし、グロ・ジャンガルベルに（奎兵衛どんがお殿様に）なったようなものだった。

所々に、ことに裁判所の下の所に、下水道の中に作られた昔の地牢ちろうの監房とも思えるようなものがわずかに認められた。恐ろしい地下牢インパーセである。それらの監房の一つには、鉄の首輪が下がっていた。一同はそれらを皆ふさいでいった。また発見された物にはずいぶ

ん珍しいものがあつた。なかんづく猩々の骸骨はすぐれたものであつた。この猩々は一八〇〇年に動植物園から姿を隠したもので、十八世紀の末ベルナルダン街に猩々が出たという名高い確かな事実と、おそらく関係があるものに違いない。獣はあわれにも下水道の中に溺死してしまつたのである。

アルシユ・マリオンに達する長い丸天井の隘路の下に、少しも破損していない屑屋の負い籠が一つあつたことは、鑑識家らの嘆賞を買い得た。人々が勇敢に征服していつた泥土の中には、至る所に、金銀細工物や宝石や貨幣などの貴重品が満ちていた。もし巨人があつてその泥土を漉したならば、篩の中に数世紀間の富が残つたに違いない。タンプル街とサント・アヴォア街との二つの水道の分岐点では、ユーグノー派の珍しい銅のメダルが拾われた。その一面には、枢機官の帽をかぶつた豚がついており、他の面には、法王の冠をかぶつた狼がついていた。

大溝渠の入り口の所で、最も意外なものに人々は出会つた。その入り口は、昔は鉄格子で閉ざされていたのであるが、もう肱金しか残っていなかった。ところがその肱金の一つに、形もわからないよごれた布が下がつていた。おそらく流れてゆく途中でそこに引つかかつて、やみの中に漂い、そのまま裂けてしまつたものだろう。ブリユヌゾーは

角燈をさしつけて、そのぼろを調べていた。バチスト織りの精巧な麻布で、いくらか裂け方の少ない片すみに、冠の紋章がついていて、その上に LAUBESP という七文字が刺繡してあった。冠は侯爵の冠章だった。七文字は Laubespine（ローベスピヌ）という女名の略字だった。一同は眼前のその布片がマラーの 柩ひつぎざれ 布の一片であることを見て取った。マラーには青年時代に情事があった。それは獣医としてアルトア伯爵の家に寄寓していた頃のことである。歴史的に証明されてある一貴婦人との情事から、右の敷き布が残っていた。偶然に取り残されていたのか、あるいは記念として取って置かれたのか、いずれかはわからないがとにかく、彼が死んだ時家にある多少きれいな布と言ってはそれが唯一のものだったので、それを 柩ひつぎざれ 布としたのであった。婆さんたちは、この悲劇的な民衆の友を、歓楽のからんだその布に包んで、墳墓へ送りやったのである。

ブリュヌゾーはそこを通り越した。一同はぼろをそのままにしておいて手をつけなかった。それは軽蔑からであつたらうか、あるいは尊敬からであつたらうか？ ともあれマラーはそのいずれをも受けるの価値があつた。その上宿命の跡はあまりに歴然としていて、人をしてそれに触れることを 躡ちゆうちよ 躡ちよ 踏ちよ 踏ちよ させたのである。もとより、墳墓に属する物はそれが自ら選んだ場所に放置しておくべきである。要するにその遺物は珍しいものであつた。

侯爵夫人がそこに眠っており、マラーがそこに腐っていた。パンテオンを通って、ついに下水道の鼠ねずみの中に到着したのである。その寝所の布片は、昔はワットーによってあらゆる襞ひだまで喜んで写されるものであったが、今はダンテの凝視にふさわしいものとなり果てていた。

パリーの地下の汚水溝渠おすいこうきよを全部検分するには、一八〇五年から一二年まで七年間を要した。進むにしたがつてブリュヌゾーは、種々の大事業を計画し、指揮し、成就した。一八〇八年には、ポンソーの水路の底部を低くし、また方々に新水路を作っては下水道をひろげ、一八〇九年には、サン・ドウニ街の下をインノサンの噴水の所まで、一八一〇年には、ゾロアマントー街の下とサルペートリエール救済院の下とに、一八一一年には、ヌーヴ・デ・プティー・ペール街の下、マイユ街の下、エシャルプ街の下、ロアイヤル広場の下に、一八一二年には、ペー街の下とアンタン大道の下とに、下水道をひろげた。同時にまた、あらゆる水路を消毒し健全にした。二年目からブリュヌゾーは、婿のナルゴーをも仕事に加わらした。

かくのごとくして十九世紀の初めには、旧社会はその二重底を清め下水道の化粧をした。とにかくそれだけ清潔になったわけである。

迂曲し、亀裂し、石畳はなくなり、裂け目ができ、穴があき、錯雑した曲がり角が入り組み、秩序もなく高低し、悪臭を放ち、野蠻で、暗黒のうちに沈み、舗石にも壁にも傷痕がつき、恐怖すべき姿で横たわっている、そういうのがパリーの昔の下水道をふり返って見たありさまだった。四方への分岐、塹壕の交差、枝の形、鴨足の形、坑道の中にあるような亀裂、盲腸、行き止まり、腐蝕した丸天井、臭い水たまり、四壁には湿疹のような滲出物、天井からたれる水滴、暗黒、実にバビロンの町の胃腸であり、洞窟であり、墓穴であり、街路が穿たれている深淵であり、かつては華麗であった醜汚の中に、過去と称する盲目の巨大な土竜が彷徨するものが暗黒の中に透かし見らるる、広大なる土竜の穴であつて、その古い吐出口の墓窟のごとき恐ろしさに匹敵するものは何もない。

繰り返して言うが、そういうのがすなわち過去の下水道であつた。

五 現在の進歩

今日では、下水道は清潔で、冷ややかで、まっすぐで、規則正しい。イギリスにてレス

ペクタブル（りつぱな）という言葉が含む意味の理想的なものを、ほとんど実現している。整然として薄ら明るく、墨繩すみなわで設計され、あたかも袴かみしもをつけたようにきちんとしている。一介の町人が国家の顧問官となつたようにかしこまっている。中にはいつてもたいてい明らかに見える。汚泥おどいも端正に控えている。一見した所では、あの昔の地下廊下かとも思われやすい。地下廊下は、「民衆が王を愛していた」古いのんきな時代には、少しも珍しくないもので、王侯たる人々が逃走するのに至つて便利なものだった。かく今日の下水道は美しい下水道である。純粹な様式ですべて支配されている。直線的なアレキサンドリア式古典味は、詩から追い払われて、建築のうちに逃げ込んだらしく、この長い薄暗いほの白い丸天井のあらゆる石に交じっているかと思われる。各出口は皆迫せりもち持もちになっている。リヴォリ街の所は溝こうきよ渠きよの中においても一派をなしている。その上、幾何学的な線が最も適当した場所を求むれば、それはまさしく大都市の排泄濠はいせつごうであろう。そこではすべてが最も短距離の道を選ばなければならない。下水道は今日多少官省ふうな趣を呈している。時として警察は下水道に関する報告をなすが、もはやその中でも敬意を欠かされてはいない。それに対する公用語中の単語も、上等になつて品位をそなえている。腸と言われているものも今日では隧すいどう道どうと言われ、穴と言われていたものも今日では検査孔と言われている。

もしヴィヨンが昔の予備の住居を尋ねても、今はその影さえ見つけ得ないだろう。しかしこの網の目のような^{あなぐら}窪の中にはやはり、昔からの齧^{げっしじゅう}齒^し獣^{じゅう}の民が住んでいて、昔よりかえって多いくらいである。時々、古猛者の鼠^{ねずみ}が下水道の窓から首を出してみて、パリーの者らをのぞくことがある。けれどもその寄生動物でさえ、おのれの地下の宮殿に満足して温和になっっている。もう汚水溝渠には初めのような^{どうも}獐^{じょう}猛^{もう}さは少しもない。雨水は昔の下水道を汚していたが、今日の下水道を洗い^{きよ}潔^めている。とは言えあまり安心しすぎてはいけない。有毒ガスはまだそこに住んでいる。完全無欠というよりも、むしろ偽善である。警視庁と衛生局とでいかに力をつくしても及ばなかった。あらゆる清潔法が講ぜられたけれども、今になお、懺悔^{ざんげ}した後のタルテュフ（訳者注 モリエールの戯曲「タルテュフ」の主人公で偽善者の典型）のように何となく怪しい臭気を放っている。

全体より見れば汚水の掃^{そう}蕩^{とう}は下水道が文明に尽す務めであるから、そしてこの見地よりすれば、タルテュフの良心はアウジアスの家畜小屋（訳者注 牛が三千頭もいながら三十年も掃除をしたことのないという物語中の家畜小屋）よりも一進歩というべきであるから、確かにパリーの下水道は改善されたわけである。

それは進歩以上である。一つの変形である。昔の下水道と現今の下水道との間には、一

大革命がある。そしてその革命はだれがなしたか？ 吾人が上に述べた世に忘られてるブリュヌゾーである。

六 将来の進歩

パリー下水道の開鑿^{かいさく}は、決して些々^{ささ}たる仕事ではなかった。過去十世紀の間力を尽しながら、あたかもパリー市を完成することができなかったと同様に、それを完成することはできなかった。実際下水道は、パリーの拡大からあらゆる影響を受けている。それは地中において無数の触角をそなえた暗黒な水※^{すいし}のようなもので、地上に市街がひろがるとともに地下にひろがってゆく。市街が一つの街路を作るたびごとに、下水道は一本の腕を伸ばす。昔の王政時代には、二万三千三百メートルの下水道しか作られてはいなかった。一八〇六年一月一日のパリーはほとんどそのままの状態であった。この時以来、すぐ後で再び述べるが、下水道の事業は着々として勇ましく再び始められ続けられてきた。ナポレオンは、妙な数ではあるが、四千八百四メートル作り、ルイ十八世は五千七百九メートル、シャルル十世は一万八百三十六メートル、ルイ・フィリップは八万九千二十メートル、一

八四八年の共和政府は二万三千三百八十一メートル、現政府は七万五百メートル作った。現在では全部で二十二万六千六百十メートル、すなわち六十里の下水道となっている。パリーの巨大な内臓である。なお人目につかない小枝は常に作られつつある。それは世に知られない広大な建造である。

読者の見るとおり、パリーの地下の迷宮は今日、十九世紀の初めより十倍もの大きさになっている。その汚水溝渠おすいこうきよを今日のような比較的完全な状態になすには、いかばかりの忍耐と努力とが必要であったか、想像にも余りあるほどである。いにしえの王政時代の奉ぶ行ぎようと十八世紀の末十年間の革命市庁とが、一八〇六年以前に存在していた五里の下水道を穿うがつに至ったのも、辛うじてのことだった。あらゆる種類の障害がその事業を妨げた、あるいは地質上の障害もあれば、あるいはパリーの労働者階級の偏見から来る障害もあつた。鶴嘴つるはしや鍬くわや鑽きりなどのあらゆる操作に著しく不便な地層の上に、パリーは立っている。パリーという驚くべき歴史的組織が積み重ねらるるその地質的組織ほど、穿ち難く貫き難いものはない。その沖積層ちゆうせきそうの中に何かの形で工事を始めて進み込もうとすると、地下の抵抗は際限もなく現われてくる。溶けた粘土とどがあり、流れる泉があり、堅い岩があり、専門の科学で俗に芥子からしと言われる柔らかい深い泥土でいどがある。薄い粘土脈やアダム以前の大

洋にいた牡蠣かきの殻をちりばめてる化石層などと交互になつてゐる石炭岩層の中を、鶴嘴は辛うじて進んでゆく。時とすると水の流れが突然現われてきて、始められたばかりの穹きゆう窿りゆうを突きこわし、人夫らを溺おぼらすこともある。あるいは泥灰岩が流れ出し、瀑布ばくふのような勢いで奔騰して、ごく大きな押さえの梁はりをもガラスのように砕く。最近のことであるが、ヴィエツトで、サン・マルタン掘割りの水を涸からしもせず航運にも害を与えないようにして、その下に集台下水道を通さなければならなかつた時、掘割りの底に裂け目ができて、にわかには地下の工事に水があふれてき、吸い上げポンプの力にもおよばなかつた。それで潜水夫を入れてその裂け目をさがさせると、大だまりの口のあることがわかつたので、非常な骨折りでそれをふさいだ。また他の所、すなわちセーヌ川の近くやあるいはかなり離れた所でも、たとえばベルヴィルやグラランド・リユーヤリユニエール通路などで、人が足を取られてすっかり沈み込んでしまふほどの底なし泥砂でいさに出会つた。その上になお、有毒ガスのための窒息、土壤の墜落のための埋没、突然の崩壊。その上になお、チブスもあつて、人夫らはしだいにそれに感染する。近頃でも、深さ十メートルの塹壕ざんごうの中で働きながら、ウールクの主要水管を入れるための土堤を作つてクリシーの隧すい道どうを掘り、更に、地すべりのする間を、多くはごく臭い開鑿かいさくをやり支柱を施して、オピタル大通りか

らセーヌ川までビエーヴルの穹窿きゆうりゆうを作り、更に、モンマルトルの溢水いっすいからパリーを救い、マルティール市門の近くに停滞して九町歩余の濁水に出口を与えるために働き、更に、四カ月間昼夜の別なく十一メートルの深さの所で働いて、ブランシユ市門からオーベルヴィリエの道に至る一条の下水道を作り、更に、未聞のことではあったが、塹壕もなぐまったく地中で、パール・デュ・ベク街の下水道を地下六メートルの所に穿うがった後に、監督のモンノーは死亡した。また、トラヴェルシエール・サン・タントアーヌ街からルーシヌ街に至るまで市中の各地点に、三千メートルにおよぶ下水道の穹窿を作り、更に、アルバレートの支脈を作つて、サンシエ・ムーフタール四つ辻つじに雨水の氾濫はんらんするのを防ぎ、更に、流砂の中に石とコンクリートとの土台を作つて、その上にサン・ジョルジュの下水道を設け、更に、ノートル・ダム・ド・ナザレの支脈の底を下げるという恐るべき工事を指揮した後に、技師のデュローは死亡した。しかし、戦場の虐殺よりもずっと有益なそれら勇敢な行為については、何らの報告文も作られていない。

一八三二年におけるパリーの下水道は、今日の状態とは非常な差があった。ブリユヌゾーは一刺戟を与えたが、その後なされた大改造をいよいよ着手したのはコレラ病の流行だった。たとえば口にするも驚くべきことではあるが、一八二一年には、大運河と言われる

る 囿繞溝渠いじようこうぎよの一部が、ちょうどヴェニスヴェニスの運河のように、グールド街に裸のまま蟠わだかまっていた。その醜悪ふたの蓋ふたをするに要した二十六万六千八十フラン六サンチームの金を、パリ市が調達し得たのは、ようやく一八二三年のことである。コンバとキュネットとサン・マンデとの三つの吸入井戸を、その出口と種々の装置とたまりと清浄用の分脈とをつけて完成したのは、わずかに一八三六年のことである。それからしだいにパリーの腹中の溝渠は新しく作り直され、また前に言ったとおり、最近四半世紀ばかりの間に十倍以上の長さとなった。

今から三十年前、すなわち一八三二年六月五日六日の反乱のおりには、下水道の大部分はほとんど昔のままだった。大多数の街路は、今日では中高となっているが、当時は中低の道にすぎなかった。街路や四つ辻つじの勾配こうばいが終わつて低部には、大きな四角の鉄格子てつこうが方々に見えていた。格子の太い鉄棒は、群集の足に磨みがかれて光っており、馬車にはすべりやすく危険であり、馬もよくころぶほどだった。橋梁きやうりょうや道路に関する公用語では、それらの低部や鉄格子に Cassis (訳者注 ラテン語にてはくもの巢という意味になる) という意味深い名前を与えていた。この一八三二年には、エトアール街、サン・ルイ街、タンブル街、ヴィエイユ・デュ・タンブル街、ノートル・ダム・ド・ナザレ街、フ

オリー・メリクール街、フルール河岸、プティー・ムスク街、ノルマンディー街、ポン・トー・ビーシュ街、マレー街、サン・マルタン郭外、ノートル・ダム・デ・ヴィクトール街、モンマルトル郭外、グランジュ・バトリエール街、シャン・ゼリゼー、ジャコブ街、トルノン街、などの多数の街路には、昔のゴチック式の汚水溝渠おすいこうきよがまだその口を皮肉らしく開いていた。時代のついた厚顔をそなえ、時には標石でめぐらされた、のろまな巨大な石の空洞くうどうであった。

一八〇六年のパリーの下水道は、一六六三年五月に調べられたのとほとんど同じで、五千三百二十八尋ひろだった。ところがブリュヌゾーの工事の後、一八三二年一月一日には、四万三百メートルとなっていた。すなわち一八〇六年から三一年まで毎年平均七百五十メートル作られたことになる。その後、毎年八千メートルから時には一万メートルに及ぶすいと隧道すいとが、コンクリートで固めた上に水硬石灰の漆喰しっくいこうじ工事を施して作られた。一メートルに二百フランとして、現今のパリーの下水道六十里は四千八百万フランを示している。

最初に指摘した経済上の進歩論のほかに、公衆衛生の重大な案件が、パリーの下水道とこの大問題に関連している。

パリーは水の層と空気の層と二つの間にはさまれている。水の層はかなり深い地下に横

たわつてゐるが、既に二つの穿孔せんこうによつて達せられていて、白堊はくあとジュラ系石灰岩との間にある緑の砂岩帯から供給される。この砂岩帯は、半径二十五里の円盤でおおよそを示すことができる。多数の大小の河川がその中に浸透している。グルネルの泉の水一杯を飲めば、セーヌ、マルヌ、イオンヌ、オアーズ、エーヌ、シエル、ヴィエンヌ、ロアール、などの諸川の水を飲むことになる。この水の層は健全なるものである。第一に空からき、つぎに地からきたものである。しかるに空氣の層は不健全で、下水道からきたものである。汚水溝渠おすいこうきよのあらゆる毒ガスが市中の呼吸に交じている。そこから悪い氣息が起こつてくる。科学の証明するところによれば、肥料の堆積の上で取つた空氣も、パリーの上で取つた空氣よりははるかに清い。けれども一定の時日を経たならば、進歩するにつれ、各種の機關も完成し、光明も増加して、人は水の層を用いて空氣の層を清めるようになるであろう。言い換えれば、下水道を洗滌せんじようするようになるであろう。下水道の洗滌という語に吾人がいかなる意味を持たしてゐるかを、読者は既に知っているはずである。すなわちそれは、汚穢おわいを土地に返す事である、汚穢を土地に送り肥料を田野に送る事である。この簡單な一事によつて、社会全体が貧窮の減少と健康の増進とを得るであろう。現今にあつては、パリーからの疫病の放射は、ルーヴルを疫病車の轂こしきとすれば、その周囲五十里におよ

んでいる。

過去十世紀の間汚水溝渠はパリーの病毒だったとも言い得るだろう。下水道は市が血液の中に持つてる汚点である。人民も本能からよくそれを知っていた。屠獸者とじゆうしやの仕事は、非常に恐れられて、長い間死刑執行人の手にゆだねられていたが、下水掃除夫の仕事も、昔はそれとほとんど同じように危険なものであり、同じように民衆からいやがられていた。泥工に頼んでその臭い堀の中にはいつてもらうには、高い賃銀を出さなければならなかった。井戸掘り人の梯子はしごもそこにはいるには躊躇ちゆうちゆうしていた。「下水道においてゆくのは墓穴の中にはいることだ、」というたとえまでできていた。その上前に述べたとおり、あらゆる種類の嫌忌けんきすべき伝説のために、その巨大な下水道は恐ろしいことどもでおおわれている。実に世に恐れられた洞窟どうくつであって、その中には、人間の革命とともに地球の革命の跡まで残っており、ノアの大洪水のおりの貝殻からマラーのぼろに至るまで、あらゆる大變災の遺物が見いだされるのである。

第三編 泥土でいどにして靈

一 下水道とその意外なるもらい物

ジャン・ヴァルジャンがはいり込んだのは、パリーの下水道の中へだった。

ここにまたパリーと海との類似がある。大洋の中におけるごとく、下水道の中にははいり込む者はそのまま姿を消すことができる。

実に驚くべき変化だった。市のまんなかにながら、ジャン・ヴァルジャンは市の外に出ていた。またたくまに、一つの蓋ふたを上げそれをまた閉ざすだけの暇に、彼はま昼間からまったくの暗黒に、正午から真夜中に、騷そうじょう擾の響きから沈黙に、百雷の旋風から墳墓の凧なぎに、そしてまた、ボロンソー街の変転よりもなおいつそう不思議な変転によって、最も大なる危険から最も全き安全にはいつてしまった。

突然あなぐら窖の中に陥ること、パリーの秘密ひみつろう牢の中に姿を消すこと、死に満ちてる街路を去

つて生の存する一種の墳墓に移ること、それはまったく不思議な瞬間だった。彼はしばしあつけに取られて、耳を澄ましながら惘然とたたずんだ。救済の罨は突然彼の下に口を開いたのである。天の好意は彼を欺いて言わば捕虜にしてしまったのである。驚嘆すべき天の待ち伏せである。

ただ負傷者は少しの身動きもしなかった。ジャン・ヴァルジャンはその墓穴の中で自分の担つてゐる男が、果たして生きてゐるのか死んでゐるのかを知らなかった。

彼の第一の感じは、盲目になつたということだった。にわかには彼は何にも見えなくなつた。それからまた、しばらくの間は聾者になつたような氣もした。何も聞こえなかつた。頭の上数尺の所で荒れ狂つてゐる虐殺の暴風は、前に言つたとおり厚い地面でへだてられたので、ごくかすかにぼんやり響いてくるだけで、ある深い所にとどろいてゐる音のように思われた。彼は足の下が堅いことを感じた。それだけであつた。しかしそれで十分だった。一方の手を伸ばし、次にまた他方の手を伸ばすと、両方とも壁に触れた。そして道の狭いことがわかつた。足がすべつた。そして舗石のぬれてゐることがわかつた。穴や水たまりや淵を氣使つて、用心しながら一歩ふみ出してみた。そして石畳が先まで続いてゐるのを悟つた。悪臭が襲つてきたので、それがどういふ場所であるかを知つた。

しばらくすると、彼はもう盲目ではなかった。わずかな光が今すべり込んできた口からさしていたし、また目もその窞あなぐらの中になれてきた。物の形がぼんやり見え出してきた。彼がもぐり込んできたとしか言いようのないその隧すいどう道は、後ろを壁でふさがれていた。それは専門語で分枝と言わるる行き止まりの一つだった。また彼の前にも他の壁が、暗夜の壁があった。穴の口からさしてくる光は、前方十一、二歩の所でなくなってしまう、下水道の湿った壁をようやく数メートルだけほの白く浮き出さしていた。その向こうは厚い闇やみだった。そこにはいつてゆくことはいかにも恐ろしく、一度はいつたらそのままのみ尽されそうに思われた。けれどもその靄もやの壁の中につき入ることは不可能ではなく、また是非ともそうしなければならなかった。しかも急いでしなければならなかった。ジャン・ヴァルジャンは、自分が舗しきい石の下に見つけた鉄格子てつこうしは、また兵士らの目にもつくかも知れないと思った。すべてはその偶然の機会にかかっていると思った。兵士らもまたその井戸の中におりてきて、彼をさがすかも知れなかった。一分間も猶予してはおれなかった。彼はマリユスを地面におろしていたが、それをまた拾い上げた、というのも実際のありさまを示す言葉である。そして彼はマリユスを肩にかつき、前方に歩き出した。彼は決然として暗黒の中にはいつて行った。

しかし実際においてふたりは、ジャン・ヴァルジャンが思っていたほど安全になったのではなかった。種類は違うがやはり同じく大なる危険が、彼らを待ち受けていた。戦闘の激しい旋風の後に毒氣と陥^{かんせい}穽との洞窟^{どうくつ}がきたのである。混戦の後に汚水溝渠^{おすいこうきよ}がきたのである。ジャン・ヴァルジャンは地獄の一つの世界から他の世界へ陥ったのである。

五十歩ばかり進んだ時、彼は立ち止まらなければならなかった。問題が一つ起こった。隧道^{すいどう}は斜めにも一つの隧道に続いていた。二つの道が開いていた。いずれの道を取るべきか、左へ曲がるべきか右へ曲がるべきか。その暗い迷宮の中でどうして方向を定められよう。しかし前に注意しておいたとおおり、その迷宮には一つの手がかりがある。すなわちその傾斜である。傾斜に従っておおりてゆけば川に出られる。

ジャン・ヴァルジャンは即座にそれを了解した。

彼は考えた。たぶんここは市場町の下水道に違いない。それで、道を左に取って傾斜をおりてゆけば、十五分とかからないうちに、ポン・トー・シャンジュとポン・ヌーフとの間のセーヌ川のどの出口かに達するだろう。すなわちパリーの最も繁華な所にま昼間身をさらすことになる。おそらく四つ辻^{つじ}の人だかりに出つくわすだろう。血に染まった二人の男が足下の地面から出てくるのを見ると通行人の驚きはどんなだろう。巡査がやってき、

近くの衛兵らが武器を取ってやってくる。地上に出るか出ないうちに取り押さえられる。それよりもむしろ、この迷宮の中には入り込み、暗黒に身を託し、天運のままに出口を求めた方が上策である。

で彼は傾斜の上の方へと右に曲がった。

隧道すいどうの角かどを曲がると、穴の口からさしていた遠い光は消えてしまい、暗黒の幕が再びたれてきて、彼はまた目が見えなくなった。それでも彼は前進をやめずに、できるだけ早く進んだ。マリユスの両腕は彼の首のまわりにからみ、両足は背後にたれていた。その両腕を彼は一方の手で押さえ、他の手で壁を伝った。マリユスの頬ほおは彼の頬に接し、血のためにそのままこびりついた。彼はマリユスの生なま温あたたかい血が自分の上に流れかかって、服の下までしみ通るのを覚えた。けれども、負傷者の口元に接している耳に湿気のある温味が感ぜられるのは、呼吸のしるしで、従ってまた生命のしるしだった。今や彼がたどっている隧道は、初めのより広くなっていた。彼はかなり骨を折ってそれを歩いていった。前日の雨水はまだまったく流れ去っていき、底の中ほどに小さな急流を作っていたので、彼は水の中に足をふみ入れないようにするため、壁に身を寄せて行かなければならなかった。そういうふうにして彼はひそかに足を運んだ。あたかも見えない中を手探りして地下の闇やみ

の脈の中に没してゆく夜の生物のようだった。

けれども、あるいは遠い穴からわずかの明りがその不透明な霧もやの中に漂ってるのか、あるいは目が暗闇になれてくるのか、少しずつぼんやりした影が見え、手で伝ってる壁や頭の上の丸天井などが漠ぼくぜん然とわかつてきた。魂が不幸のうちに拡大してついにそこに神を見いだすに至ると同じように、瞳どうこう孔は暗夜のうちに拡大してついにそこに明るみを見いだすに至るものである。

行く手を定めることは困難であった。

下水道の線は、上に重なってる街路の線を言わば写し出してるものである。パリーのうちには当時二千二百の街路があった。そのちようど下に下水道と称する暗黒な枝が錯綜してるのを想像してみるがいい。当時存在していた下水道の組織は、それを端から端へつなぎ合わせてみると、十一里の長さに達していた。上に述べたとおり、現在におけるその網の目は、最近三十年間の特に活発な工事によって、六十里にも及んでいる。

ジャン・ヴァルジャンはまず第一に思い違いをした。彼は今サン・ドウニ街の下にいるものと思ったのであるが、不幸にも実はそうでなかった。サン・ドウニ街の下には、ルイ十三世の時代にできた古い石の下水道があつて、大溝渠だいこうきよと言われている集合溝渠にまつす

ぐ続いている。そして昔のクール・デ・ミラクルの高みで右に脇を出し、また一本の枝が別れてサン・マルタンの下水道となり、四つの腕は十字形に交差している。しかしコラント亭のそばに入り口があるプティート・トリユアンドリーの隧道は、サン・ドウニ街の地下とはまったく連絡がなく、モンマルトルの下水道に続いていた。ジャン・ヴァルジャンがはいり込んだのはそれへだった。そこには道に迷う所がたくさんあった。モンマルトルの下水道は、古い網の目のうちで最も入り組んだものの一つである。幸いにもジャン・ヴァルジャンは、帆柱をたくさん組み合わせたような図形をしてる市場町の下水道を通り越した。しかし彼の前には幾つもの難関があった。多くの街路の角が——まったくそれは街路である——暗黒の中に疑問符のように控えていた。第一に左の方には、判じ物のようなプラートリエールの大下水道が、郵便局や麦市場の建て物の下などに、T字形やZ字形の紛糾した枝をつき出し、Y字形をなしてセーヌ川に終わっている。第二に右の方には、カドラン街の彎曲した隧道が歯のような三つの行き止まりを持って控えている。第三にまた左の方には、マイユの下水道の一脈が、既に入り口近くからフオーク形に錯雑し、稲妻形に続いていて、各方面に交差し分岐してるルーヴルの大流出口に達している。最後にまた右の方には、ジューヌール街の行き止まりの隧道があつて、圍繞溝渠に達する

まで小さな横穴が方々についている。そしてこの圍繞溝渠のみが、十分安心できるくらい
の遠い出口に彼を導き得るのであった。

もしジャン・ヴァルジャンが、上に指摘したようなことを多少知っていたならば、ただ
壁に手を触れただけで、サン・ドゥニ街の下水道にいないことをすぐに気づいた
ろう。というのは、古い切り石の代わりに、すなわち花崗岩かこうがんと肥石灰漆喰しっくいとで作られ
一尋ひつ八百フランもする底部と溝とを供えて下水道に至るまで広壯巖然たる昔の建築の代わ
りに、近代の安価な経済的方法、すなわちコンクリートの層の上に水硬石灰で固めた砂岩
の一メートル二百フランの工事を、いわゆる小材料でできた普通の泥工事を、彼は手に感
じたはずである。しかし彼はそれらのことを少しも知っていなかった。

彼は、何も見ず、何も知らず、偶然のうちに没し、言いかえれば天命のうちにのみ込ま
れて、懸念しながらも落ち着いて前方に進んでいった。

けれども実を言えば、彼はしだいにある恐怖の情にとらえられていった。彼を包んでい
た影は彼の精神の中にもはいつてきた。彼は一つの謎なぞの中を歩いていたのである。その汚
水の道は実に恐るべきものである。眩惑げんわくをきたさせざるまでに入り組んでいる。その暗黒
のパリーのうちにとらえらるる時、人は慄然りっぜんたらざるを得ない。ジャン・ヴァルジャン

は目に見えない道を探り出してゆかなければならなかった。否ほとんど道を作り出してゆかなければならなかった。その不可知の世界においては、踏み出して各一步は、それが最後の一步となるかも知れなかった。いかにしてそこから出られるであろうか。出口が見つかるであろうか。しかも時期おくれにならないうちに出口が見つかるであろうか。石造の蜂^{はち}の巣のようなその巨大な地下の海綿は、彼に中を通りぬけさせるであろうか。ある意外な闇^{やみ}の結び目に出会いはしないだろうか。脱出し得られぬ所に、通過し得られぬ所に、陥りはしないだろうか。その中でマリユスは出血のために死に、彼は空腹のために死にはすまいか。ふたりともその中に埋没し終わって、二つの骸^{がいこつ}骨となり、その暗夜の片すみに横たわるに至りはすまいか。それは彼自身にもわからなかった。彼はそれらのことを自ら尋ねてみたが、自ら答えることができなかった。パリーの内臓は一つの深淵^{しんえん}である。いにしえの予言者のように、彼は怪物の腹中にいたのである。

突然彼は意外な驚きを感じた。最も思いがけない瞬間に、そしてやはりまっすぐに進み続けていた時に、傾斜を上つているのでないことに気づいた。水の流れは、爪^{つまさき}先からこないで、踵^{かかと}の方に当たっていた。下水道は今下り坂になっていた。どうしたわけだろう。さてはにわかにはセーヌ川に出るのであるか。セーヌ川に出るのは大なる危険であったが、

しかし引き返すの危険は更に大きかった。彼は続けて前に進んだ。

しかし彼が進みつつあったのはセーヌ川の方へではなかった。セーヌ右岸にあるパリーの土地の高脈は、一方の水をセーヌ川に注ぎ他方の水を大溝渠だいこうきよに注いでいる。分水嶺ぶんすいれいをなすその高脈は、きわめて不規則な線をなしている。排水を両方に分つ最高点は、サント・アヴォア下水道ではミシエル・ル・コント街の彼方かなたにあり、ルーヴルの下水道では大通りの近くにあり、モンマルトルの下水道では市場町の近くにある。ジャン・ヴァルジャンが到着したのは、その最高点であった。彼は囿繞溝渠いじょうこうきよの方へ進んでいた。道筋はまぢがっていなかった。しかし彼はそれを少しも自ら知らなかった。

枝道に出会うたびごとに、彼はその角かどに一々さわってみた。その口が今いる隧道すいどうよりも狭い時には、そちらに曲がり込まないでまっすぐに進んでいった。狭い道はすべて行き止まりになってるはずで、目的すなわち出口から遠ざかるだけであると、至当な考えをしたからである。かくして彼は、上にあげておいた四つの迷路によって暗黒のうちに張られてる四つの罟わなを、免れることができた。

時には、防寨ぼうさいのため交通が途絶され暴動のため石のように黙々としてるパリーの下から出て、いきいきたる平常のパリーの下にはいったのを、彼は感ずることができた。ふい

に頭の上で、雷のような遠い連続した音が聞こえた。それは馬車の響きであった。

彼は約三十分ばかり、少なくとも自ら推測したところによると約三十分ばかり、歩き続けていたが、なお休息しようとも思わなかった。ただマリユスをささえてる手を代えたのみだった。暗さはいよいよ深くなっていたが、その深みがかえって彼を安心させた。

突然彼は前方に自分の影を認めた。影は足下の底部と頭上の丸天井とをぼんやり染めるほのかな弱い赤みの上に浮き出していて、隧道のじめじめした両側の壁の上に、右へ左へとすべり動いた。彼は惘然^{ぼうぜん}としてうしろを振り返った。

うしろの方に、彼が今通ってきたばかりの隧道の中に、しかも見たところ非常に遠く思われる所に、厚い闇^{やみ}を貫いて、こちらをながめてるような一種の恐ろしい星が燃え上がっていた。

それは下水道の中に出る陰惨な警察の星であった。

星の向こうには、黒いまっすぐなぼんやりした恐ろしい十個たらずの影が、入り乱れて揺らめいていた。

二 説明

六月六日に下水道内搜索の命令が下された。敗亡者らがあるいはそこに逃げ込んではいないかという懸念があったので、ブジョー將軍が公然のパリイを掃蕩そうとうしている間に、ジスケ警視總監は隱密のパリーを探索することになったのである。上は軍隊によつて下は警察によつて代表された官力の二重戦略を必要とする、相関連した二重の行動であつた。警官と下水夫との三隊は、パリーの地下道を探險しにかかつて、一つはセーヌ右岸を、一つは左岸を、一つはシテ島を探つた。

警官らは、カラビン銃、棍棒こんぼう、劍、短劍、などを身につけていた。

その時ジャン・ヴァルジャンにさし向けられたのは、右岸巡邏隊じゆんらたいの角灯だつた。

その巡邏隊は、カドラン街の下にある彎曲わんきよくした隧道すいどうと三つの行き止まりとを見回つてきたところだつた。彼らがそれらの行き止まりの奥に大角灯を振り動かしてゐる時、既にジャン・ヴァルジャンは途中でその隧道の入り口に出会つたが、本道より狭いのを知つて、それにはいり込まなかつた。彼は他の方へ通つていった。警官らはカドランの隧道から出てきながら、圍繞溝渠いじようこうきよの方向に足音が聞こえるように思った。實際それはジャン・ヴァルジャンの足音だつた。巡邏の長をしてゐる警官はその角灯を高く上げ、一隊の人々

は足音が響いてくる方向へ霧もやの中をのぞき込んだ。

ジャン・ヴァルジャンにとつては何とも言い難い瞬間だった。

幸いにも、彼はその角灯をよく見ることができたが、角灯の方は彼をよく見ることができなかつた。角灯は光であり、彼は影であつた。彼はごく遠くにいたし、あたりの暗黒の中に包まれていた。彼は壁に身を寄せて立ち止まつた。

それに彼は、後方に動いてるものが何であるかを知らなかつた。不眠と不食と激情とは、彼をもまた幻覚の状態に陥らしていた。彼は一つの火炎を見、火炎のまわりに幽鬼を見た。それはいつたい何であるか、彼にはわけがわからなかつた。

ジャン・ヴァルジャンが立ち止まつたので、音はやんだ。

巡邏じゆんちゆうの人々は、耳を澄ましたが何にも聞こえず、目を定めたが何にも見えなかつた。彼らは互いに相談を始めた。

当時モンマルトルの下水道にはちようどその地点に、通用地と言われてる一種の四つ辻つじがあつた。大雨のおりなどには雨水が流れ込んで地下の小さな湖水みたようになるので、後に廃されてしまった。巡邏の者らはその広場に集まることのできた。

ジャン・ヴァルジャンは幽鬼らがいつしよに丸く集まつてるのを見た。その犬のような

頭は、互いに近く寄ってささやきかわした。

それらの番犬がなした相談の結果は次のことに帰着した。何か思い違いをしたのである。音がしたのではない。だれもない。圍繞溝渠いじょうこうきよのうちにはいり込むのはむだである。それはただ時間を空費するばかりだ。それよりもサン・メーリーの方へ急いで行かなければいけない。何かなすべきことがあり追跡すべき「ブーザンゴー」がいるとするならば、それはサン・メーリーの方面においてである。

徒党あだなというものは時々その古い侮辱的な綽名を仕立て直してゆく。一八三二年には、「ブーザンゴー」（水夫帽）という言葉は、既にすたつてるジャコバンという言葉と、当時まだあまり使われていなかったがその後広く用いられたデマゴークという言葉との、中間をつないで過激民主党をさすのだった。

隊長は斜めに左へ外それてセーヌ川への斜面の方に下ってゆくよう命令を下した。もし彼らが二つに分かれて二方面へ進んでみようという考えを起こしたならば、ジャン・ヴァルジャンは捕えられていたろう。ただ一筋の糸にかかっていたのである。おそらく警視庁では、戦闘の場合を予想し暴徒らが多数いるかも知れないと予想して、巡邏隊に分散することを禁ずる訓令を出したのであろう。一隊はジャン・ヴァルジャンをあとに残して歩き出

した。すべてそれらの行動についてジャン・ヴァルジャンが認めたことは、にわかには角灯が彼方に向いて光がなくなつたことだけだつた。

隊長は警官としての良心の責を免れるため、立ち去る前に、見捨ててゆく方面へ向かつて、すなわちジャン・ヴァルジャンの方へ向かつて、カラビン銃を発射した。その響きは隧道すいどうの中に反響また反響となつて伝わり、あたかもその巨大な腸の腹鳴りするがようだつた。一片の漆喰しっくいが流れの中に落ちて、数歩の所に水をはね上げたので、ジャン・ヴァルジャンは頭の上の丸天井に弾があつたのを知つた。

調子を取つたゆるやかな足音が、しばらく隧道の底部の上に響き、遠ざかるにしたがつてしだいに弱くなり、一群の黒い影は見えなくなり、ちらちらと漂つてる光が、丸天井に丸い赤味を見せていたが、それも小さくなつてついに消えてしまい、静寂はまた深くなり、暗黒はまた一面にひろがり、その闇やみの中にはもう何も見えるものもなく聞こゆるものもなくなつてしまつた。けれどもジャン・ヴァルジャンは、なおあえて身動きもせず、長い間壁に背をもたしてたたずみ、耳を傾け、瞳ひとみをひろげて、その一隊の幻が消えうせるのをながめていた。

三 尾行されたる男

世間の重大な騷擾そうじょうの最中にも平然として保安と監視との義務を怠らなかつたことは、当時の警察に認めてやらなければならない。暴動も警察の目から見れば、悪漢らを手放しにするの口実とはならないし、政府が危険に瀕ひんしているからといって、社会を閑却するの口実とはならない。平常の職務は、異常な場合の職務の間にも正確に尽されていて、少しも乱されてはいなかつた。政治上の大事件が始まつてる最中にも、あるいは革命となるかも知れないという不安の下にも、反乱や防寨ぼうさいに気を散らさることなく、警官は盜賊を「尾行」していた。

ちようどそういう一事が、六月六日の午後、セーヌ右岸のアンヴァリード橋の少し先の汀みぎわで行なわれていた。

今日ではもうそこに川岸の汀はない。場所のありさまは一変している。

さてその川岸の汀の上で、ある距離をへだててる二人の男が、明らかに互いの目を避けながらも互いに注意し合つてるらしかつた。先に行く男は遠ざかろうとしていたし、あとからついてゆく男は近寄ろうとしていた。

それはあたかも遠くから黙つてなされてる将棋のようなものだった。どちらも急ぐ様子はなく、ゆるやかに歩いていた。あまり急いでかえつて相手の歩みを倍加させはすまいかと、互いに気使つてるがようだった。

たとえば、食に飢えた者が獲物を追っかけながら、それをわざと様子に現わすまいとてると同じだった。獲物の方は狡猾こうかつであつて、巧みに身をまもつていた。

追われてる馳いたちと追っかけてる犬との間の適宜な割合が、ちようど両者の間に保たれていた。のがれようとしてる男は、体も小さく顔もやせていた。捕えようとしてる男は、背の高い偉丈夫で、いかめしい様子をしており、腕力もすぐれてるらしかった。

第一の男は、自分の方が弱いのを知つて、第二の男を避けようとしていた。しかしおのずから一生懸命の様子が現われていた。彼をよく見たならば、逃走せんとする痛ましい敵対心と恐れに交じつた虚勢とが、その目の中に読み取られたであろう。

川岸みぎわの汀には人影もなかった。通りすがりの者もなかった。所々につないである運送船には、船頭もいず人夫もいなかった。

向こう岸からでなければふたりの様子をたやすく見て取ることはできなかつた。そしてそれだけの距離を置いてながめる時には、先に行く男は、毛を逆立てぼろをまとい怪しい

姿をして、ぼろぼろの仕事服の下に不安らしく震えており、後ろの男は、古風な役人ふうな姿をして、フロック型の官服をつけ頤あごの所までボタンをはめているのが、見て取られたろう。

読者がもし更に近くからふたりをながめたならば、彼らが何者であるかをおそらく知り得たろう。

第二の男の目的は何であつたか？

おそらく第一の者にもつと暖かい着物を着せてやろうというのに違いなかつた。

国家の服をつけてる者がぼろをまとつてる男を追跡するのは、その男にもやはり国家の服を着せんがためにである。ただ問題はその色にある。青い服を着るのは光栄であり、赤い服を着るのは不愉快である。

世には下層にも緋ひの色がある。(訳者注 上層に皇帝の緋衣のあるごとくに)

第一の男がのがれんと欲していたのは、たぶんこの種の不愉快と緋の色とであつたろう。第二の男が第一の男を先に歩かしてなお捕えないでいるのは、その様子から推測すると、彼をある著名な集合所にはいり込ませ、一群のいい獲物の所まで案内させようというつもりしかつた。その巧みなやり方を「尾行」という。

右の推測をなお確かならしむることに、ボタンをはめてる男は川岸通りを通りかかった空の辻馬車を汀から見つけて、御者に合い図をした。御者はその合い図を了解し、またきつと相手がどういう人であるかを見て取ったのだらう、手綱を回らして、川岸通りの上から並み足でふたりの男について行き始めた。そのことは、先に歩いてるぼろ服の怪しい男からは気づかれなかった。

辻馬車はシャン・ゼリゼーの並み木に沿って進んでいた。手に鞭むちを持つてる御者の半身が胸欄の上から見えていた。

警官らに与えられてる警察の秘密訓令の一つに、こういう個条がある。「不時の事件のために常に辻馬車を手に入れ置くべし。」

互いにみごとな戦略をもつて行動しながらふたりの男は、川岸通りの傾斜が水ぎわまで下つてる所に近づいていった。そこは当時、パツシーから到着する辻馬車の御者らが、馬に水を飲ませるために川までおりてゆけるようになっていた。けれどもその傾斜は、全体の調和を保つためにその後つぶされてしまった。馬はそのために喉のどをかわかしているが、見た所の体裁はよくなっている。

仕事服の男は、シャン・ゼリゼーに逃げ込むためにその傾斜を上ってゆくつもりらしいか

った。シャン・ゼリゼーは樹木の立ち並んだ場所だった。しかしその代わりに、巡查の往来が繁く相手は容易に助力を得られるわけだった。

川岸通りのその地点は、一八二四年ブラク大佐がモレー市からパリーに持ってきたいわゆるフランソア一世の家と言われる建て物から、ごく近い所であった。衛兵の屯所とんしよもすぐそばにあった。

ところが意外にも、追跡されてる男は、水飲み場の傾斜を上ってゆかなかつた。彼はなお川岸通りに沿つて汀みぎわを進んでいった。

彼の地位は明らかに危険になつていった。

セーヌ川に身を投げるのでなければ、いつたい彼はどうするつもりだろう。

先に行けばもう川岸通りに上る方法はなかつた。傾斜もなければ階段もなかつた。少し先は、セーヌ川がイエナ橋の方へ屈曲してる地点で、汀はますます狭くなり、薄い舌ほどになつて、ついに水の中に没していた。そこまで行けば、右手は絶壁となり、左と前とは水となり、うしろには警官がやってきて、彼はどうしても四方からはさまれることになるのだつた。

もつともその汀のつきる所には、何の破片とも知れない種々の遺棄物が六、七尺の高さ

に積もつて、人の目をさえぎつてはいた。しかしその男は一周すればすぐに見つけられるようなその残壊物の堆積のうしろに、うまく身を隠そうとでも思っていたのだろうか。それは兎戯に類する手段であつた。彼も確かにそんなことを考えていたのではあるまい。それほど知恵のない盗人は世にあるものではない。

残壊物の堆積は水ぎわに高くそびえていて、川岸通りの壁まで岬みさきのようにつき出ていた。追われてる男は、その小さな丘の所まで行つて、それを回つた。そのためにもひとりの男からは見えなくなつた。

あとの男は、相手の姿を見ることができなくなつたが、それとともに先方から見られることもなくなつた。彼はその機会に乗じて、今までの仮面を脱してごく早く歩き出した。間もなく残壊物の丘の所に達して、それを一巡した。そして彼は惘然ぼうぜんとして立ち止まつた。彼が追つかけてきた男はもうそこにいなかった。

仕事服の男はまったく雲隠れしてしまつたのである。

汀みぎわは残壊物の堆積から先には三十歩ばかりしかなく、川岸通りの壁に打ちつけてる水中に没していた。

逃走者がセーヌ川に身を投ずるか川岸通りによじ上るかすれば、必ず追跡者の目に止ま

つたはずである。いったい彼はどうなったのであろう？

上衣によくボタンをかけてる男は、汀の先端まで進んでゆき、拳こぶしを握りしめ目を見張り考え込んで、しばらくたたずんだ。と突然彼は額をたたいた。地面ができて水となつてる所に、分厚ぶあつな錠前と三つの太い肱金すしかねとのついてる大きな低い円形の鉄格子てつこうしを、彼は認めたのだった。その鉄格子は、川岸通りの下に開いてる一種の門であつて、その口は川と汀みぎわとにまたがつていた。黒ずんだ水が下から流れ出ていた。水はセーヌ川に注いでいた。

その錆さびついた重い鉄棒の向こうに、一種の丸い廊下が見えていた。

男は両腕を組んで、叱責しっせきするような様子で鉄格子を睨にらめた。

しかし睨にらんだだけでは足りないのに、彼はそれを押し開こうとした。そして揺すつてみたが、鉄格子はびくともしなかつた。何の音も聞こえなかつたけれども、たぶんそれは今しがた開かれたはずである。そんな錆ついた鉄格子にしては、音のしなかつたのが不思議である。またそれは再び閉ざされたに相違ない。してみれば、つい先刻その門を開いて閉ざした男は、開門鉤かいもんかぎではなく一つの鍵かぎを持っていたことは確かである。

その明らかな事實は、鉄格子てつこうしを揺すつてゐる男の頭に突然浮かんできた。彼は憤然として思わず結論を口走つた。

「実にけしからん、政府の鍵を持っている！」

それから彼は直ちに冷静に返つて、頭の中にいっばい乱れてる考えのすべてを、ほとんど冷罵れいばのような一息の強い単語で言い放つた。

「よし、よし、よし、よしっ！」

そう言つて、あるいは男が再び出て来るのを見るつもりか、あるいは他の男どもがはいつてゆくのをみるつもりか、とにかく何事かを期待しながら、気長く憤怒を忍んでる獵犬のような様子で、残壞物の堆積のうしろに潜んで見張りをした。

彼の足並みに速度を合わせてきた辻馬車つじばしやの方も、上方の胸欄のそばに止まつた。御者は長待ちを予想して、下の方が湿つてる燕麦えんばくの袋を馬の鼻面にあてがつた。そういう食物の袋はパリ―人のよく知つてるもので、ついでに言うが、彼ら自身も時々政府からそれをあてがわれることがある。まれにイエナ橋を渡る行人人らは、遠ざかる前に振り返つて、あたりの景色の中にじつと動かないでいる二つのもの、汀みぎわの上の男と川岸通りの上つじばの辻馬車しやとを、しばらくながめていった。

四 彼もまた十字架を負う

ジャン・ヴァルジャンは再び前進し始めて、もう足を止めなかった。

行進はますます困難になつてきた。丸天井の高さは一定でなかった。平均の高さは五尺六寸ばかりで、人の身長に見積もられていた。ジャン・ヴァルジャンはマリユスを天井に打ちつけないように背をかがめなければならなかった。各瞬間に身をかがめ、それからまた立ち上がり、絶えず壁に触れてみなければならなかった。壁石の湿気と底部の粘質とは、手にもまた足にもしつかりしたささえを与えなかった。彼は都市のきたない排泄物はいせつぶつの中につまづいた。風窓から時々さしてくる明るみは、長い間を置いてしか現われてこなかったし、太陽の光も月の光かと思われるほど弱々しかった。その他はすべて、霧もやと毒気と混濁と暗黒のみだった。ジャン・ヴァルジャンは腹がすき喉のどがかわいていた。ことにかわきははなはだしかった。しかもそこは海のように、水が一面にありながら一滴も飲むことのできない場所だった。彼の体力は、読者の知るとおり非常に大であつて、清浄節欲な生活のために老年におよんでもほとんど減じてはいなかったが、それでも今や弱り始めてきた。疲労は襲つてき、そのために力は少なくなり、背の荷物はしだいに重さを増してきた。マリユスはもう死んでるのかも知れないと思われた。命のない身体のようにずっしりした重

さがあった。ジャン・ヴァルジャンはその胸をなるべく押さえないように、またその呼吸がなるべく自由に通うようなふうに、彼をになつていた。足の間には鼠ねずみがすばやく逃げてゆくを感じた。中には狼ろうばい 狽ばいの余り彼に噛かみついたのがあった。時々下水道の口のすき間から新しい空気が少し流れ込んできたので、彼はまた元気になることもあった。

彼がいじょうこうきよ 圍繞溝渠に達したのは、午後三時ごろであつたらう。

最初に彼は突然広くなつたのに驚いた。両手を伸ばしても両方の壁に届かず頭も上の丸天井に届かないほどの広いすいどう 隧道に、にわかに出たのだった。実際その大溝渠は、広さ八尺あり高さは七尺ある。

モンマルトル下水道が大溝渠に合してる所には、他の二つの隧道、すなわちプロヴァンス街のそれと屠獸所のそれとが落ち合つて、四つ辻つじを作っている。ごくれいり 伶俐な者でなければその四つの道のうちを選択することは困難であつた。幸いにジャン・ヴァルジャンは一番広い道を、すなわち圍繞溝渠を選びあてた。しかしそこにまた問題が起こつてきた。傾斜を下るべきか、あるいは上るべきか？ 事情は切迫しているし今はいかなる危険を冒してもセーヌ川に出なければいけないと、彼は考えた、言い換えれば、傾斜をおりてゆかなければならないと。彼は左へ曲がつた。

その選定は彼のために仕合わせだった。圍繞溝渠はベルシーの方へとパツシーの方へと二つの出口があると思ひ、その名の示すがようにセーヌ右岸のパリーの地下を取り巻いてると思ふのは、誤りである。來歴を考えればわかることであるが、その大溝渠は昔のメニルモンタン川にほかならないのであつて、上手に上つてゆけば一つの行き止まりに達する。その行き止まりはすなわち、昔の川の出発点で、メニルモンタンの丘ふもとにある源泉だった。ポパンクール街より以下のパリーの水を合し、アムロー上水道となり、昔のルーヴィエ島の上手でセーヌ川に注いでる一脈とは、何ら直接の連絡はないのである。集合溝渠を完全ならしむるその一脈は、メニルモンタン街の下では、上かみと下しもとに水を分かつ地点となつて一塊の土壤で、大溝渠からへだてられている。もしジャン・ヴァルジャンが隧道すいどうを上つていったならば、限らない努力を重ねた後、まったく疲れきり、息も絶えだえになつて、暗黒の中で一つの壁につき当たつたであらう。そして彼はもう万事休したに違ひない。

なお嚴密に言えば、その行き止まりから少しあとに引き返し、ブーシユラー四つ辻つじの地の輻湊点ふくそうてんにも迷わないで、フィユー・デュ・カルヴェールの隧道にはいり、次に左手のサン・ジルの排水道にはいり、次に右に曲がり、サン・セバステイヤンの隧道を避け

ば、アムロー下水道に出られ、それから更に、バステイーユの下にあるF字形の隧道に迷いこまなければ、造兵廠ぞうへいしょうの近くのセーヌ川への出口に達するのだった。しかしそれには、巨大な石蚕せきさんのような下水道をよく知りつくし、あらゆる枝と穴を知っていなければならなかつたろう。しかるに、なおことわっておくが、彼は自らたどってるその恐るべき道筋について何らの知識をも持っていなかつた。もしどういふ所にいるかと人に尋ねられたとしたら、彼はただ暗夜のうちにいるのだと答えたろう。

本能は彼にいい助言を与えたのである。傾斜をおりてゆけば、実際あるいは救われるかも知れなかつた。

彼は、ラフィット街とサン・ジョルジュ街との下で鷲わしの爪つめの形に分岐してる二つの隧道と、アンタン大道の下のフォーク形に分かれてる長い隧道とを、そのまま右にしてまっすぐに進んでいった。

たぶんマドレーヌの分岐らしい一つの横道から少し先まで行った時、彼は立ち止まった。非常に疲れていた。おそらくアンジュ街ののぞき穴であつたろうが、かなり大きな風窓がそこにあつて、相当強い光がさし込んでいた。ジャン・ヴァルジャンは負傷してる弟に對するような静かな動作で、マリユスを下水道の底の段の上におろした。マリユスの血に

染まつた顔は、風窓から来る白い明るみを受けて、墳墓の底にあるもののように思われた。その目は閉じ、髪は赤い絵の具を含んだままかわいてる刷毛はけのようになって額にこびりつき、両手は死んだようにだらりとたれ、四肢ししは冷たく、脣くちびるのすみには血が凝結していた。血のかたまりが襟えり飾かぎりの結び目にたまっていた。シャツは傷口にはいり込み、上衣のラシヤはなまなましい肉の大きな切れ目をじかに擦こすっていた。ジャン・ヴァルジャンは指先で服を開いて、その胸に手をあててみた。心臓はまだ鼓動していた。彼は自分のシャツを裂き、できるだけよく傷口を縛って、その出血を止めた。それから薄ら明かりの中で、依然として意識もなくまたほとんど息の根もないマリユスの上に身をかがめ、言葉に尽し難い恨みの情をもつて見守った。

マリユスの服を開く時、ジャン・ヴァルジャンはそのポケットに二つの物を見いだした。前日入れたまま忘れられてるパンと、マリユスの紙ばさみであった。彼はそのパンを食い、次に紙ばさみを開いてみた。第一のページにマリユスが認めた数行が見えた。その文句は読者の記憶するとおりである。

予はマリユス・ポンメルシーという者なり。マレーのフィュー・デュ・カルヴェール

街六番地に住む予が祖父ジルノルマン氏のもとに、予の死骸しがいを送れ。

ジャン・ヴァルジャンは風窓からさしこむ光でその数行を読み、しばらく何か考え込んだようにしてたたずみながら、半ば口の中で繰り返した、「フィーユ・デュ・カルヴェール街六番地、ジルノルマン氏。」それから彼は紙かみ挟はさみをまたマリユスのポケットにしまった。彼は食を得たので力を回復した。それでマリユスを再び背に負い、その頭を注意して自分の右肩にもたせ、また下水道を下り始めた。

メニルモンタンの谷に沿って曲がりながら続いている大溝渠は、およそ二里ほどの長さだった。その間おもな部分には皆石が鋪しいてあった。

ジャン・ヴァルジャンの地下の道筋を読者によくわからせるために、われわれは一々パリーの街路の名前をあげているが、彼自身はもとより炬火たいまつのようなそういう知識を持たなかった。パリーのいかなる地帯を横ぎつてるのか、またいかなる道筋をたどつてるのか、それを彼に示してくれるものは何もなかった。ただ、時々出会う光の隈くまがますます薄くなつてゆくので、日光はもう往来にささず日暮れに間もないことが、わかるばかりだった。そして頭の上の馬車のとどろきは、連続してたのが間歇かんけつ的になり、後にはほとんど聞こ

えなくなつてしまつたので、もうパリーの中央の地下にいてのではなく、外郭の大通りか出外れの川岸通りかに近いある寂しい場所に近づいたことが、推定されるだけだった。人家や街路の少ない所には、下水道の風窓も少なくなる。今やジャン・ヴァルジャンのまわりには暗やみが濃くなつていた。それでも彼は闇やみの中を手探りでなお前進し続けた。するとにわかには、その闇やみは恐ろしいほどになつてきた。

五 砂にも巧みなる不誠実あり

ジャン・ヴァルジャンは水の中にはいつてゆくを感じ、また足の下にはもう舗石しきいしがなくて泥土でいどばかりなのを感じた。

ブルターニュやスコットランドのある海岸では、旅客や漁夫などが、干潮の時岸から遠い砂浜を歩いていると、数分前から歩行が困難になつてゐるのを突然気づくことが往々ある。足下の砂浜は瀝青チヤンのようで、足の裏はすいついてしまう。それはもう砂ではなくて糺もちである。砂面はまったくかわいているが、歩を運ぶごとに、足をあげるとすぐに、その足跡には水がいつぱいになる。けれど目に見た所では普通の砂浜と何の違ひもない。広い浜は平

たく静かであり、砂は一面に同じありさまをし、固い所とそうでない所との区別は少しもつかない。跳はねむし虫の小さな雲のような楽しい群れは、行く人の足の上に騒々しく飛び続ける。人はなおその道が続け、前方に進み、陸地の方へ向かつて、岸に近づこうとする。彼は別に不安を覚えない。實際何の不安なことがある。ただ彼は一歩ごとに足の重みが増してゆくように感ずるばかりである。するとにわか沈み出す。二、三寸沈んでゆく。まさしく道筋が悪いのである。正しい方向を見定めるために彼は立ち止まる。ふと自分の足下を見る。足は見えなくなっている。砂の中に没している。それで足を砂から引き出し、元きた方に戻ろうとしてうしろを向く。するとなお深く沈んでゆく。砂は踝くるぶしまで及ぶ。飛び上がった左へ行こうとすると砂は脛すねの半ばまで来る。右へ行こうとすると、砂は膝ひざがし頭らまで来る。その時彼は、流砂の中に陥つてることを、人が歩くを得ず魚が泳ぐを得ない恐るべき場所に立つてることを、始めて気づいて、名状すべからざる恐怖に襲われる。荷物があればそれを投げ捨てる。危険に瀕ひんした船のように身を軽くしようとする。しかしもう遅い。砂は膝ひざの上まで及ぶ。

彼は助けを呼ぶ、帽子やハンカチを振る。砂はますます彼を巻き込む。もし浜辺に人がいないか、陸地があまり遠いか、特に危険だという評判のある砂床であるか、あたりに勇

者がいないかすれば、もう万事終わりである。そのまま没するのほかはない。彼が定められた刑は、恐るべき徐々の埋没で、避け難い執念深いそして遅らすことも早めることもできないものであり、幾時間も続いて容易に終わらないものであつて、健康な自由な者を立つたままとらえ、足から引き込み、努力をすればするほど、叫べば叫ぶほど、ますます下へ引きずりこみ、抵抗すればそれを罰するかのようにつう強くつかみ取り、徐々に地の中に埋めてゆき、しかも、一望の眼界や、樹木や、緑の野や、平野のうちにある村落の煙や、海の上を走る船の帆や、さえずりながら飛ぶ小鳥や、太陽や、空などを、うちながめるだけの余裕を与えるのである。その埋没は、地面の底から生ある者の方へ潮のごとく高まつてくる一つの墳墓である。各瞬間は酷薄な埋葬者となる。とらわれた悲惨な男は、すわり伏しまたはおうとする。しかしあらゆる運動はますます彼を埋めるばかりである。彼は身を伸ばして立ち上がり、沈んでゆく。しだいにのみ込まれるのを感じる。叫び、懇願し、雲に訴え、腕をねじ合わせ、死者狂いとなる。もう砂は腹までき、次に胸におよぶ。もう半身像にすぎなくなる。両手を差し上げ、恐ろしいなり声を出し、砂浜の上に爪つめを立ててその灰のようなものにつかまろうとし、半身像の柔らかい台から脱するため両 りようひ 肱じに身をささえ、狂気のように泣き叫ぶ。砂はしだいに上がってくる。肩におよび、首

におよぶ。今や見えるものは顔だけになる。大声を立てると、口には砂がいつぱいになる。もう声も出ない。目はまだ見えているが、それもやがて砂にふさがれる。もう何も見えなくなる。次には額が没してゆく。少しの髪の毛が砂の上に震える。一本の手だけが残って、砂浜の表面から出て動き回る。それもやがて見えなくなる。そして一人の人間が痛ましい消滅をとげるのである。

時には騎馬の者が馬と共に埋没することもあり、車を引く者が車と共に埋没することもある。皆砂浜の下に終わってしまう。それは水の外の難破である。土地が人を溺らすのである。土地が大洋に浸されて罫わなとなる。平地のように見せかけて、海のように口を開く。深淵しんえんもそういうふうに人を裏切ることがある。

かかる悲惨なできごとはある地方の海浜には常に起こり得ることであるが、三十年前のパリー下水道にも起こり得るのであった。

一八三三年に始められた大工事以前には、パリーの地下の道はよく突然人を埋没させるようになつていた。

水が特に砕けやすい下層の地面にしみ込むので、古い下水道では舗石しきいしであり新しい下水道ではコンクリートの上に固めた水硬石灰である部分は、もうそれをささえるものがない

くなつて揺るぎ出していた。この種の牀板ゆかいたにおいては、一つの皺しわはすなわち一つの割れ目である。一つの割れ目はすなわち一つの崩壊である。底部はかなり長く破壊していた。泥濘の二重の深淵たるその亀裂を専門の言葉では崩壊孔と称していた。崩壊孔とは何であるか？ 突然地下で出会う海岸の流砂である。下水道の中にあるサン・ミシエルの丘の刑場である。水を含んだ土地は溶解したようになっていた。その分子は柔らかい中間に漂っている。土でもなく水でもない。時としては非常に深さにおよんでいる。そういうものに出会うほど恐ろしいことはない。もし水が多ければ、死はすみやかであつて、直ちにのみ込まれてしまう。もし泥どろが多ければ、死はゆるやかであつて、徐々に埋没される。

そういう死は人の想像にもおよばないだろう。埋没が海浜の上においても既に恐るべきものであるとするならば、下水溝渠げすいこうきよの中においてはどんなものであろう。海浜においては、大気、外光、白日、朗らかな眼界、広い物音、生命を雨降らす自由の雲、遠くに見える船、種々の形になつて現われる希望、き合わせるかも知れない通行人、最後の瞬間まで得られるかも知れない救助、それらのものがあるけれども、下水道の中においてはただ、沈黙、暗黒、暗い丸天井、既にでき上がつてゐる墳墓の内部、上を蔽おほわれてゐる泥土でいどの中の死、すなわち汚穢おわいのための徐々の息苦しき、汚泥の中に窒息が爪つめを開いて人の喉のどをつかむ石の

箱、瀕死ひんしの息に交じる悪臭のみであつて、砂浜ではなく泥土であり、台風ではなくて硫化水素であり、大洋ではなくて糞尿ふんにょうである。頭の上には知らぬ顔をしている大都市を持ちながら、徒らいたすに助けを呼び、齒をくいしばり、もだえ、もがき、苦しむのである。

かくのごとくして死ぬる恐ろしさは筆紙のおよぶところではない。時とすると死は、一種の壮烈さによつてその恐ろしさを贖あがなわれることがある。火刑や難破のおりなどには、人は偉大となることがある。炎や白波の中においては、崇高な態度も取られる。そこでは滅没しながら偉大な姿と変わる。しかし下水の中ではそうはゆかない。その死は醜悪である。そこで死ぬのは屈辱である。最後に目に浮かぶものは汚穢である。泥土は不名誉と同意義の言葉である。それは小さく醜くまた賤いやしい。クレランス（訳者注 イギリスのエドワード四世の弟で、王に背いた後死刑に処せられた時、自ら葡萄酒の樽の中の溺死の刑を求めたと伝えられている）のように芳香葡萄酒ぶどうしゆの樽たるの中で死ぬのはまだいいが、エスクロー（訳者注 本章末節参照）のように溝浚とぶさらい人の墓穴の中で死ぬのはたまらない。その中でもがくのは醜悪のきわみである。死の苦しみをしながら泥水でいすいちゆう中を歩くのである。地獄と言つてもいいほどの暗黒があり、泥穴と言つてもいいほどの泥潭でいねいがあつて、その中に死んでゆく者は、果たして靈魂となるのか蛙かえるとなるのかを自ら知らない。

墳墓はどこにあつても凄惨せいさんなものであるが、下水道の中では醜悪なものとなる。

崩壊孔の深さは一定でなく、またその長さや密度も場所によつて異なり、地層の粗悪さに比例する。時とすると、三、四尺の深さのこともあれば、八尺から十尺にもおよぶことがある、あるいは底がわからぬこともある。その泥土はほとんど固くなつてゐる所もあれば、ほとんど水のように柔らかい所もある。リュニエールの崩壊孔では、ひとりの人が没するに一日くらいかかるが、フェリポの泥濘では五分間くらいですむ。泥土の密度いかに従つてその支持力にも多少がある。大人が没しても子供なら助かる所がある。安全の第一要件は、あらゆる荷物を捨ててしまうことにある。足下の地面が撓しなうのを感じる下水夫らは、いつもまず第一に、その道具袋や負おい籠かごや泥桶どろおけを投げ捨てるのであつた。

崩壊孔のできる原因は種々である。地質の脆ぜい弱じやく、人の達し得ないほど深い所に起る地すべり、夏の豪雨、絶え間ない冬の雨、長く続く霖雨りんうなど。また時とすると、泥灰岩や砂質の地面に立ち並んでる周囲の人家の重みのため、地廊の丸天井が押しやられてゆがむか、あるいは、その圧力のために底部が破裂して割れ目ができることもある。パンテオンの低下は、一世紀以前に、サント・ジュヌヴィエーヴ山の隧すい道どうの一部をそういうふうにしてふさいでしまつた。人家の重みのために下水道がくずれる時、ある場合にはその変

動は、舗石の間が鋸形のこぎりがたに開いて上部の街路に現われた。その裂け目は亀裂した丸天井の長さだけうねうねと続いていて、損害は明らかに目に見えるので、すぐに修復することができた。けれどもまた、内部の惨害が少しも外部に痕跡こんせきを現わさないこともしばしばあった。そういう場合こそ下水夫は災いである。底のぬけた下水道に不用意にはいつて、そのままになった者も往々ある。古い記録は、そのようにして崩壊孔の中に埋没した下水夫を列挙している。幾多の名前が出ている。そのうちには、ブレーズ・プートランという男があるが、カレーム・プルナン街の広場の下の崩壊孔に埋没した下水夫である。彼はニコラ・プートランの兄弟であつて、このニコラ・プートランは、一七八五年に嬰兒みどりごの墓地と言われている墓地の最後の墓掘り人であつた。その年にこの墓地は廃せられてしまったのである。

またその中には、上にちよつとあげた愉快な青年子爵エスクーブローもいる。彼は絹の靴下くつしたをはきバイオリンをささげて襲撃が行なわれたレリダ市の攻囲のよりの勇士のひとりだつた。エスクーブローはある夜、従妹たるスールデイ公爵夫人のもとにいた所を不意に見つけられ、公爵の剣をのがれるためにボートレイ下水道の中に逃げ込んだが、その崩壊孔の中に溺死できししてしまつた。スールデイ夫人はその死を聞いた時、薬壘くすりびんを取り寄せ

て塩剤を嗅ぎ、嘆くのを忘れた。そういう場合には恋も続くものではない。汚水だめは恋の炎を消してしまふ。へ口はレアドロスの溺死体を洗うのを拒み、チスベはピラムスの前に鼻をつまんで「おお臭い！」と言う。（訳者注 古代の物語中の話）

六 崩壊孔

ジャン・ヴァルジャンは一つの崩壊孔に出会ったのである。

かかる崩壊は、当時シャン・ゼリゼーの地下にしばしば起こったことで、非常に流動性のものであったから、水中工事を困難ならしめ地下構造を脆ぜいじやく弱ならしめていた。その流動性は、サン・ジョルジュ街区の砂よりもいっそう不安定なものであり、マルテール街区のガスを含んだ粘土層よりもいっそう不安定なものだった。しかも、サン・ジョルジュの砂地は、コンクリートの上に石堤を作つてようやく食い止められたものであり、マルテールの粘土層は、マルテール修道院の回廊の下では鑄鉄の管でようやく通路が穿うがられたほど柔らかいものであった。一八三六年に、今ジャン・ヴァルジャンがはいり込んだその石造の古い下水道を改造するために、サン・トノレ郭外の下がこわされた時、シャン・

ゼリゼーからセーヌ川まで地下に横たわつてた流砂は非常な障害となつて、工事は六カ月近くも続き、付近の住民、ことに旅館や馬車を所有してゐる人々の、ひどい不平の声を受けたものである。工事は困難なばかりでなく、また至つて危険なものだつた。実際、雨が四カ月半も続き、セーヌ川の溢水が三度も起こつた。

ジャン・ヴァルジャンが出会つた崩壊孔は前日の驟雨のためにできたものであつた。下の砂土にようやくさきさきえられていた舗石はゆがんで、雨水をふさぎ止め、水が中に入り込んで、地くずれが起こつていた。底部はゆるんで、泥土の中には入り込んでいた。どれほどの長さに及んでいたか、それはわからない。やみは他の所よりもずっと濃くなつていた。それは暗夜の洞窟の中にある泥土の穴だつた。

ジャン・ヴァルジャンは足下の舗石が逃げてゆくを感じた。彼は泥濘の中にはいつた。表面は水であり、底は泥であつた。けれどもそれを通り越さなければならなかつた。あとに引き返すことは不可能だつた。マリユスは死にかかつており、ジャン・ヴァルジャンは疲れきつていた。それにまたどこにも他に行くべき道はなかつた。ジャン・ヴァルジャンは前進した。その上、初めの二、三步ではその窪地はさまで深くなさそうだつた。しかし進むに従つて、足はしだいに深く没していった。やがては、泥が脛の半ばにおよび水

が膝ひざの上におよんだ。彼は両腕でできるだけマリユスを水の上に高く上げながら、進んでいった。今や泥は膝におよび、水は帯の所におよんだ。もう退くことはできなかつた。ますます深く沈んでいった。底の泥土でいどは、ひとりの重さにはたえ得るくらい濃密だつたが、明らかにふたりを支えることはできなかつた。マリユスとジャン・ヴァルジャンとは、もし別々に分かれたらあるいは無事ですむかも知れなかつた。しかしジャン・ヴァルジャンは、おそらくはもう死骸しかいになつてるかも知れない瀕死ひんしのマリユスをにないながら、続けて前進した。

水は腋わきまできた。彼は今にも沈み込むような気がした。その深い泥土の中で歩を運ぶのも辛うじてであつた。ささえとなる泥の密度はかえつて障害となつた。彼はなおマリユスを持ち上げ、非常な力を費やして前進した。しかしますます沈んでいった。もう水から出てるのは、マリユスをささえてる両腕と頭とだけだつた。洪水こうずいの古い絵には、そういうふう子供を差し上げてる母親が見らるる。

彼はなお沈んでいった。水を避けて呼吸を続けるために、頭をうしろに倒して顔を上向けた。もしその暗黒の中で彼を見た者があつたら、影の上に漂つてる仮面かと思つたかも知れない。彼は自分の上に、マリユスのうなだれた頭と蒼白そうはくな顔とを、ぼんやり見分け

た。彼は死に物狂いの努力をして、足を前方に進めた。足は何か固いものに触れた。一つの足場である。ちょうどいい時だった。

彼は身を伸ばし、身をひねり、夢中になってその足場に乘った。あたかも生命のうちに上つてゆく階段の第一段のように思えた。

危急の際に底の泥どろの中で出会ったその足場は、底部の向こうの一端だった。それは曲がったままこわれないでいて、板のようにまた一枚でできてるかのようになり、水の下に撓しなつていた。よく築かれた石畳せきぢやう工事は、迫せりもち持もちになつていくまでに丈夫なものである。その一片の底部は、半ば沈没しながらなお強固で、まったく一つの坂道となつていた。一度その坂に足を置けば、もう安全だった。ジャン・ヴァルジャンはその斜面を上つて、泥濘でいねいの孔こうの彼岸ひんがしに着いた。

彼は水から出て、一つの石に出会い、そこにひざまずいた。彼は自然にそういう心地になつて、しばらくそこにひざまずいたまま、全心を投げ出して言い知れぬ祈念を神にささげた。

彼は身を震わし、氷のように冷たくなり、臭氣にまみれ、瀕死ひんしの者になつて背をかがめ、泥濘でいねいをしたたらし、魂は異様な光明に満たされながら、立ち上がった。

七 上陸の間ぎわに座礁することあり

ジャン・ヴァルジャンは再び進み出した。

けれども、崩壊孔の中に生命は落としてこなかったとするも、力はそこに落としてきたがようだった。極度の努力に彼は疲憊ひはいしつくしていた。今は身体に力がなくて、三、四歩進んでは息をつき、壁によりかかって休んだ。ある時は、マリユスの位置を変えるために段の所にすわらなければならなかった。そしてもう動けないかと思った。しかしたとい力はなくなっていたとするも、元気は消えうせていなかった。彼はまた立ち上がった。

彼はほとんど足早に絶望的に歩き出して、頭も上げず、息もろくにつかないで、百歩ばかり進んだ。すると突然壁にぶつかった。下水道の曲がり角かどに達し、頭を下げて歩いていたので、その壁に行き当たったのである。目を上げてみると、隧道すいどうの先端に、前方の遠いごくはるかな彼方かなたに、一つの光が見えた。今度は前のように恐ろしい光ではなかった。それは楽しい白い光だった。日の光であった。

ジャン・ヴァルジャンは出口を認めたのである。

永劫えいじゆうの罰を被つて焦熱地獄の中にありながら突然出口を認めた魂にして始めて、その時ジャン・ヴァルジャンが感じた心地を知り得るだろう。その魂は、焼け残りの翼をひろげて、光り輝く出口の方へ、狂気のごとく飛んでゆくに違いない。ジャン・ヴァルジャンはもう疲労を感じなかった。もうマリユスの重みをも感じなかった。足は再び鋼鉄のように丈夫になって、歩くというよりもむしろ走つていった。近づくにしたがつて、出口はますますはつきり見えてきた。それは穹窿きゆうりゆうけい形の迫持せりもちで、しだいに低くなつて、隧道の丸天井よりも更に低く、丸天井が下がるにしたがつてしだいに狭せままつて、隧道より更に狭かつた。隧道は漏斗ろうとの内部のようになっていた。かくしだいにつぼんでる不都合な形は、重罪監獄の側門を模したもので、監獄では理に合っているが、下水道では理に合わない。なので、その後改造されてしまった。

ジャン・ヴァルジャンはその出口に達した。

そこで彼は立ち止まった。

まさしく出口ではあったが、出ることはできなかった。

丸い門は丈夫な鉄格子てつこうしで閉ざされていた。そして鉄格子は、酸化した肱金ひしがねの上にくわつたに開閉された様子も見えず、石の框かまちに厚い錠前で固定してあり、錠前は赤く錆びて、

大きな煉瓦れんがのようになっていた。鍵穴かぎあなも見え、頑丈がんじょうな門かぬぎ子こが鉄の受座うゑざに深くはいつてるのも見えていた。錠前は明らかに二重錠にじゆうじやうがおろされていた。それは昔パリーがやたらに用いていた牢獄の錠前じやうぜんの一つだった。

鉄格子の向こうには、大気、川、昼の光、狭くはあるが立ち去るには足りる汀みぎわ、遠い川岸通り、容易に姿を隠し得らるる深淵しんえんたるパリー、広い眼界、自由、などがあつた。右手には下流の方にイエナ橋が見え、左手には上流の方にアンヴァリード橋が見えていた。夜を待つて逃走するには好都合な場所だった。パリーの最も寂しい地点の一つだった。グロ・カイユーに向き合つてゐる汀みぎわだった。蠅はえは鉄格子の間から出入でいりしていた。

午後の八時半ごろだったろう。日は暮れかかっていた。

ジャン・ヴァルジャンは底部のかわいた所に壁に沿つてマリユスをおろし、それから鉄格子に進んでいつて、その鉄棒を両手につかんだ。そして狂気のごとく揺すつたが、少しも動かなかつた。鉄格子はびくともしなかつた。弱い鉄棒を引きぬいて槓てことし扉とびらをこじあけるか錠前をこわすかするつもりで、彼は鉄棒を一本一本つかんだが、どれも小揺るぎさえしなかつた。虎とらの牙きばもおよばないほど固く植わつていた。一つの槓てこもなく、一つの力になる物もなかつた。障害は人力のおよぶべくもなかつた。扉を開くべき方法は何もな

かつた。

それでは彼は、そこで終わらなければならなかったのか。どうしたらいいか。どうなるのか。引き返して、既に通つてきた恐ろしい道程を繰り返すには、その力がなかった。それにまた、ようやく奇跡のように脱してきたあの泥濘（でいねい）の孔（あな）を、どうして再び通ることができよう。更にその泥濘の後には、あの警官の巡邏隊（じゆんらたい）があるではないか。確かに二度とそれからのがれられるものではない。そしてまた、どこへ行つたらいいか。どの方向を取つたらいいか。傾斜について進んでも、目的を達せられるものではない。他の出口にたどりついた所で、必ずやそれも石の蓋（ふた）か鉄の格子かでふさがれているだろう。あらゆる口がそういうふう閉ざされてることは疑いない。彼がはいつてきた鉄格子は偶然にもゆるんでいたが、しかし下水道の他の口がすべて閉ざされてることは明らかである。彼はただ牢獄（うごく）の中に逃げ込み得たに過ぎなかった。

万事終わりであった。ジャン・ヴァルジャンがなしてきたすべては徒勞に歸した。神はそれを受け入れなかつたのである。

かれらは二人とも、死の大きな暗い網に捕えられてしまった。そしてジャン・ヴァルジャンは、暗黒の中に震え動くまっ黒な網の糸の上に恐るべき蜘蛛（くも）が走り回るのを感じた。

彼は鉄格子に背を向け、やはり身動きもしないでいるマリユスのそばに、舗石の上に、すわるといふよりもむしろ打ち倒れるように身を落とした。その頭は両膝の間^{りょうひざ}にたれた。出口はない。それが苦悶の最後の一滴であった。

その深い重圧の苦しみのうちに、だれのことを彼は考えていたか。それは自分のことでもなく、またマリユスのことでもなかった。彼はコゼットのことを思っていたのである。

八 裂き取られたる上衣の一片

その喪心の最中に、一つの手が彼の肩に置かれ、一つの声が低く彼に話しかけた。

「山分けにしよう。」

その闇^{やみ}の中にだれがいたのであろうか。絶望ほど夢に似たものはない。ジャン・ヴァルジャンは夢をみてるのだと思つた。少しも足音は聞こえなかつたのである。現実にそんなことがあり得るだろうか。彼は目をあげた。

一人の男が彼の前にいた。

男は労働服を着、足には何にもはかず、靴^{くつ}を左手に持っていた。明らかに彼は、足音を

立てないでジャン・ヴァルジャンの所まで来るために、靴をぬいだのだった。

ジャン・ヴァルジャンはその男がだれであるかを少しも惑わなかった。いかにも意外な邂逅かいこうではあったが、見覚えがあった。テナルデイエだった。

言わば突然目をさましたようなものだったが、ジャン・ヴァルジャンは危急になれており、意外の打撃をも瞬間に受け止めるように鍛えられていたので、直ちに冷静に返ることができた。それに第一、事情は更に險悪になり得るはずはなかった。困却もある程度におよべば、もはやそれ以上に大きくなり得ないものである。テナルデイエが出てきたとて、その闇夜をいつそう暗くすることはできなかつた。

しばし探り合いの時間が続いた。

テナルデイエは右手を額の所まで上げて目庇まびさしを作り、それから目をまたたきながら眉根ゆねを寄せたが、それは口を軽くとがらしたのと同時に、相手がだれであるかを見て取ろうとする鋭い注意を示すものだった。しかし彼はそれに成功しなかつた。ジャン・ヴァルジャンは前に言つたとおり、光の方に背を向けていたし、またま昼間の光でさえも見分け難いほど泥どろにまみれ血に染まって姿が変わっていた。それに反してテナルデイエは、害あなぐらの中のようなほの白い明りではあるがそのほの白さの中にも妙にはつきりしてる鉄格子てつこうしから

来る光を、まっ正面に受けていたので、通俗な力強い比喩ひゆで言うとおおり、すぐにジャン・ヴァルジャンの目の中に飛び込んだのである。この条件の違いは、今や二つの位置と二人の男との間に行なわれんとする不思議な対決において、確かにジャン・ヴァルジャンの方にある有利さを与えるに足りた。会戦は、覆面をしたジャン・ヴァルジャンと仮面をぬいだテナルデイエとの間に行なわれた。

ジャン・ヴァルジャンはテナルデイエが自分を見て取っていないのをすぐに気づいた。ふたりはその薄暗い中で、互いに身長をかり合ってるように、しばらくじろじろなめ合った。テナルデイエが先に沈黙を破った。

「お前は どうして出るつもりだ。」

ジャン・ヴァルジャンは返事をしなかった。

テナルデイエは続けて言った。

「扉とびらをこじあけることはできねえ。だがここから出なけりやならねえんだろう。」

「そのとおりで。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

「じゃあ山分けた。」

「いったい何のことだ？」

「お前はその男をやつつけたんだろう。よろしい。ところで俺われの方に鍵かぎがあるんだ。」
テナルデイエはマリユスをさし示した。彼は続けて言った。

「俺はお前を知らねえ、だが少し手伝おうというんだ。おだやかに話をつけようじゃねえか。」

ジャン・ヴァルジャンは了解しはじめた。テナルデイエは彼を人殺しだと思ってるのだ。テナルデイエはまた言った。

「まあ聞けよ、お前はそいつの懐中を見届けずにやつつけたんじやあるめえ。半分俺われによこせ。扉を開いてやらあね。」

そして穴だらけの上衣の下から大きな鍵かぎを半ば引き出しながら、彼は言い添えた。

「自由な身になる鍵がどんなものか、見てえなら見せてやる。これだ。」

ジャン・ヴァルジャンは、老コルネイユの用語を借りれば、「啞然あぜんとした。」そして眼前のことが果たして現実であるかを疑ったほどである。それは恐ろしい姿で現われてくる天意であり、テナルデイエの形となつて地から出て来る善良な天使であつた。

テナルデイエは上衣の下に隠されてる大きなポケットに手をつき込み、一筋の綱を取り出して、それをジャン・ヴァルジャンに差し出した。

「さあ、」と彼は言った、「おまけにこの綱もつけてやらあな。」

「綱を何にするんだ。」

「石もいるだろうが、それは外にある。こわれ物がいっぱい積んであるんだ。」

「石を何にするんだ。」

「ばかだな。お前はそいつを川に投げ込むつもりだろう。すりゃあ石と綱とがいるじゃねえか。そうしなけりや水に浮いちまわあな。」

ジャン・ヴァルジャンはその綱を取った。だれにでも、そういうふうにとただ機械的に物を受け取ることがある。

テナルデイエは突然ある考えが浮かんだかのように指を鳴らした。

「ところで、お前は どうして 向こうの 泥孔どろあなを越してきたんだ。俺おれにはとてもできねえ。

ぷー、あまりいいにおいじゃねえな。」

ちよつと黙つた後、彼はまた言い出した。

「俺がいろんなことを聞いているのに、お前が一向返事もしねえのはもつともだ。予審のいやな十五、六分間の下稽古だからな。それに、口をききさえしなけりやあ、あまり大きな声を出しやしねえかという心配もねえわけだからな。だがどつちみち同じことだ。お前の

顔もよく見えねえし、お前の名も知らねえからといって、お前がどんな人間でどんなことをするつもりか、俺にわからねえと思っちゃまちがえだぜ。よくわかってらあね。お前はその男をばらして、今どこかに押し込むつもりだろう。お前には川がいるんだ。川つてものはばかなことをすつかり隠してしまうものだからな。困るなら俺が救ってやらあ。正直者の難儀を助けるなあ、ちようど俺のはまり役だ。」

ジャン・ヴァルジャンが黙ってるのを彼は一方に承認しながらも、明らかに口をきかせようとつとめていた。彼は横顔でも見ようとするように、相手の肩を押しした。そしてやはり中声をしたまま叫んだ。

「泥孔と言やあ、お前はどうかしてるね。なぜあそこにほうり込んでこなかったんだ？」

ジャン・ヴァルジャンは黙っていた。

テナルデイエは襟えり飾りかぎとしてるぼろ布を喉のど仏ほとけの所まで引き上げた。それは真剣になつた様子を充分に示す身振りだった。そして言った。

「だが、つまりお前のやり方は伶俐りこうだったかも知れねえ。職人が明日穴でもふさぎに来れば、そこに死人が捨てられてるのをきつと見つける。そうすりやあ、それからそれと糸をたぐって跡をかぎつけ、お前の身におよんでくる。下水道の中を通った奴やつがいる。それは

だれだ、どこから出たんだ、出るのを見た者があるか？ なんて警察はなかなか抜け目がねえからな。下水道は裏切つて、お前を密告する。死人なんていう拾い物は珍しいし、人の目をひく。だから下水道を仕事に使う奴はあまりいねえ。ところが川とくりやあ、だれでも使つてる。川はまったく墓場だからな。一月もたつてから、サン・クルーの網に死体がひっかかる。そうなりやあかまつたこたあねえ。身体は腐つてらあ。だれがこの男を殺したか、パリーが殺したんだ、てなことになる。警察だつてろくに調べやしねえ。つまりお前は上手にやつたわけだ。」

テナルデイエがしゃべればしゃべるほど、ジャン・ヴァルジャンはますます黙り込んだ。テナルデイエはまた彼の肩を押し動かした。

「さあ用事をすまそう。二つに分けるんだ。お前は俺おれの鍵かぎを見たんだから、俺にも一つお前の金を見せなよ。」

テナルデイエは荒々しく、獯どうもう猛で、胸に一物あるらしく、多少威嚇いかくするようなふうだったが、それでもごくなれなれしうだった。

不思議なことが一つあった。テナルデイエの態度は単純ではなかった。まったく落ち着いてるような様子はなかった。平気なふうを装いながら、声を低めていた。時々口に指を

あてては、しッ！ とつぶやいた。その理由はどうも察し難かった。そこには彼らふたりのほかだれもいなかった。おそらく他に悪党どもがどこかあまり遠くない片すみに潜んでいて、テナルデイエはそれらと仕事を分かちたくないと思ってるのだと、ジャン・ヴァルジャンは考えた。

テナルデイエは言った。

「話を片づけてしまおう。そいつは懐中にいくら持っていたんだ？」

ジャン・ヴァルジャンは身体中方々さがした。

読者の記憶するとおり、いつも金を身につけてるのは彼の習慣だった。臨機の策を講じなければならぬ陰惨な生活に定められてる彼は、金を用意しておくのを常則としていた。ところがこんどに限って無一物だった。前日の晩、国民兵の服をつけるとき、悲しい思いに沈み込んでいたので、紙入れを持つのを忘れてしまった。彼はただチョッキの隠しにわずかな貨幣を持つただけだった。全部で三十フランばかりだった。彼は汚水に浸ったポケットを裏返して、底部の段の上に、ルイ金貨一個と五フラン銀貨二個と大きな銅貨を五、六個並べた。

テナルデイエは妙に首をひねりながら、したくちびる下唇をつき出した。

「安っぽくやつつけたもんだな。」と彼は言った。

彼はごくなれなれしく、ジャン・ヴァルジャンとマリユスとのポケットに一々さわってみた。ジャン・ヴァルジャンは特に光の方に背を向けることばかりに気を使っていたので、彼のなすままに任じた。テナルデイエはマリユスの上衣を扱ってる間に、手品師のような敏捷^{びんしょう}さで、ジャン・ヴァルジャンが気づかぬうちに、その破れた一片を裂き取って、自分の上衣の下に隠した。その一片の布は、他日被害者と加害者とがだれであるかを知る手掛かりになるだろうと、多分考えたのだろう。しかし金の方は、三十フラン以外には少しも見いださなかった。

「なるほど、」と彼は言った、「ふたりでそれだけつきり持たねえんだな。」

そして山分けという約束を忘れて、彼は全部取ってしまった。

大きな銅貨に対しては彼もさすがにちよつと躊躇^{ちゆうちよ}した。しかし考えた末それをも奪いながら口の中でつぶやいた。

「かまわねえ、あまり安すぎるからな。」

それがすんで、彼はまた上衣の下から鍵^{かぎ}を引き出した。

「さあ、お前は出なけりやなるめえ。ここは市場のようなもんで出る時に金を払うんだ。」

お前は金を払ったから、出るがいい。」

そして彼は笑い出した。

彼がそういうふうには、見知らぬ男に鍵を貸してやり、その門から他人を出してやったのは、一殺害人を救つてやろうという純粹無私な考えからであつたらうか。それについては疑いを入れる余地がある。

テナルデイエはジャン・ヴァルジャンに自ら手伝つて再びマリユスを肩にかつがせ、それから、ついて来るように合い図をしながら、跣足はだしの爪先でそつと鉄格子てつこうしの方へ進み寄り、外をのぞき、指を口にあて、決心のつかないようなふうでしばらくたつた。やがて外の様子をうかがつてしまうと、彼は鍵を錠前の中に差し込んだ。門子かぬきはすべり、扉は開いた。擦すれる音もせず、軋きしる音もしなかつた。ごく静かに開かれてしまった。それで見ると明らかに、鉄格子と肱ひしがね金とはよく油が塗られていて、思ったよりしばしば開かれていたものらしい。その静けさは気味悪いものだった。隠密な往来がそこに感ぜられ、夜の男どもの黙々たる出入りと罪悪の狼おおかみの足音とがそこに感ぜられた。下水道はまさしく、秘密な盗賊仲間の同類だった。音を立てないその鉄格子は贓品ぞうひん受け取り人だった。

テナルデイエは扉とびらを少し開き、ジャン・ヴァルジャンにちやうど通れるだけのすき間を

与え、鉄格子てつこうしを再び閉ざし、錠前の中に二度鍵かぎを回し、息の根ほどの音も立てないで、暗黒の中にまた没してしまった、彼は虎のビロードのような足で歩いてるかと思われた。一瞬間の後には、天意ともいうべきその嫌悪けんおすべき男は、目に見えないものうちにはいり込んでしまっていた。

ジャン・ヴァルジャンは外に出た。

九 死人と思わるるマリユス

ジャン・ヴァルジャンはマリユスみぎわを汀の上みぎわにすべりおろした。

彼らは外に出たのである。

毒気と暗黒と恐怖とは背後になった。自由に呼吸される清純な生きた楽しい健全な空気は、あたりにあふれていた。周囲は至る所静寂であつたが、しかしそれは蒼空あおぞらのうちに太陽が沈んでいった後の麗わしい静寂だつた。薄暮の頃で、夜はきかかっていた。夜こそは大なる救済者であり、苦難から出るために影のマントを必要とするあらゆる魂の友である。空は大きな平穏となつて四方にひろがっていた。川は脣くちづけをするような音を立てて

足下に流れていた。シャン・ゼリゼーの楡にれの木立ちの中には、互いに就寝のあいさつをか
わしてゐる小鳥の軽い對話が聞こえていた。ほの青い中天をかすかに通してただ夢想の目
のみ見える二、三の星は、無辺際のうちうちに小さな点となつて輝いていた。夕はジャン・ヴ
アルジャンの頭の上に、無窮なるものの有するあらゆる静穩を展開していた。

しかりとも否とも言い難い微妙な不分明な時間だつた。既に夜の靄もやはかなり濃くなつて
いて、少し離るれば人の姿もよくわからないが、なお昼の明るみはかなり残つていて、近
くに寄れば相手の顔が認められた。

ジャン・ヴァルジャンはしばらくの間、そのおごそかなまたやさしい清朗の氣にまつた
く打たれてしまつた。かく我を忘れさせる瞬間もよくあるものである。そういう時、苦惱
は不幸なる者をわずらわすのをやめる。すべては思念の中に姿を潜める。平和の氣は夢想
する者を夜のおおおう。そして輝く薄明の下に、光をちりばむる空をまねて、人の魂
も星に満たされる。ジャン・ヴァルジャンは頭の上に漂つてるその輝く広い影をうちなが
めざるを得なかつた。彼は思いにふけりながら永劫えいじゅうの空のおごそかな静寂のうちに、恍
惚と祈念との情をもつて浸り込んだ。それから急に、あたかも義務の感に戻つてきたかの
ように、彼はマリユスの方へ身をかがめ、掌てのひらくぼの窪の中に水をすくつて、その数滴を静かに

彼の顔にふりかけた。マリユスの眼瞼まぶたは開かなかつた。けれども半ば開いてるその口には息が通っていた。

ジャン・ヴァルジャンは再び川に手を入れようとした。その時、姿は見えないがだれかが背後に立つてるような言い知れぬ不安を突然感じた。

だれでもそういう感銘を知ってるはずだが、それについては既に他の所で述べてきたとおりである。

ジャン・ヴァルジャンはふり返った。

感じたとおりに、果たして何者かがうしろにいた。

背の高いひとりの男が、フロック形の長い上衣を着、両腕を組み、しかも右手には鉛の頭が見える棍棒こんぼうを持って、マリユスの上にかがんでるジャン・ヴァルジャンの数歩うしろの所に、じつと立っていた。

それは影に包まれていて幽霊のように見えた。単純な者であつたら、薄暗がりのために恐怖を感じたろう。思慮ある者であつたら、棍棒のために恐怖を感じたろう。

ジャン・ヴァルジャンはその男がジャヴェルであることを見て取った。

テナルデイエを追跡したのはジャヴェルにほかならなかつたことを、読者は既に察した

であろう。ジャヴェルは望外にも防寨ぼうさいから出た後、警視庁へ行き、わずかの間親しく総監に面接して口頭の報告をし、それからまた直ちに自分の任務についた。読者は彼のポケットに見いだされた書き付けのことを記憶しているだろう。それによると彼の任務には、しばらく前から警察の注意をひいていたセーヌ右岸のシャン・ゼリゼー付近を少し監視することも含まっていた。彼はそこでテナルデイエを見つけ、その跡をつけたのだった。その後のことは読者の知るとおりである。

ジャン・ヴァルジャンの前に親切にも鉄格子てつこうしを開いてやったのは、テナルデイエの一つの妙策だったことも、また同様にわかるはずである。テナルデイエはジャヴェルがまだそこにいることを感じていた。待ち伏せされてる男は的確な一つの嗅覚きゆうかくを持つてるものである。そこで獵犬に一片の骨を投げ与えてやる必要があつた。殺害者とは何という望外の幸いであろう！ それは又とない身代わりであつて、どうしてもものがすわけにはゆかない。テナルデイエは自分の代わりにジャン・ヴァルジャンを外につき出すことによつて、警察に獲物を与え、自分の追跡を弛ゆるませ、いつそう大きな事件のうちに自分のことを忘れさせ、いつも間諜スパイが喜ぶ待ち甲斐のある報酬をジャヴェルに与え、自分は三十フランを儲もつけ、そして、自分の方はそれに紛れて身を脱し得ることと思つた。

ジャン・ヴァルジャンは一つの暗礁から他の暗礁へぶつかつたのである。

相次いでテナルディエからジャヴェルへと落ちていった二度の災難は、あまりにきびしすぎた。

前に言つたとおり、ジャン・ヴァルジャンはまったく姿が変わつていたので、ジャヴェルはそれと見て取り得なかつた。彼は両腕を組んだまま、目につかないくらいの動作で棍棒^{んぼう}を握りしめてみて、それから簡明な落ち着いた声で言つた。

「何者だ。」

「私だ。」

「いつたいだれだ？」

「ジャン・ヴァルジャン。」

ジャヴェルは棍棒をくわえ、膝^{ひざ}をまげ、身体を傾け、ジャン・ヴァルジャンの両肩を二つの万力ではさむように強い両手でとらえ、その顔をのぞき込み、そして始めてそれと知つた。二人の顔はほとんど接するばかりになつた。ジャヴェルの目つきは恐ろしかつた。ジャン・ヴァルジャンはあたかも山猫^{やまねこ}の爪^{つめ}を甘受^{あまうけ}してる獅子^{しし}のように、ジャヴェルにつかまれたままじつとしていた。

「ジャヴェル警視、」と彼は言った、「私は君の手中にある。それに今朝けさから、私はもう君に捕えられたものだと思つていた。君からのがれるつもりならば、住所などを教えはしない。私を捕えるがいい。ただ一つのことを許してもらいたい。」

ジャヴェルはその言葉を聞いてるようにも思われなかった。彼はジャン・ヴァルジャンの上にじつと瞳ひとみを据えていた。頤あごに皺しわを寄せ、脣くちびるを鼻の方へつき出して、荒々しい夢想の様子だった。それから彼はジャン・ヴァルジャンを放し、すつくと身を伸ばし、棍棒こんぼうを充分手のうちに握りしめ、そして夢の中にもいるように、次の間を発した、というよりむしろつぶやいた。

「君はここに何をしてるんだ、そしてその男は何者だ。」

彼はもうジャン・ヴァルジャンをきさまと呼んではいなかった。

ジャン・ヴァルジャンは答えたが、その声の響きにジャヴェルは始めて我に返った。

「私が君に話したいのもちようどこの男のことだ。私の身は君の勝手にしてほしい。だがまずこの男をその自宅に運ぶのを手伝ってもらいたい。願ねがいというのはそれだけだ。」

ジャヴェルの顔は、人から讓歩を予期されてると思うたびごとにいつもするように、すつかり張りつめた。けれども彼は否とは言わなかった。

彼は再び身をかがめ、ポケットからハンカチを引き出し、それを水に浸して、マリユスの血に染まつてる額をぬぐった。

「防寨ぼうさいにいた男だな。」と彼は独語のように半ば口の中で言った。「マリユスと呼ばれていた者だ。」

彼こそ実に一流の探偵たんでいというべきであつて、やがて殺されるのを知りながらも、すべてを観察し、すべてに耳を傾け、すべてを聞き取り、すべてのことを頭に入れていたのである。死の苦悶くもんのうちにあるが、様子をうかがい、墳墓へ一步ふみ込みながら、記録をとっていたのである。

彼はマリユスの手を取つて脈を診みた。

「負傷している。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

「死んでいる。」とジャヴェルは言った。

ジャン・ヴァルジャンは答えた。

「いや、まだ死んではない。」

「君はこの男を、防寨ぼうさいからここまで運んできたんだな。」とジャヴェルは言った。

下水道を横ぎつてきたその驚くべき救助についてその上尋ねることもせず、また彼の問

にジャン・ヴァルジャンが何とも答えないのを気にも止めなかったのを見ると、何か深く彼の頭を満たしていたものがあつたに違いない。

ジャン・ヴァルジャンの方は、ただ一つの考えしかいだいていないようだった。彼は言つた。

「この男の住所は、マレーのフィュー・デュ・カルヴェール街で、その祖父……名前を忘れてしまった。」

ジャン・ヴァルジャンはマリユスの上衣を探り、紙ばさみを取り出し、マリユスが鉛筆で走り書きしたページを開き、それをジャヴェルに差し出した。

文字が読めるくらいの光は、まだ空中に漂っていた。その上ジャヴェルの目は、夜の鳥のように暗中でも見える一種の燐光りんこうを持っていた。彼はマリユスの書いた数行を読み分けてつぶやいた。

「フィュー・デュ・カルヴェール街六番地、ジルノルマン。」

それから彼は叫んだ。「おい、御者！」

読者の思い起こすとおり、辻馬車つしばしやは万一の場合のために待っていた。

ジャヴェルはマリユスの紙かみばさ挟みを取り上げてしまった。

まもなく、馬車は水飲み場の傾斜をおりて汀^{みぎわ}までやってき、マリユスは奥の腰掛けの上に置かれ、ジャヴェルとジャン・ヴァルジャンとは相並んで前の腰掛けにすわった。

戸は閉ざされ、辻^{つじばしや}馬車はすみやかに遠ざかつて、川岸通りをバステューユの方向へ上つていった。

一同は川岸通りを去つて、街路にはいった。御者台の上に黒く浮き出してる御者は、やせた馬に鞭^{むち}をあてていた。馬車の中は氷のような沈黙に満たされていた。マリユスは身動きもせず、奥のすみに身体をよせかけ、頭を胸の上にぐたりとたれ、両腕をぶら下げ、足は固くなつて、もうただ柩^{ひつぎ}を待つてるのみであるように思われた。ジャン・ヴァルジャンは影でできてるかのようにであり、ジャヴェルは石でできてるかのようにだった。そして馬車の中はまったくの暗夜であつて、街灯の前を通るたびごとに、明滅する電光で照らされるように内部が青白くひらめいた。死骸^{しかい}と幽霊と彫像と、三つの悲壮な不動の姿が、偶然いっしょに集まつて、ものすごく顔をつき合はしてるとかと思われた。

十 生命を惜しまぬ息子^{むすこ}の帰宅

舗^{しきいし}石の上に馬車が揺れるたびごとに、マリユスの頭髮から一滴ずつ血がたれた。

馬車がフィーユ・デュ・カルヴェール街六番地に達した時は、もうま夜中だった。

ジャヴェルはまっさきに馬車からおり、大門の上についてる番地を一目で見取り、^お牡山羊とサチール神とが向かい合つて古風な装飾のある練鉄の重い金槌^{かなづち}を取つて、案内の鐘を一つ激しくたたいた。片方の扉^{とびら}が少し開いた。ジャヴェルはそれを大きく押し開いた。門番は欠伸^{あくび}をしながら、ぼんやり目をさましたようなふうで、手に蠟燭^{ろうそく}を持って半身を現わした。

家の中は皆寝静まっていた。マレーでは皆早寝で、ことに暴動の日などはそうである。

その善良な古い町は、革命と聞くと恐れおののき、眠りの中に逃げ込んでしまふ。あたたかも子供らが、人攫^{ひとさら}い鬼の来るのを聞いて、急いで頭からふとんをかぶるようなものである。

その間に、ジャン・ヴァルジャンは両わきをささえ御者は膝^{ひざ}を持って、ふたりでマリユスを馬車から引き出した。

そういうふうによりユスをかかえながら、ジャン・ヴァルジャンは大きく裂けてる服の下に手を差し込んで、その胸にさわってみ、なお心臓が鼓動してるのを確かめた。しかも、

馬車の動揺のためにかえって生命を取り返したかのように、心臓の鼓動はいくらか前よりもよくなっていた。

ジャヴェルはいかにも暴徒の門番に対する役人といった調子で、その門番に口をきいた。「ジルノルマンという者の家はここか。」

「ここですが、何の御用でしょう？」

「息子を連れ戻してきたのだ。」

「息子を？」と門番はぼんやりしたふうで言った。

「死んでいるんだ。」

よごれたぼろぼろの服をつけたジャン・ヴァルジャンが、ジャヴェルのうしろに立つるので、門番は恐ろしそうにそちらをながめていた。するとジャン・ヴァルジャンは頭を振って、死んでるのではないと合い図をした。

門番にはジャヴェルの言葉もジャン・ヴァルジャンの合い図もよくわからないらしかつた。

ジャヴェルは続けて言った。

「この者は防寨ぼうさいに行っていたが、このとおり連れてきたのだ。」

「防寨に！」と門番は叫んだ。

「そして死んだのだ。親父おやじを起こしに行け。」

門番は身を動かさなかつた。

「行けと言つたら！」とジャヴエルはどなつた。

そして彼は付け加えた。

「いづれ明日あすは葬式となるだろう。」

ジャヴエルにとつては、公道における普通のできごとは、すべて整然と分類されていた。それは警戒と監視との第一歩である。そして各事件はそれぞれの部門を持つていた。普通
にありそうな事柄はすべて、言わば引き出しの中にしまわれていて、場合に依じて必要な
だけ取り出さるるのだった。街路の中には、騒擾、暴動、遊樂、葬式、などがあつた。

門番はただバスクだけを起こした。バスクはニコレットを起こした。ニコレットはジル
ノルマン伯母を起こした。祖父の方はなるべく遅く知らせる方がいいとされて、眠つたま
まにして置かれた。

マリユスは建て物の他の部屋へやの者がだれも気づかないうちに二階に運ばれ、ジルノルマ
ン氏の次の室へやの古い安樂椅子あんらくいすに寝かされた。そしてバスクが医者を迎えに行き、ニコレッ

トが箆筒たんすを開いてる間に、ジャン・ヴァルジャンはジャヴェルから肩をとらえられてるのを感じた。

彼はその意味を了解し、ジャヴェルの足音をうしろにしたがえながら階段をまたおりていった。

門番は恐ろしい夢の中にいるような心地で、彼らがいってきたとおりにまた出て行くのをながめた。

彼らは再び馬車に乗った。御者も御者台に上った。

「ジャヴェル警視、」とジャン・ヴァルジャンは言った、「も一つ許してもらいたい。」
「何だ？」とジャヴェルは荒々しく尋ねた。

「ちよつと自宅に戻るのを許してほしい。それからあとは君の存分にしてもらおう。」

ジャヴェルは上衣のえりに頤あごを埋め、しばらく黙り込んでいたが、それから前の小窓を開いた。

「御者、」と彼は言った、「オンム・アルメ街七番地へやれ。」

十一 絶対者の動揺

彼らは先方に着くまで一言も口をきかなかつた。

ジャン・ヴァルジャンが望んでいることは何であつたか？ 既にはじめたところをなし終えること、すなわち、コゼットに事情を知らせ、彼女にマリユスの居所を告げ、他の何か有益な注意を与え、またでき得るならば最後の処置を取ることだつた。彼自身のことは、彼一身に關することは、万事終わつていた。彼はジャヴエルに捕えられ、少しも抵抗しなかつた。もし他の者がそういう地位に立つたら、テナルデイエにもらつた綱とこれからはいるべき第一の地牢ちろうの格子窓こうしまどとに、おそらく漠然ばくぜんと思いを馳はせたであらう。しかしミリエル司教に会つて以来ジャン・ヴァルジャンのうちには、あらゆる暴行に対して、あえて言うが自身の生命を害する暴行に対しても、深い敬虔けいけんな躊躇ちゆうちよの情があつたのである。

自殺といふことは、未知の世界に対する一種神秘的な違法行為であり、ある程度まで魂の死を含み得るものであつて、ジャン・ヴァルジャンにはなし得ないことだつた。

オンム・アルメ街の入り口で馬車は止まつた。その街路は非常に狭くて馬車はいれなかつた。ジャヴエルとジャン・ヴァルジャンとは馬車から降りた。

御者は馬車のユトレヒト製ビロードが、被害者の血と加害者の泥どろとで汚点だらけになったことを、「警視様」にうやうやしく申し出た。彼はその事件を殺害だと思っていたのである。そして損害を弁償してもらわなければならぬと言いつ添えた。同時に彼はポケットから手帳を取り出して、「何とか御証明を一行」その上に書いていただきたくないと警視様に願った。

ジャヴェルは御者が差し出してる手帳を退けて言った。

「待ち合わせと馬車代とをいれて全部でいくらほしいのか。」

「七時間と十五分になりますし、」と御者は答えた、「ビロードはま新しかったものですから、警視様、八十フランいただきますでしょう。」

ジャヴェルはポケットからナポレオン金貨を四つ取り出して与え、馬車を返してやった。ジャン・ヴァルジャンはすぐ近くにあるブラン・マントーの衛舎かアルシーヴの衛舎かに、ジャヴェルが自分を徒歩で連れてゆくつもりだろうと思った。

彼らはオンム・アルメ街にはいつて行った。街路はいつものとおり寂然としていた。ジャヴェルはジャン・ヴァルジャンのあとに従った。彼らは七番地に達した。ジャン・ヴァルジャンは門を叩いた。門は開いた。

「よろしい。上つてゆくがいい。」とジャヴエルは言った。

そして妙な表情をし、強^しいて口をきいてるかのようなふうで言い添えた。

「わたしはここで君を待っている。」

ジャン・ヴァルジャンはジャヴエルの顔をながめた。そんなやり方はジャヴエルの平素にも似合わぬことだった。けれども、今ジャヴエルが一種傲^{ごうぜん}然たる信任を彼に置いているとしても、それはおのれの爪^{つめ}の長さだけの自由を鼠^{ねずみ}に与える猫^{ねこ}の信任であるし、またジャン・ヴァルジャンは一身を投げ出して万事を終わろうと決心していたので、別に大して驚くにも当たらないことだった。彼は戸を押し開き、家の中にはいり、もう寝ていて寢床の中から門を開く綱を引いてくれたその門番に、「私だ」と言い残し、階段を上つていった。

二階にきて彼は立ち止まった。あらゆる悲しみの道にも足を休むべき場所がある。階段の上の窓は、揚げ戸窓になつていたが、いっぱい開かれていた。古い家には多く見受けられるとおり、その階段も外から明りが取られていて、街路が見えるようになっていた。ちょうど正面にある街路の光が少し階段に差して灯火^{あかり}の儉約となつていた。

ジャン・ヴァルジャンは息をつくためかあるいはただ機械的にか、その窓から頭を出し

た。そして街路の上に身をかがめてみた。街路は短くて、端から端まで明るく街灯に照らされていた。ジャン・ヴァルジャンは惘然ぼうぜんとして我を忘れた。そこにはもうだれもいなかったのである。

ジャヴェルは立ち去っていた。

十二 祖父

人々からとりあえず安楽椅子あんらくいすの上へのせられたまま身動きもしないで横たわってるマリユスを、バスケットと門番とは客間の中に運んだ。呼ばれた医者は駆けつけてきた。ジルノルマンおぼ伯母は起き上がっていた。

ジルノルマン伯母は驚き恐れて、うろろうろし、両手を握り合わせ、「まあどうしたことだろう、」と口にするきり何にもできなかつた。時とするとまた言い添えた、「何もかも血だらけになる。」それから最初の恐怖がしずまると、彼女の頭にも事情が多少わかつて、「こうなるにきまっている、」という言葉を出させた。それでも彼女は、そういう場合によく口にされる「私が言ったとおりだ」とまでは言わなかつた。

医者の言いつけで、たたみ寝台が一つ安樂椅子のそばに据えられた。医者はマリユスを診察して、脈がまだ続いており、胸には一つも深い傷がなく、唇くちびるのすみの血は鼻孔から出てるものであることを調べ上げた後、彼を平たく寝台の上に寝かし、呼吸を自由にさせるために、上半身を裸にし、枕まくらを与えないで頭が身体と同じ高さに、というよりむしろ多少低くなるようにした。ジルノルマン嬢はマリユスが裸にされるのを見て席をはずした。そして自分の室へやで念珠ねんじゆきとう祈禱しとうを唱えはじめた。

胴体は内部におよぶ傷害を一つも受けていなかった。一弾は紙かみ挟ばさみに勢いをそがれ、横にそれて脇わきにひどい裂傷を与えていたが、それは別に深くはなく、したがって危険なものではなかった。下水道の中を長く通ってきたために、折れた鎖骨はまったく食い違つて、そこに重な損傷があつた。両腕は一面にサーベルを受けていた。顔にはひどい傷は一つもなかった。けれども頭はすっかりめちやくちやになつていた。それらの頭部の傷はどういう結果をきたすであろうか、頭皮だけに止まつてるのだろうか、脳をも侵してきはしないだろうか？ その点がまだ不明だつた。重大な兆候は、それらの傷のために気絶してることであつて、そういう気絶からはついに再びさめないことがよくある。その上彼は出血のために弱りきつていた。ただ帯から下の部分は、防ぼう寨さいにまもられて無事だつた。

バスケットとニコレットとは布を引き裂いて繻帯ほうたいの用意をした。ニコレットはそれを縫い、バスケットはそれを巻いた。綿撒糸めんさんしがないので、医者は一時綿をあてて傷口の出血を止めた。寝台のそばには、外科手術の道具が並べられてるテーブルの上に、三本の蠟燭ろうそくが燃えていた。医者は冷水でマリユスの頬と頭髪とを洗った。桶おけ一杯の水はたちまち赤くなった。門番は手に蠟燭を持ってそれを照らしていた。

医者は悲しげに考え込んでいるらしかった。時々彼は自ら心のうちで試みてる間に自ら答えるように、否定的に頭を振った。医者がひとりでやるその不思議な対話は、病者に對する悪いしるしである。

医者がマリユスの顔をぬぐって、なお閉じたままの眼瞼まぶたに軽く指先をさわった時、その客間の奥の扉とびらが開いて、青ざめた長い顔が現われた。

祖父であった。

二日間の暴動は、ジルノルマン氏をひどく刺激し怒らせ心痛さしていた。前夜彼は一睡もできず、またその一日熱に浮かされていた。晩になると、家中の締まりをよくしろと言いつけながら、早くから床について、疲労のため軽い眠りに入った。

老人の眠りはさめやすいものである。ジルノルマン氏の室へやは客間に接していたので、皆

は用心をしていたが、物音は彼をさましてしまった。彼は扉のすき間から見える光に驚いて、寢床から起き出し、手探りにやってきた。

彼は闖の上に立ち、半ば開いた扉の取っ手に片手をかけ、頭を少し差し出してふらふらさし、身体は経帷子きようかたびらのように白いまっすくな無鬘むひだの寝間着に包まれ、びっくりした様子であった。その姿はあたかも墳墓の中をのぞき込んでる幽霊のようだった。

彼は寢台を見、ふとんの上の青年を見た。青年は血にまみれ、皮膚は蠟ろうのように白く、目は閉じ、口は開き、唇くちびるは青ざめ、帯から上は裸となり、全身まっかな傷でおおわれ、身動きもせず、明るく照らし出されていた。

祖父は頭から足先までその固い五体の許すだけ震え上がり、老年のために目じりが黄色くなつてゐる両眼はガラスのような光におおわれ、顔全体はたちまち骸骨がいこつのそのように土色の角を刻み、両腕は撥条ぼねが切れたようにだらりとたれ下がり、惘然ぼうぜんたる驚きの余りその震えてる年老いた両手の指は一本一本にひろがり、両膝りようひざは前方に角度をなしてごみ、寝間着の開き目から白い毛の逆立ったあわれな膝頭があらわにのぞき出し、そして彼はつぶやいた。

「マリユス！」

「旦那様、」とバスクは言った、「若旦那様は人に運ばれてこられました。防寨に行かれまして、そして……。」

「死んだのだ！」と老人は激しい声で叫んだ、「無頼漢めが！」

その時、墳墓の中の変容もかくやと思われるばかりに、その百歳に近い老人は若者のようにすつくと身を伸ばした。

「あなたは医者ですね。」と彼は言った。「まず一つのことをはつきり言ってもらいたいです。そいつは死んでいるのでしょうか、そうではないですか。」

医者は心痛の余り黙っていた。

ジルノルマン氏は両手をねじ合らしながら、恐ろしい笑いを発した。

「死んでいる、死んでいる。防寨で生命を投げ出したのだ、このわしを恨んで。わしへの面当にそんなことをしたのだ。ああ吸血兎めが！　こんなになってわしの所へ戻ってきたのか。ああ、死んでしまったのか！」

彼は窓の所へ行き、息苦しいかのようにそれをいっぱい開き、そして暗闇の前に立ちながら、街路の方に暗夜に向かって語り始めた。

「突かれ、切られ、喉をえぐられ、屠られ、引き裂かれ、ずたずたに切りさいなまれたの

だ。わかつたか、恥知らずめが！ お前はよく知つてたはずだ、わしがお前を待つていたこと、お前の室へやを整えて置いたこと、お前の小さな子供の時分の写真をいつも寢床の枕まくらに置いていたことも。よく知つてたはずだ、お前はただ帰つてきさえすればよかつた、もう長い年月わしはお前の名を呼んでいた、夕方などどうしていいかわからないで膝ひざに手を置いたまま暖炉のすみにじつとしていた、お前のためにぼんやりしてしまつていた。お前はよく知つてたはずだ、ただ戻つてきさえすればよかつたのだ、私わたくしですと言いさえすればよかつたのだ。お前はこの家の主人となる身だつたのだ。わしは何でもお前の言うことを聞いてやるはずだつたのだ、この老いぼれたばかな祖じいさん父をお前は思うとおりにすることができたのだ。お前はそれをよく知つていながら、『いや、彼は王党だ、彼の所へ行くもんか、』と言つた。そしてお前は防ぼう寨さいに行き、依え怙こじ地に生命を捨ててしまつた。ペリ―公についてわしが言つた事柄の腹癒いせだ。実に不名誉なことだ。だがまあ床について、静かに眠るがいい。ああ死んでしまつた。これがわしの覚めざめ醒だ。」

医者はこんどは両方を心配し出して、ちよつとマリユスのそばを離れ、ジルノルマン氏の所へ行き、その腕を取つた。祖父はふり返り、大きく開いた血走つてるように思われる目で彼をながめ、それでも落ち着いて彼は言つた。

「いやありがとう。わしは何ともない。わしは一個の男子だ。ルイ十六世の死も見てきた。あらゆる事変を経てきた。だがただ一つ恐ろしいことがある。新聞紙が世に害毒を流すのを考えることだ。でたらめ記者、饒舌家、弁護士、弁論家、演壇、論争、進歩、光明、人權、出版の自由、そういうものがあればこそ、子供は皆こういう姿になって家に運ばれて来るのだ。ああマリユス！ 呪うべきことだ。殺されてしまった。わしより先に死んでしまった。防塞、無頼漢！ ドクトル、君はこの辺に住んでるのでしよう。わしは君をよく知っている。君の馬車を通るのをわしはよく窓から見かけた。わしは誓って言う。わしが今怒つてると思つてはまちがいです。死んだ者に対して怒つても仕方がない。それはばかげたことだ。これはわしが自分で育てた子供です。この子がまだごく小さい時、わしはもう老年になつていた。小さな鍬と小さな椅子とを持ってテユイルリーの園でよく遊んでいた。そして番人にしかられないように、わしは杖の先で、彼が鍬で地面に掘った穴をよく埋めてやった。ところが他日、ルイ十八世を打ち倒せと叫んで、出ていってしまった。それはわしの罪ではない。彼は薔薇色の頬をし、金髪であつた。母親はもう亡くなつていた。小さな子供は皆金色の髪をするものだが、なぜでしょう。これはひとりのロアールの無頼漢の子です。だが父親の罪は子供の知つたことではない。わしはこれがほんのこれ

くらいの大きさの時のことを覚えている。まだドという音を言えない時だった。小鳥のようにやさしいわけのわからぬ口をきいていた。ある時ファルネーゼのヘラクレス像の前で、大勢の者が彼を取り巻いて嘆賞したことを、わしは覚えていて。それほどこの子は美しかった。まるで絵に書いたようだった。わしは時々大きい声をすることもあり、杖を振り上げておどかすこともあったが、それもただ戯れであることを彼はよく知っていた。朝わしの室へはいつてくると小言を言ったが、それでもわしにとっては日の光がさしてくるようなものだ。そういう子供に対しては、だれでも無力なものだ。子供はわれわれを奪い、われわれをとらえて、決して放さないものだ。実際この子のようにかわいいものは世になかった。そして今、この子を殺してしまったラファイエット派やバンジヤマン・コンスタン派やテイルキュイル・ド・コルセル派などは、何という奴どもだ！ このままで済ますことはできない。」

やはり身動きもせずに色を失つてるマリユスに彼は近寄って、また両腕をねじ合わせた。医者もマリユスのそばに戻っていた。老人の白い唇は、ほとんど機械的に動いて、臨終の息のように、ようやく聞き取れるかすかな言葉をもらした。「ああ、薄情者、革命党、無法者、虐殺人！」それは死骸に対して瀕死の者がつぶやく非難の声であった。

内心の爆発は常に外に現われなければやまないものである。引き続き言葉は少しずつ出てきたが、しかし祖父にはもうそれを口にするだけの力がないように見えた。彼の声は他界から来るかと思われるほど遠くかすかになつていた。

「それももうわしにとつては同じことだ。わしも間もなく死ぬんだ。ああパリーのうちにも、このあわれな子を喜ばせるだけの女はいなかったのか！ なぜこの世をおもしろく楽しもうとはせず、戦いに行つて畜生のように屠ほぶられてしまったのか。それもだれのため何のためかと言えば、共和のためではないか！ 若い者はシヨームエールにでも行つて踊つてればいいのだ。二十歳といえばめつたにない大事な年齢だ。ろくでもないばかな共和めが！ 世の母親がいくらきれいな子供をこしらえても、皆攫さらつてゆきやがる。ああこの子は死んでしまった。そのためにお前のとわしのと二つの葬式がこの家から出るだろう。お前がそんなことをしたのも、ラマルク將軍の目を喜ばせるためなのか。だがそのラマルク將軍がいつたいお前に何をしてくれたか。猪武者いのししむしやめが、向こう見ずめが！ 死んだ者のために死ぬなんてなんのことだ。これで気が狂わずにいられるか。考えてみるがいい、わずか二十歳で！ そしてあとに残る者のことはふり向いて見ようもしない。このようにして世にあわれな人のいい老人は、ただひとりで死ななければならぬのか。おおただ

ひとりでくたばってしまうのか！ だがとにかくそれで結構だ。わしの望みどおりだ。わしもこれでさっぱり往生するだろう。わしはあまり長生きしてる。もう百歳だ、万々歳だ。長い前から死んでよかったのだ。この打撃で済んだ。もう終わりだ。かえって仕合わせというものだ！ この子にアンモニアを嗅^かがせたりやたらに薬を飲ませたりしても、もう何の役に立とう。ドクトル、もう君がどんなに骨折してもむだですぞ。ねえ、彼は死んでい、まったく死んでい。わしはよくそれを知っている。わし自身も死んでるのだから。

彼は世の中を半分しか知らなかった。ああ今の時代は、汚れてる、汚れてる、汚れてるんだ。時代自身も、思潮も、学説も、指導者も、権威者も、学者も、三文文士も、へぼ思想家も、それから六十年來テユイルリー宮殿^{からす}の鳥の群れを脅かした多くの革命も、皆汚れてるんだ。そしてお前はこんなふう^にに身を殺しながら、わしに対して慈悲の心を持たなかったのだから、わしもお前の死を別に悲しくは思わない。わかったか、人殺しめ！」

ちようどその時マリユスは、静かに眼^{まぶた}瞼を開いた。そしてその目は、まだ昏^{こんすいてき}睡的な驚きにおおわれながら、ジルノルマン氏の上に据えられた。

「マリユス！」と老人は叫んだ、「マリユス、わしの小さなマリユス、わしの子、わしのかわいい子！ 目を開いたか、わしを見てるのか、生きてくれたのか！ ありがたい！」

そして彼は氣を失つて倒れた。

第四編 ジャヴェルの変調

ジャヴェルはゆるやかな足取りでオンム・アルメ街を去っていった。

生涯に始めて頭をたれ、生涯に始めて両手をうしろにまわして、彼は歩いていった。

その日までジャヴェルは、ナポレオンの二つの態度のうち決意を示す方の態度をしか、すなわち胸に両腕を組む態度をしか取ったことはなかった。遅疑を示す方の態度は、すなわち両手をうしろにまわす方の態度は、彼の知らないところだった。しかるに今や一変化が起こっていた。彼の全身には緩慢沈鬱ちんうつの気が漂って、心痛の様さまが現われていた。

彼は静かな街路を選んではいっていった。それでも彼は一定の方向に進んでいた。

彼はセーヌ川に達する最も近い道をたどり、オルム川岸にいで、その川岸通りに沿い、グレーヴを通り越し、そしてシャートレー広場の衛舎からわずか離れた所、ノートル・ダム橋の角かどに立ち止まった。セーヌ川はそこで、一方ノートル・ダム橋とポン・トー・シャンジュの橋とはさまれ、他方メジスリー川岸とフルール川岸とはさまれて、まん

なかに急流を通しながら四角な湖水みたようになっていた。

セーヌ川のその辺は水夫たちが恐れてる場所である。今日はなくなっているが当時は橋の水車の杭くいがあつて、そのために急流が狭められ激せられてはなはだ危険だった。二つの橋が近いので危険はなお大となっている。橋弧の下は激しく水が奔騰している。水は大きな恐ろしい波を立てて逆巻き、そこに集まつてたまり、太い水の綱で橋杭を引き抜こうとしてるかのように打ちつけている。そこに一度陥る者は再び姿を現わすことがなく、最も泳ぎに巧みな者も溺おぼれてしまう。

ジャヴェルは橋の欄干に両りょう 肱ひじをもたせ、頤あごを両手に埋め、濃い口くちひげ 髭ひげを爪先つまききで機械的にひねりながら、考え込んだ。

一つの珍事が、一つの革命が、一つの破滅が、彼の心の底に起こったのである。深く反省すべき問題がそこにあつた。

ジャヴェルは恐ろしい苦悶をいだいていた。

数時間前から既にジャヴェルの考えは単純でなくなっていた。彼の心は乱されていた。その一徹な澄み切った頭脳は、透明さを失っていた。その水晶のごとき澄明さのうちには、一片の雲がかけていた。ジャヴェルは自分の本心のうちに義務が二分したのを感じ、自ら

それをごまかすことができなかつた。セーヌ川の汀で、意外にもジャン・ヴァルジャンに会つた時、彼のうちには、獲物を再びつかんだ狼おおかみのごときものと主人に再びめぐり会つた犬のごときものがあつた。

彼は自分の前に二つの道を見た。両方とも同じようにまっすぐであつたが、とにかく二つであつた。生涯にただ一本の直線しか知らなかつた彼は、それにおびえた。しかも痛心のきわみには、その二つの道は互いに相入れないものだつた。二つの直線は互いに排し合つていた。いずれが眞実のものであつたらうか。

彼の地位は名状し難いものであつた。

悪人のおかげで生命を保ち、その負債を甘受してそれを償却し、心ならずも罪人と同等の位置に立ち、恩に対して他の恩を返すこと、「行け」と言われたのに対してこんどは

「自由の身となれ」と言つてやること、私的な動機からして一般的責務を犠牲にし、しかもその私的な動機のうちにも、同じく一般的なまたおそらく更に優すぐれた何かを感ずること、自分一個の本心に忠実なるため社会に裏切ること、それら種々の不合理が現実^に現われてきて彼の上に積み重なつたので、彼はなすところを知らなかつた。

ジャヴェルを驚かした一事は、ジャン・ヴァルジャンが彼を赦ゆるしたことであり、彼を茫ぼ

然^{うぜん}自失せしめた一事は、彼自らがジャン・ヴァルジャンを赦したことであった。

彼はいかなる所に立っていたのか。彼はおのれをさがしたが、もはやおのれを見いだすことはできなかつた。

今やいかになすべきであつたか？ ジャン・ヴァルジャンを引き渡すは悪いことであり、またジャン・ヴァルジャンを自由の身にさしておくのも悪いことだつた。第一の場合においては、官憲の男が徒刑場の男よりも更に低く墜^おちることであり、第二の場合においては、徒刑囚が法律よりも高く上つて法律を足に踏まえることだつた。二つの場合とも、彼ジャヴェルにとつては不名誉なことであつた。いかなる決心を取つても墜^お墮が伴うのだった。

人の宿命には不可能の上に垂直にそびえてる絶壁があるもので、それから向こうは人生はもはや深^{しんえん}淵にすぎなくなる。ジャヴェルはそういう絶壁の縁の一つに立っていた。

彼の心痛の一つは、考えなければならなくなつたことである。相矛盾するそれらの感情の激しさは、彼をして考えるの余儀なきに至らしめた。思考といふことは、彼がかつて知らなかつたことであつて、何よりも彼を苦しめた。

思考のうちには常に内心の反乱が多少あるもので、彼は自分のうちにそういう反乱を持つてるのにいら立つた。

自分の職務の狭い範囲外に属するいかなる問題に関する思考も、あらゆる場合において彼に取っては、一つの無用事であり一つの退屈事だった。しかし今や過ぎた一日のことを考えると苦しくなった。それでも彼は、そういう打撃の後に自分の本心をのぞき込み、自らおのれをけんかく検覈せざるを得なかった。

彼は自分のなしてきた事柄にせんりつ戦慄した。彼ジャヴエルは、警察のあらゆる規則に反し、社会上および司法上の組織に反し、法典全部に反し、自らよしとして罪人を放免したのである。それは彼一個には至当であった。しかし彼は私事のために公務を犠牲にした。それは何とも名状し難いことではなかったか。自ら犯したその名義の立たない行為に顔を向けるたびごとに、彼は頭から足先までふるえ上がった。いかなる決心を取るべきであるか。今はただ一つの手段きり残っていないかった。急いでオンム・アルメ街に戻りジャン・ヴァルジャンを下獄させること、それこそ明らかに彼がなさなければならぬことだった。しかし彼はなし得なかった。

何かがその方への道を彼にふさいでいた。

何物であるか？ 何であるか？ 法廷や執行文や警察や官憲などより他のものが、世にはあるのであろうか。ジャヴエルは困惑した。

神聖なる徒刑囚、法をもつても裁くことのできない囚人、しかもそれはジャヴェルにとつて現実であつた。

罰を与えるための人間であるジャヴェルと、罰を受くるための人間であるジャン・ヴァルジャンと、互いに法の中にあるそのふたりが、ふたりとも法を超越するに至つたことは、恐るべきことではなかつたか。

いったいどうしたわけであるか。かかる異常事が世に起こるものであろうか、そしてこれも罰を受けないことがあり得るだろうか。ジャン・ヴァルジャンは社会組織全体よりも強力であつて自由の身となり、彼ジャヴェルはなお政府のパンを食い続けてゆく、そういうことがあり得るだろうか。

彼の夢想はしだいに恐ろしくなつてきた。

そういう夢想の間にも彼はなお、フィユー・デュ・カルヴェール街に運ばれた暴徒のことについて、多少の自責を持つはずであつた。しかし彼はそのことを念頭に浮かべなかつた。小さな過失はより大なる過失のうちに消えてしまつた。それにまた、その暴徒は確かに死んでいた。法律上の追跡は死人にまで及ぶものではない。

ジャン・ヴァルジャンという一点こそ、彼の精神を圧する重荷であつた。

ジャン・ヴァルジャンは彼をまったく困惑させた。彼の生涯の支柱だったあらゆる定理はその男の前にくずれてしまった。彼ジャヴェルに対するジャン・ヴァルジャンの寛容は、彼を圧倒してしまった。昔彼が虚偽とし狂愚として取り扱ってきた他の事実も思い出されて、今や現実のものとなつてよみがえってきた。マドレーヌ氏の姿は、ジャン・ヴァルジャンの背後に再び現われ、その二つの姿が重なり合つて一つとなり、崇敬すべきものとなつた。恐ろしい何ものかが、囚人に対する賛嘆の情が、魂のうちに沁み通つてくるのをジャヴェルは感じた。徒刑囚に対する尊敬、そういうことがあり得るであろうか。彼は慄然として、身をささえることができなかつた。いかにもだえても、内心の審判のうちに、おいて、その悪漢の莊嚴さを自白せざるを得なかつた。それは実にたえ難いことであつた。慈善を施す悪人、あわれみの念が強く、やさしく、救助を事とし、寛大で、悪に報ゆるに善をもつてし、憎悪に報ゆるに許容をもつてし、復讐よりも憐愍を取り、敵を滅ぼすよりも身を滅ぼすことを好み、おのれを打つた者を救い、徳の高所にあつてひざまずき、人間よりも天使に近い徒刑囚、そういう怪物が世に存在することを、ジャヴェルは自認するの余儀なきに至つた。

事情はそのまま存続するを得なかつた。

あえて力説するが、あの怪物に、その賤しむべき天使に、その嫌悪すべき英雄に、彼を茫然たらしむるとともに憤激させたその男に、まさしく彼は何ら抵抗することなく屈服したのではなかつた。ジャン・ヴァルジャンと向き合つて馬車の中にいた間に、幾度となく法の虎は彼のうちに咆哮した。幾度となく彼はジャン・ヴァルジャンの上に飛びかかっていた念に駆られた。彼をつかみ彼を食わんとした、すなわち彼を捕縛せんとした。実際それは誠に容易なことだった。衛舎の前を通りかかる時、「これは監視違反の囚人だ」と叫び、憲兵らを呼び、「この男を君たちに引き渡す」と言い、それから自分は立ち去り、罪人をそこに残し、その他のことはいつさいかまわず、自分は少しもそれに関与しなければよかつたのである。ジャン・ヴァルジャンは永久に法律の捕虜となり、法律の欲するままに処理せらるるだろう。それこそ最も正当なことだった。ジャヴェルはそれらのことをひとり考えた。そしてその方向を取り、手を下し、彼をつかもうとした。しかし今それができなくなつたと同じく、その時にもそれができなかつた。ジャン・ヴァルジャンの首筋に向かつて痙攣的に手をあげるたびごとに、その手は非常な重さに圧せられるように再び下にたれた。そして彼は自分に叫びかける一つの声を、異様な声を、頭の奥に聞いた。「よろしい。汝の救い主を引き渡せ。それからポンテオ・ピラト（訳者注 キリストを祭

司の長等に引き渡せしユダヤの太守たらいの盥たらいを取り寄せて汝の手を洗うがいい。」
次に彼の考えは自分自身の上に戻ってきて、壮大となったジャン・ヴァルジャンの傍に、墮落した自身ジャヴェルの姿を見た。

一徒刑囚が彼の恩人だったのである！

しかしまた、何ゆえに彼は自分を生かしておくことをその男に許したのだったか。彼は防寨ぼうさいの中で殺さるべき権利を持つていた。彼はその権利を用うべきだったろう。他の暴徒ら呼んでジャン・ヴァルジャンを妨げ、無理にも銃殺されること、その方がよかつたのである。

彼の最大の苦悶は、确实なものがなくなつたことであつた。彼は自分が根こぎにされたのを感じた。法典ももはや彼の手の中では丸太にすぎなかつた。彼はわけのわからぬ一種の懸念と争わなければならなかつた。その時まで彼の唯一の規矩きくだつた合法的肯定とはまったく異なつた一つの感情的啓示が、彼のうちに起こつてきた。旧もとの公明正大さのうちに止まるだけでは、もう足りなくなつた。意外な一連の事実が突発して、彼を屈服さした。一つの新世界が彼の魂に現われた。すなわち、甘受してまた返してやつた親切、献身、慈悲、寛容、憐愍れんびんから発した峻嚴しゅんげんの毀損きそん、個人性の承認、絶対的裁断の消滅、永劫定

罪の消滅、法律の目における涙の可能、人間に依存する正義とは反対の方向を取る一種の神に依存する正義。彼は暗黒のうちに、いまだ知らなかった道德の太陽が恐ろしく上りゆくのを見た。それは彼をおびえさし、彼を眩惑げんわくさせた。驚わしの目を持つことを強しいられたふくろう梟であつた。

彼は自ら言つた、これも真実なのだ、世には例外がある、官憲も狼狽ろうばいさせられることがある、規則も事実の前に逡巡しゆんじゆんすることがある、万事が法典の明文のうちには当てはまるものではない、意外事は人を服従させる、徒刑囚の徳は役人の徳を賈わなにかからせることもある、怪物が神聖になることもある、宿命のうちにはそういう伏兵もある。そして彼は絶望の念をもつて、自分はそういう奇襲を避けることができなかつたのだと考えた。

彼は親切というものの世に存在することを認めざるを得なかつた。あの囚人は親切であつた。そして彼自身も、不思議なことではあるが、先刻親切な行ないをなしてきた。彼は変性したのであつた。

彼は自分が卑怯ひきようであるのを認めた。彼は自ら恐ろしくなつた。

ジャヴェルの理想は、人間的たることではなく、偉大たることではなく、崇高たることではなかつた。一点の非もないものとなることであつた。

しかるに彼は今や歩を誤っていた。

どうして彼はそうなったのか、どうしてそういうことが起こったのか？ それは彼自身にもわからなかった。彼は両手で頭を押さえ、いかに考えてみても、自らそれを説明することができなかつた。

確かに彼はジャン・ヴァルジャンを再び法律の下に置こうと常に考えていた。ジャン・ヴァルジャンは法律の虜とりこであり、彼ジャヴェルは法律の奴隸どれいであつた。ジャン・ヴァルジャンを手にしてる間、それを放ちやろうという考えを持つてるとは、彼はただの瞬時も自ら認めなかつた。彼の手が開いてジャン・ヴァルジャンを放したのは、ほとんど自ら知らずに行なつたことだつた。

あらゆる種類の謎なぞのような新奇なことが、彼の眼前に現われてきた。彼は自ら問い自ら答えたが、その答はかえつて彼を脅かした。彼は自ら尋ねてみた。「私がほとんど迫害するまでに追求したあの囚徒は、あの絶望の男は、私を足の下に踏まえ、復讐ふくしゅうすることができ、しかも怨恨えんこんのためと身の安全のために復讐するのが至当でありながら、私の生命を助け、私を赦ゆるしたが、それはいったいなぜであつたか。私的な義務といふか。否。義務以上の何かである。そして私もまたこんどは、彼を赦してやったが、それはいったいな

ぜであつたか。私的な義務というか。否。義務以上の何かである。それでは果たして、義務以上の何かがあるのであるか？」そこになつて彼はおびえた。彼の秤はかりははずれてしまつた。一方の皿は深淵しんえんのうちに落ち、一方の皿は天に上がった。そしてジャヴェルは、上にあがつた方と下に落ちた方とに対して、等しく恐怖を感じた。彼はヴォルテール派とか哲人とか不信者とか呼ばれるような人物では少しもなかつた。否かえつて本能から、うち立てられたキリスト教会を尊敬していた。けれどもただ、社会全体のいかめしい一片としてしかそれを知らなかつた。秩序は彼の信条であつて、それだけで彼には充分だつた。成年に達し今の職務について以来、彼は自分の宗教のほとんど全部を警察のうちに置いてしまつた。そして、少しも皮肉ではなく、最もまじめな意味において、彼は前にわれわれが言つたとおり、人が牧師であるごとく探偵たんでいであつた。彼は上官として総監ジスケ氏を持つていた。彼はこの日まで、神という他の上官のことをほとんど考えてみなかつた。

この神という新しい主長を彼は意外にも感得して、そのために心が乱された。

彼はその思いがけないものに当面して困惑した。彼はその上官に対してはどうしていいかわからなかつた。今まで彼が知つていたところでは、部下は常に身をかがむべきものであり、背反し誹謗ひぼうし議論してはいけないものであり、あまりに無茶な上官に対しては辞表

を呈するのほかはなかった。

しかしながら、神に辞表を呈するにはいかにしたらいいであろうか？

またそれはともかくとして、一つの事実がすべての上に顕然としてそびえ、彼の考えは常にその点に戻っていった。すなわち恐るべき違反の罪を犯したという一事であつた。監視違反の再犯囚に対して、彼は目を閉じてきたのだった。ひとりの徒刑囚を放免してきたのだった。法律に属するひとりの男を盗んできたのだった。彼はまさしくそういうことを行なつた。彼はもはや自分自身がわからなくなつた。自分は果たして本来の自分であるか確かでなかつた。自分の行為の理由さえも見失い、ただ眩惑のみが残つていた。彼はその時まで、暗黒なる清廉を生む盲目的な信念にのみ生きていた。しかるに今や、その信念は彼を去り、その清廉は彼になくなつた。彼が信じていたことはすべて消散した。自分の欲しない真実が頑強につきまといつてきた。今後彼は別の人間とならなければならなかつた。突然内障眼の手術を受けた本心の異様な苦痛に悩んだ。見るのを厭つていたものを見た。自己が空しくなり、無用となり、過去の生命から切り離され、罷免され、崩壊されたのを、彼は感じた。官憲は彼のうちに死滅した。彼はもはや存在の理由を持たなかつた。かき乱されたる地位こそは恐るべきものである。

花崗岩かこうがんのごとき心であつて、しかも疑念をいなく。法の鑄型の中で全部鑄上げられた

懲戒の像であつて、しかもその青銅の胸の中に、ほとんど心臓にも似たる不条理不従順なるある物を突然に認める。その日まで悪だと思つていたものが善となり、その善に対して善を報いなければならなくなる。番犬であつて、しかも敵の手を舐なめる。氷であつて、しかも溶解する。釘くぎぬ抜きであつて、しかも普通の手となる。突然に指が開くのを感じる。つかんだ獲物を放つ。それは実に恐怖すべきことである。

もはや進むべき道を知らずして後退する一個の人間の鉄砲弾であつた。

自ら次のことを認めざるを得ないとは何たることであろう！ すなわち、無むびゆう謬なるもの必ずしも無謬ではない。信条のうちにも誤謬があり得る。法典はすべてを説きつくすものではない。社会は完全ではない。官憲も動揺することがある。動かすべからざるものうちに割れ目のできることがある。裁判官も人間である。法律も誤ることがある。法廷も誤認することがある。大空の広大なる青ガラスにも亀裂が見らるるのか？

ジャヴェルのうちに起こつたことは、直線的な心の撓とうきよく曲まがであり、魂の脱線であり、不可抗の力をもつてまっすぐに突進し神に当たつて碎け散る、清廉の崩壊であつた。確かにそれは異常なことだつた。秩序の火夫が、官憲の機関車が、軌道を走る盲目なる鉄馬に

またがつて進みながら、光明の一撃を受けて落馬したのである。変更を許さざるもの、直接なるもの、正規なるもの、幾何学的なるもの、受動的なるもの、完全なるものが、撓たわんだのである。機関車に対してもダマスクスの道があつたのである。（訳者注 聖パウロのある伝説に由来し、突然内心の光輝によつて心機一転することをダマスクスの道という）常に人の内部にあつて真の良心となり虚偽に反発する神、閃せん光こうをして消滅することを得ざらしむる禁令、光輝をして太陽を記憶せしむるの命令、魂をして虚構の絶対とそれに接する真の絶対とを見分けしむるの訓令、死滅せざる人間性、滅落せざる人心、そういう燦さん然ぜんたる現象を、おそらく人間の内部の最も美うつくわしい不可思議を、ジャヴェルは知つたであろうか。ジャヴェルはそれを見通したであろうか。ジャヴェルはそれを了解したであろうか。否々。しかしながら、その不可解にして明白なるものの圧力の下に、彼は自分の頭脳が少しく開けるのを感じた。

彼はその異変のために面目を一新した、というよりもむしろその犠牲となつた。彼は憤激しながらそれに打たれた。彼がその中に見たところのものは、存立の大なる困難のみだつた。爾来じらい永久に呼吸を妨げられるような心地がした。

頭の上に未知のものを持つこと、それに彼はなれていなかった。

それまで自分の上に持つてたところのものは、明確単純清澄な表面であるように彼の目には見えていた。そこには、何ら未知のものもなく暗黒なものもなかった。規定されたもの、整理されたもの、鎖につき止められたもの、簡明なるもの、正確なるもの、範囲の定められたるもの、限定されたるもの、閉鎖されたるもの、ばかりであった。すべて予見されたるものであった。官憲は一つの平坦なるものであった。その中には何らの墜落もなく、それに対しては何らの眩惑げんわくもなかった。ジャヴェルが今まで未知の物を見てきたのは、ただ下方においてのみだった。不規律、意想外、渾沌界こんとんかいの錯雑した入り口、いつすべり落ちるかもわからない深淵しんえん、そういうものは、賊徒や悪人や罪人などのすべて下層地帯に存在していた。しかるに今ジャヴェルはあおむけに転倒し、異様な妖怪すなわち上方の深淵を見て、にわかに狼狽ろうばいした。

どうしたことであろう、徹頭徹尾突きくずされ、絶対に失調させられるとは！ およそ何に信頼したらいいか。確信していたものが崩壊してしまうとは！

社会の鑑よらいの欠陥が寛厚なる一罪人によって見いだされ得るのか。法律の正直なる僕しもべが、ひとりの男を放免するの罪とそれを捕縛するの罪との二つの罪の間に、突然板ばさみになることがあり得るのか。国家が役人に与える訓令のうちにも、不確かなるものがあるのか。

義務のうちにも行き止まりがあるものなのか。ああそれらはすべて実際のことだったのか。刑罰の下に屈している昔の悪漢がすつくと立ち上がってついに正当となることがあるのも、真実だったのか。そんなことが信じ得られようか。それでは、法律も変容した罪惡の前に宥免を乞いながら退かなければならないような場合が、世にはあるのか。

そうだ、それは事実であった。ジャヴエルはそれを見、それに触れた。ただにそれを否定し得なかつたばかりでなく、自らその渦中のひとりであった。それはまさしく現実であつた。現実がかかる異様な姿になり得るとは、実に呪うべきことだつた。

もし事実がその本分を守るならば、必ずや事実は法を証明することをしかしなないであろう。なぜならば、事実を世に送るものは神であるから。しかるに今や、無政府主義までが天からおりてこようとするのか。

かくて、ますます加わってくる煩悶のうちに、茫然自失した幻覺のうちに、ジャヴエルの感銘を押さえ止め訂正するすべてのものは消えうせ、社会も人類も宇宙も皆、彼の目には爾来ただ単に忌まわしいだけの姿となつて映じた。そして、刑法、判決、至当なる立法の力、終審裁判所の決定、司法官職、政府、嫌疑と抑圧、官省の知恵、法律の無謬、官憲の原則、政治的および個人的安寧が立脚するあらゆる信条、国王の大権、正義、法典

から発する理論、社会の絶対権、公の真理、すべてそれらのものは、破片となり塵芥じんがいとなり渾沌こんとんたるものとなつてしまつた。秩序の監視人であり、警察の厳正な僕しもべであり、社会を保護する番犬である、彼ジャヴェル自身も、打ち負かされてしまつた。そしてそれらの廢墟の上に、緑の帽を頭にかぶり円光を額にいただいてるひとりの男が立っていた。彼が陥つた惑乱はそういうものであり、彼が魂のうちに持つた恐るべき幻はそういうものであつた。

それはたえ得ることであつたらうか。否。

きびしい状態があるとすれば、それこそまさにきびしい状態であつた。それから脱する道は二つしかなかつた。一つは、決然としてジャン・ヴァルジャンに向かつて進んでゆき、徒刑囚たる彼を地牢ちろうに返納すること。今一つは……。

ジャヴェルは橋の胸壁を離れ、こんどは頭をもたげて、シャートレー広場の片すみにともつてる軒灯で示されている衛舎の方へ、確乎かっこたる足取りで進んでいった。

そこまで行つて彼は、ひとりの巡查が中にいるのをガラス戸から認め、自分もはいつていった。衛舎の扉とびらのあけ方だけでも、警察の者らは互いにそれと知り得るのである。ジャヴェルは自分の名前を告げ、名刺を巡查に示し、それから一本の蠟燭ろうそくがともつてるそ

のテーブルの前にすわった。テーブルの上には、一本のペンと、鉛のインキ壺つぼと、少しの紙とがのつていた。不時の調書や夜間巡邏じゅんらの訓令などのために備えてあるものだった。

いつも一個の藁椅子わらいすがついてるそのテーブルは、規定の品である。いずれの分署にも備えてある。そして必ず、鋸屑のこくずがいつぱいはいつてる黄楊つげの平皿と、赤い封蝋ろうがいつぱいはいつてるボール箱とが上にのつている。それは官省ふうの最下級をなすものである。国家の文学はまずそこで始まる。

ジャヴェルはペンと一枚の紙とを取つて、書き始めた。彼が書いた文句は次のとおりだった。

職務上の注意事項

- 一、警視総監閣下いちべつの一警せられんことを願う。
- 二、予審廷より来る囚徒らは、身体検査中、靴くつを脱ぎはだし跣足はだしのまま舗石しきいしの上に佇ちより立つ。監獄せきに戻るにおよんで多くは咳せきを発す。ために病舎の費用を増すに至る。
- 三、製糸監は、所々に警官の配置あるをもつてはなはだよろし。しかれども、重大なる場合のために、少なくともふたりの警官は互いに見得る位置を保つ要あるべし。

かくせば、もし何らかの理由によって、ひとりが務めを怠ることありとも、他のひとりがそれを監視し補足するを得ん。

四、マドロネット監獄においては、たとい金を払うも囚徒に椅子いすを与えざる特殊の規則あれど、その何ゆえなるやを解する能あたわず。

五、マドロネットにおいては、酒保の窓に二本の鉄棒あるのみ。これ酒保をして、囚徒に手を触るるを得せしむるものなり。

六、呼び出し人と普通に称せられて他の囚徒らを面会所に呼ぶの用をなす囚徒は、名前を声高に叫ぶごとに当人より二スーずつ徴発す。これ一つの奪取なり。

七、一筋の糸のたれたるものあれば、該囚徒は織物工場において十スーずつ賃金を差し引かる。これ請け負い者の弊風なり。織物はそのために粗悪となるものに非ざればなり。

八、フォルス監獄を訪れる者が、サント・マリー・レジプシエンヌ面会所に至るために、必ず「小僧の中庭」を通るは、憂慮すべきことなり。

九、毎日憲兵らが、警視庁の中庭において、司法官らの行なえる尋問を語り合うは、確かなる事実なり。神聖なるべき憲兵が、予審廷にて聞けることを繰り返し語るは、

風紀の重大なる紊乱びんらんなり。

十、アンリー夫人は正直なる女にして、その酒保はきわめて清潔なり。しかれども、秘密監の罾わなの口をひとりの女が握るは、よきことに非あらず。そは大文明の附属監獄にとりて恥はずべきことなり。

ジャヴェルは一つの句読点をも略さず、紙に確かなペンの音を立てながら、最も冷静正確な手跡で、右の各行をしたためた。そして最後の行の次に署名をした。

一等警視　　ジャヴェル

シャートレー広場の分署において

一八三二年六月七日午前一時頃

ジャヴェルは紙の上の新しいインキをかわかし、紙を手紙のように折り、それに封をし、裏に「制度に関する覚え書き」としたため、それをテーブルの上に残し置き、そして衛舎

から出て行つた。鉄格子てつこうしのはまつてるガラス戸は彼の背後に閉ざされた。

彼はシャートレー広場を再び斜めに横ぎり、川岸通りにいで、ほとんど自動機械のような正確さで、十五、六分前に去つた同じ場所へ戻つてきた。彼はそこに肱ひじをつき、胸壁の同じ石の上に同じ態度で身を休めた。前の時から身を動かしたとは思えないほどだった。

一点のすき間もない闇やみだった。ま夜中に引き続き墳墓のような時間だった。雲の天井が星を隠していた。空には凄惨せいさんな気が深くよどんでいた。シテ島の人家にももう一点の光も見えなかつた。通りかかる者もなかつた。街路も川岸通りも、見える限り寂然せきぜんとしていた。ノートル・ダームの堂宇と裁判所の塔とが、暗夜のひな形のように見えていた。一つの街灯の光が川岸縁を赤く染めていた。多くの橋の姿は、靄もやの中に相重なつてぼかされていた。川の水は雨のために増していた。

読者の記憶するとおり、ジャヴェルがよりかかつてるその場所は、ちようどセーヌ川の急流の上であつて、無限の螺旋らせんのように解けてはまた結ばるる恐るべき水の渦巻うずまきを眼下にしていた。

ジャヴェルは頭をかがめてながめ入つた。すべてはまっくらで、何物も見分けられなかつた。泡立あわだつ激流の音は聞こえていたが、川の面は見えなかつた。おりおり、目が眩くらむば

かりのその深みの中に、一条の明るみが現われて茫漠たるうねりをなした。水には一種の力があつて、最も深い闇夜のうちにも、どこからともなく光を取ってきてそれを蛇の形になすものである。が、再びその明るみも消え、すべてはまたおぼろになった。広大無限なるものがそこに口を開いてるかと思われた。下にあるものは水ではなく、深淵である。川岸の壁は、切り立ち、入り組み、霧にぼかさされ、たちまちに隠れて、無窮なるもの懸崖のようだった。

何物も見えなかつたが、水の敵意ある冷たさとぬれた石の無味なおいとは感ぜられた。荒々しい息吹がその淵から立ち上つていた。目には見えないがそれと知らるる増水、波の悲壮なささやき、橋弧の気味悪い大きさ、頭に浮かんでくるその陰惨な空洞中への墜落、すべてそれらの暗影は人を慄然たらしむるものに満たされていた。

ジャヴェルはその暗黒の口をながめながら、しばらくじっとたたずんでいた。専心に似た注視で目に見えないものを見守つていた。水は音を立てて流れていた。すると突然、彼は帽子をぬぎ、それを川岸縁に置いた。一瞬間の後には、帰りおくれた通行人が遠くから見たならば幽霊と思つたかも知れないような黒い高い人影が、胸壁の上にすつくと立ち現われ、セーヌ川の方へ身をかがめ、それからまた直立して、暗黒の中にまっすぐに落ちて

いった。鈍い水音が聞こえた。そして水中に没したその暗い姿の瘡^{けい}癩^{れん}の秘密は、ただ影のみが知るところだった。

第五編 孫と祖父

一 亜鉛の張られたる樹木再び現わる

上に述べきたつた事件より少し後、ブーラトリユエルはひどく心を動かされた。

ブーラトリユエルというのは、あのモンフェルメイユの道路工夫で、本書の暗黒なる場面において読者が既に瞥見した男である。

読者はたぶん記憶してゐるだろうが、ブーラトリユエルは種々の怪しい仕事をやっていた。石割りをしながらも、大道で旅客の持ち物を強奪していた。土方でかつ盗賊でありながら、一つの夢想をいだいていた。彼はモンフェルメイユの森の中に埋められてるといふ宝のこゝとを信じていた。いつかはある木の根本の地中に金を見いだしてやるつもりでいた。そして、それまでは通行人のポケットの金に好んで目をつけていた。

けれども当座の間は彼も謹慎していた。彼はわずかに身を脱したのだった。読者の知る

とおり、彼はジョンドレットの陋屋ろうおくの中で、他の悪漢らとともに捕縛された。ところが、悪徳も時には役に立つもので、泥酔のために助かった。彼がそこに盗賊としていたのかもしくは被害者としていたのか、どうしてもわからなかった。待ち伏せの晩泥酔していたことが証明されたので、免訴の申し渡しによつて、自由の身となった。彼はまた森の中に逃げ込んだ。彼はガンエーからランニーへ至る道路工事に立ち戻り、政府の監視の下に、国家のために道路の手入れをなし、しおれた顔つきをし、ひどく鬱ふさきこみ、危うく身を滅ぼさんとした悪事に対してもだいぶ熱がさめていた。しかし身を救ってくれた酒に対しては、いつそうの愛着をもつて親しんでいた。

道路工夫の藁小屋わらしやに戻つて間もなく、彼がひどく心を動かされたことというのは、次のような事柄だった。

ある朝まだ日の出より少し前の頃、ブーラトリユエルはいつものとおり仕事に、またおそらくは待ち伏せに出かけたが、その途中で、樹木の枝葉の間にひとりの男を認めた。彼はそのうしろ姿を見ただけだったが、遠方から薄ら明りの中にながめた所では、かつこうにどうやら見覚えがあるような気がした。ブーラトリユエルは酒飲みではあったが、正確めいせきな記憶力を持つていた。そういう記憶力は、法律的方面と多少の争いをしてる者に

とつては、欠くべからざる護身の武器である。

「あの男は見かけたような奴だが、はてな？」と彼は自ら尋ねてみた。

しかし、頭の中にぼんやり残つてゐるだれかにその男が似てるといふだけで、そのほかは何にも自ら答えることができなかった。

それでもブーラトリユエルは、それをだれとはつきりきめることはできなかったが、種々考え合わせ推測してみた。男は土地の者ではない。どこからかやってきた者に相違ない。明らかに徒歩できたのである。今時分モンフェルメイユを通る客馬車は一つもない。男は夜通し歩いたに違いない。それではいったいどこからきたのだろうか？ 遠方からではない。旅りよのう囊も包みも持つていないのを見てもわかる。きつとパリーからきたのであろう。ところで、なぜこの森の中に来たのか、なぜこんな時刻にきたのか、何をしにきたのか？

ブーラトリユエルは宝のことを考えた。それから記憶をたどっていると、既に数年前、ある男のことで同じように心をひかれたことがあつたのを、ぼんやり思い出した。どうもその男と同一人であるように考えられた。

そんなことを考えふけりながら、自分の瞑めい想そうの重みの下に、彼は頭を下げていた。それは自然のことではあるが、あまり上手なやり方ではなかった。彼が頭を上げた時、もう

そこにはだれもいなかった。男は森と薄暗がりの中に消えてしまっていた。

「畜生め、」とブーラトリユエルは言った、「今一度見つけ出してやらあ。どこの奴かさがし出してやらあ。うろついでる盗賊め、何かわけがあるに違いねえ。嗅ぎ出してやるぞ。この森の中で、俺に内密で仕事をしようたって、やれるものか。」

彼は鋭く上がった鶴嘴を取り上げた。

「さあ、」と彼はつぶやいた、「これで地面でも人間でもさがせる。」

そして糸と糸をつなぎ合わせてゆくように、男がたどったと思われる道筋にできるだけよく従いながら、彼は木立ちの中を進み始めた。

大またに百歩ばかり進んだ頃、上りかける太陽の光の助けを得た。所々砂の上についてる足跡、踏みにじられた草、押し分けられた灌木、目をさまししながら伸びをする美人の腕のようなやさしいゆるやかさで、茂みの中に身を起こしつつある曲げられた若枝、そういうものが彼に道筋を示してくれた。彼はそれに従っていった。それからそれを見失った。時は過ぎていった。彼は森の中に深くはいり込んだ。そして一種の高所に達した。ギーユリーの歌の節を口笛で吹きながら遠くの小道を通ってゆく朝の獵人をひとり見て、彼は木へ登ってみようと思いついた。年は取っていたがなかなか敏捷だった。ちようどそこ

には、チチルス（訳者注 櫛の木の下に横たわつてゐる瞑想的な羊飼ひ——ヴィルギリウス
の詩）とブーラトリユエルとにふさわしい櫛ぶなの大木が一本あつた。ブーラトリユエルはで
きるだけ高くその櫛に登つた。

それはいい思いつきだつた。木立ちが入り組んで森が深くなつてゐる寂せき然ぜんたる方面をな
がめ回すと、突然男の姿が見えた。

しかし男は、見えたかと思ふまにまた隠れてしまつた。

男は大木の茂みにおおい隠されてゐるかなり向こうの開けた場所へ、はいり込んだ、とい
うよりもむしろすべり込んだのである。しかしブーラトリユエルはその開けた場所をよく
知つていて、そこには白うすいし石がうずたかく積んであり、そのそばに、亜鉛トタン板いたを樹皮へじ
かに打ち付けてある枯れかかつた栗くりの木が一本あるのを、よく見ておいた。その開けた場
所は、ブラリュの地所と昔言われた所だつた。積まれた石は何にするためのものかわから
なかつたが、三十年前までは確かにそのまま残つていた。今日もまだたぶんそこにあるだ
ろう。板いた塀べいがいくら長くもつと言つても、およそ石の積んだのくらい長くもつものはな
い。ところがそこには一時のものでたくさんで、長くもたせなければならぬような理由
は一つもなかつたのである。

ブラトリユエルは喜びの余り大急ぎで、木からおりた、というよりむしろ落ちた。穴は見つかった。今は獸を捕えるだけだった。夢みていたあのたいへんな宝は、たぶんそこにあるに違いなかった。

しかしその開けた場所まで行くのは、そう容易なことではなかった。無数の稲妻形の意地悪く曲がりくねってる知った小道から行けば、十五分くらいは充分かかるのだった。一直線に進んでゆくには、木の茂みがその辺はことに厚く、荆棘いばらが深く強くて、三十分はたつぷりかかるのだった。ブラトリユエルはこの点を思い誤った。彼は一直線の方を信じた。一直線ということは、尊むべき幻覚ではあるが、往々人を誤らせることが多い。茂みが深く交差していたが、ブラトリユエルはそれを最善の道のように思った。

「狼おおかみの大通りから行ってやれ。」と彼は言った。

ブラトリユエルはいつも斜めな道を取るになれていて、こんどだけまっすぐな道を歩くのは誤りだった。

彼は思い切つて、入り乱れた藪やぶの中につき進んだ。

柀ひいらぎや蕁いらぐさ麻さんざしや山査子のぼらや野薔薇あざみや薊いばらや気短かな茨いばらなどと戦わなければならなかった。非常な搔傷そうしやうを受けた。

低地の底では水たまりに出会って、それを渡らなければならなかった。

彼はついに四十分ばかりの後、ブラリュの空地へたどりついた。汗を流し、着物をぬらし、息を切らし、肉を引き裂かれ、恐ろしい姿になっていた。

空地にはだれもいなかった。

ブーラトリユエルは石の積んである所へ走り寄った。石は元のとおりだった。動かされた跡はなかった。

男の方は、森の中に消えうせていた。逃げてしまっていた。どこへ、どの方面へ、どの茂みの中へか？ それを察知することはまったくできなかった。

しかも遺憾きわまることには、石の積んであるうしろに、亜鉛の張つてある木の前に、掘り返したばかりの新しい土があり、忘れられたか捨てられたかした鶴嘴つるはしが一つあり、また穴が一つあった。

穴は空からだった。

「泥坊どろぼうめ！」とブーラトリユエルは地平線に向かって両の拳こぶしを振り上げながら叫んだ。

二 マリユス国内戦よりいでて家庭戦の準備をなす

マリユスは長い間死んでるのか生きてるのかわからない状態にあった。数週間熱が続き、それに伴って意識の昏迷こんめいをきたし、また、傷そのものよりもむしろ頭部の傷の刺激から来るかなり危険な脳症の徴候を示していた。

彼は最初のうち幾晩も、熱に浮かされた痛ましい饒舌じょうぜつになり、妙に執拗しつような苦悩のうち、コゼットの名を呼び続けた。二、三の大きな傷はことに危険なものだった。大きな傷口の膿のうは常に内部へ吸収されがちなもので、その結果、大気のある影響を受けて患者を殺すことがある。それで天気の変化するごとに、わずかの暴風雨にも、医者は心配していた。「何よりもまず病人の気をいら立たせてはいけません、」と彼は繰り返し言っていた。絆創膏ばんそうこうでガーゼや繃帶ほうたいを止める仕方は当時まだ見いだされていなかったたので、手当ては複雑で困難だった。ニコレットは敷き布を一枚ほごして綿撒糸めんさんしを作った。「天井ほどの大きな敷き布」と彼女は言っていた。塩化洗滌薬えんかせんじょうやくと硝酸銀とを腐蝕部の奥まで達せさせるのも、容易なことではなかった。危険の間、ジルノルマン氏は孫の枕頭まくらもとにつき添いながら惘然ぼうぜんとして、マリユスと同様に死んでるのか生きてるのかわからなかった。

毎日、時によると一日に二度も、門番の言うところによるとごくりっぱな服装の白髪の紳士が、病人の様子を尋ねにきて、手当てのためと言って綿撒糸めんさんしの大きな包みを置いていった。

ついに九月の七日、瀕死ひんしのマリユスが祖父の家に運ばれてきた悲しい夜から満三カ月たった時、医者はその生命を保証すると明言した。回復期がやってきた。けれどもなお彼は、鎖骨の挫折ざせつからくる容態のために、二カ月余りも長椅子ながいすの上に身を横たえていなければならなかった。いつまでも口のふさがらない傷が残って、手当てを長引かし、病人をひどく退屈たいくつがらせることがよくある。

しかし、その長い病と長い回復期とのために、彼は官憲の追求を免れた。フランスにおいてはいかなる激怒おこりも、公おおやけの激怒でさえ、六カ月もたてば消えてしまう。それに当時の社会状態にあつては、暴動はだれでもしやすすい過失であつて、それに対してはある程度まで目を閉じてやらなければならなかった。

なおその上、ジスケの無茶な命令は、負傷者を申し出るように医者に強しいて、輿論よろんを激げ昂つこさし、また輿論のみでなく第一に国王をも激昂つこしたので、負傷者らはその激昂のために隠匿かくされ保護された。そして軍法会議では、戦争中に捕虜となつた者のほかは、いつ

さい不問に付することに決した。それでマリユスは無事のままでいることができた。

ジルノルマン氏は最初あらゆる心痛を経て、次にあらゆる狂喜を感じた。每晚負傷者の傍そばで夜を明かすのをやめさすのは、非常な骨折りだった。彼はマリユスの寝台のそばに自分の大きな肱掛ひしかけ椅子いすを持ってこさした。圧定布や繃帯を作るためには家にある最上の布を使うように娘に言いつけた。けれどもジルノルマン嬢は、年取った伶俐りこうな女だったので、老人の命に従うように見せかけながら、最上の布は皆しまっておいた。綿撒糸めんざんしを作るにはバチスト織りの布よりも粗悪な布の方がよく、新しい布よりも擦すり切れた布の方がよいということをも、ジルノルマン氏はどうしても承認しなかった。手当ての時には、ジルノルマン嬢は謹つつしんで席をはずしたが、ジルノルマン氏はいつもそこについていた。鋏はさみで死肉を切り取る時、彼はいつも自ら「いた、いたい！」とうめいていた。震えを帯びてる老衰した姿で病人に煎藥せんやくの茶碗ちやわんを差し出してる所は、見るも痛ましいほどだった。彼はやたらにいろんなことを医者に尋ねた。そしていつも同じ質問を繰り返してることに自ら気づかなかつた。

マリユスがもう危険状態を脱したと医者から告げられた日、老人は常識を失った。彼は門番に慰勞としてルイ金貨を三つ与えた。その晩自分の室へやに退くと、親指と人差し指とで

カスタネットの調子を取つて、ガヴオットを踊り、次のような歌を歌つた。

ジャンヌの生まれはフーゼール、

羊飼いのまことの巢。

われは愛す、その裳衣、

すね者。

愛は彼女のうちに生く。

彼女の瞳ひとみのうちにこそ、

愛は置きぬ、その矢筒、

やたら者。

われは彼女を歌にせん。

ディアナよりもなおいとし、

わがジャンヌとその乳房ちぶさ、

ちから者。

それから彼は椅子いすの上にひざまずいた。少し開いてる扉しびらのすきから彼の様子を注意していたバスクは、たしかに彼が祈りをしているのだと思った。

その時まで、彼はほとんど神を信じていなかったのである。

マリユスの容態がますますよくなってゆくごとに、祖父は狂わんばかりになった。やたらにうれしげな機械的な行動をした。自分でなぜともわからずに階段を上ったり下ったりした。隣に住んでたひとりの美しい婦人は、ある朝大きな花輪を受け取って茫然ぼうぜんとした。それを贈ったのはジルノルマン氏だった。そのため彼女が夫から疑られませんでした。ジルノルマン氏はニコレットひせを膝ひざに抱き上げようとした。マリユスを男爵殿と呼んだ。「共和万歳！」と叫ぶこともあった。

彼は始終医者いしやに尋ねた、「もう危険はないでしょうね。」彼は祖母のような目つきでマリユスをながめた。マリユスが物を食べる時はそれから目を離さなかった。彼はもう自分を忘れ、自分を眼中まなこに置いていなかった。マリユスが一家の主人となっていた。彼は喜びの余り自分の地位を譲り与え、孫に対して自分の方が孫となっていた。

そういう喜悦のうちにあつて、彼は最も尊むべき子供となつていた。癒りなほかかつた病人を疲らしたりわずらわしたりすることを恐れて、ほほえみかける時でさえそのうしろにまわつた。彼は満足で、愉快で、有頂天で、麗しく、若々しくなつた。その白髪は、顔に現われてる喜びの輝きに、一種のやさしい威厳を添えた。高雅な趣が顔の皺しわといつしよになる時には、いかにも景慕すべきものとなる。花を開いた老年のうちには言い知れぬあけぼの曙の氣がある。

マリユスの方は、人々に包帯をさせ看護をさせながら、コゼットという一つの固定した観念をいだいていた。

熱と昏迷こんめいとが去つて以来、彼はもうその名前を口にせず、あるいはもうそのことを考へていないのかとも思われた。しかし彼が黙つていたのは、まさしく彼の魂がそこに行つてゐるからだつた。

彼はコゼットがどうなつたか少しも知らなかつた。シャンヴルリー街の事件はただ一片の雲のように記憶の中に漂つていた。エポニーヌやガヴローシユやマブーフやテナルディエ一家の者や、防寨ぼうさいの硝煙にもものすごく包まれてる友人らなどは、皆ほとんど見分けのつかないほどの影となつて彼の脳裏に浮かんでいた。その血まみれの事件のうちに不思議

にもフォーシユルヴァン氏が現われたことは、暴風雨中の謎なぞのように彼には思えた。自分の生命については彼は何にもわからなかった。どうしてまただれから救われたのか少しも知らなかった。周囲の人々にもそれを知つてゐる者はなかった。周囲の人々から彼が聞き得たことは、辻馬車つじばしやに乗せられて夜中にフィーユ・デュ・カルヴェール街に運ばれてきたということだけだった。過去も現在も未来も、すべては彼にとって漠然ぼくぜんたる觀念もやの霧もやにすぎなかつた。しかしその霧の中に、不動な一点が、明確な一つの形が、花崗岩かこうがんでできてるようなある物が、一つの決意が、一つの意志が、存在していた。すなわち再びコゼツトに会うことだった。彼にとつては、生命の觀念とコゼツトの觀念とは別々のものではなかつた。彼は心のうちで、その一方だけを受け取ることはすまいと決していた。だれでも自分を生きさせようと望む者には、祖父にも運命にも地獄にも、消えうせたエデンの園を戻すように要求してやろうと、決心の臍ほそを固めていた。

それに対する障害は、彼も自らよく認めていた。

特に一事をここに力説しておくが、祖父のあらゆる親切や慈愛も、彼の心を奪うことは少しもできず、彼の心を和らげることはあまりできなかつた。第一、彼はすべてのことをよく知つていながつた。次に、まだおそらく熱に浮かされてる病床の夢想のうちに彼は、

自分を懐柔しようとする変な新しい試みと見做して、祖父のやさしい態度を信じなかった。彼は冷淡にしていた。祖父はそのあわれな老いた微笑を空しく費やすのみだった。マリユスはこう考えていた。自分が何にも口をきかずなされるままにしている間だけ、祖父も穏やかにしているのだ、しかし問題が一度コゼットのことにおよんだなら、祖父の顔は一変し、その真の態度が仮面をぬいで現われて来るに違いない。その時こそきびしいことが起こってくる、家庭問題の再発、身分の相違、一度に出てくるあらゆる嘲弄や異議、フオーシユルヴァンとかまたはクープルヴァン、財産、貧乏、困窮、首につけた石、将来、などということが。そして激しい反対と、結局の拒絶。かく考えてマリユスはあらかじめ心を固めていた。

それからなお、生命を回復するにしたがつて、心の古い痛みはまた現われてき、記憶の古傷はまた口を開いてきた。彼は再び過去のことを思いやった。ポンメルシー大佐は再びジルノルマン氏と彼マリユスとの間につつ立った。自分の父に対してあれほど不正で酷薄であった人から、何ら真の好意が望まれるものではないと彼は考えた。そして健康とともに、祖父に対する一種の頑固さが彼に戻ってきた。そのために老人はやさしく心を痛めた。ジルノルマン氏は少しも様子に現わしはしなかったが、マリユスが家に運ばれてきて以

来、意識を回復して以来、一度も自分を父と呼んだことのないのを、深く心にとめていた。もとよりマリユスは他人らしい敬称で彼を呼びはしなかった。しかしその父という語もまたは敬称をも使わないように、一種の言い回し方をしていた。

危機は明らかに近づいてきた。

かかる場合にいつもあるとおり、マリユスはまず試みのために、いよいよ戦端を開く前に斥候戦をやってみた。いわゆる瀬踏せがみである。ある朝偶然にも、ジルノルマン氏は手にした新聞のことから、国約議会のことを少し論じ、ダントンやサン・ジュストやロベスピエールに対して王党らしい嘲りあざけの口吻こうふんをもらした。すると、「九十三年に働いた人々は皆大人物です、」とマリユスはいかめしく言った。老人は口を噤つぶんでしまって、その日は終日一言も発しなかった。

マリユスは一步も譲ることをしない往年の祖父をいつも頭に置いていたので、その沈黙を深い憤怒の集中だと思ひ、それから激しい論争が起ることを予期し、頭の奥で戦いの準備をますます固めた。

彼は心にきめていた、もし拒絶される場合には、包帯を破りすて、鎖骨をはずし、残つてゐる傷をなまなましくむき出し、いつさい食物を取るまいと。傷はすなわち戦いの武器だ

った。コゼットを得るかもしくは死ぬ、と彼は決心していた。

彼は病人の狡猾こうかつな忍耐で好機会を待つていた。

その機会は到来した。

三 マリユス攻勢を取る

ある日ジルノルマン氏は、戸棚の大理石板の上に壇びんやコップを娘が片づけてる時、マリユスの上に身をかがめて、最もやさしい調子で彼に言った。

「ねえマリユス、わしがもしお前だったら、もう魚さかなより肉の方を食べるがね。比目魚ひらめのフライも回復期のはじめには結構だが、病人が立って歩けるようになるには、上等の脇肉わきにくを食べるに限るよ。」

マリユスはもうほとんど体力をすべて回復していたが、更にその力を集中して、そこに半身を起こし、握りしめた両の拳こぶしを敷き布の上につき、祖父の顔をまともにじつとながめ、恐ろしい様子をして言った。

「そうおっしゃれば一つ申したいことがあります。」

「何かね？」

「私は結婚したいのです。」

「そんなことなら前からわかっている。」と祖父は言った。そして笑い出した。

「何ですって、わかっていますって？」

「うむ、わかっているよ。あの娘をもらうがいい。」

マリユスはその一言に惘然ぼうぜんとして眩惑げんわくし、手足を震わした。

ジルノルマン氏は続けて言った。

「そうだ、あのきれいなかわいい娘をもらうがいい。あの娘は毎日、老人を代わりによこしてお前の様子を尋ねさしている。お前が負傷してからというもの、いつも泣きながら綿め撒糸んざんしをこしらえてばかりいる。わしはよく知ってる。オンム・アルメ街七番地に今住ん

でいる。ああいいとも。好きならもうがいい。お前はすっかりはまり込んでいるな。お前はつまらない計画を立てて、こう考えたんだらう。『あの祖父じじいに、あの摂政時代と執政内閣時代との木乃伊みいに、あの古めかしい洒落者しゃれものに、あのゼロントとなつたドラントに

（訳者注 共にモリエールの戯曲中の人物にて、ゼロントは欺かれやすい愚かな好々爺、ドラントはばかげた気取りや）、きつぱりと思ひ知らしてやらう。彼だつて昔は、おもし

ろいことをやって、情婦いろおんなをこしらえ、小娘をひっかけ、幾人ものコゼットを持っていったんだ。お化粧をし、翼をつけ、春のパンを食ったことがあるんだ。昔のことを少し思い出さしてやらなけりやいけない。どうなるかみてるがいい。戦争だ。』そう思ってお前はかぶとむし甲虫の角をつかまえたわけだな。いい考えだ。そこでわしが脇肉はどうだと言ひ出したら、実は結婚したいのですが、と答えたんだな。それは話をそらすというものだ。お前は少し言い争うつもりでいたんだろう。わしがこれでも古狸ふるだぬきであることを、お前は知らなかつたんだ。どうだね。腹が立つかね。祖父おじいさんを少しばかりにしてやろうなどと思つても、そうはいかないさ。議論なんかしかけようたつてむだなことさ。弁護士しやくさん、癪しゃくにさわるかね。まあ怒るのは損だよ。お前のすきなようにしてやれば、文句もなからうというものだ。ばかだね。まあ聞きなさい。わしもなかなかずるくてな、いろいろ調べてみたんだ。なるほどきれいで伶俐りしやうな娘だ。槍騎兵そうきへいの話も嘘うそだった。綿撒糸めんさんしを山のように作つてくれたよ。実にりっぱな娘だ。お前に逆上さかせきつてる。もしお前が死んだら、三人になるところだつた、娘の葬式がわしの葬式に続いて出る所だつた。わしもな、お前がよくなりかけてからは、娘を枕頭まくらもとに連れてきてやろうとは思つたが、美男子が負傷して寝てる所へ、夢中になつてる若い娘をすぐに連れてくるのも、小説ならともかく、実際はち

と困るからな。伯母^{おば}さんもどう言うかわからないしね。お前は素裸になつてゐる時の方が多くくらいだった。いつもそばについてたニコレットに聞いてみなさい、婦人を傍に置けたかどうか。それからまた医者もどう言うかわからない。きれいな娘は決して人の熱を下げてくれるものではないからな。だが、もうそれでいい、こんな話はやめよう。すっかりきまつてる。でき上がつてる。まとまつてることなんだ。あの娘をもらうがいい。わしの意地悪さと言えばまあそんなものだ。ねえ、わしはな、お前からきらわれてゐるのを見て取つて、こう考えた。『こいつが俺^{われ}を愛するようになるには、どうしたらいいかな。』そしてまたわしは考えた。『なるほど、コゼットが俺の手の中にある。コゼットを一つくれてやろう。そうしたら少しは俺を愛してくれるに違いない。あるいはまた、愛しない理由を言うに違いない。』ところがお前は、この爺^{じい}さんがやかましく言い、大きな声を立て、反対をとなえ、その夜明けのような娘の上に杖^{つえ}を振り上げることと、思つていたんだろう。だがそんなことをわしがするものか。コゼットも結構、恋も結構、わしはもうそれで十分だ。だからどうか結婚してくれ。かわいなお前のことだもの、幸福になつてくれ。』

そう言つて、老人は涙にむせんだ。

彼はマリユスの頭を取り、それを年老いた胸に両腕で抱きしめた。そしてふたりとも泣

き出した。泣くのは最上の幸福の一つの形である。

「お父さん！」とマリユスが叫んだ。

「ああ、ではわしを愛してくれるか？」と老人は言った。

それは名状し難い瞬間だった。ふたりは息をつまらして、口をきくこともできなかつた。やがて老人はつぶやいた。

「さあ、これで口もあけた。わしをお父さんと言ってくれた。」

マリユスは祖父の腕から頭をはずして、静かに言った。

「ですがお父さん、もう私は丈夫になつていますから、彼女に会つてもよさそうに思います。」

「それも承知してる。明日^{あす}会わしてやろう。」

「お父さん！」

「何かね。」

「なぜ今日はいけないんです。」

「では今日、そう今日にしよう。お前は三度お父さんと言つたね、それに免じて許してやろう。わしが引き受ける。お前のそばへ連れてこさせよう。こうなるだろうと思つていた。」

ちやんと詩にもなってる。アンドレ・シエニエの病める若者という悲歌の末句だ。九十三年の悪……大人物どもから斬首ざんしゅされたアンドレ・シエニエのね。」

ジルノルマン氏はマリユスがちよつと眉まゆをしかめたように思った。しかしあえて言っておくが、マリユスはまったく歓喜のうちに包まれ、一七九三年のことなんかよりもコゼツトのことを多く考えていて、老人の言葉に耳を傾けていなかった。けれども祖父は、折り悪しくアンドレ・シエニエを口にして自ら震え上がり、急いで弁解べんげを始めた。

「斬首ざんしゅというのは適當でない。事実を言えば、革命の偉人たちは、確かに悪人ではなく英雄であったが、アンドレ・シエニエを少し邪魔にして、彼を断頭……すなわち、その英傑たちは、共和熱月七日（一七九四年七月二十五日）、公衆の安寧のために、アンドレ・シエニエに願つて……。」

ジルノルマン氏は自分の言おうとする言葉に喉のどをしめつけられて、あとを続けることができなかつた。言い終えることも言い直すこともできず、娘がマリユスのうしろで枕を直してゐる間に、激情に心転倒して、老年の足が許す限りの早さで、寢室の外に飛び出し、うしろに扉とびらを押ししめ、まっかになり、喉のどをつまらし、口に泡あわを立て、目をむき出して、ちよつど次の室へやで靴くつをみがいていた正直なバスクとばつたり顔を合あわした。彼はバスクの襟えり

をとらえ、まっ正面から勢い込めてどなりつけた。「畜生、その悪漢どもが殺害したんだ！」

「だれをでございますか。」

「アンドレ・シエニエをだ！」

「さようでございます。」とバスクは驚き恐れて言った。

四 フォーシユルヴァン氏の小わきの包み

コゼットとマリユスとは再び会った。

その面会はどんなものであったか、それを語るのをわれわれはやめよう。世には描写すべからざるものがある。たとえば太陽もその一つである。

コゼットがはいつてきた時には、バスクやニコレットをも加えて一家の者が皆マリユスの室へやに集まっていた。

彼女は闕しきいの上に現われた。その姿はあたかも円光に包まれてるかと思われた。

ちようどその時祖父は鼻をかもうとしていた。彼はそれを急にやめ、ハンカチで鼻を押

さえたまま、その上からコゼットをながめた。

「みごとな娘だ！」と彼は叫んだ。

それから彼は大きな音を立てて鼻をかんだ。

コゼットは、酔い、喜び、おびえ、天に上ったような心地になっていた。彼女はおよそ幸福が与え得るだけの恐怖を感じていた。彼女は口ごもり、まっさおになり、またまっかになり、マリユスの腕に身を投じたかと思いつながらあえてなし得なかつた。大勢の人前で愛するのをはずかしがったのである。人は幸福なる恋人らに対して無慈悲である。彼らが最もふたりきりでいたかと思う時にはそこに控えている。しかしふたりはまったく他人を必要としないのである。

コゼットと共に、白髪の老人がひとりそのあとからはいってきた。彼は荘重な顔つきをしていたが、それでもほほえんでいた。しかしそれはぼんやりした痛ましい微笑だった。この老人は「フォーシユルヴァン氏」で、すなわちジャン・ヴァルジャンであった。

彼は新しい黒服をまとい白い襟えり飾かぎをつけて、門番が言ったとおりがくりっぱな服装をしていた。

公証人でもありそうなのきちようめんな市民が、あの六月七日の夜、気絶したマリ

ユスを腕にかかえ、ぼろをまとい、不潔で醜く荒々しく、血と泥どろとにまみれた顔をして、門の中にはいつてきた恐ろしい死体運搬人であろうとは、門番は夢にも思いつかなかつた。しかしどことなく見覚えがあるように思った。フォーシユルヴァン氏がゴゼットと共にやつてきた時、門番はそつと女房にささやかざるを得なかつた。「何だかあの人は前に見たことがあるようにいつも思われてならないがね、どうも変だ。」

フォーシユルヴァン氏はマリユスの室へやの中で、わきによけるように扉とびらのそばに立っていた。彼は小わきに、紙にくるんだ八折本らしい包みを抱えていた。包み紙は緑がかつた色で、かび黴がはえてるようだった。

「あの人はいつもああして書物を抱えていなさるのかしら。」と書物ぎらいなジルノルマン嬢は、低い声でニコレットに尋ねた。

「そう、あの人は学者だ。」とその声を耳にしたジルノルマン氏は同じ小声で答えた。

「だがそんなことはかまわんじやないか。わしが知ってるブーラールという人もやはり、いつも書物を持って歩いていて、ちようどあのように古本を胸に抱いていた。」

そしてお辞儀をしながら、彼は高い声で言った。

「トランシユルヴァンさん……。」

ジルノルマン老人は他意あつてそんなふうには呼んだのではなかった。人の名前にとんちやくしないのは、彼にとつては一つの貴族的な癖だった。

「トランシユルヴァンさん、わたしは、孫のマリユス・ポンメルシー男爵のために御令嬢に結婚を申し込みますのを、光榮と存じます。」

「トランシユルヴァン氏」は頭を下げた。

「これできました。」と祖父は言つた。

そしてマリユスとコゼットとの方を向き、祝福するように両腕をひろげて叫んだ。

「互いに愛し合うことを許す。」

彼らは二度とその言葉を繰り返させなかつた。言われるが早いかすぐに楽しく話し出した。マリユスは長椅子ながいすの上に肱ひじをついて身を起こし、コゼットはそのそばに立つて、互いに声低く語り合つた。コゼットはささやいた。「ああうれしいこと、またお目にかかれたのね。ねえ、あなた、あなた！ 戦争においでなすつたのね。なぜなの。恐ろしいことだわ。四月よつきの間私は生きてる気はしなかつたわ。戦争に行くなんて、ほんに意地悪ね。私あなたに何をして？ でも許して上げてよ。これからもうそんなことをしてはいけないわ。さつき、私たちに来るようにつて使いがきた時、私はまたもう死ぬのかと思つたの。でも

うれしいことだったのね。私は悲しくて悲しくて、着物を着換えることもできなかったのよ。大変な服装なりをしてるでしょう。しわくちなな襟えり飾かぎりをしてるところをごらんなすつて、お家の方は何とおっしゃるでしょうね。さあ、あなたも少し話してちょうだい。私にばかり口をきかしていらつしやるのね。私たちはずっとオンム・アルメ街にいたのよ。あなたの肩の傷はさぞひどかったんでしょね。手がはいるくらいだったそうですね。それに缺はさまで肉を切り取ったんですね。ほんとに恐ろしい。私は泣いてばかりいたので、目を悪くしてしまったの。どうしてあんなに苦しんだかと思うとおかしいほどよ。お祖父じい様さまは御親切ごしんせつそうな方ね。静かにしていらつしやいな、肱うでで起き上がってはいけないわ。用心しんなさらないと、障さわるでしょう。ああ私ほんとに仕合わせだこと！ 悪いことももう済んでしまったのね。私どうかしたのかしら。いろんなことをお話したいと思つたのに、すっかり忘れてしまった。やっぱりあなたは私を愛して下さるの？ 私たちはオンム・アルメ街に住んでるのよ。庭はないの。私はいつも綿めん撒さん糸しばかりこしらえていたわ。ねえあなた、ごらんなさい、指に胼胝たごができてしまったわ。あなたが悪いのよ。」マリユスは言った。「おお天使よ！」

天使という言葉こそ、使い古すことのできない唯一のものである。他の言葉はみな、恋

人らの無茶な使用にはたえ得ない。

それから、あたりに人がいるので、ふたりは口をつぐんでもう一言も言わず、ただやさしく手を握り合つてゐるばかりだった。

ジルノルマン氏は室へやの中なかにいる人々の方へ向いて声高に言った。

「みんな声を高くして話すんだ。楽屋の方で音を立てるんだ。さあ、子供ふたりで勝手にしゃべくるように、少し騒ぐがいい。」

そして彼はマリユスとコゼットに近寄つて、ごく低く言った。

「うちとけて親しむがいい。遠慮するにはおよばない。」

ジルノルマン伯母おばは、古ぼけた家庭にかく突然光がさし込んできたのを惘然ぼうぜんとしてながめていた。惘然さのうちには何らの悪意もなかった。それは二羽の山鳩やまばとに対する梟ふくろうの憤ねたつた妬ましい目つきでは少しもなかった。五十七歳の罪のない老女の唾然あぜんたる目つきであり、愛の勝利をながめてる空むなしい生命だった。

「どうだ、」と父は彼女に言った、「こんなことになるだろうとわしがかねて言ったとおりではないか。」

彼はちよつと黙つたが、言い添えた。

「他人の幸福も見るものだ。」

それから彼はコゼットの方に向いた。

「実にきれいだ、実にきれいだ！ グルーズの絵のようだ。おい、いたずらっ兎さん、お前はひとりでこれからその娘さんを独占するんだな。わしと張り合わずにすんで仕合わせだ。わしがもし十五年も若けりや、剣を取つてもお前と競争するからな。いや、お嬢さん、わたしはお前さんに惚れ込ほんでしまった。しかし怪しむに当たらない。それはお前さんの権利だ。ああこれで、美しいきれいな楽しいかわい結婚が一つ出来上がる。この教区はサン・ドウニ・デュ・サン・サクルマンだが、サン・ポールで結婚式をあげるように許しを得てやろう。あの教会堂の方が上等だ。ゼジュイット派が建てたものだ。あの方が美しい。ピラーグ枢機官の噴水と向き合っている。ゼジュイット派建築の傑作は、ナムユール市にあつて、サン・ルーと言われている。お前たちが結婚したらそこへ行ってみるがいい。旅するだけの価値はある。お嬢さん、わたしも全然お前さんの味方だ。娘が結婚するのはいいことだ。結婚するようにできている。聖カテリナ（訳者注 四世紀初葉の殉教者にして若い娘の守護神）のような女で、わしがいつもその髪を解かせたく思うのが、世にはたくさんある。娘のままにいるのも結構なことだが、それはどうも冷たすぎる。聖書にもあ

る、増せよ殖えよと。人民を救うにはジャンヌ・ダルクのような女も必要だが、しかし人民を作るにはジゴニー小母さん（訳者注 人形芝居の人物にて、裳衣の下からたくさんの子供を出してみせる女）のような女が必要だ。だから美人はすべからず結婚すべし。実際独身でいて何のためになるかわしにはさっぱりわからん。なるほど、教会堂に特別の礼拝所を持ち、聖母会の連中の噂ばかりする者も世にはある。しかし結婚して、夫はりっぱな好男子だし、一年たてば金髪の大きな赤ん坊ができ、元気に乳を吸い、腿は肥ってよくくくれ、曙のように笑いながら、薔薇色の小さな手でいっぱいに乳房を握りしめるとすれば、晩の祈禱に蠟燭を持って象牙の塔（聖母マリア）を歌うよりも、よほど勝っている。

祖父は九十歳の踵でぐるりと回って、発条がとけるような具合に言い出した。

「かくてアルシペよ、夢想到限界を定めて、

やがて汝が婚姻するは、まことなるか。

時にね。」

「何です、お父さん。」

「お前には親しい友だちがあつたか。」

「ええ、クールフェーラックという者です。」

「今どうしてる？」

「死んでいます。」

「それでいい。」

彼はふたりのそばに腰を掛け、コゼットにも腰掛けさし、彼らの四つの手を自分の年老いた皺しわのある手に取った。

「実にりっぱな娘さんだ。このコゼットはまったく傑作だ。小娘でまた貴婦人だ。男爵夫人には惜しい。生まれながらの侯爵夫人だ。睫毛まつげもりっぱだ。いいかね、お前たちは本當の道を踏んでるといふことをよく頭に入れとかなくてはいかん。互いに愛し合うんだ。愛してばかりになるんだ。愛というものは、人間の愚蒙ぐもウで神の知恵だ。互いに慕い合うがいい。ただ、」と彼は急に沈み込んで言い添えた、「一つ悲しいことがある。それがわしの気がかりだ。わしの財産の半分以上は終身年金になつてゐる。わしが生きてる間はいいが、わしが死んだら、もう二十年もしたら、かわいそうだが、お前たちは一文なしになる。男爵夫人たるこのまっ白な美しい手も、食うために働かなくてはならないことになるだろう。」

その時、莊重な落ち着いた声が聞こえた。

「ウユーフラジー・フォーシユルヴァン嬢は、六十万フランの金を持っています。」
その声はジャン・ヴァルジャンから出たのだった。

彼はその時まで一言も口をきかずにいた。だれも彼がそこにいることさえ知らないがようだった。そして彼は幸福な人々のうしろにじっと立っていた。

「ウユーフラジー嬢というのは何のことだろう？」と祖父はびっくりして尋ねた。

「私です。」とコゼットは答えた。

「六十万フラン！」とジルノルマン氏は言った。

「たぶん一万四、五千フランはそれに足りないかも知れませんが。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

そして彼はジルノルマン嬢が書物だと思っていた包みをテーブルの上に置いた。

ジャン・ヴァルジャンは自ら包みを開いた。それは一束の紙幣だった。人々はそれをひろげて数えてみた。千フランのが五百枚と五百フランのが百六十八枚はいつていて、全部で五十八万四千フランあった。

「これは結構な書物だ。」とジルノルマン氏は言った。

「五十八万四千フラン！」と伯母おばがつぶやいた。

「これで万事うまくいく、そうじゃないか。」と祖父はジルノルマン嬢に言った。「マリユスの奴、分限者の娘を狩り出したんだ。こうなったらお前も若い者の恋にかれこれ言えやしないだろう。学生は六十万フランの女学生を見つけ出す。美少年はロスチャイルド以上の働きをするというものだ。」

「五十八万四千フラン！」とジルノルマン嬢は半ば口の中で繰り返していた。「五十八万四千フラン、まあ六十万フランだ。」

マリユスとコゼットとは、その間ただ互いに顔を見合っていた。ふたりはそんなことにほとんど注意もしなかった。

五 金は公証人よりもむしろ森に託すべし

読者は長い説明を待つまでもなく既に了解したのであろう。ジャン・ヴァルジャンはシャンマテュー事件の後、最初の数日間の逃走によって、パリーにき、モントルイユ・スユール・メールでマドレーヌ氏の名前で儲けていた金額を、ちょうどよくラフィット銀行から引き出すことができた。そして再び捕えられることを気使って——果たして間もなく捕

えられたが——モンフェルメイユの森の中のブラリュの地所と言われてる所に、その金を埋めて隠しておいた。金額は六十三万フランで、全部銀行紙幣だったので、わずかな嵩で一つの小箱に納めることができた。ただその小箱に湿気を防ぐため、更に栗の木屑をいっぱいいつめた櫛かしの箱に入れておいた。同じ箱の中に彼は、も一つの宝である司教の燭しよくだい台をもしまった。モントルリュ・スジュール・メールから逃走する時彼がその二つの燭台を持つていったことを、読者は記憶しているだろう。ある夕方ブラトリユエルが最初に見つけた男は、ジャン・ヴァルジャンにほかならなかった。その後ジャン・ヴァルジャンは、金がいるたびごとにそれを取りにブラリュの空地にやってきた。前に言ったとおり彼が時々家をあげたのは、そのためだった。彼は人の気づかない茂みの中に一本の鶴つるはし嘴を隠しておいた。それから彼は、マリユスが回復期にはいったのを見た時、その金の役立つ時機が近づいたのを感じて、それを取りに出かけていった。ブラトリユエルが森の中でこんどは夕方でなく早朝に見かけた男は、やはりジャン・ヴァルジャンだった。ブラトリユエルはその鶴嘴だけを受け継いだ。

実際に残つてた金額は五十八万四千五百フランだった。ジャン・ヴァルジャンはそのうち五百フランだけを自分のために引き去つておいた。「あとはどうにかなるだろう、」と

彼は考えた。

その金額とラフィット銀行から引き出した六十三万フランとの間の差額は、一八二三年から一八三三年に至る十年間の費用を示すものである。そのうち修道院にいた五年間は、ただ五千フランかかったのみだった。

ジャン・ヴァルジャンは二つの銀の燭台を暖炉だんろ棚だなの上に置いた。そのりっぱなのを見てトウーサンはひどく感心していた。

それからまたジャン・ヴァルジャンは、ジャヴェルから免れたことを知っていた。その事実が自分の前で話されるのを聞いて、彼は機関新聞で更に確かめてみた。その記事によると、ジャヴェルというひとりの警視が、ポン・トー・シャンジュとポン・ヌーフの二つの橋の間の洗濯舟せんたくぶねの下に溺死でせきしているのが発見された、しかるに彼は元来上官からもごく重んぜられ何ら非難すべき点もない男であつて、その際残していった手記によつて考えれば、精神に異状を呈して自殺を行なつたものらしい、というのだった。ジャン・ヴァルジャンは考えた。「実際彼は、私を捕えながら放免したところをみると、どうしても既にある時から気が狂つていたに違いない。」

六 コゼットを幸福ならしむるふたりの老人

結婚の準備は悉く整えられた。医者に相談すると、二月には行なつてもいいという明言が得られた。今は十二月だった。かくて全き幸福の楽しい数週間が過ぎていった。

祖父も同じように幸福だった。彼はよく十四、五分間もコゼットに見惚れてることがあった。

「実にきれいな娘だ！」と彼は叫んだ。「そして至つてやさしく親切そうな様子だ。いとしき者よわが心よ、などと言つてもまだ足りない。これまで見たこともないほど美しい娘だ。やがては董すみれのように香んばしい婦徳も出て来るだろう。まったく優美の至りだ。こんな婦人といつしよにおれば、だれでもりっぱな生活をしないわけにはゆかない。マリユス、お前は男爵で金持ちだ。もう弁護士なんかにはならないでくれ、頼むから。」

コゼットとマリユスとは、にわかには墳墓から楽園に移つたがようだった。その変化はあまりに意外だったので、ふたりはたとい目が眩くらみはしなかつたとするもまったく惘然ぼうぜんとしてしまった。

「どうしてだかお前にわかる？」とマリユスはコゼットに言った。

「いいえ。」とコゼットは答えた。「ただ神様が私たちを見てて下さるような気がするの
」

ジャン・ヴァルジャンはすべてのことをなし、すべてを平らにし、すべてを和らげ、すべてを容易ならしめた。彼はコゼット自身と同じくらい熱心に、また表面上いかにもうれしそうに、彼女の幸福を早めようとした。

彼は市長をしていたことがあるので、コゼットの戸籍という彼ひとりが秘密を握ってる困難な問題をも、よく解決することができた。その身元を露骨に打ち明けたら、あるいは結婚が破れるかも知れなかった。彼はあらゆる困難をコゼットに免れさせた。彼女のため、に死に絶えた一家をこしらえてやった。それはいかなる故障をも招かない安全な方法だった。コゼットは死に絶えた一家のただひとりの末裔まつえいとなり、彼の娘ではなくて、もひとりのフォーシユルヴァンの娘となった。ふたりのフォーシユルヴァン兄弟はプティー・ピクプユスの修道院で庭番をしていたことがあるので、そこに聞き合わされた。よい消息やりっぱな証明はたくさんあった。善良な修道女らは、身元なんかの問題はよく知りもせずあまり注意してもいなかったし、また不正なことがされてようとも思っていなかったもので、小さなコゼットはふたりのフォーシユルヴァンのどちらの娘であるかを本当に知ってはい

なかつた。彼女らは望まれるままの口をきき、しかも心からそう述べ立てた。身元証明書はすぐでき上がった。コゼットは法律上ウユーフラジー・フォーシユルヴァン嬢となつた。彼女は両親ともない孤児と確認された。ジャン・ヴァルジャンはうまく取り計らつて、フォーシユルヴァンという名の下にコゼットの後見人と定められ、またジルノルマン氏は後見監督人と定められた。

五十八万四千フランは、名を明かすことを欲しなかつた今は亡くなつてある人から、コゼットへ遺贈されたものとなつた。その遺産は初め五十九万四千フランだったが、内一万フランはウユーフラジー嬢の教育費に使われ、その内五千フランは修道院に支払われたものだつた。その遺産は第三者の手に保管され、コゼットが丁年に達するか結婚するかする時彼女に渡されることになつていた。それらのことは、読者の見るとおりいかにももつともなことであつて、特に百万の半ば以上という金がついておればなおさらだつた。もとよりいぶかしい点も所々ないではなかつたが、人々はそれに気づかなかつた。当事者のひとは愛に目がおおわれていたし、他の人たちは六十万フランに目がおおわれていた。コゼットは自分が長く父と呼び続けていた老人の娘でないことを聞かされた。彼はただ親戚であつて、もひとりのフォーシユルヴァンという人が本当の父であつた。他の時だつ

たらそのことは彼女の心を痛ませたろう。しかし今は得も言えぬ楽しい時だったので、それはただわずかな影であり一時の曇りにすぎなかった。彼女はまったく喜びに満たされていたので、その雲も長く続かなかつた。彼女はマリユスを持っていた。青年がきて、老人は姿を消した。人生はそうしたものである。

それにまた、コゼットは長年の間、自分の周囲に謎のようなことを見るになれていた。不可思議な幼年時代を経てきた者は皆、いつもある種のあきらめをしやすいものである。

それでも彼女は続けてジャン・ヴァルジャンを父と呼んでいた。

心も空に喜んでいるコゼットは、ジルノルマン老人にも深く感謝していた。実際老人はやたらに愛撫あいぶの言葉や贈り物を彼女に浴びせかけた。ジャン・ヴァルジャンが彼女のために、社会における正当な地位と適当な身元とを作つてやつてる間に、ジルノルマン氏は結婚の贈り物に腐心していた。壮麗であることほど彼を喜ばせるものはなかった。祖母から伝えられてるバンシユ製レースの長衣をもコゼットに与えた。彼は言った。「こういう物もまた生き返つてくる。古い物も喜ばれて、わしの晩年の若い娘がわしの幼年時代の婆さんのような服装をするんだ。」

中ぶくれのりっぱなコロマンデル製の漆戸うるしとだな柵をも彼は開放してしまった。それはもう

長年の間開かれたことのないものだった。彼は言った。「この婆さんたちにもひとつ懺悔ざんげをさしてやれ。腹に何をしまつてるか見てやろう。」そして彼は自分の幾人もの妻や情婦やお婆さんたちの用具がいつぱいつまつてる引き出しの中を、大騒ぎでかき回した。南なんき

京んじゆす縹じゆす子、緞どんす子、縞ごんす子、縞ごんす子、模様絹、友禅絹、トウール製の炎模様粗絹の長衣、洗たくにたえる金縁の印度ハンカチ、織り上げたばかりで鋏はさみのはいつていない裏表なしの花模様絹、ゼノアやアランソン製の刺ししゆう繡、古い金銀細工の装飾品、微細な戦争模様のついでの象牙の菓子箱、装飾布、リボン、それらをすべて彼はコゼットに与えた。コゼットはマリウスに対する愛に酔いジルノルマン氏に対する感謝の念にいつぱいになって、心の置き所も知らず、縹じゆす子とビロードとをまとつた限りない幸福を夢みていた。結婚の贈物が天使からささげられるような気がした。彼女の魂はマリーヌのレースの翼をつけて蒼空そうくうのうちに舞い上がった。

ふたりの恋人の恍惚こうこうの情におよぶものは、前に言つたとおり、ただ祖父の歡喜あるのみだつた。かくてフィユー・デュ・カルヴェール街には楽隊の響きが起こつたかのようにだつた。

祖父は毎朝コゼットへ何かの古物こぶつを必ず贈つた。あらゆる衣裳いさうが彼女のまわりに燦爛さんらん

と花を開いた。

マリユスは幸福のうちにも好んでまじめな話をしていたが、ある日、何かのことについてこう言った。

「革命の人々は実に偉大です。カトーやフォキオン（訳者注　ローマおよびアテネの大人物）のように数世紀にわたる魅力を持っていて、各人がそれぞれ古代の記念のようです。」
「古代の絹！」と老人は叫んだ。「ありがとう、マリユス。ちようどわしもそういう考えをさがしてるところだった。」

そして翌日、茶色の観世模様古代絹のみごとな長衣がコゼットの結婚贈り物に加えられた。

祖父はそれらの衣裳から一つの哲理を引き出した。

「恋愛は結構だ。だが添え物がなくてはいかん。幸福のうちにも無用なものがなくてはいかん。幸福そのものは必需品にすぎない。だから大いにむだなもので味をつけるんだ。宮殿と心だ。心とルーヴル美術館だ。心とヴェルサイユの大噴水だ。羊飼いな女にも公爵夫人のような様子をさせることだ。矢車草を頭にいたでいるフィリスにも十万フランの年金をつけることだ。大理石の柱廊の下に目の届く限り田舎景色いなかげしきをひろげることだ。田舎景色

もいいし、また大理石と黄金との美観もいい。幸福だけの幸福はパンばかりのようなものだ。食えはするがごちそうにはならない。むだなもの、無用なもの、よけいなもの、多すぎるもの、何の役にも立たないもの、それがわしは好きだ。わしはストラスブルグの大公会堂で見た時計を覚えている。それは四階建ての家ほどある大きな時計で、時間を教えてもいたが、親切にも時間を教えてはいたが、そのためにばかり作られたものではなさそうだった。正午やま夜中や、太陽の時間である昼の十二時や、恋愛の時間である夜の十二時や、そのほかあらゆる時間を報じたあとで、種々なものを出してみせた。月と星、陸と海、小鳥と魚、フォイボスとフォイベ（訳者注 太陽の神と月の神）、また壁へきがん 龕から出て来るたくさんのもの、十二使徒、皇帝カルル五世、エポニーネとサビヌス（訳者注 ローマ人の羈絆からゴール族を脱せしめんと企てた勇士夫婦）、その上になお、ラツパを吹いてる金色の子供もたくさんいた。そのたびごとになぜともなく空中に響き渡らせる楽しい鐘の音は、言うまでもないことだ。ただ時間だけを告げる素裸のみじめな時計が、それと肩を並べることができようかね。わしはな、ストラスブルグの大時計の味方だ。シュワルツワルト（黒森山）の杜ほととぎす 鶇ほととぎすの声を出すだけの目ざまし時計より、それの方がずっとよい。

ジルノルマン氏は特に、結婚式のことについて屁理屈へりくつを並べていた。彼の贅辞ぜいじのうちには十八世紀の事柄がやたらにはいつてきた。

「お前たちは儀式の方法を心得ていない。近ごろの者は喜びの日をどうしていいかよく知らないのだ。」と彼は叫んだ。「お前たちの十九世紀は柔弱だ。過分ということがない。金持ちをも知らなければ、貴族をも知らない、何事にもいがり頭だ。お前たちのいわゆる第三階級というものは、無味、無色、無臭、無形だ。家を構える中流市民階級の夢想は、自分で高言してるように、新しく飾られた紫檀したんや更紗さらせのちよつとした化粧部屋にすぎない。さあお並び下さい、しまりやさんがけちけち嬢さんと結婚致します、といったような具合だ。そのぜいたくや華美としては、ルイ金貨を一つ蠟燭ろうそくにはりつけるくらいのものだ。十九世紀とはそんな時代なんだ。わしはバルチック海の向こうまでも逃げてゆきたいほどだ。わしは既に一七八七年から、何もかもだめになったと予言しておいた。ローアン公爵やレオン大侯やシャボー公爵やモンバゾン公爵やスービーズ侯爵や顧問官トゥール子爵が、がた馬車に乗ってロンシャンの競馬場に行くのを見た時からだ。ところが果たしてそれは実みを結んだ。この世紀ではだれでも皆、商売をし、相場をし、金を儲もけ、そしてしみつたれてる。表面だけを注意して塗り立ててる。おめかしをし、洗い立て、石鹼せっけんをつけ、

拭いをかけ、髯を剃り髪を梳き、靴墨をつけ、てかてかさし、みがき上げ、刷毛をかけ、外部だけきれいにし、一点のほこりもつけず、小石のように光らし、用心深く、身ぎれいにしているが、一方では情婦をこしらえて、手鼻をかむ馬方でさえ眉を顰むような、肥料溜や塵溜を心の底に持っている。わしは今の時代に、不潔な清潔という題辞を与えてやりたい。なにマリユス、怒つてはいけないよ。わしに少し言わしてくれ。別に民衆の悪口を言うんじゃない。お前のいわゆる民衆のことなら十分感心してるのだが、中流市民を少しばかりたたきつけてやるのはかまわんだろう。もちろんわしもそのひとりだ。よく愛する者はよく鞭うつ。そこでわしはきつぱりと言つてやる。今日では、人は結婚をするが結婚の仕方を知らない。まったくわしは昔の風習の美しさが惜しまれる。すべてが惜しまれる。その優美さ、仁俠さ、礼儀正しい細やかなやり方、いずれにも見らるる愉快なぜいたくさ、すなわち、上は交響曲から下は太鼓に至るまで婚礼の一部となつていた音楽、舞踊、食卓の楽しい顔、穿ちすぎた恋歌、小唄、花火、打ち解けた談笑、冗談や大騒ぎ、リボンの大きな結び目。それから新婦の靴下留めも惜しまれる。新婦の靴下留めは、ヴィーナスの帯と従姉妹同士だ。トロイ戦争は何から起こつたか？ ヘレネの靴下留めかではないか。なぜ人々は戦つたか、なぜ神のようなディオメーデはメリオネスが頭にい

ただいてる十本の角のある青銅の大きな兜かぶとを打ち砕いたか、なぜアキレウスとヘクトルとは槍やりで突き合ったか？ それも皆へレネが靴下留めにパリスの手を触れさせたからではないか。コゼットの靴下留めからホメロスはイリアードをこしらえるだろう。その詩の中にわしのような饒じょうぜつ舌ぜつな老人を入れて、それをネストルと名づけるだろう。昔はね、愛すべき昔では、人は賢い婚こ婚こん礼れいをしたものだ。りっぱな契約をし、次にりっぱなごちそうをしたものだ。キュジャスが出てゆくとガマーシユがはいってきたものだ（訳者注 前者は法律学者の典型にて、後者はドン・キホーテの一挿話中に出てくる婚こ婚こん礼れいの大馳走をする田舎者）。というのも、胃袋というものは愉快やっな奴やつで、自分の分け前を求め、自分もまた婚こ婚こん礼れいをしようとするからだ。皆よく食ったし、また食卓では、胸当てをはずして適宜にえりを開いてる美人と隣合つてすわったものだ。皆大きく口をあいて笑うし、あの時代は実に愉快な者ばかりだった。青春は花輪はなわだった。若い男は皆、ライラックの一枝か薔薇ばらの一握りかを持っていた。軍人までも皆羊飼やぎ飼いだった。たとい竜騎兵の将校でも、フロリアン（訳者注 十八世紀の後半の寓話作者）と人から呼ばれる術を心得ていた。皆きれいに着飾るように心掛けていた。刺し繡しゅうをつけ緋絹ひぎぬをつけていた。市民は花のようだったし、侯爵は宝石のようだった。脚絆きゃはん留めをつけたり長靴ながぐつをつけたりはしなかった。はなやかで、

艶々つやつやしく、観世模様をつけ、蝦茶色えびちやいろずくめで、軽快で、華奢きゃしゃで、人の気をそらさないが、それでもなお腰には剣を下げていた。蜂雀くちばしつめも嘴くちばしと爪つめとを持つてるものだ。優美なる藍色服の人々の時代だった。その時代の一面は繊麗であり、一面は壮麗だった。そして人々は遊び戯れていたものだ。ところが今日ではだれも皆まじめくさつてる。市民はけちで貞節ぶつてる。お前たちの世紀は不幸なものだ。あまり首筋を出しすぎると言つては優美の女神を追いやってゐる。あわれにも、美しさをも醜さと同じように包み隠してゐる。革命からは、だれでもズボンをはくようになった、踊り娘こまでそうだ。道化女もまじめくさり、リゴドン踊りも理屈つぼくなつてる。威儀を正してなけりやいけない。襟飾えりかざりりの中に頤あごを埋めていなけりや気を悪くされる。結婚しようとする二十歳の小僧の理想は、口アイエ・コラール氏（訳者注 立憲王党派の謹厳なる学者）のようにならうということだ。そしてお前たちは、そういう威容をばかり保つてついにどうなるか知つてるのか。ただ矮わ小いしやうになるばかりだ。よく覚えておくがいい、快活は単に愉快であるばかりでなく、また偉大である。だから快活に恋をするがいい。結婚するなら、熱情と無我夢中と大騒ぎと混沌たる幸福とをもつて結婚するがいい。教会堂でしかつめらしくしてるのもよいが、弥み撒さがすんだら、新婦のまわりに夢の渦巻うずまきを起こさしてやるがいい。結婚は堂々としてい

てしかも放恣ほうしでなくちやいかん。ランスの大会堂からシャントルーの堂まで練り歩かなくちやいかん。元氣のない婚礼は思つてもいやだ。少なくともその当日だけは、オリンポスの殿堂にはいった氣でなくてはね。神々になつた氣でなくてはね。ああみんなして、空気の精や遊びの神や笑いの神や銀楯の精兵などになるがいい。小鬼になるがいい。結婚したての者は皆アルドブランデイニ侯（訳者注 十七世紀の初めに見いだされた華麗な結婚図の古い壁画の主人公）のようでなくちやいけない。生涯にただ一度のその機会に乗じて、白鳥や鷺と共に火天まで舞い上がっていくんだ。そして翌日また中流市民の蛙かえるの中に落ちてこないですむようにしなくちやいけない。結婚について儉約したり、その光輝をそぐよくなことをしてはいけない。光榮の日にけちけちするものではない。婚礼は世帯ではない。わしの思いどおりにやれたら、実にみやびなものになるんだがな。木立ちの中にはバイオリンの音を響かしてやる。計画と言つては、空色と銀だ。儀式には田野の神々をも並べてみせる。森の精や海の精をも招きよせてみせる。アンフィトリテ（訳者注 海の女神）の婚礼、薔薇色ばらいろの雲、髪を結わえた素裸の水の精ども、女神に四行詩をささげるアカデミー会員、海の怪物に引かれた馬車。

トリトン（海の神）は先に駆けりつ、法螺ほらの貝もて

人皆を歡喜せしむる樂を奏しぬ。

これが儀式の目録だ、目録の一つだ。さもなくばわしはもう何にも知らん、断じて！」

祖父が叙情詩熱に浮かされて、自ら自分の言葉に耳を傾けてる間に、コゼットとマリユスとは自由に顔を見合わして恍惚こうこつとしていた。

ジルノマン伯母おばはいつもの平然たる落ち着きでそれらのことをながめていた。彼女は五、六カ月以来、ある程度までの感動を受けた。マリユスが戻ってきたこと、血にまみれて運ばれてきたこと、防寨ぼうさいから運ばれてきたこと、死にかかっていたが次に生き返ったこと、祖父と和解したこと、婚約したこと、貧乏な女と結婚すること、分限者の女と結婚すること。六十万フランは彼女の最後の驚きだった。それから最初の聖体拝領の時のような無關心さがまた戻ってきた。彼女は欠かさず教会堂の祭式に列し、大念珠をつまぐり、祈禱きとうし書よを読み、家の片すみで人々がわれ汝を愛すをささやいてる間に、他の片すみでアヴェエ・マリアをささやき、そしてマリユスとコゼットとを漠然ぼくぜんと二つの影のようにながめていた。しかし實際彼女の方が影の身であった。

ある惰性的な苦行の状態があるもので、その時人の魂は麻痺まひして中性となり、世話事とも言い得るすべてのことに無関心となり、地震や大變災などを除いては、何事にも何ら人

間らしい感銘を受ることなく、何ら楽しい感銘をも苦しい感銘をも受けることがなくなる。ジルノルマン老人は娘にこう言った。「そういう帰依の状態は、鼻感冒はななかぜと同じものだ。お前は人間において少しも感じない。悪いにおいも良いにおいも感じない。」

その上、六十万フランの金は、どうでもいいという気を老嬢に起こさした。父はいつも彼女をあまり眼中においていなかった。マリユスの結婚承諾についても彼女に相談をしなかった。例のとおり熱狂的な行動を取り、奴隷となつた専制者の態度で、ただマリユスを満足させようという一つの考えしか持つていなかった。伯母については、伯母が実際にそこにいるかどうか、伯母が何かの意見を持つてゐるかどうか、それを彼は考えてもみなかった。彼女はきわめて温順ではあつたが、そのために多少気を悪くした。そして内心では少し不満を覚えながら、表面は冷然として、自ら言った。「父はひとりで結婚問題をきめてしまったのだから、私もひとりで遺産の問題をきめてしまおう。」実際彼女は財産を持つていたが、父は財産を持たなかった。それで彼女は、そこに自分の決心をおいていた。結婚するふたりが貧乏だったら貧乏のままにしておいてやれ、甥おいにはお気の毒様だ、一文なしの女を娶めとるなら彼も一文なしになるがいい。ところがコゼットの持つてゐる百万の半ば以上の金は、伯母おばの気に入った、ふたりの恋人に対する心持ちを変えさせた。六十万と

言えば尊敬に価するものである。そして明らかに彼女は、若いふたりにもう金の必要がなくなつた以上、彼らに自分の財産を与えてやるよりほかにしようがなくなつたのである。

新夫婦は祖父の所に住むことに話がまとまつていた。ジルノルマン氏は家で一番美しい自分の室を是非とも彼らに与えようと思つていた。彼はこう言つた。「それでわしも若返る。元から考えていたことだ。わしはいつも自分の室で結婚式を行ないたいと思つていたんだ。」彼はその室に、優美な古い珍品をやたらに備えつけた。また天井と壁には大變な織物を張らせた。それは彼が一機ひとかまそっくり持つていて、ユトレヒト製だと思つてるもので、毛茛色きんぽうげいろの繻子しゆすのような地質に蓮馨花色さくらそういろのピロードのような花がついていた。彼は言つた。「ローシユ・ギヨンでアンヴェイル公爵夫人の寝台の帷とばりとなつていたのも、これと同じ織物だ。」また彼は暖炉だんろ棚だなの上に、裸の腹にマツフをかかえてるサクソニー製の人形を一つ据えた。

ジルノルマン氏の図書室は弁護士事務室となつた。読者の記憶するとおり、弁護士たる者は組合評議員会の要求によつて事務室を一つ持つていなければならなかつたので、マリユスにもその必要があつたのである。

七 幸福のさなかに浮かびくる幻

ふたりの恋人は毎日顔を合わしていた。コゼットはいつもフォーシユルヴァン氏と共にやってきた。ジルノルマン嬢は言った。「こんなふうには嫁さんの方からきげんを取られに男の家へやって来るのは、まるでさかさまだ。」けれどもマリユスはまだ回復期にあつたし、フィーユ・デュ・カルヴェール街の脇掛椅子ひしかいすはオンム・アルメ街の藁椅子わらいすよりもふたりの差し向かいに好都合だったので、自然とコゼットの方からやって来る習慣になつたのである。マリユスとフォーシユルヴァン氏とは絶えず会つていたが、話をし合うことはあまりなかつた。自然とそういうふうには默契ができたかのようにだつた。娘にはすべて介添えがいろいろある。コゼットはフォーシユルヴァン氏といつしよでなければやつてこられなかつたろう。しかしマリユスにとっては、コゼットあつてのフォーシユルヴァン氏であつた。彼はフォーシユルヴァン氏をとにかく迎えていた。かくて彼らは、万人の運命を一般に改善するという見地から政治上の事柄を、微細にわたることなく漠然ぼくぜんと話題に上せて、しかりもしくは否というよりも多少多くの口をきき合うこともあつた。一度マリユスは、教育というものは無料の義務的なものになして、あらゆる形式の下に増加し、空気が

や太陽のように万人に惜しまず与え、一言にして言えば、民衆全体が自由に吸入し得らるるようにしなければいけないという、平素の持論を持ち出したが、その時ふたりはまったく意見が合つて、ほとんど談話とも言えるくらい口をきき合つた。そしてフォーシユルヴァン氏がよく語りしかもある程度まで高尚な言葉を使うのを、マリユスは認めた。けれども何か欠けていた。フォーシユルヴァン氏には普通の人よりも、何か足りなくまた何かが多過ぎていた。

マリユスは頭の奥でひそかに、自分に向かつては単に親切で冷然たるのみのフォーシユルヴァン氏に対して、あらゆる疑問をかけてみた。時とすると、自分の思い出にさえ疑いをかけてみた。彼の記憶には、一つの穴、暗い一点、四カ月間の瀕死ひんしの苦しみによつて掘られた深淵しんえんが、できていた。多くのことがその中に落ち込んでいた。そのために、かくまじめな落ち着いた人物であるフォーシユルヴァン氏を防寨ぼうさいの中で見たというのは、果たして事実だつたらうかと自ら疑つてみた。

もとより、過去の明滅する幻が彼の脳裏に残したものは、単なる惘然ぼうぜんさのみではなかつた。幸福中にもまた満足中にも人をして沈鬱ちんうつに後方をふり返り見させる記憶の纏綿てんめんから、彼が免れていたと思つてはいけない。消えうせた地平線の方をふり返り見ない頭に

は、思想もなければ愛もないものである。時々マリユスは両手で頭をおおった。そして騒然たるおぼろな過去が、彼の脳裏の薄ら明りの中を過ぎよっていった。彼はマブーフが倒れる所を再び見、霰さんだん弾の下に歌を歌ってるガヴローシユの声を聞き、エポニーヌの額の冷たさを脣くちびるの下に感じた。アンジョーラ、クールフェーラック、ジャン・プルーヴェール、コンブフェール、ボシユエ、グランテール、などすべての友人らが、彼の前に立ち現われ、次いでまた消えうせてしまった。それらの、親しい、悲しい、勇敢な、麗しい、あるいは悲壮な者らは、皆夢であったのか？ 彼らは實際存在していたのか？ 暴動はすべてを硝煙のうちに巻き込んでしまっていた。それらの大なる苦熱は大なる幻を作り出す。彼は自ら問い、自ら憶測し、消えうせたそれらの現実に対して眩げんうん暈を感じた。彼らは皆どこにいるのか。皆死んでしまったというのは真実であるか。彼を除いたすべての者は暗黒の中に墜落してしまっていた。それはあたかも芝居の幕のうしろに隠れたことのように彼には思われた。人生にもかく幕のおりることがある。神は次の場面へと去ってゆく。

そして彼自身は、やはり同じ人間なのか。貧しかったのに富有となった。孤独だったのに家庭の人となった。望みを失ったのにコゼットを娶めとることとなった。彼は墳墓を通ってきたような気がした。暗黒な姿で墳墓にはいり込み、純白な姿でそこから出てきたよう

な気がした。しかもその墳墓の中に、他の者は皆残つてるのである。ある時には、それら過去の人々がまた現われてき、彼の周囲に立ち並んで彼を陰鬱いんうつにした。その時彼はコゼットのことを考えて、また心が朗らかになるのだった。その災いを消散させるには、コゼットを思う幸福だけで充分だった。

フォーシユルヴァン氏もそれら消えうせた人々のうちにほとんどはいつていた。防寨ぼうさいにいたフォーシユルヴァン氏が、肉と骨とをそなえまじめな顔をしてコゼットのそばにすわつてこのフォーシユルヴァン氏と同一人であるとは、マリユスには信じ難かった。第一の方はおそらく、長い間の昏迷こんめいのうちに現滅した悪夢の一つであろう。その上、ふたりともきわめて謹厳な性格だったので、マリユスはフォーシユルヴァン氏に向かつて何か聞き糺ただすこともでき難かった。聞き糺ただしてみようという考えさえ彼には浮かばなかった。ふたりの間のそういう妙なへだたりは、前に既に指摘しておいたとおりである。ふたりとも共通の秘密を持つていながら、一種の默契によつて、そのことについては互いに一言も交じえない。そういう事実は案外たくさん世にあるものである。ただ一度、マリユスは探りを入れてみたことがあった。彼は会話の中にシャンヴルリー街のことを持ち出して、フォーシユルヴァン氏の方へ向きながら言った。

「あなたはあの街路まちをよく御存じでしょうね。」

「どの街路ですか。」

「シャンヴルリー街です。」

「そういう名前については別に何の考えも浮かびませんが。」とフォーシユルヴァン氏は最も自然らしい調子で答えた。

答えは街路の名前についてであつて、街路そのものについてではなかったが、それでもマリユスはよく了解できるような気がした。

「まさしく自分は夢をみたのだ。」とマリユスは考えた。「幻覚を起こしたのだ。だれか似た者がいたのだろう。フォーシユルヴァン氏はあすこにいたのではない。」

八 行方不明ゆくえのふたりの男

歡喜の情はきわめて大きかつたけれども、マリユスの他の気がかりを全然消すことはできなかつた。

結婚の準備が整えられてる間に、定まった日を待ちながら、彼は人を使って困難な既往

の穿鑿せんさくを細密になさした。

彼は諸方面に恩を被つていた。父のためのもあれば、自分自身のためのもあった。

まずテナルデイエがいた。また彼マリユスをジルノルマン氏のもとへ運んでくれた未知の人がいた。

マリユスはそのふたりの者を探し出そうとつとめた。結婚し幸福になつて彼らのことを忘れようとは思わなかつた。その恩を報じなければ、これから光り輝いたものとなる自分の生活に影がさしはしないかを恐れた。その負債をいつまでも遅滞さしておくことは彼にはできなかつた。楽しく未来にはいつてゆく前に過去の負い目を皆済ましたいと願つた。

たといテナルデイエは悪漢であろうとも、そのためにポンメルシー大佐を救つたという事実を少しも曇らせはしなかつた。テナルデイエは世の中のだれにとつても一個の盜賊だったが、マリユスにとつてだけはそうでなかつた。

そしてマリユスは、ワールローの戦場の実景についてはまったく無知だったので、父はテナルデイエに対して、生命の恩にはなつてゐるが感謝の義務はないという妙な地位に立つてゐる特別の事情を、少しも知らなかつた。

マリユスは種々の人に頼んだが、だれもテナルデイエの行方ゆくえをさがしあてることができ

なかつた。その踪跡そうせきはまったくわからなくなつてゐるしかつた。テナルデイエの女房は予審中に監獄で死んでいた。その嘆かわしい一家のうちで生き残つてゐるのはテナルデイエと娘のアゼルマだけだったが、ふたりとも暗黒の中に没し去つていた。社会の不可知なる深淵しんえんは再び黙々として彼らの上を鎖とぎしていた。その深淵の面には、何かが陥つたことを示してくれ、また錘おもりを投すべき場所を示してくれるような、揺るぎや、震えや、かすかな丸い波紋さえも、もはや見られなくなつていた。

テナルデイエの女房は死に、ブーラトリユエルは免訴となり、クラクズーは消えうせ、おもな被告は脱走してしまつたので、ゴルボー屋敷の待ち伏せの裁判はほとんど空くうに終わつてしまつた。事件はかなり曖昧あいまいのままになつていた。重罪裁判廷はふたりの従犯人で満足しなければならなかつた。すなわちパンシヨール一名プランタニエ一名ビグルナイユとドウミ・リアール一名ドゥー・ミリアールとであつて、ふたりとも審理の上十年の徒刑に処せられた。脱走した不在の共犯人らに対しては、無期徒刑が宣告された。頭目であつて主犯者たるテナルデイエは、同じく欠席裁判所によつて死刑を宣告された。テナルデイエに関して世に残つてゐるものは、その宣告だけで、あたかも柩ひつぎのそばに立つてゐる蠟燭ろうそくのよ
うに、彼の葬られた名前の上に凄惨せいさんな光を投じていた。

その上この処刑は、再び捕縛される恐れのためにテナルデイエを最後の深みへ追いやってしまったので、彼をおおう暗黒をいつそう深からしめるのみだった。

もひとりの男に關しては、すなわちマリユスを救つてくれた無名の男に關しては、初めのうち多少搜索の結果が上がったけれど、それから急に行き止まってしまった。すなわち、六月六日の夜フィーユ・デュカルヴェール街へマリユスを乗せてきた辻馬車つじばしやを見いだすことができた。その御者の言うところはこうであつた。六月六日、シヤン・ゼリゼー川岸通りの大溝渠だいこうきよの出口の上で、午後の三時から夜まで、ある警官の命令で彼は「客待ち」をしていた。午後の九時ごろ、川の汀みぎわについてる下水道の鉄格子口てつこうしぐちが開いた。ひとりの男がそこから出てきて、死んでるらしい他の男を肩にかついでいた。そこに番をしていた警官は、生きている男を捕え、死んでいる男を押さえた。警官の命令で、御者は「その人たち」を馬車に乗せた。最初フィーユ・デュ・カルヴェール街へ行った。死んでる男はそこでおろされた。その死んでる男というのはマリユス氏であつた。「こんどは」生きていたけれども、御者は確かに見覚えていた。それからふたりはまた彼の馬車に乗った。彼は馬に鞭むちをあてた。古文書館の門から数歩の所で、止まれと声をかけられた。その街路で彼は金をもらつて返された。警官はもひとりの男をどこかへ連れて行つた。それ以上のこと

は少しも知らない。その晩は非常に暗かった。

前に言つたとおり、マリユスは何にも覚えていなかった。防寨ぼうさいの中であおむけに倒れかかる時背後から力強い手でとらえられたことだけを、ようやく思い出した。それから何にもわからなくなった。意識を回復したのはジルノルマン氏の家においてだった。

彼は推測に迷つた。

御者の言う男が彼自身であることは疑いなかった。けれども、シャンヴルリー街で倒れてアンヴァリード橋近くのセーヌ川みぎわの汀で警官から拾い上げられたとは、どうしたのであつたらうか。だれかが彼を市場町からシャン・ゼリゼーまで運んでくれたには違いなかった。だがどうして？ 下水道を通つてか。それにしては驚くべき献身的な行為である。

だれかしら。だれだろうか？

マリユスがさがしてるのはその男であつた。

彼の救い主であるその男については、何にもわからず、何らの踪跡そうせきもなく、少しの手掛かりもなかった。

マリユスは警察の方には内々にせざるを得なかつたが、それでもついに警視庁にまで探索を進めてみた。しかしそこでも他の所と同じく、何ら光明ある消息は得られなかつた。

警視庁では辻馬車つじばしやの御者ほどもその事件を知っていなかった。六月六日大溝渠だいこうぎよの鉄の扉とびらの所でなされた捕縛などということは少しも知られていなかった。その件については何ら警官の報告も届いていなかった。警視庁ではそれを作り話だと見なした。それを捏造ねつぞうしたのは御者だとされた。御者というものは、少し金をもらいたいと思えば何でもやる、想像の話でもこしらえる。とは言うものの、その事柄はいかにも確からしかった。マリユスはそれを疑い得なかった。少なくとも、上に述べたとおり、自分がその男だということ
は疑い得なかった。

その不思議な謎においてはすべてが不可解だった。

その男、氣絶したマリユスをついで大溝渠だいこうぎよの鉄格子てつこうしき口から出て来るのを御者が見たというその不思議な男、ひとりの暴徒を救助してゐる現行を見張りの警官から押さえられたというその不思議な男、彼はいったいどうなったのか？ 警官自身はどうなったのか？ なぜその警官は口をつぐんでいたのだろうか。男はうまく逃走してしまつたのであるうか。彼は警官を買収したのであるうか。マリユスがあらん限りの恩になつてゐるその男は、なぜ生きてゐるしだに伝えてこなかつたのか。その私心のない行ないは、その献身的な行ないにも劣らず驚くべきものだった。なぜその男は再び出てこなかつたのか。おそらく

彼はいかなる報酬を受けてもお足りなかったのかも知れないが、しかしだれも感謝を受けて不足だとするはずはない。彼は死んだのであろうか、どういう人であったろうか、どういふ顔をしていたのか？ それを言い得る者はひとりもなかった。その晩は非常に暗かったと御者は答えた。バスケットとニコレットとはすっかり狼^{ろうばい}狽^{ばい}して、血にまみれた若主人にしか目を注がなかった。ただ、マリユスの悲惨な帰着を蠟^{ろうそく}燭^{そく}で照らしていた門番だけが、問題の男の顔をながめたのであるが、その語るところはこれだけだった、「その人は恐ろしい姿だった。」

マリユスは探査の助けにもと思つて、祖父のもとへ運ばれてきた時身につけていた血に染んだ服をそのまま取つて置かした。上衣を調べてみると、裾^{すそ}が妙なふうに裂けていた。その一片がなくなつていた。

ある晩マリユスは、その不思議なできごとや、試みてみた数限りない探査や、あらゆる努力が無効に終わったことなどを、コゼットとジャン・ヴァルジャンとの前で話した。ところが「フォーシユルヴァン氏」の冷淡な顔つきは彼をいら立たした。彼はほとんど憤怒の震えを帯びてゐる強い調子で叫んだ。

「そうです、その人はたといどんな人であつたにせよ、崇高な人です。あなたはその人の

したことがわかりますか。その人は天使のようにやってきたのです。戦いの最中に飛び込んで、私を奪い去り、下水道の蓋ふたをあけ、その中に私を引きずり込み、私をになつて行かなければならなかつたのです。恐ろしい地下の廊下を、頭をかがめ、身体を曲げ、暗黒の中を、汚水の中を、一里半以上も、背に一つの死骸しかいをになつて一里半以上も、歩かなければならなかつたのです。しかも何の目的でかと言えば、ただその死骸を救うということだけです。そしてその死骸が私だつたのです。彼はこう思つたのでしよう。まだおそらく生命の影が残つてゐるらしい、このかすかな生命のために自分一身を賭としてみよう。しかも彼は自分の一身を、一度だけではなく幾度も危険にさらしたのです。進んでゆく一歩一歩が皆危険だつたのです。その証拠には、下水道を出るとすぐに捕えられたのもわかりません。どうです、彼はそれだけのことをやつたのです。しかも何らの報酬をも期待してはいなかつたのです。私は何者だつたのでしよう、ひとりの暴徒にすぎなかつたのです、ひとりの敗北者にすぎなかつたのです。ああ、もしコゼットの六十万フランが私のものであつたら……。」

「それはあなたのものです。」とジャン・ヴァルジャンはさえぎつた。

「そうなれば、」とマリユスは言った、「あの人を見つけ出すために私はそれを皆投げ出

してもかまいません。」

ジャン・ヴァルジャンは黙っていた。

第六編 不眠の夜

一 一八三三年二月十六日

一八三三年二月十六日から十七日へかけた夜は、祝福されたる夜であつた。夜の影の上には天が開けていた。マリユスとコゼツトとの結婚の夜だつた。

その日は実に麗しい一日だつた。

それは祖父が夢想したような空色の祝典ではなく、新郎新婦の頭上に天使や愛の神が飛び回る夢幻的な祝いではなく、門の上に美しい彫刻帯をつけるのにふさわしい結婚ではなかつた。しかしそれは楽しい微笑^{ほほえ}んでる一日だつた。

一八三三年の結婚式のありさまは、今日とは非常に異なつていた。新婦を連れ、教会堂から出るとすぐに逃げ出し、自分の幸福をはずかしがって身を隠し、破産者のように人を避ける様子とソロモンの賛歌のような歓喜とを一つにするという、あのイギリスふうの雅

致は、まだフランスに行なわれていなかった。その楽園を馭馬車の動搖に任し、その神秘を馬車の軋きしる音で貫かせ、旅籠屋はたごやの寢床を結婚の床とし、そして一生のうちの最も神聖な思ひ出を、馭馬車の車掌や宿屋の女中などと差し向かいになった光景に交じえながら、一晩だけの卑俗な寢床に残してくるといふ、そういうやり方のうちに、貞節な微妙な謹直な何かがあることは、まだ了解されていなかった。

現今十九世紀の後半においては、区長とその飾り帯、牧師とその法衣、法律と神、それだけでは足りなくなっている。それに加うるに、ロンジユモアの御者（訳者注 美声を持ったある馭馬車の御者が結婚の間ぎわに女をすててオペラ役者になって浮かれ歩くという歌劇中の人物）をもつてしななければならない。赤い縁取りと鈴ボタンのついている青い上衣、延べ金の腕章、緑皮の股衣、尾を結んだノルマンディー馬への掛け声、にせの金モール、塗り帽子、髪粉をつけた変な頭髮、大きな鞭むち、および丈夫な長靴ながぐつ。けれどもフランスではまだ、イギリスの貴族がするように、新郎新婦の馭馬車の上に底のぬけた上靴や破れた古靴などをやたらに投げつけるほど、優美のふうが進んではない。その風習は、結婚の当日伯母の怒りを買って古靴を投げつけられたのがかえって僥倖ぎようこうになつたという、マールボルーあるいはマルブルーク公となつたチャーチル（訳者注 十八世紀はじめのイギ

リスの將軍でおどけ唄の主人公として伝説的の人物となった人）に由来するものである。そういう古靴や上靴は、まだフランスの結婚式にははいつてきていない。しかし気長に待つがよい。いわゆるいい趣味はだんだんひろがつてゆくもので、やがてはそれも行なわれるようになるだろう。

一八三三年には、また百年以前には、馬車を大駆けにさせる結婚式などというものは行なわれていなかった。

変に思われるかも知れないが、その頃の人の考えでは、結婚というものはごく打ち解けた公おおやけの祝いであり、淳じゆんぼく朴みだな祝宴は家庭の尊厳を汚すものではなく、たといそのにぎわいは度を越えようと、猥みだらなものでさえなければ、少しも幸福の妨げとなるものではないとされ、また、やがて一家族が生まれいずべきふたりの運命の和合をまず家の中で始め、同どうせい棲くさび生活がその楔くさびとして長く結婚の室へやを有することは、至つて尊い善良なことだとされていた。

そして人々は、不謹慎にも自宅で結婚をしたのである。

マリユスとコゼットとの結婚も、現今すた廃つてゐるその風習に従つて、ジルノルマン氏の家でなされた。

教会堂に掲示すべき予告、正式の契約書、区役所、教会堂、それら結婚上の仕事はごく当然な普通なことではあるが、いつも多少の面倒をきたすものである。そして二月十六日まででなければすつかり準備ができ上がらなかつた。

しかるに、われわれはただ正確を期するためにこの一事を言うのであるが、十六日はちようど謝肉祭末日の火曜日だつた。それで人々はいろいろ躊躇ちゆうちよしたり気にかれたりし、ことにジルノルマン伯母おばはひどく心配した。

「謝肉祭末日なら結構だ。」と祖父は叫んだ。「こういう諺ことわざがある。

謝肉祭末日の結婚ならば

謝恩を知らぬ子供はできない。

是非ともやろう。十六日にきめよう。マリユス、お前は延ばしたいか。」

「いいえ、ちつとも。」と恋人は答えた。

「ではその日が結婚だ。」と祖父は言つた。

それで、世間のにぎわいをよそにして、十六日に結婚式があげられた。その日は雨が降つた。けれども、たとい他の者は皆雨傘あまがさの下にいようとも、恋人らがなめる幸福の蒼そ天うてんは、常に空の片すみに残つてるものである。

その前日、ジャン・ヴァルジャンはジルノルマン氏の面前で、五十八万四千フランをマリユスに渡した。

結婚は夫婦財産共有法によつてなされたので、契約書は簡単だった。

トウーサンはジャン・ヴァルジャンに不用となったので、コゼットが彼女を引き取つて、小間使いの格に昇進させた。

ジャン・ヴァルジャンの方は、ジルノルマン家のうちに特に彼のために設けられたきれいな室^{へや}を提供された。そして、「お父様^{とうさま}、どうかお願いですから、」とコゼットが切に勧めるので、彼も仕方なしに、その室に住もうというおおよその約束をした。

結婚の定日の数日前、ジャン・ヴァルジャンに一事が起こった。すなわち右手の親指を少し負傷したのである。大した傷ではなかった。そして彼はそれを気にかけてり包帯したりまたは調べてみたりすることをだれにも許さなかった、コゼットにも許さなかった。それでも彼は、その手を布で結わえ、腕を首からつらなければならなかった。そして署名することができなくなつた。ジルノルマン氏がコゼットの後見監督人として彼の代わりをした。

われわれは読者を区役所や教会堂まで連れて行くことをよそう。人は通例そこまでふた

りの恋人について行くものでなく、儀式が結婚の花束をボタンの穴にさすとすぐ、背を向けて立ち去るものである。だからわれわれはここに一事をしるすに止めよう。その一事は、もとより婚礼の一行からは気づかれなかつたことであるが、フィーユ・デュ・カルヴェール街からサン・ポール教会堂までの道程の途中で起こつたものである。

当時、サン・ルイ街の北端で舗石しきいしの修復がされていて、パルク・ロアイヤル街から先は往来がふさがれていた。それで婚礼の馬車はまっすぐにサン・ポールへ行くことができず、どうしても道筋を変えなければならなかつた。一番簡単なのは大通りへ回り道をすることだつた。ところがちやうど謝肉祭末日なので大通りには馬車がいっぱいになつてゐるうと、客のひとりは注意した。「なぜです？」とジルノルマン氏は尋ねた。「仮装行列があるからです。」すると祖父は言った。「それはおもしろい。そこから行きましょう。この若い者たちは結婚して、これから人生のまじめな方面にはいろいろとするんです。仮装会を少し見せるのも何かのためになるでしょう。」

一同は大通りから行くことにした。第一の婚礼馬車には、コゼットとジルノルマン伯母おばとジルノルマン氏とジャン・ヴァルジャンとが乗つた。マリユスは習慣どおり花嫁と別になつて第二の馬車に乗つた。婚礼の行列はフィーユ・デュ・カルヴェール街を出るとすぐ

に、マドレーヌとバステューユの間を往来してゐる絶え間のない長い馬車の行列の中には入り込んだ。

仮装の人々は大通りにいつぱいになっていた。時々雨が降つたけれども、パイヤスやパントロンやジルなどという道化者らはそれに臆おくしもしなかつた。その一八三三年の冬の上ぎげんさのうちにパリーはヴェニスの町のようになつてゐた。今日ではもうそういう謝肉祭末日は見られない。今日存在しているものは皆広い意味の謝肉祭であつて、本当の謝肉祭はもはやなくなつてゐる。

横町は通行人でいつぱいになつており、人家の窓は好奇な者でいつぱいになつてゐた。

劇場の回廊の上にある平屋根には見物人が立ち並んでゐた。仮装行列のほかにもまた、謝肉祭末日の特徴たるあらゆる馬車の行列が見られた。ちやうどロンシャンにおけるがように、つじばしや辻馬車、しやうようばしや市民馬車、しょうようばしや逍遙馬車、ほろこばしや幌小馬車、二輪馬車、などが警察の規則で互いに一定の距離を保ち、あたかもレールにはめ込まれたようにして、整然と進んでゐた。それらの馬車の中にある者はだれでも、見物人であると同時にまた人から見物されてゐた。巡査らは、平行して反対の方向へ行くその間断なき二つの行列を、大通りの両側に並ばせ、その二重の運行が少しも妨げられないように、馬車の二つの流れを、一つは上手かみてのアンタン

大道の方へ、一つは下手しもてのサン・タントアーヌ郭外の方へと、嚴重に監視していた。上院議員や大使などの紋章のついた馬車は、道の中央を自由に往来していた。ある壯麗なおもしろい行列、ことに飾り牛の行列なども、同様の特権を持っていた。そういうパリーの快活さのうちに、イギリスはその鞭むちを鳴らしていた、すなわちセーモアー卿と一般に紳名あだなさされてる馱馬車は、大きな音を立てて走り過ぎていた。

二重の行列は、羊飼いの番犬のように並んで駆けてる市民兵で付き添われていたが、その中には、爺じいさんや婆さんたちがいっぱい乗り込んでる正直な家族馬車が交じっていて、その戸口には仮装した子供の鮮やかな一群が見えていた。七歳ばかりの道化小僧どうけこそうや六歳ばかりの道化娘らで、公然と一般の遊樂に加わってることを感じ、道化役者の品位と役人のしかつめらしさとをそなえてる、愉快な少年少女らであった。

時々、馬車の行列のどこかに混雑が起こり、両側のどちらかの列に結び目ができて、それが解けるまで立ち止まることもあった。一つの馬車に故障が起これば、それですぐに全線が動けなくなった。しかしやがて行進は始まるのだった。

婚礼の馬車は、バステイーユの方へ向かって大通りの右側を進んでる列の中にはいつていた。ところがポン・トー・シュー街の高みで、しばらく行列が止まった。それと同時に、

マドレーヌの方へ進んでる向こう側の行列も同じく行進を止めた。そして行列のちようどその部分に一つの仮装馬車があつた。

それらの仮装馬車は、否むしろそれらの仮装の荷物は、パリーになじみの深いものである。もしそういう馬車が、謝肉祭末日や四旬節中日などに見えないと、人々は何か悪いところがあるのだと思ひ、互いにささやき合う。「何かわけがあるんだな。たぶん内閣が変わるのかも知れない。」通行人の上の方に揺り動かされてるたぐさんのカサンドルやアールカンやコロンビーヌなどの道化、トルコ人から野蛮人に至るまでありとあらゆる滑稽な者、侯爵夫人をかついでるヘラクレス神、アリストファネスに目を伏せさせた巫女みこのように、ラブレールにも耳を押さえさせるかと思われるばかりの無作法な女ども、麻屑あさくずの鬘かつら、薔薇ばら色の肉襦袢にくじゆばん、洒落者しやれものの帽子、斜眼者やぶにらみの眼鏡めがね、蝶になぶられてるジャノー（訳者注 滑稽愚昧な人物）の三角帽、徒歩の者らに投げつける叫び声、腰にあてた拳こぶし、無作法な態度、裸の肩、仮面をつけた顔、ほしいままな醜態、それから花の帽子をかぶつた御者が撒まき散らす無茶苦茶な悪口、そういうのがこの見世物のありさまである。

ギリシヤにはテスピスの四輪馬車が必要であつたが、フランスにはヴァアの辻馬車つじばしやが必要である。（訳者注 前者は悲劇の開祖たるギリシヤ詩人、後者は通俗詩の開祖たるフ

ランス詩人)

いかなるものも皆道化化され得る、道化そのものも更に道化化され得る。古代美の洗面であるサツルヌス祭も、しだいに度を強めてきてついに謝肉祭カルナヴァル末日となっている。昔は葡萄蔓ぶどうづるの冠をかぶり太陽の光を浴び、神々しい半身裸体のうちに大理石で造られたような乳房を示していた酒神祭バッカスも、今日では北部の湿ったぼろの下に形がくずれてきて、仮面行列と言われるようになっていく。

仮装馬車の風習は王政時代のごく古くからあった。ルイ十一世の会計報告によれば、

「仮装辻馬車三台のためにツールヌア貨幣二十」を宮廷執事に使わせている。現今では、それら一群の騒々しい仮装人物らは、たいてい旧式な辻馬車つじばしやの上段にいっぱい立ち並び、あるいは幌ほろをおろした市営幌馬車にがやがやつまっている。六人乗りの馬車に二十人も乗っている。椅子いすや腰掛けや幌の横ながえや轆ながえにまでも乗っている。照灯にまたがっている者さえある。あるいは立ち、あるいは寝ころび、あるいは腰をかけ、あるいは足をねじ曲げ、あるいは脛すねをぶら下げてる。女は男の膝ひざに腰掛ける。遠くから見ると、それらのうようよし頭が妙なピラミッド形をなしている。そしてこの一馬車の者どもは、群集のまんやかに歓喜の山となってそびえている。コレヤパナルやピロン（訳者注 皆諧謔風刺に富んだ

詩人) などのような言葉が、更に隱語を交じえてそれから流れ出る。その上方から群集の上に、野卑な文句が投げつけられる。できる限りたくさんの人を積んでその馬車は、戦利品のようなありさまに見える。前部は喧騒けんそうをきわめ、後部は混雑をきわめている。一同は怒鳴り、喚わめき、吼ほえ、笑い、有頂天になっている。快活の気はわき立ち、譏刺きしは燃え上がり、陽気さは緋衣ひいのようにひろがっている。二匹の瘦馬やせうまは、花を開いてる滑稽を神に祭り上げて引いてゆく。それは哄笑こうしょうの凱旋車がいせんしゃである。

その哄笑は、露骨というにはあまりに皮肉すぎる。実際その笑いには怪しげな気がこもっている。それは一つの使命を帯びてるのである。パリー人に謝肉祭を示すの役目を持つてるのである。

それら野卑無作法な馬車には、何となく暗黒の気が感ぜらるるものであつて、思索家をして夢想到に沈ませる。その中には政府がいる。公人と公娼こうしょうとの不思議な和合がそこにはつきりと感ぜらるる。

種々の醜悪が積み重なつて一つの快活さを作り上げること、破廉恥と卑賤ひせんとを積み上げて民衆を酔わすこと、間諜が醜業をささえる柱となつて衆人を侮辱しながらかえつて衆人を侮辱しながらかえつて衆人を笑わせること、金びかのぼろであり、半ば醜業と光明とで

あり、吠えまた歌っている、その生きた恐ろしい積み荷が、辻馬車の四つの車輪に運ばれてゆくのを見て、群集が喜ぶこと、あらゆる恥辱でできてるその光榮に向かつて、人々が手をたたいて喝采すること、二十の頭を持った喜悅の怪蛇を自分たちのまんなか引き回してもらおうという以外には、群集にとって何らおもしろいにぎわいもないということ、それは確かに悲しむべきことである。しかしどうしたらいいのか。リボンと花とで飾られた汚賤おせんのそれらの車は、公衆の笑いによつて侮辱されながら赦ゆるされているではないか。すべての者の笑いは、一般の墮落を助ける。ある種の不健全なにぎわいは、民衆を分散させて多衆となす。そして多衆にとつては暴君にとつてと同じく、諧諷かいぎやうが必要である。国王にはロクロールがあり、人民にはパイヤスがある（訳者注 前者はルイ十四世の下にいた諧諷をもつて知られし將軍、後者は卑俗な喜劇によく出て来る一種の道化役）。パリイは莊嚴な大都市たることを止むる時には常に狂愚な大都会となる。謝肉祭はその政治の一部分となつている。うち明けて言えば、パリイは好んで破廉恥な喜劇を受け容れる。もし主人があれば、その主人はただ一事をしか求めない、すなわちわれに泥どろを塗つてくれと。ローマも同じ氣質を持つていた。ローマはネロを愛していた。しかるにネロは巨大なる泥塗りに人であつた。

さて、前に言つたとおり、婚礼の行列が大通りの右側に止まつた時偶然にも、仮面をつけた男女が房のようにかたまつて乗り込んでその大きな四輪馬車の一つが、大通りの左側に止まつた。そして仮装馬車はちょうど新婦の馬車と大通りをはさんで向かい合つた。

「おや！」と仮装のひとりが言つた、「婚礼だ。」

「嘘うその婚礼だ。」と他のひとりが言つた。「本物は俺おれたちの方だ。」

そして、婚礼の列の方へ言葉をかけるには少し離れすぎていたし、また巡査の制止の声を恐れていたのも、仮装のふたりは他の方を向いた。

すぐに、仮装馬車の者らはごく忙しくなつた。群集が彼らに悪罵あくばの声をかけ始めた。それは仮装の者らに対する群集の愛撫である。今言葉をかわしたふたりも、仲間の者らといつしよに、衆人に立ち向かわなければならなかつた。彼らは道化者のあらゆる武器を持っていたが、無数の人々の悪あく諛ぎやくを相手にして他を顧みるの余裕がなかつた。そして仮装の者らと群集との間に激しく諧かいぎやく諛ぎやくがかわされた。

そのうちに、同じ馬車に乗つていた他の仮装のふたり、すなわちお爺じいさんのふうをしてばかに大きな黒髭くろひげをつけてる鼻の大きなスペイン人と、黒ビロードの仮面をつけてるごく若いやせたはすっぱ娘むすめとが、やはり婚礼の馬車に目を止めて、仲間の者らと道行人らと

が互いに野次りかわしてゐる間に、低い声で話をした。

彼らのふたりの内緒話は、喧騒けんそうの声に包まれて他にもれなかつた。去来する雨に、あけ放してある馬車の中はすっかりぬれていた。それに二月の風はまだ寒い。スペイン人に答えながら、首筋をあらわにしたはすっぱ娘の方は、震え笑いかつ咳せきをしていた。

その会話は次のとおりだった。(訳者注 以下の会話は隠語を交じえたものと想像していただきたい)

「なあ、おい。」

「なによ、お父とうさん。」

「あの爺さんが見えるか。」

「どの爺さん？」

「向こうの、婚礼馬車の一番先のに乗つてる、こちら側のさ。」

「黒い布で腕をつつてる方の。」

「そうだ。」

「それがどうしたの。」

「どうも確かに見覚えがある。」

「そう。」

「この首を賭けてもいい、この命を賭けてもいい、俺おれは確かにあのパンタン人（パリー人）を知ってる。」

「なるほど今日は、パリーはパンタンだね。」（訳者注 パンタンとは小さな操り人形のことにて仮面道化をさすのであるが、また下層の俗語ではパリーのことをパンタンという）
「少しかがんだらお前に花嫁が見えやしないか。」

「見えない。」

「花婿の方は？」

「あの馬車には花婿はいないよ。」

「なあに！」

「いないよ、もひとりの爺じいさんが花婿なら知らないが。」

「とにかくよくかがんで花嫁を見てくれ。」

「見えやしないよ。」

「じやいいさ。だが手をどうかしてるあの爺さんを、俺は確かに知ってる。」

「爺さんを知ってるったって、それがなにになるんだね。」

「それはわからねえ。だが時には何かになるさ。」

「あたしは爺さんじいなんかあまり気には止めないよ。」

「俺はあいつを知ってる！」

「勝手に知るがいいよ。」

「どうして婚礼の中に出てきたのかな。」

「よけいなことだよ。」

「あの婚礼はどこから出たのかな。」

「あたしが知るもんかね。」

「まあ聞けよ。」

「なに？」

「ちよつと頼まれてくれ。」

「なにを？」

「馬車からおりてあの婚礼の跡をつけるんだ。」

「どうして？」

「どこへ行くのか、そしてどういふ婚礼か、少し知りてえんだ。急いでおりて駆けていけ、

お前は若いから。」

「この馬車を離れることはできないよ。」

「なぜだ。」

「雇われているんだからさ。」

「畜生！」

「はすつば娘になつて警視庁から一日分の給金をもらつてるじゃないかね。」

「なるほど。」

「もし馬車から離れて、警視に見つかろうもんなら、すぐにつかまってしまふ。よく知つてくせに。」

「うん、知つてるよ。」

「今日は、あたしはお上かみから買われた身だよ。」

「それはそうだが、どうもあの爺じいさんが気になる。」

「爺さんののが気になるの。若い娘でもなくせにね。」

「一番先の馬車に乗つてる。」

「だから？」

「花嫁の馬車に乗ってる。」

「それで？」

「花嫁の親に違いねえ。」

「それがどうしたのさ。」

「花嫁の親だというんだ。」

「そうさね、ほかに親はいやしない。」

「まあ聞けよ。」

「なんだね？」

「俺おれは仮面をつけてでなけりや外にはあまり出られねえ。こうしてりや、顔が隠れてるか
らだれにもわからねえ。だが明日あしたになったらもう仮面がなくなる。明日は灰の水曜日（四
旬節第一日）だ。うっかりすりや捕つかまっちゃう。また穴の中に戻らなきやあならねえ。と
ころがお前は自由な身体だ。」

「あまり自由でもないよ。」

「でも俺よりは自由だ。」

「だからどうなのよ？」

「あの婚礼がどこへ行くか調べてもらいたいんだ。」

「どこへ行くか？」

「そうだ。」

「それはわかつてるよ。」

「なに、どこへ行くんだ？」

「カドラン・ブルーへさ。」

「なにそつちの方面じゃねえ。」

「それじゃ、ラーペへさ。」

「それともほかの方かも知れねえ。」

「それは向こうの勝手さ。婚礼なんてものはどこへ行こうと自由じゃないか。」

「まあそんなことはどうでもいい。とにかく、あの婚礼はどういうもので、あの爺じいさんは
どういう男で、またあの人たちはどこに住んでるか、それを俺に知らしてくれというんだ
。」

「いやだよ！ ばかばかしい。一週間もたつてから、謝肉祭の終わりの火曜日にパリーを
通った婚礼がどこへ行つたか調べたつて、なかなかわかるもんじゃやないよ。藁小屋わらこの中に

落ちた針をさがすようなもんだ。わかりっこないよ。」

「でもまあやってみるんだ。いいかね、アゼルマ。」

そのうち二つの列は、大通りの両側で反対にまた動き出した。そして花嫁の馬車は仮装馬車から見えなくなつてしまつた。

二 なお腕をつれるジャン・ヴァルジャン

夢想を実現すること。だれがそれを許されているか。それには天における推薦を得なければならぬ。人は皆自ら知らずして候補に立つ、そして天使らが投票をする。コゼットとマリユスとはその選にはいつていた。

区役所と教会堂におけるコゼットは、燦然^{さんぜん}として人の心を奪つた。彼女の身じたくは、ニコレットの手伝いで重^{おも}にトウーサンがやつたのである。

コゼットは白琥珀^{こはく}の裳衣の上にバンシユ紗^{しや}の長衣をまとい、イギリス刺繡^{ししゅう}のヴェール、みごとな真珠の首環^{くびわ}、橙花^{オレンジ}の帽をつけていた。それらは皆白色だったが、その白づくめの中で彼女は光り輝いていた。美妙的な純潔さが光明のうちに綻^{ほころ}びて姿を変えようとして

ありさまだった。処女が女神になろうとしてるのかと思われた。

マリユスの美しい髪は艶々つやつやとして薫かおっていた。その濃い巻き毛の下には所々に、防ぼうき寨さいでの創痕きずあとである青白い筋が少し見えていた。

祖父は昂然こうぜんとして頭をもたげ、バラス（訳者注 革命内閣時代の華美豪奢な人物）の時代のあらゆる優美さを最もよく集めた服装と態度とをして、コゼットを導いていた。ジャン・ヴァルジャンが腕をつつていて花嫁に腕を貸すことができなかつたので、彼がその代わりをしているのだった。

ジャン・ヴァルジャンは黒い服装をして、そのあとに従いほほえんでいた。

「フォーシユルヴァンさん、」と祖父は彼に言った、「実にいい日ではありませんか。これで悲しみや苦しみはおしまいにしたいもんです。これからはもうどこにも悲しいことがあつてはいけません。まったく私は喜びを主張します。悪は存在の権利を持つものではありません。実際世に不幸な人々がいることは、青空に対して恥ずべきことです。悪は元来善良である人間から来るものではありません。人間のあらゆる悲惨は、その首府として、またその中央政府として、地獄を持っています、言い換えれば悪魔のテユイルリー宮殿を持つてるのです。いやこれは、今では私も過激派のような言い方をするようになりました

かな。ところで私はもう、何ら政治上の意見は持っていません。すべての人が金持ちであるように、すなわち愉快であるように、それだけを私は望んでいるんです。」

あらゆる儀式を完成させるものとして、区長の前と牧師の前とである限りのしかりという答えを発した後、区役所の書面と奥殿の書面とに署名した後、ふたり互いに指輪を交換した後、香炉の煙に包まれて、まっ白な観世模様絹の天蓋てんがいの下に相並んでひざまずいた後、ふたり互いに手を取り合つて、すべての人々から賛美されうらやまれつつ、マリユスは黒服をまとい彼女は白服をまとい、大佐の肩章をつけ鉞まさかりで舗石しきいしに音を立てる案内人のあとに従い、魅せられてる見物人の人垣の間を進んで、両扉りょうひとも大きく開かれてる教堂の表門の下まで行き、再び馬車に乗るばかりになって、すべてが終わった時、コゼットはまだそれが夢ではないかと疑っていた。彼女はマリユスをながめ、群集をながめ、空をながめた。あたかも夢からさめるのを恐れてるがようだった。そのびっくりした不安な様子は言い知れぬ一種の魅力を彼女に添えていた。家に戻るために、彼らはいっしょに相並んで同じ馬車に乗った。ジルノルマン氏とジャン・ヴァルジャンとがふたりに向き合つてすわった。ジルノルマン伯母おばは一段だけ位を落とされて、二番目の馬車に乗った。祖父は言った。「これでお前たちは、三万フランの年金を持つてる男爵および男爵夫人となった

わけだ。「コゼットはマリユスに近く寄り添って、天使のようなささやきで彼の耳根をなでた。「本当なのね。私の名もマリユスね。私はあなたの夫人なのね。」

彼らふたりは光り輝いていた。彼らは、再び来ることのない見いだそうとて見いだせない瞬間にあり、あらゆる青春と喜悦とのまばゆい交差点にあった。彼らはジャン・ブルーヴェールの詩を実現していた。ふたりの年齢を合わしても四十歳に満たなかった。精気のような結婚であつて、そのふたりの若者は二つの百合ゆりの花であつた。彼らは互いに見ることをせず、しかも互いに見とれ合つていた。コゼットはマリユスを光栄の中にながめ、マリユスはコゼットを祭壇の上にながめていた。そしてその祭壇の上とその光栄の中とに、ふたりは共に神となつて相交わり、その奥に、コゼットにとっては霞かすみのうしろに、マリユスにとっては炎の中に、ある理想的なものが、現実的なものが、脣くちづけと夢との会合が、婚姻の枕が、横たわつてゐるのだつた。

過去のあらゆる苦しみは戻つてきて、かえつて彼らを酔わした。苦痛、不眠、涙、煩はんも悶ん、恐怖、絶望、それらのものも今は愛撫と光輝とに姿を変じて、まさにきたらんとする麗しい時間を更に麗しくするように思われた。そしてあらゆる悲しみも今は喜びの装いをする召し使いのように思われた。苦しんだのはいかに仕合わせなことであるか。彼らの

不幸は今や彼らの幸福あけぼのに曙の色を与えていた。ふたりの愛の長い苦悶くもんはついに昇天の喜びに達したのである。

彼らふたりの魂のうちには、マリユスにあつては快樂の色に染められコゼットにあつては貞節の色に染められてる同じ歓喜があつた。彼らは声低く語り合つた。ふたりでプリューメ街の小さな庭をまた見に行こうと。コゼットの長衣ひだの襜はマリユスの上に置かれていた。

そういう日こそは、夢幻の確實との得も言えぬ混同の日である。人は実際に所有した仮想する。種々想像するだけの余裕がまだ残っている。ま昼にあつてま夜中のことを思うその日こそは、実に名状し難い情緒に満ちてるものである。彼らふたりの心の楽しさは、衆人の上にも流れ出し、通りすがりの者らにも喜悅の氣を与えていた。

サン・タントアール街のサン・ポール教会堂の前には、多くの人が立ち止まって、コゼットの頭の上に震える橙花オレンヂを馬車のガラス戸越しにながめていた。

それから一同は、フィュー・デュ・カンヴェール街の自宅に戻つた。マリユスはコゼットと相並んで、かつて瀕死の身体を引きずり上げられたあの階段を、光り輝き昂然こうぜんとして上つていった。貧しい人々は、戸口の前に集まつてもらつた金を分かちながら、ふたり

を祝福した。至る所に花が撒かれていた。家の中も教会堂に劣らずかおりを放っていた。香の次に薔薇の花となつたのである。ふたりは無窮のうちに歌声を聞くような気がし、心のうちに神をいだし、宿命を星の輝く天井のように感じ、頭の上に朝日の光を見るがように思った。突然大時計が鳴った。マリユスはコゼットの美しい裸の腕と、胴衣のレース越しにかすかに見える薔薇色のものとをながめた。そしてコゼットはマリユスの視線を見て、目の中までもまつ赤になつた。

ジルノルマン一家の旧友の多数は、皆招待されていた。人々はコゼットのまわりに集まつて、先を争いながら男爵夫人と彼女に呼びかけた。

今は大尉になつてテオデュール・ジルノルマン将校も、徒弟ボンメルシーの結婚に列するため、任地のシャルトルからやつてきていた。コゼットは彼の顔を忘れていた。

彼の方では、いつも婦人らからきれいだと思われてばかりいたので、もうコゼットのことも頭に残つていなかった。

「この槍騎兵の話^{そうきへい}を本当にしないでよかつた。」とジルノルマン老人はひとりで思った。コゼットはこれまでにないほどジャン・ヴァルジャンに対してやさしかった。また彼女はジルノルマン老人としつくり調子が合っていた。老人が盛んに警句や格言を使って喜び

を述べ立ててる間、彼女は愛と善良さとかおりのように発散さしていた。幸福はすべての者が楽しからんことを欲するものである。

彼女はジャン・ヴァルジャンに話しかける時は、少女時代の声の調子に戻っていた。また、ほほえみを送って彼に甘えていた。

饗応きようおうの宴は食堂に設けられていた。

昼間のように明るい灯火は、大なる喜びの席にはなくてはならないものである。靄もやと暗さは決して幸福な人々の好むものではない。彼らは黒い姿となるのを喜ばない。夜はよいが、暗闇くらやみはいけない。もし太陽が出ていなければ、それを別に一つこしらえなければならぬ。

食堂は楽しい器具の巢であった。中央には、まっ白に光ってる食卓の上に、平たい延べ金の下飾りがついてるヴェニス製のだいしよくだい大燭台が一つあって、その四方の枝のろうそく蝋燭に囲まれたまんなかには、青や紫や赤や緑などに塗った各種の鳥がとまっていた。おおしよくだい大燭台のまわりには多くの飾り燭台があり、壁には三枝もしくは五枝に分かれた反射鏡がかかっていた。鏡、水晶器具、ガラス器具、皿、磁器、陶器、土器、金銀細工物、銀の器具など、すべてが輝き笑っていた。燭台の間々には花輪がいっぱい積まれていて、至る所光か花かで

あつた。

次の間では、三つのバイオリンと一つの笛とが制音器をつけて、ハイドンの四部合奏曲を奏していた。

ジャン・ヴァルジャンは客間の入り口の横手の椅子にすわっていて、扉が開くとほとんどそのうしろに隠れるようになっていた。食堂にはいるちよつと前に、コゼットはふと引きずられるように彼のそばに寄つてゆき、両手で花嫁の衣裳をひろげながら深い愛敬の様子を示し、やさしいいたずらそうな目つきをして尋ねた。

「お父さま、あなたおうれしくて？」

「ああ、」とジャン・ヴァルジャンは言った、「うれしい。」

「では笑つてちようだいな。」

ジャン・ヴァルジャンは笑顔をした。

やがて、バスケットは食事の用意が整つたことを告げた。

客人らは、コゼットに腕を貸してゐるジルノルマン氏のあとについて、食堂にはいり、予定の順序で食卓のまわりに並んだ。

花嫁の右と左とにある二つの大きな脇掛け椅子には、一つにジルノルマン氏がすわり、

一つにジャン・ヴァルジャンがすわることになっていた。ジルノルマン氏は席についた。しかし一つひじかの肱掛いすけ椅子にはだれもいなかった。

人々は「フォーシユルヴァン氏」の姿を見回した。

彼はもうそこにいなかった。

ジルノルマン氏はバスクに声をかけた。

「フォーシユルヴァンさんはどこにおらるるか知っていないか。」

「はい存じております。」とバスクは答えた。「フォーシユルヴァン様は、お手の傷が少し痛まれて、男爵お二方と会食ができないから、旦那様だんなさまよろしく申し上げてほしいと

私にお伝えでございました。そして今晚は御免を被つて、明朝来るからと申されて、ただ今お帰りになりました。」

その空からの肱掛いすけ椅子のために、婚礼の宴は一時白しらけた。しかしフォーシユルヴァン氏は不在でも、ジルノルマン氏がそこにいて、ふたり分にぎやかにしていた。もし傷が痛むようならフォーシユルヴァン氏は早くから床につかれた方がよいが、しかしそれもちよつとしたいいたに過ぎない、と彼は断言した。そしてその言葉でもう充分だった。それにもとより、一座喜びにあふれてる中であつてその薄暗い一隅いちぐうなどは何でもないことだった。

コゼットとマリユスはもう幸福の影しか頭に映らないような利己的な至福な瞬間にあつた。それにまたジルノルマン氏は妙案を思いついた。「ところでその脇掛け椅子が空あいている。マリユス、お前がそこにすわるがいい。伯母おばさんの方に権利はあるんだが、きつとお前に許してくれるよ。その席はお前のだ。それが正当で、また至極おもしろい。好運児と幸運女とは相並ぶべしだ。」人々は皆喝かつさい采さいした。マリユスはコゼットのそばにジャン・ヴァルジャンの席についた。そして万事うまくいったので、初めジャン・ヴァルジャンの不在を悲しく思っていたコゼットも、ついに満足するようになった。マリユスがジャン・ヴァルジャンの代わりになった時、コゼットはもう神を恨まなかつた。彼女は白しろ繻じゆす子うわぐの上うわぐ靴つをつけた小さなやさしい足を、マリユスの足の上にのせた。

脇ひしか掛け椅子いすはふさがり、フォーシウルヴァン氏はなくなつてしまい、何も欠けた所はなかつた。そして五分もたつうちには、食卓全体はすべてを忘れた上うわぐきげんで、端から端まで笑いさざめいていた。

食後の茶菓子の時になつて、ジルノルマン氏はたち上がり、九十二歳の高齡のために手が震えるのでこぼれないようにと、半分ばかり注がしたシャンパンの杯を取り、新夫婦の健康を祝した。

「お前たちは二度の説教をのがれることはできない。」と彼は声を張り上げた。「朝に司祭の説教があり、晩に祖父の説教があるのだ。まあわしの言うことを聞くがいい。わしはお前たちに一つの戒めを与える、それは互いに熱愛せよということだ。わしはくどくど泣き言を並べないで、すぐに結論に飛んでゆく、すなわち幸福なれということだ。万物のうちで賢いのはただ鳩はとだけである。ところが哲学者らは言う、汝の喜びを節せよと。しかるにわしは言う、汝の喜びを奔放ならしめよと。むちやくちやにのぼせ上がるがいい、有頂天になるがいい。哲学者どもの言うことは阿呆あほうの至りだ。彼らの哲学なんかはその喉のどの中につき戻すがいいのだ。かおりが多すぎ、開いた薔薇ばらの花が多すぎ、歌うたつてる鶯うぐいすが多すぎ、緑の木の葉が多すぎ、人生に曙が多すぎ、などということがあり得ようか。互いに愛しすぎるといふことがあり得ようか。互いに気に入るということがあり得ようか。気をつけるがいい、エステル、お前はあまりにきれいすぎる、気をつけるがいい、ネモラン、お前はあまりに麗うつくしすぎる（訳者注 フロリアンの牧歌中の若い女と男）、などというのは何というばかげたことだ。互いに惑わしよろこばし夢中にならせすぎるといふことがあり得るものか。あまり上きげんすぎるといふことがあり得るものか。あまり幸福すぎるといふことがあり得るものか。汝の喜びを節せよだと、ばかな。哲学者どもを打ち倒すべし

だ。知恵はすなわち歓喜なり、歓喜せよ、歓喜すべし。いったいわれわれは、善良だから幸福なのか、もしくは幸福だから善良なのか？ サンシー金剛石は、アルレー・ド・サンシーの所有だったからサンシーといわれるのか、またはサン・シー（百六）カラットの重さがあるからサンシーと言われるのか？ そういうことはわしにはわからない。人生はそんな問題で満ちている。ただ大切なのは、サンシー金剛石を所有することだ、幸福を所有することだ。おとなしく幸福にしているがいい。太陽に盲従するがいい。太陽とは何であるか？ それは愛だ。愛と言わば婦人だ。ああそこにこそ全能の力はあるんだ。それが婦人だ。この過激派のマリユスに聞いてみるがいい、彼がこのコゼットという小さな暴君の奴隷どれいでないかどうかを。しかも甘んじてそうなるではないか。実に婦人なるかなだ。ロベスピエールのごとき者でさえ長く地位を保つことはできない。常に婦人が君臨するので。わしがまだ王党だというのも、この婦人の王位に対してのことだ。アダムは何であるか？ それはイブの王国だ。イヴにとつては八九年（一七八九年）の事変なんかはない。百合ゆりの花を冠した国王の笏しやくはあった、地球を上へのせた皇帝の笏はあった、鉄でできたシヤールマーニユ大帝の笏はあった、黄金でできたルイ大王の笏はあった、けれども革命は、親指と人差し指とで、一文のねうちもない藁わらくず屑くずのようにそれらをへし折ってしまった。

廃せられ砕かれ地に投ぜられて、もはや笏はなくなっている。ところが、蘭麝らんじやのかおりを立てる刺繡ししゅうした小さなハンカチに対して、革命をやれるならやってみるがいい。一つ見たいものだ。やってみなさい。なぜそれが強固かと言えば、一片の布だからだ。ああ諸君は十九世紀ですね。どうです。われわれは十八世紀の者です。そしてわれわれも諸君と同じくらいにばかであった。しかし諸君は、ころりがコレラ病と言われるようになり、ブーレ踊りがカチューシャ舞踏と言われるようになったからと言って、世界に大変化をきたしたと思つてはいけません。根本においては、常に婦人を愛せざるを得ないでしょう。その原則からはだれだつてなかなか出られるものではない。それらの鬼女がわれわれの天使である。そうだ、愛と婦人と唇くちづけ、その世界からだれも出られるものではない。わしはむしろそこにはいりたいと思うくらいだ。ヴィーナスの星（金星）が、天空の偉大な洒落しやれ女おんなが、大洋のセリメーヌが、あらゆるものをおのれの下に静めながら、海の波濤はとうをも一婦人のように物ともしないで、無窮の空に上つてゆくのを、諸君のうちに見られた方がありますか。大洋はすなわち謹厳なアルセストです（訳者注　モリエールの戯曲「人間ざらい」中の主人公にてセリメーヌはその中の嬌艶な女）。ところで彼がいかに苦にがい顔かほをしていようと、ヴィーナス（愛の神）が現われてくれば、ほほえまざるを得ないのである。

この粗暴な獣も屈服してしまふ。われわれにしても同じことだ。憤怒、暴風、雷鳴、天井まで水沫しぶきが飛んでいようと、ひとりの婦人が舞台に現われるれば、一つの星が上つてくれば、平伏してしまふのである。マリユスは六カ月前には戦争をしていた。しかるに今日は結婚をしている。それは結構なことだ。マリユス、そうだとも、コゼット、お前たちのやることはもつともだ。大胆にふたり頼り合つて生きてゆくがいい、互いに恋し合うがいい、さんざん他の者をうらやませるがいい、互いに崇拜し合うがいい。お前たちふたりの嘴くちばしで、地上にありとあらゆる幸福の藁わら屑くずをつまみ取つて、それで生涯の巢を作るがいい。愛し愛さるることは、若い時には麗しい奇蹟のような気がするものだ。だがそれは、自分たちが始めて考え出したことだと思つてはいけない。このわしもやはり夢をみたり、思いを走はせたり、憧れあこがをいだいたりしたことがある。わしもやはり、月のように輝いた魂を自分のものにしたことがある。恋愛は六千歳の子供だ。恋愛は長い白はく髻ぜんをつけてもいい者なんだ。メトセラ（訳者注 ノアの祖父にて九百六十九年生きたと言われる人物）もキューピッドに比ぶれば鼻たらし小僧にすぎない。六十世紀も前から男女は互いに愛しながら困難をきりぬけてきた。狡猾こうかつな悪魔は人間をきらい始めたが、いつそう狡猾な人間は女を愛し始めた。そうして、悪魔から受ける災いよりもいつそう多くのいいことをした。この妙

策は、地上の楽園の初めから見いだされていたのである。この発明は古くからのものだが、いつまでも新しいものである。それを利用しなければいけない。フィレモンとポーシスになるまでは、まずダフニスとクロエになるがいい（訳者注 前者は近代のオペラの中のふたりの恋人、後者はギリシヤの物語の中のふたりの恋人）。お前たちがふたりいつしよにいさえすれば、何も不足なものはなく、コゼットはマリユスにとって太陽となり、マリユスはコゼットにとって全世界となる、そういうふうでなくてはいかん。コゼット、夫のほえみをお前の晴天とするがいい、マリユス、妻の涙をお前の雨とするがいい。そして願わくば、お前たちの家庭に決して雨が降らないようにな。お前たちは恋愛結婚といういい籤くじを引きあてた。その大変な賞品を得たのだから、それを大事にし、鍵かぎをかけてしまつて置き、やたらに使つてしまわないで、互いに愛し合い、その他のことは顧みないでいい。わしが言うことをよく心に止めておかなくてははいかん。これは良ボンサンス識だ。良識は決して人を誤るものではない。互いに信仰し合わなくてははいかん。だれにでも神を拝む独特のやり方があるものだ。ところで神を拝む最もいい方法は、自分の妻を愛することだ。私はお前を愛する！ というのがわしの教理要領だ。だれでも愛を持つてるものはすなわち正教派だ。アンリ四世の誓投詞では飽食と酩酊めいていとの間に神聖というものが置かれていた。す

なわち酔つ払いの神聖なる腹！（訳者注 語気を強めるために、よし、畜生、などというのと同じ意味のもの）しかしわしはそういう宗派ではない。それには婦人が忘れられて。アンリ四世の誓投詞にそういうことがあるのはわしの意外とするところだ。諸君、婦人なるかなです。人はわしを老人だと言う。しかし不思議にもわしは自分ながら若返ってくるような気がする。わしは森の中に行つてむつこと睦言を聞きたいくらいだ。麗しく幸福である道を心得てるそれらの若者どもは、わしの心を酔わしてくれる。もしだれか見たいというなら、すてきな結婚をしてみせてもいい。いずれの点から考えても、神がわれわれ人間を作つたのは、こういうことをさせるためだつたに違いない、すなわち、夢中にかわいがり、喋々ちようちようなんなん々々し、美しく着飾り、鳩のようになり、牡おんどり鶏のようになり、朝から晩まで恋愛をつつつき回し、かわいい妻のうちに自分の姿を映してみ、得意になり、意気揚々として、そ反りくり返ることだ。それが人生の目的である。御免を被つて申せば、われわれ老人がまだ若い頃に考えていたことは、そういうようなことだつた。ああその頃は、いかにあでやかな女が、愛くるしい顔ややさしい姿が、たくさんいたことだろう！ わしはその中を荒し回つたものだ。すべからく互いに愛し合うべし。もし愛し合うことがなかったならば、春があつたとて何の役に立つかわしにはわからない。そうなつたらわしはむ

しろ神に願つて、神がわれわれに示してくれる美しいものを皆寄せ集め、それをわれわれから取り戻し、花や小鳥やきれいな娘を、再びその箱に閉じ込めてもらいたいくらいだ。子供たちよ、この好々爺こうこうやの祝福を受けてくれ。」

その一晚の饗宴きやうえんは、にぎやかで快活で楽しいものだった。一座を支配する祖父の上きげんさは、すべてのものの基調となり、各人はほとんど百歳に近い老人のへだてない態度に調子を合わせていた。舞踏も少し行なわれ、また盛んに談笑された。甘えつ児の婚禮だった。高砂たかさごの爺さんじいを招いてもいいほどだった。それにまた、高砂の爺さんはジルノルマン老人のうちに含まれていた。

かくて大騒ぎをした後に、静寂せいじやくが落ちてきた。

新夫婦は退いていった。

十二時少し前に、ジルノルマン家は寺院のようにひっそりとなった。

ここでわれわれは筆を止めよう。結婚の夜の入り口には、ひとりの天使が立っていて、ほほえみながら口に指をあてている。

愛の祝典があげらるる聖殿に対しては、人の魂は瞑想めいそうにはいってゆく。

それらの人家の上には光輝があるに違いない。その中にこもってる喜びは、光となって

石の壁を通し、ほんのりと暗黒を照らすに違いない。その運命に関する神聖な祝いは、必ずや天国的な光明を無窮のうちに送るに相違ない。愛は男女の融合が行なわれる崇高な坩堝つぼである。一体と三体と極体と、人間の三位一体がそれから出てくる。かく二つの魂が一つとなつて生まれ出ること、影にとつては感動すべきことに違いない。愛する男はひとりの牧師である。歓喜せる処女はびつくりする。かかる喜悅のあるものは神のもとまで達する。真に結婚がある所には、すなわち恋愛がある所には、理想もそれに交じつてくる。結婚の床は、暗闇くらやみの中の一隅あけぼのに曙を作り出す。もし上界の恐るべきまた麗しい象かたちを肉眼で見得るものとするならば、夜の形象が、翼のある見知らぬ者らが、目に見えない境を過ぎりゆく青色の者らが、身をかがめて、輝く人家のまわりに暗い頭を寄せ集め、満足し祝福しつつ、処女の新婦を互いにさし示し、やさしい驚きの様子をして、その聖い顔きよの上に人間の至福の反映を浮かべているのを、おそらく人は見るであろう。もしその極致の瞬間に、歓喜に眩惑げんわくせるふたりの者が、他にだれもないと信じつつも耳を澄ますならば、飛びかわす翼の音を室の中に聞くであろう。完全なる幸福は、天使をも参与させるものである。その小さな暗い寢所は、全天空を天井としている。愛に聖められた二つの脣くちびるが、創造のために相接する時、その得も言えぬ脣くちつけの上には、星辰せいしんの広漠こうぼくたる神秘のうち

に、必ずや一つの震えが起るに相違ない。

それらの幸福こそ真正なるものである。それらの喜びを外にしては真の喜びは存しない。愛、そこにこそ唯一の恍惚たる喜びがある。他のすべては皆嘆きである。

愛しもしくは愛した、それで充分である。更に求むることをやめよ。人生の暗い襞のうちに見いだされ得る真珠は、ただそれのみである。愛することは成就することである。

三 側より離さざる物

ジャン・ヴァルジャンはどうなったか？

コゼットのやさしい命令で笑顔をしたあと間もなく、だれからも注意を向けられていないのに乗じて、ジャン・ヴァルジャンは立ち上がり、人に気づかれぬうちに次の間へ退いた。八カ月以前に、彼が泥と血と埃とでまっ黒になって、祖父のもとへその孫を運んではいつてきたのも、やはりその同じ室へであった。今やその古い壁板は、緑葉と花とで飾られていた。かつてマリユスが横たえられた安楽椅子には、音楽師らが集まっていた。黒い上衣と短いズボンと白い靴足袋と白い手袋とをつけたバスケットは、これから出そうとする皿

のまわりにそれぞれ薔薇の花を配っていた。ジャン・ヴァルジャンは首につつた腕を彼に示し、席をはずす理由を伝えてくれるように頼んで、そこを出て行った。

食堂の窓は街路に面していた。ジャン・ヴァルジャンはしばらく、それらの明るい窓の下影の中に、身動きもしないでたたずんでいた。彼は耳を澄ました。祝宴の混雑した物音が伝わってきた。祖父の堂々たる声高な言葉、バイオリンの響き、皿やコップの音、哄こ笑うしよの声、などが聞こえてきた。そして彼はその愉快な騒ぎの中に、コゼットの楽しいやさしい声を聞き分けた。

彼はフィユー・デュ・カルヴェール街を去って、オンム・アルメ街へ帰っていった。帰ってゆくのに彼は、サン・ルイ街とキュルテール・サント・カトリーヌ街とブラン・マントー教会堂の方の道筋を取った。それは少し遠回りの道だったが、三カ月以前から、ヴィエイユ・デュ・タンプル街の混雑と泥でいねい濘なまとを避けるために、コゼットと共にオンム・アルメ街からフィユー・デュ・カルヴェール街へ行くのに、毎日通いなれた道筋であった。

コゼットが通りつけたその道は、彼に他の道筋を取らせなかった。

ジャン・ヴァルジャンは自分の家に戻った。蝟ろうそく燭をともして階段を上っていった。部

屋はがらんとしていた。トウーサンももういなかった。ジャン・ヴァルジャンの足音は、室へやの中にもいつもより高く響いた。戸棚とだなは皆開かれていた。彼はコゼットの室へはいった。寝台には敷き布もなかった。綾あやぬの布の枕は枕掛けもレース飾りもなくなって、床の下しもの方にたたまれてる夜具の上のせてあり、床はむき出しになってもうだれも寝られないようになっていた。コゼットが大事にしていた細々した婦人用の器物は、皆持ってゆかれていた。残ってるのはただ、大きな家具と四方の壁ばかりだった。トウーサンの寝床も同じように取り片づけてあった。ただ一つの寝床だけが用意されていて、だれかを待ってるようだった。それはジャン・ヴァルジャンの寝床だった。

ジャン・ヴァルジャンは壁をながめ、戸棚とだなの二、三の戸を閉ざし、室へやから室へと歩き回った。

それから彼は自分の室にはいり、テーブルの上に燭しょくどい台たいを置いた。

彼はつるしていた腕をはずし、別に痛みもしないかのようになその右手を使っていた。

彼は自分の寝台に近寄った。そして彼の目は、偶然にかまたは意あつてか、コゼットがうらやんでたつき物の上に、決して彼のそばを離れない小さな鞆かばんの上に落ちた。六月四日オナム・アルメ街にやってきた時、彼はそれを枕まくらもと頭のかぶ小卓の上に置いていた。彼はす

ばしこくその小卓の所へ行き、ポケットから一つの鍵かぎを取り出し、そして鞆を開いた。

彼はその中から、十年前コゼットがモンフェルメイユを去る時につけていた衣裳を、静かに取り出した。第一に小さな黒い長衣、次に黒い襟えり巻き、次にコゼットの足はごく小さいので今でもまだはけそうな丈夫な粗末な子供靴こどもぐつ、次にごく厚い綾織あやおりの下着、次にメリヤスの裳衣、次にポケットのついてる胸掛け、それから毛糸の靴足袋くつたび。その靴足袋には、小さな脛はぎの形がまだかわいく残っていて、ほとんどジャン・ヴァルジャンの掌たなごころの長さほどもしかなかった。それらのものは皆黒い色だった。彼女のためにそれらの衣裳をモンフェルメイユまで持つてつてやったのは彼だった。今彼はそれらを鞆から取り出しては、一々寝床の上に並べた。彼は考え込んでいた。昔のことを思い起こしていた。冬で、ごく寒い十二月のことだった。彼女はぼろを着て半ば裸のまま震えていた。そのあわれな小さな足は木靴をはいてまっかになつていた。彼ジャン・ヴァルジャンは、それらの破れ物を脱がせて、この喪服をつけさしてやった。彼女の母も、彼女が自分のために喪服をつけるのを見、ことに相当な服装をして暖かにしてるのを見ては、墓の中できつと喜んだに違ひなかった。また彼はモンフェルメイユの森のことを思い出していた。コゼットと彼とはふたりいっしょにその森を通つていった。天気のこと、葉の落ちた樹木のこと、小鳥のいない木立ちの

こと、太陽の见えない空のこと、それでもなお楽しかったこと、などが皆思い出された。そして今彼はそれらの小さな衣類を寢床の上に並べ、襟巻えりまきを裳衣えりまのそばに置き、靴足袋くつたびを靴のそばに置き、下着を長衣のそばに置き、それらを一つ一つながめた。あの時彼女はまだごく小さかった。大きな人形を腕に抱き、ルイ金貨をこの胸掛けのポケットに入れ、そして笑っていた。ふたりは手を取り合つて歩いた。彼女が頼りとする者は、世にただ彼ひとりだった。

そこまで考えた時、ジャン・ヴァルジャンの敬すべき白髪しろかみの頭は寢床の上にたれ、その堅忍な老いた心は張り裂け、その顔はコゼットの衣裳の中に埋つてしまった。もしその時階段を通る者があつたら、激しいすすり泣きの声が耳に聞こえたであろう。

四 きわみなき苦悶くもん

われわれが既にその多くの局面をながめてきた古い恐るべき争闘が、再び始まった。

ヤコブが天使と争つたのはただ一夜だけであった。しかるに痛ましくも、ジャン・ヴァルジャンが暗黒の中で自分の本心とつかみ合つて猛烈に争うのを、幾度吾人は見たことで

あろう！

実に異常な争闘であつた。ある時は足がすべり、ある時は足下の地面がくずれた。善へ進まんとあせる本心が、彼をつかみ彼を圧倒したことも、幾度であつたろう。一步も譲らない真理が、彼の胸を膝ひざの下に押さえつけたことも、幾度であつたろう。彼が光明から投げ倒されてその宥ゆうじよ恕を願つたことも、幾度であつたろう。彼のうちにまた彼の上に司教からともされた仮借なき光明が、盲目ならんと欲する彼を強しいて眩げん惑わくさせたことも、幾度であつたろう。巖いわおに身をささえ、詭弁きべんによりかかり、塵にまみれ、あるいは本心を自分の下に打ち倒し、あるいは本心から打ち倒されながら、争闘のうちに彼が立ち直つたことも、幾度であつたろう。曖昧あいまいな理屈を立てた後、利己心の一見道理あるらしい狡猾こうかつな論法を用いた後、憤つた本心から「奸佞かんねいの徒、みじめなる奴、」と耳に叫ばれるのを彼が聞いたのも、幾度であつたろう。頑迷がんめいなる彼の思想が、瞭然りょうぜんたる義務の下に瘡けいれ癩んてき的なうめきを発したのも、幾度であつたろう。神に対する抗争。暗い汗。多くの秘密な傷、彼ひとりだけが感ずる多くの出血。彼の痛ましい生が受くる多くの擦すり傷。血にまみれ、傷におおわれ、身を碎かれ、光に照らされ、心に絶望の念をいだき、魂に清朗の気をたたえて、彼がまた起き上がったのも、幾度であつたろう。敗者でありながら彼は勝者

のように感じていた。そして彼の本心は、彼を挫き苦しめ打ち折った後、恐ろしい煌々たる落ち着いた姿をして彼の上につつ立ち、彼に言った、「今は平和に歩くがいい！」

しかし、かく陰惨な争闘から出てきた後では、それもいかに悲しい平和であったことか！

けれどもその晩ジャン・ヴァルジャンは、最後の戦いをしてるような心地になった。痛切な一つの問題が現われていた。

定められた運命はまっすぐなものではない。それは当の人間の前にまっすぐな大道となつて開けゆくものではない。行き止まりもあり、袋庭もあり、まっくらな曲がり角もあり、多くの道が交錯して不安な四つ辻もある。ジャン・ヴァルジャンは今、それらの四つ辻のうち最も危険なものに立ち止まっていた。

彼は善と悪との最後の交差点に到達していた。その暗黒な接合点を眼前に見ていた。そしてこんども、他の痛ましい変転の折既に幾度か起こったように、二つの道が前に開けていた。一つは彼を誘惑し、一つは彼を恐れさせた。いずれを取るべきであるか？

彼を恐れさせる道の方を、神秘的指先がさし示していた。その指こそは、影の中に目を定めるたびごとに万人が認め得るところのものである。

ジャン・ヴァルジャンはなお一度、恐るべき港とほほえめる陷穽かんせいとのいずれかを選択しなければならなかった。

それでは、魂は癒いされ得るが運命はいかんともし難いということとは、果たして真実なのか。不治の宿命！ 恐るべきことである。

彼の前に現われた問題とは、次のようなものであった。

ジャン・ヴァルジャンはコゼットとマリユスとの幸福に対していかなる態度を取らんとしていたのか。しかもその幸福たるや、彼が自ら望み、彼が自ら作ってやったものである。彼はその幸福を自分の内臓のうちにしまい込んでいたが、今やそれを取り出してながめていた。そして、自分の胸から血煙を立てる短刀を引きぬきながらその上におのれの製作銘を認むる刀剣師のような一種の満足を、彼は感じ得るのであった。

コゼットはマリユスを得、マリユスはコゼットを所有していた。彼らはすべてを、富をさえも得ていた。しかもそれは彼が自らなしてやった業だった。

しかし、今現に存在し今そこにあるその幸福に対して、彼ジャン・ヴァルジャンはどうしようとしていたのか。彼はその幸福の仲間にはいつてもよかつたであろうか。それを自分のものであるかのように取り扱つてもよかつたであろうか。確かにコゼットは他人のもの

のであった。しかし彼ジャン・ヴァルジャンは、自分が保有し得るだけのものをコゼットから保有してもよかつたであろうか、推定されたものではあるがしかし大切にされていた父たるの地位に、彼は今までどおり止まってもさしつかえなかつたであろうか。平然としてコゼットの家にはいり込んでよかつたであろうか。その未来の中に自分の過去を、一言も明かさずに持ち込んでよかつたであろうか。当然であるかのようにそこに出てゆき、素性を隠しながらその輝く炉辺にすわつても、さしつかえなかつたであろうか。彼らの潔い手^{きよ}を自分の悲惨な手のうちに、ほほえみながら取つてもよかつたであろうか。ジルノルマン家の客間の平和な炉火の前に、法律の不名誉な影をあとに引きずつてる自分の足を置いて、よかつたであろうか。コゼットとマリユスと共に、彼も幸運の分^{わけ}前^{まえ}をもらつてもよかつたであろうか。自分の頭の上の曇りと彼らの上の雲とを深めても、さしつかえなかつたであろうか。彼らふたりの至福に自分の覆滅を、第三者として付け加えてもよかつたであろうか。やはり何も打ち明けないでもよかつたであろうか。一言にして言えば、それらふたりの幸福な者のそばに、宿命の気味悪い沈黙としてすわつていても、さしつかえないのであつたらうか。

人は常に宿命とその打撃とになれていて、ある種の疑問が恐ろしい赤裸の姿で現われて

きても、あえて目をあげてそれを見つめ得るようになっていなければいけない。善と悪はそのきびしい疑問の背後に控えている。「どうするつもりか、」とそのスフィックスは尋ねる。

ジャン・ヴァルジャンはそういう試練になれていた。彼はそのスフィックスをじつと見つめた。

彼はその残忍な問題をあらゆる方向から考究した。

あの麗しいコゼットは、難破者たる彼にとつては一枚の板子いたごであった。しかるに今やいかにすべきであったか。それに取りついているべきか。それを離すべきか！

もしそれに取りついていれば、彼は破滅から免れ、日光のうちに上つてゆき、衣服と頭髪とから苦い水をしたたらせ、救われ、生きながらえることができるのだった。

もしそれを離せば！

その時は深淵しんえんあるのみだつた。

かく彼は自分の考えに悲痛な相談をなしてみた。あるいは更に適切に言えば、戦いを開いた。彼は心のうちで、あるいは自分の意志に対してあるいは自分の確信に対して、猛然として飛びかかつていった。

泣くことができたのは、ジャン・ヴァルジャンにとつて一つの仕合わせだった。それはおそらく彼の心を晴らしたであろう。けれども争いの初めは激烈だった。一つの暴風雨が、昔彼をアラスの方へ吹きやつたのよりもいつそう猛烈な暴風雨が、彼のうちに荒れ回つた。過去は現在の前に再び現われてきた。彼はその両者を比較し、そしてすすり泣いた。一度涙の堰せきが開かるるや、絶望した彼は身をもだえた。

彼は道がふさがつたのを感じていた。

ああ、利己心と義務との激戦において、昏迷こんめいし、奮激し、降伏を肯がえんぜず、地歩を争い、何らかの逃げ道をねがい、一つの出口を求めつつ、巍然ぎぜんたる理想の前から一步一步退く時、後方にある壁の根本は、いかに凄惨せいさんなる抵抗を突然なすことであるか。

道をさえぎる聖なる影を感じる心地は！

目に見えざる酷薄なるもの、それはいかに執拗しつようにつきまどつてくることか！

本心との戦いには決して終わりが無い、ブルツスといえどもあきらめるがいい。カトーといえどもあきらめるがいい。本心は神なるがゆえに、底を持たない。その井戸の中へ、一生の仕事を投げ込み、幸運を投げ込み、富を投げ込み、成功を投げ込み、自由や祖国を投げ込み、安寧も、休息も、喜悦も、皆投げ込んでみよ。まだ、まだ、まだ足りない。瓶びん

を空しゆうし、壺つぼの底をはたけ。そして終わりに、おのれの心をも投げ込まなければならぬ。

いにしえの地獄の靄もやの中には、そういう大樽おおたるがどこかにある。

それを拒むのは許されないことであろうか。尽きることなき追求はその権利を持つてるのであるか。限りなき鉄鎖は人力のたえ得ないものではないのであろうか。シシフス

(訳者注 死後地獄の中にて永久に岩石を転がす刑に処せられし者) やジャン・ヴァルジャンが、「もうこれが力の限りだ！」と言うのを、だれかどがめる者があるか。

物質の服従には、磨損まさんするがために一定の限度がある。しかるに、精神の服従には限度がないのであろうか。永久の運動が不可能であるとするのに、それでも永久の献身が求め得らるるのであろうか。

第一歩は容易である。困難なのは最後の一步である。シャンマティユーの事件も、コゼットの結婚および続いて来る事柄に比ぶれば何であつたらう。再び徒刑場にはいることも、虚無のうちにはいりゆくことに比ぶれば何であろう。

下降の第一段は、いかに暗いものであることか。更に第二段は、いかに暗黒なるものであることか！

このたびは、いかにして顔をそむけないでおられようぞ。

殉教は、一つの浄化である、侵蝕による浄化である。聖化せしむる苛責かしやくである。最初のうちはそれを甘んじて受けることができる。赤熱した鉄の玉座にすわり、赤熱した鉄の冠を額にいただき、赤熱した鉄の王国を甘諾し、赤熱した鉄の笏しやくを執る。しかしなおその上に炎のマントを着なければならぬ。そしてその時こそ、みじめな肉体は反抗し、人はその苦痛を避けたく思うことが、ないであろうか。

ついにジャン・ヴァルジャンは、喪心の極、平静のうちにはいった。

彼は計画し、夢想し、光明と陰影との神秘的な秤はかりざら、皿の高低をながめた。

光り輝くふたりの若者に自分の刑罰を添加すること、もしくは、救う道なき自分の陥没を自分ひとりに止めること。前者はコゼットを犠牲にすることであり、後者は自己を犠牲にすることであった。

彼はいかなる解決をなしたか。いかなる決心を定めたか。宿命の森厳なる尋問に対して彼が心のうちでなした最後の確答は、何であったか。いかなる扉とびらを開こうと彼は決心したか。生命のいかなる方面の扉を、彼はいよいよ閉鎖しようとしたか。四方をとりまいてる測り知られぬ断崖だんがいのうち、いずれを彼は選んだか。いかなる絶端を彼は甘受したか。

それらの深淵しんえんのいずれに向かつて、彼は首肯したか？

彼の昏迷こんめいてき的な夢想は終夜続いた。

彼はそのまま同じ態度で、寢床の上に身をかがめ、巨大な運命の下に平伏し、おそらくは痛ましくも押しつぶされ、十字架につけられた後俯うづむ向けに投げ出された者のように、拳こぶしを握りしめ両腕を十の字にひろげて、夜が明けるまでじっとしていた。十二時間の間、冬の長い夜の十二時間の間、頭も上げず一言も発しないで、凍りついたようになっていた。自分の思念が、あるいは蛇のように地面をはい、あるいは驚わしのように天空を翔かけつてる間、死骸しがいのように身動きもしないでいた。その不動の姿は、あたかも死人のようだった。と突然彼は痙攣けいれんてき的に身を震わし、その口はコゼットの衣裳に吸い着いて、それに脣くちづけをした。彼がなお生きてることを示すものはただそれだけだった。

それを見ていた者は、だれであるか、だれかであるか？ ジャン・ヴァルジャンはただひとりであつて、そこにはだれもいなかったではないか。

否、闇やみの中にある「あの人」が。

第七編 苦杯の最後の一口

一 地獄の第七界と天国の第八圏

結婚の翌日は寂しいものである。人々は幸福なふたりの沈思に敬意を表し、またその眠りの長引くのに多少の敬意を表する。訪問や祝辞の混雑はしばらく後にしか始まってこないものである。さて二月十七日の朝、もう正午少し過ぎた頃だったが、バスクが布巾ふきんと羽はねねぼうきとを腕にして、「次の間を片づけ」ていた時、軽く扉とびらをたたき音が聞こえた。呼び鐘は鳴らされなかった。こういう日にとっては少し不謹慎な訪れ方だった。バスクが扉を開くと、フォーシュルヴァン氏が立っていた。バスクは彼を客間に通した。客間はまだいっぱい取り散らされていて、前夜の歓楽のなごりをとどめていた。

「まあ旦那様だんなさま、」とバスクは言った、「私どもは遅く起きましたので。」

「御主人は起きておいでかね。」とジャン・ヴァルジャンは尋ねた。

「お手はいかがでございます。」とバスクは尋ね返した。

「だいたい。御主人は起きておいでかね。」

「どちらでございますか、大旦那様おおだんなさまと若旦那様と。」

「ポンメルシーさんの方だ。」

「男爵様でございますか。」と言いながらバスクはまっすぐに身を伸ばした。

男爵などということは召し使いにとつてはことに尊く思われるものである。彼らはそれから何かを受ける。哲学者が称号の余沫よまつとも呼びそうなものを、彼らは自分の身にまよつて喜ぶ。ついでに言うが、マリユスは共和の戦士であり、実際それを行為に示してきたが、今は心ならずも男爵となつていた。この称号に関して家庭内に小さな革命が起こつていた。その称号を好んで用いるのは今ではジルノルマン氏であつて、マリユスはむしろそれを避けていた。しかし、「予が子は予の称号を用うべし」とポンメルシー大佐から書き残されていたので、マリユスもそれに服従していた。その上、女たる自覚ができかかつてきたコゼットは、男爵夫人たることを喜んでいた。

「男爵でございますか。」とバスクは繰り返した。「見て参りましょう。フォーシユルヴァン様がおいでになりましたと申し上げましょう。」

「いや、私だと言わないでくれ。内々にお話したいことがあると言ってる人とだけで、名前は言わないでくれ。」

「へえ！」とバスクは言った。

「ちよつとびつくりさしてみたいから。」

「へえ！」とバスクは、前の「へえ！」を自ら説明するようにして繰り返した。

そして彼は出て行つた。

ジャン・ヴァルジャンはひとりになった。

上と言つたとおり、客間の中はすっかり取り散らされていた。もし耳を澄ましたら、婚礼の漠然たる騒ぎがまだ聞こえそうにも思われた。床の上には、花輪や髪飾りから落ちた各種の花が散らばっていた。根元まで燃えつきた蠟燭は、燭台の玻璃に蝟のしたたりを添えていた。器具はすっかりその位置が乱されていた。片すみには、三、四脚の脇掛け椅子が互いに丸く寄せられてなお話を続けてるがようだった。室全体が笑っていた。宴の果てた跡にもなお多くの優美さが残つてるものである。すべてが幸福だったのである。乱れてるそれらの椅子の上で、澗んでるそれらの花の間で、消えてるそれらの灯火の下で、人々は喜びの念をいだいたのである。今や太陽の光は蠟燭の後を継いで、客間のうちに楽

しくさし込んでいた。

数分間過ぎた。ジャン・ヴァルジャンはバスと別れた所にじっと立っていた。顔は青ざめていた。その目は落ちくぼんで、不眠のためほとんど眼窩がんかの中に隠れてしまっていた。その黒服には乱れた皺しわがついていて、一晩中着通されたことを示していた。その脇は敷き布とすれ合った跡が白く毛ぼだつていた。彼は自分の足もとに、太陽の光で窓の形が床の上に投げられてるのをながめていた。

とびら扉の所に音がした。彼は目をあげた。

マリユスがはいってきた。頭を上げ、口もとに笑えみを浮かべ、一種の輝きを顔に漂わせ、ゆつたりとした額で、揚々たる目をしていた。彼もまた一睡もしていなかった。

「あああなたでしたか、お父さん！」と彼はジャン・ヴァルジャンを見て叫んだ。「バスクの奴やつ妙にもつともらしい様子をしたりなんかして！ それにしてもたいそう早くいらしたですね。まだ十二時半にしかありませんよ。コゼットは眠っています。」

フォーシユルヴァン氏に向かつてマリユスが言った「お父さん」という言葉は、最上の喜びを意味するものだった。読者の知つてるとおり、彼らの間には常に、絶壁と冷ややかさと気兼ねとが、砕とき融かさなければならぬ氷が、介在していた。ところが今やマリユ

スに喜びの 때가きて、その絶壁も低くなり、その氷も融け、フォーシユルヴァン氏は彼にとつてもコゼットにとつても同じくひとりの父となつたのである。

彼は続けて言った。喜悅の聖い発作きよの特色として、言葉は彼からあふれ出た。

「お目にかかつてほんとにうれしく思います。昨日いて下さらなかつたので私もほんなに寂しかったでしょう。よくきて下さいました、お父さん。お手はいかがです。よろしい方で、そうではありませんか。」

そして、自らいいと答えたのに満足しながら、彼はなお言い続けた。

「私もはふたりでよくあなたの噂うわさばかりしています。コゼットはどんなにかあなたを慕っています。この家にあなただのお室へやがあることもお忘れではありませんでしょうね。私どもはもうオナム・アルメ街をあまり好みません。実際もう好ましくありません。どうしてあなたはあんな街路にお移りなすつたのです。あすこは、不健康で、うるさくて、きたなくて、一方の端には柵さくがあり、寒くて、とても行けやしません。ここにお住みになつたがよろしいです。今日からそうなすつて下さい。そうでないとコゼットが承知しませんよ。まったくコゼットは私どもを自分の好きなおりにするつもりでいます。あなたはあの室へやをごらんなすつたでしょう。私どもの室のすぐわきで、庭に向いています。錠前も直して

あれば、寝台も整っていて、すっかり用意ができています。ただおいでになりさえすれば
よろしいんです。コゼットはあなたの寝台のそばに、ユトレヒト製ビロードの大きな安楽
椅子を据えて、お父様をいたわっておくれと言いました。春になるといつも、窓の正面に
あるアカシアの茂みに、鶯うぐいすがやってきました。二カ月の間も続いております。その鶯の巢が
お室へやの左にあつて、私どものが右手にあるわけです。晩には鶯が歌い、昼間はコゼットが
お話相手になります。室は日当たりも上等です。コゼットがあなたの書物も並べてあげま
す。クック大尉の旅行記やヴァンクーヴァーの旅行記や、何でも御入用なものを整えてあ
げます。たしかごく大事にしていられる小さな鞆かばんが一つありましたね。あのためには片す
みにちゃんと置き場所をこしらえさしてあります。私の祖父はまったくあなたに心服して
います。ちようにいいお相手です。みんないつしよに住みましょう。あなたはトランプを
御存じですか。もしおやりでしたら祖父はどんなに喜ぶでしょう。私が裁判所に弁論に出
る時には、あなたがコゼットを散歩に連れていつて下さい、昔リユクサンブルでなすつ
たように、コゼットに腕を貸して。私どもは是非ともごく幸福にしたいときめています。
それにはあなたの幸福も欠けてはいけません。ねえお父さん。そして今日は、私どもとい
つしよに朝食をして下さい。」

「私は、」とジャン・ヴァルジャンは言った、「あなたに一つ話したいことがあるんです。私はもと徒刑囚だった身の上です。」

およそ鋭い音は、耳に対すると同じく精神に対しても、知覚の範囲を越すことがある。フォーシユルヴァン氏の口から出た「私はもと徒刑囚だった身の上です」という言葉は、マリユスの耳に響きはしたが、まとまった意味の範囲を越えたものだった。マリユスは了解しなかった。ただ何か言われたように思えたが、何であるかわからなかった。彼はほんやりしてしまった。

その時彼は、相手が恐ろしい様子をしてるのに気づいた。彼は自分の喜びに夢中になって、相手のひどく青ざめてるのがそれまで目にはいらなかった。

ジャン・ヴァルジャンは右腕をつついていた黒布を解き、手に巻いていた包帯をはずし、親指を出して、それをマリユスに示した。

「手はなんともなっていないません。」と彼は言った。

マリユスはその親指をながめた。

「初めからなんともなかったのです。」とジャン・ヴァルジャンはまた言った。

実際何らの傷痕きずあともなかった。

ジャン・ヴァルジャンは言い続けた。

「私はあなたの結婚の席にいない方がよかったです。できるだけ出席しないようにつとめました。私は偽証をしないために、結婚の契約書に無効なものをはさまないために、署名することをのがれるために、怪我けがをしたと嘘うそを言いました。」

マリユスは口ごもった。

「どういうわけですか。」

「そのわけは、」とジャン・ヴァルジャンは答えた、「私は徒刑場にはいったことがある身だからです。」

「そんなことが！」とマリユスは恐れて叫んだ。

「ポンメルシーさん、」とジャン・ヴァルジャンは言った、「私は十九年間徒刑場にいました。窃盗のためにです。次に無期徒刑に処せられました。窃盗のためにです。再犯としてです。今では脱走の身の上です。」

マリユスはいたずらに、現実の前にたじろぎ、事実を拒み、明確を排しようとしたが、しかもその本意を屈しなければならなかった。彼はようやくいっさいを了解し始めた。そしてかかる場合の常として、言外のことまで了解した。内心にさしてきた嫌悪けんおすべき光に

彼は戦慄せんりつを覚えた。慄然りつぜんたる一つの觀念が彼の精神を過ぎつた。自分にあてられてる一つのおぞましい宿命を、未来のうちに垣間かいま見た。

「すべてを言つて下さい、すべてを言つて下さい！」と彼は叫んだ。「あなたはコゼットの父ですね。」

そして彼は言い難い恐怖に駆られて二、三步後ろに退さがつた。

ジャン・ヴァルジャンは天井まで伸び上がるかと思われるようなおごそかな態度で頭を上げた。

「今あなたは私の言うことを信じて下さらなければいけません。そして、私のような者の誓言は法廷からは受け入れられませんけれども……。」

そこで彼はちよつと口をつぐんだ。それから一種の崇巖陰惨な力をもって、ゆつくりと一語一語力を入れて言い添えた。

「……私の言葉を信じて下さい。コゼットの父は私ですと！ 神に誓つて否と言います。ボンメルシー男爵、私はファヴロールの田舎者いなかものです。樹木の枝切りをして生活していた者です。名前もフォーシユルヴァンではなく、ジャン・ヴァルジャンと言います。コゼットとは何の縁故もありません。御安心下さい。」

マリユスはつぶやいた。

「だが証明してくれましょう……。」

「私が必要です。私がそう言う以上は。」

マリユスは相手をながめた。相手は沈痛で落ち着いていた。そういう静平から偽りが出ようはずはなかった。氷のごとき冷ややかさは誠実なものである。その墳墓のごとき冷然さのうちには真実が感ぜられた。

「私はあなたの言葉を信じます。」とマリユスは言った。

ジャン・ヴァルジャンは承認するように頭を下げ、そしてまた言い続けた。

「コゼットに対して私は何の関係がありません。ただ通りがかりの者にすぎません。十年前までは彼女が世にいることすら知りませんでした。なるほど私が彼女を愛していたのは本当です。既に年を取ってからごく小さな娘を見ると、それを愛したくなるものです。年を取つてくると、どの子供に対しても祖父のような気になるものです。私のような者でも人並みの心をいくらか持つてゐるらしいです。コゼットは孤児でした。父も母もありませんでした。それでせめて私でもあつた方がよかったです。そういうわけで私は彼女を愛し始めました。子供という者はか弱いもので、偶然出会つた私のような者でもその保護者

となり得ます。私はコゼットに対して保護者の務めをしてきました。私はそれくらいのことと善い行ないだと言い得ようとは思いませんが、しかしもし善い行ないだとすれば、私がそれをしたことも考えてやって下さい。私の罪を多少なりと軽くするものとして考えていただきたいです。そして今日、コゼットは私の手もとを離れ、ふたりは行路を異にすることになりました。これから以後、私はもうコゼットに対しては何の関係もなくなります。彼女はポンメルシー夫人です。彼女の保護者が変わったわけです。そしてコゼットにはそれが仕合わせです。万事好都合です。六十万フランの金については、あなたは何とも言われませんが、私から先に申し上げれば、それは委託されたものです。その委託金がどうして私の手にはいったか、それは問う必要はありません。私はただそれを返すまでです。それ以上私は人に求めらるるところはないはず。私は自分の本名を明かして本来の自分に返りました。それは私一個に関することです。ただ私は、私がどんな人間だかあなたに知っていただきたいのです。」

そしてジャン・ヴァルジャンはマリユスの顔を正面からじつとながめた。

マリユスを感じたことは、ただ雑然たる連絡もないことばかりだった。宿命のある種の風は人の魂のうちにそういう波を立たせるものである。

自分のうちのすべてのものが分散してしまうような惑乱の瞬間を知らない者は、およそ世にあるまい。そういう時人は、いつものはずれのことをでたらめに口にする。世には突然意外なことが現われてくることもあつて、人はそれにたえ得ないで、強烈な酒を飲んだように酔わされてしまう。マリユスは新たに現われてきた自分の地位に惘然^{ぼうぜん}としてしまつて、ほとんど相手の自白を難^がずるがような口のきき方をした。

「ですが、」と彼は叫んだ、「なぜあなたはそんなことを私に言うのです。だれに強^しいられて言うのです。自分ひとりで秘密を守つておればいいではありませんか。あなたは告発されてもいず、搜索されてもいず、追跡されてもいないではありませんか。自ら好んでそんなことを打ち明けられるのには何か理由があるでしょう。言つておしまいなさい。何かあるでしょう。どういうつもりで自白をなさるのです。どういう動機で？」

「どういう動機？」とジャン・ヴァルジャンは、マリユスに話しかけるといふよりもむしろ自分自身に話しかけるような低い鈍い声で答えた。「なるほど、この囚徒が私は囚徒ですと言つたのは、どういう動機からかと、そうです、妙な動機です。それは正直からです。不幸なことですが、私の心の中に私をつなぎ止めてる一筋の綱があります。ことに老年になるとその綱がますます丈夫になるものです。まわりの生活がすべてこわれかけてく

るのに、その綱だけは頑固に残ります。もし私が、その綱を払いのけ、それを断ち切り、その結び目を解くか切り捨てるかして、遠くへ立ち去ることができてたら、私は救われたでしょう。ただ出立つするだけでよかったです。ブーロア街に駅馬車もあります。そうすれば、あなたは幸福になり、私は行ってしまっただけです。で私はその綱を切ろうとつとめ、引きのけようとしたが、綱は丈夫で、中々切れるどころではなく、私の心をいっしょに引きもぎろうとするのです。その時私は、他の所へ行って生活することはできないと思いました。どうしても他へは行けません。で、なるほどあなたの言われるのは道理です、私はほかです。このまま黙ってここにいればいいわけです。あなたは私に室^{へや}を一つ与えて下さるし、ポンメルシー夫人は私を愛して、あの人をいたわっておくれと安楽椅子^{あんらくいす}に言って下さるし、あなたのお祖父^{じい}様は私がここにいさえすればよろしいとおっしゃるし、私がお相手となり、皆いっしょに住みいっしょに食事をし、私はコゼット……いやごめん下さい、つい口癖になつてるものですから、で私はポンメルシー夫人に腕を貸し、皆同じ屋根、同じ食卓、同じ火、冬には暖炉の同じ片すみに集まり、夏にはいっしょに散歩をする。実に喜ばしいことで、実に楽しいことで、それ以上のことはありません。そして一族のように暮らしてゆく、一家族のように！」

その言葉を発して、ジャン・ヴァルジャンはにわかに荒々しくなった。彼は両腕を組み、あたかもそこに深い穴でも掘ろうとしてるように足下の床ゆかをにらみつけ、声は急に激しくなった。

「一家族！ いや。私には家族はない。私はあなたの家族のひとりではありません。およそ人間の家族にはいるべき者ではありません。人が自分の家とする所では、どこへ行つても私はよけいな者となるのです。世にはたくさんのお家庭があるが、私が加わり得る家庭はありません。私は不幸な者です。社会の外にほうり出されてる人間です。父母があつたときえも思えないくらいです。私があのお嬢さんを結婚させた日、私のすべては終わりました。彼女が幸福であること、愛する人といっしょにいること、親切な御老人がおられること、ふたりの天使の家庭ができたこと、家中喜びに満ちてること、万事よくいつてること、それを私は見て、自分で言いました、汝は入るべからずと、実際私は、嘘うそをつくこともでき、あなた方皆を欺くこともでき、フォーシユルヴァン氏となつてることもできました。そして彼女のためである間は嘘もつきました。しかし今は私のためである以上、嘘をついてはいけません。なるほど私がただ黙つてさえおれば、今のまま続いていったでしょう。あなたは、だれに強しいられて自白するのかと私にお尋ねなされる。それは下らないものです。

私の良心です。けれども、黙っているのもまたたやすいことでした。私は一晩中、黙つて
いようといういろいろ考えてみました。あなたは私にすべてを打ち明けてくれと言われる。実
際私があなたに申したことは普通のことではないので、あなたがそう言われるのも無理は
ありません。ところで私は一晩中、いろいろ理屈を並べてみ、至当な理由を並べてみて、
できるだけの努力はしました。しかしどうしても私の力に及ばないことが二つあったので
す。私の心をここにつなぎとめ釘付けにしこびりつかせてる綱を断ち切ることと、ひとり
でいる時私に低く話しかけるある者を黙らせることとです。それで私は今朝あなたにすべ
てを自白しにきました。すべてを、もしくはほとんどすべてをです。私にだけ関係したこ
とで言う必要のないものは、胸にしまつて申しません。要点は既に御存じのとおりのこと
です。私は自分の秘密を取り上げて、あなたの所へ持つてきました。そしてあなたの目の
前に底まで開いて見せました。これは容易な決心ではなかったのです。私は終夜苦しみま
した。私は自ら言つてみました。これはシャンマティユー事件とは違う、自分の名前を隠
したとてだれに害を及ぼすものでもない、フォーシユルヴァンという名前はあることをし
てやった礼としてフォーシユルヴァン自身からもらったものである、それを自分の名前と
しておいてさしつかえない、あなたからいただくあの室へやにはいったらどんなに幸福だろう、

だれの邪魔にもなるまい、自分だけの片すみに引きこもっていよう、コゼットはあなたのものであるが、私は彼女と同じ家にいることを考えていようと。そうすれば各自相応な幸福を得られるわけです。続けてフォーシユルヴァンとなっておれば、すべてはよくなるわけです。もちろんただ私の魂を別にしてはです。そうして私のまわりには喜びの光が満ち、私の魂の底だけが暗黒なばかりです。しかし人は幸福であるだけでは足りません。満足でなければいけません。そうして私はフォーシユルヴァン氏となっており、自分の本当の顔を隠し、あなたの晴れやかな心の前に私は謎なぞをいただき、あなたの白日の輝きの中に私は影をいただき、何らの警告もせず善良な顔をしてあなたの家庭に徒刑場を引き入れ、もしあなたに知られたら追い払われるに違いないと考えながら、あなたと同じ食卓につき、もし召し使いたちに知られたら実に汚らわしいと言われるに違いないと思いつながら、彼らから用をしてもらうことになるのです。当然あなたからきらわれるべき臍ひじをあなたに接し、あなたの握手を騙かたり取ることになります。あなたの家では、尊い白髪と烙印らくいんをおされた白髪との両方に、尊敬を分かつことになります。最も親しい談話の折り、皆が互いに心の底まで打ち開いてると思つてる時に、あなたのお祖父様じいさまとあなた方ふたりと私と四人いっしょにいる時に、そこにはもひとり見知らぬ男がいることになります。私は自分の恐ろしい井

戸の蓋ふたを開くまいということにばかり注意して、あなた方の生活のうちに立ち交わることになります。そうしてもはや葬られてる私が、生命のあるあなた方の邪魔にはいることになりません。私は永久に彼女につきまとうことになりません。あなたとコゼットと私と三人とも、緑色の帽子をかぶることになります。あなたはそれでも平然としておられますか。私は最も踏みじられた人間にすぎません。そしてこんどは最も恐ろしい人間となるわけです。そして毎日罪悪を犯すこととなるでしょう。毎日嘘うそをつくこととなるでしょう。毎日暗夜の仮面をつけることとなるでしょう。毎日自分の汚辱をあなた方に分かつこととなるでしょう。毎日です、しかも私の愛するあなた方に、私の子供たるあなた方に、潔白なるあなた方입니다。黙っているのが何でもありません。沈黙を守っているのがわけもないことでしょうか。いえ、わけもないことではありません。沈黙が虚偽となることもあります。しかも私の虚偽、私の欺瞞ぎまん、私の汚辱、私の怯懦きょうだ、私の裏切り、私の罪悪、それを私は一滴一滴と飲み、また吐き出し、また飲み込み、夜中に終えてはまた昼に始め、そして私の朝の挨拶あいさつも偽りとなり、晩の挨拶も偽りとなり、その虚偽の上に眠り、その虚偽をパンと共に食い、しかもコゼットと顔を合わせ、天使のほほえみに地獄の者のほほえみで答え、忌むべき瞞まん者ちやくしやとなるわけです。幸福になるにはどうしたらいいでしょ

うか。ああこの私が幸福になるには！　そもそも私に幸福になる権利があるのでしようか。私は人生の外にいる者です。」

ジャン・ヴァルジャンは言葉を切った。マリユスは耳を傾けていた。かかる一連の思想と苦悶くもんとの声は決して中断するものではない。ジャン・ヴァルジャンは再び声を低めたが、こんどはもう単に鈍い声ではなくて凄惨せいさんな声だった。

「なぜそんなことを言うのかとあなたは尋ねなされる。告発されても搜索されても追跡されてもいらないではないかと、あなたは言われる。ところが事実私は告発されてるのです。搜索され、追跡されてるのです。だからかと言えば、私自身からです。私の行く手をさえぎる者は私自身です。私は自分を引きつれ、自分を突き出し、自分を捕縛し、自分を処刑しています。人は自分自身を捕える時ほど、しかと捕えることはないものです。」

そして彼は自分の上衣をぐつとつかんで、それをマリユスの方へ引っ張った。

「この拳こぶしをごらん下さい。」と彼は言い続けた。「この拳は襟えりをつかんでどうしても放さないようには見えませんか。ところでこれと同じも一つの拳があります。すなわち良心です。人は幸福でありたいと欲するならば、決して義務とすることを了解してはいけません。なぜなら、一度義務を了解すると、義務はもう一步も曲げないからです。あたかも了解し

たために罰を受けるがようにも見えません。しかし実はそうではありません。かえって報われるものです。なぜなら、義務は人を地獄の中につき入れますが、そこで人は自分のそばに神を感じるからです。人は自分の内臓はらわたを引き裂くと、自分自身に対して心を安んじ得るものです。」

そして更に痛切な音調で、彼は言い添えた。

「ポンメルシーさん、これは常識をはずれたことかも知れませんが、しかし私は正直な男です。私はあなたの目には低く墮おちながら、自分の目には高く上るのです。前にも一度そういうことがありましたが、こんどほど苦しいものではありませんでした。何でもないとでした。そう、私はひとりの正直な男です。しかし私の誤ったやり方のために、もしあなたがなお続けて私を重んずるようなことになれば、私はもう正直ではなくなります。ところが今あなたは私を賤いやしんでいられるから、私は正直な男と言えるのです。私は一つの宿命しなを担になっています、人の尊敬はただ盗んでしか得られないのですが、そういう尊敬はかえって私をはずかしめ私の内心を苦しめます。そして自ら自分を尊敬するには、人から賤いやしまれなければいけないのです。その時私は始めてまっすぐに立っています。私は自分の良心に服従して一徒刑囚です。他に類もないことだと自分でも知っています。しかしど

うしたらいいのでしよう。それが事実です。私は自分自身に対して約束をしています。それを守るだけです。生涯のうちには身を縛られるようなことに出会いもすれば、義務のうちに引きずり込まれるような機会に会うこともあります。おわかりでしょう、ポンメルシ―さん、私の生涯にはいろいろなことが起こったのです。」

ジャン・ヴァルジャンはまた言葉を切りながら、自分の言葉の後口がいかにも苦いにがかのようにやく唾つばをのみ込んで、また続けた。

「そういう嫌悪けんおすべきものを身に担っている場合、人はそれをひそかに他人へ分かち与えてはいけません、自分の疫病を他人に伝染さしてはいけません、気づかれないようにして他人を自分の深みへ引きずり込んではいけません、他人にまでも自分の赤い着物をまどわしてはいけません、狡猾こうかつなやり方をして自分のみじめきで他人の幸福を妨げてはいけません。聖きよい人々に近寄って、目に見えない自分の膿うみをひそかに他人になすること、それは忌むべきことです。フォーシユルヴァンは私にその名前を貸してくれましたが、私にはそれをを用うる権利はありません。彼は私にその名前を与えることもできましたが、私はそれを取ることができませんでした。一つの名前はすなわち一つの自己です。ところで私はひとりの田舎者にすぎませんが、このとおり少しは考えもし、少しは書物も読みました。

そして物事のわきまえもあります。このとおり相当に自分の意見も表白できません。私は自分で自分を教育しました。そう確かに、他人の名前を盗み取ってその下に身を置くのは、不正直なことです。アルファベットの文字は、金入れや時計のように騙り取ることもできません。しかし、肉と骨とをそなえた偽りの名前となり、生きた偽りの鍵かぎとなり、錠前をこじあけて正直な人の家にはいり込み、決してまっすぐに物を見ず、いつも偷み見ばかりをし、自分の内部に汚辱をいだいていることは、どうして、どうして、どうして！ それよりもむしろ、苦しみもだえ、血をしぼり、涙を流し、爪つめで肉体をかきむしり、悩みにもだえて夜を過ごし、自分の心身を自ら食いつくす方が、よほどまさっています。そういうわけで、私はすべてをあなたに話しに参ったのです。おっしゃるとおり自ら好んです。」

彼は苦しい息をついて、最後の言葉を投げつけた。

「昔私は生きるために、一片のパンを盗みました。そして今日私は、生きるために一つの名前を盗みたくはありません。」

「生きるため！」とマリユスは言葉をはさんだ。「生きるためにその名前があなたに必要なわけではないでしょう。」

「ああ、あなたの言われる意味はよくわかります。」とジャン・ヴァルジヤンは答えなが

ら、幾度も続けて頭をゆるく上げ下げした。

それから沈黙が落ちてきた。ふたりとも黙り込んで、深く考えの淵ふちに沈んでしまった。マリユスはテーブルのそばにすわり、折り曲げた指の一本の上に口の角をもたせていた。ジャン・ヴァルジャンは歩き回っていた。そして彼は鏡の前に立ち止まり、そこにじっとたたずんだ。それから、映つてる自分の姿も目に入れないで鏡の面をながめながら、あたかも内心の推理に答えるかのように言った。

「でも、これで私は気が安らいだ！」

彼はまた歩き出して、室へやの先端まで行つた。そして向き返ろうとした時、マリユスが自分の歩いてるのをながめているのに気づいた。その時彼は、名状し難い調子でマリユスに言った。

「私の足は少し引きずり加減になっています。その理由ももうおわかりでしょう。」
それから彼はマリユスの方へすつかり向き直つた。

「ところで、まあ仮りにこうなつたとしたらどうでしょう、私が何にも言わず、フォーシユルヴァン氏となつており、あなたの家にはいり込み、あなたの家庭のひとりとなり、自分の室をもらい、毎朝楽しく食事をし、晩は三人で芝居に行き、私はテユイルリーの園や

ロアイヤル広場にポンメルシー夫人の伴をし、皆いつしよに暮らし、私も人並みの人間と思われているとします。しかるにある日、私もそこにおり、あなた方もそこにおられ、いつしよに話をし笑い合っている時に、突然ジャン・ヴァルジャンと叫ぶ声が聞こえ、警察の恐ろしい手が陰から現われてき、私の仮面をにわかにはぎ取るとします！」

彼はまた口をつぐんだ。マリユスは慄然りつぜんとして立ち上がった。ジャン・ヴァルジャンは言った。

「それをあなたはどう思われます？」

マリユスは沈黙をもってそれに答えた。

ジャン・ヴァルジャンは続けて言った。

「私は黙っていない方が正しいと、あなたにもよくおわかりでしょう。でどうか、あなたは幸福で、天にあって、ひとりの天使をまもる天使となり、日の光の中に住み、それに満足して下さい。そして、ひとりのあわれな罪人が、自分の胸を開いて義務をつくすために取った手段については、心をわずらわさないで下さい。今あなたの前に立ってるのはひとりのみじめな男です。」

マリユスは静かに室を横切り、ジャン・ヴァルジャンのそばにきて、彼に手を差し出し

た。

しかしマリユスは相手が手を出さないので、進んでそれを取らなければならなかった。ジャン・ヴァルジャンはなされるままに任じた。マリユスはあたかも、大理石の手を握りしめたような気がした。

「私の祖父にはいくらも親しい人がいます。」とマリユスは言った。「あなたの赦免を得るように努めてみましょう。」

「それはむだなことです。」とジャン・ヴァルジャンは答えた。「私は死んだ者と思われています。それで充分です。死んだ者は監視を免れています。静かに腐蝕していると見做なされています。死は赦免と同じことです。」

そしてマリユスに握られていた手を放しながら、犯すべからざる威厳をもって言い添そえた。

「その上、義務を果たすことは、頼りになる友を得ると同じです。私はただ一つの赦免をしか必要としません、すなわち自分の良心の赦免です。」

その時、客間の他の一端にある扉が少し静かに開いて、その間からコゼットの頭が現まわれた。こちらからはそのやさしい顔だけしか見えなかった。髪はみごとに乱れており、眼

瞼はまだ眠りの気にふくらんでいた。彼女は巢から頭を差し出す小鳥のような様子で、最初に夫をながめ、次にジャン・ヴァルジャンをながめ、そして薔薇の花の奥にあるほほえみかと思われるような笑顔をして、彼らに言葉をかけた。

「政治の話をしていらつしやるのね、私をのけものにして何ということでしょう！」

ジャン・ヴァルジャンは身を震わした。

「コゼット！」とマリユスはつぶやいた。そしてそのまま口をつぐんだ。あたかも彼らふたりは罪人でもあるかのようだった。

コゼットは光り輝いて、なおふたりをかわるがわる見比べていた。その日の中には、樂園の反映があるかと思われた。

「実際の所をつかまえたのよ。」とコゼットは言った。「フォーシユルヴァンお父様が、良心だの義務を果たすだのおつしやつてるのを、私は扉の外から聞いたんですもの。それは政治のことでしょう。いやよ。すぐ翌日から政治の話をするなんていけないことよ。」

「そうではないんだよ、コゼット。」とマリユスは答えた。「僕たちは用談をしている。お前の六十万フランをどこに預けたら一番いいか話し合って……。」

「いえ、そんなことではないわ。」とコゼットはそれをさえぎった。「私もはいつて行っ

てよ。私が参つてもいいでしょう。」

彼女は思い切つて扉から出て、客間の中にはいつてきた。たくさんの襷ひだと大きな袖そでのあるまっ白な広い化粧着をつけて、それを首から足先まで引きずっていた。古いゴチツクの画面には天使のまとうそういう美しい長衣が黄金色の空に描いてある。

コゼットは大鏡に映して自分の姿を頭から足先までながめ、それから言い難い喜びにあふれて叫んだ。

「むかし王様と女王様とがおられました、というお嘸はなしのようだわ。私ほんとにうれしいこと！」

そう言つて彼女は、マリユスとジャン・ヴァルジャンとに会釈した。

「さあ私は、」と彼女は言つた、「あなた方のそばの肱掛ひしか椅子いすにすわっていますわ。もう三十分もすれば御飯なのよ。何でも好きなことを話しなざるがいいわ。男の方つて話をしずにはいられないものね。私おとなしくしていますわ。」

マリユスは彼女の腕を取つて、やさしく言つた。

「僕たちは用談をしているのだからね。」

「あそうそう、」とコゼットはそれに答えて言つた、「私窓をあけたら、庭にたくさんピ

エロ（訳者注 雀の俗称）がきていましたわ。小鳥の方のよ、仮装のではないのよ。今日は灰の水曜日（四旬節第一日）でしょう。でも小鳥には大齋日もないのね。」

「僕たちは用談をしているんだから、ねえ、コゼット、ちよつと向こうへ行つてておくれ。数字のことだからお前は退屈するに違いない。」

「まああなたは、今朝けさきれいな襟えり飾かざりりをしていらつしやるのね。ほんとおしやれだこと。いえ、数字でも私は退屈しませんわ。」

「きつと退屈するよ。」

「いいえ。なぜって、あなたのお話ですもの。よくはわからないか知れないけれど、おとなしく聞いていますわ。好きな人の声を聞いておれば、その意味はわからなくてもいいんですもの。ただ私はいつしよにいたいなのよ。あなたといつしよにいますわ、ねえ。」

「大事なお前のことだけれど、それはいけないんだ。」

「いけないんですって!!」

「ああ。」

「よござんすわ。」とコゼットは言った。「いろんなお話があるんだけど。お祖父様じいさまはまだお起きになっていません。伯母様おばさまは弥撒みさに参られました。フォーシユルヴァンお父様

の室^{へや}では、暖炉から煙が出ています。ニコレットは煙筒掃除人を呼びにやりました。トウーサンとニコレットとはもう喧嘩^{けんか}をしました。ニコレットがトウーサン^{ども}の吃^くりをからかつたんです。でも何にもあなたには話してあげないわ。いけないんですって？ では私の方でも、覚えていらつしやい、いけないと言ってあげるわ。どちらが降参するでしょうか。ねえ、マリユス、私もあなたたちおふたりといっしょにここにいさして下さいな。」

「いや、是非ともふたりきりでなければいけないのだ。」

「では私はほかの者だとおつしやるの？」

ジャン・ヴァルジャンはそれまで一言も発しなかった。コゼットは彼の方を向いた。

「まずお父様、私はあなたに接吻^{せつぶん}していただきたいわ。私の加勢もしず何ともおつしやらないのは、どうなすつたんです。そんなお父様つてあるものでしょうか。このとおり私は家庭の中でごく不幸ですの。夫^{おつと}が私をいじめます。さあすぐに私を接吻して下さいな。」

ジャン・ヴァルジャンは近寄つた。

コゼットはマリユスの方を向いた。

「私はあなたはいや。」

それから彼女はジャン・ヴァルジャンに額を差し出した。

ジャン・ヴァルジャンは一步進み寄った。

コゼットは退った。

「お父様、まあお顔の色が悪いこと。お手が痛みますの。」

「それはもうよくなつた。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

「よくお眠りにならなかつたんですか。」

「いいや。」

「何か悲しいことでもおありになるの。」

「いいや。」

「私を接吻せつぶんして下さいな。どこもお悪くなく、よくお眠りになり、御安心していらつし

やるのなら、私何とも小言こごとは申しません。」

そして新たに彼女は額を差し出した。

ジャン・ヴァルジャンは天の反映の宿つてるその額くちびるに唇をあてた。

「笑顔をして下さいな。」

ジャン・ヴァルジャンはその言に従った。しかしそれは幽霊おとの微笑のようだった。

「さあ夫おとから私をかばって下さい。」

「コゼット！」とマリユスは言った。

「お父様、怒ってやって下さい。私がいる方がいいと言ってやって下さい。私の前でもお話はできます。私をばかだと思つていらつしやるのね。ほんとおかしいわ、用談だの、金を銀行に預けるだのつて、大した御用ですわね。男つて何でもないことに勿体^{もったい}をつけたるものね。私ここにいたいんです。私は今朝^{けさ}大変きれいでしよう、マリユス、私を見てごらんさい。」

そしてかわいい肩を少しそびやかし、ちよつとすねてみた何とも言えない顔をして、彼女はマリユスをながめた。ふたりの間には一種の火花があつた。そこに人がいようと少しもかまわなかつた。

「僕はお前を愛するよ！」とマリユスは言った。

「私はあなたを慕つてよ！」とコゼットは言った。

そしてふたりはどうすることもできないでしかと抱き合つた。

「もうこれで、私がここにいってもいいでしょう。」とコゼットは勝ち誇つたようにちよつと口をとがらして化粧着の髻^{ひだ}をなおしながら言った。

「それはいけない。」とマリユスは哀願するよ様な調子で答えた。「僕たちはまだきまり

をつけなければならぬことがあるから。」

「まだいけないの？」

マリユスは厳格な口調で言った。

「コゼット、どうしてもいけないのだ。」

「ああ、あなたは太い声をなさるのね。いいわ、行ってしまいます。お父様も私を助けて下さらないのね。お父様もあなたも、ふたりともあまり圧制です。お祖父様じいさまに言いつけてあげます。私がまたじきに戻ってきてつまらないことをするとお思いなすつては、まちがいですよ。私だつて矜ほこりは持っています。こんどはあなた方がたの方からいらつしやるがいいわ。私がいなけりやあなた方の方で退屈なさるから、見ててごらん下さい。私は行ってしまいます、ようございます。」

そして彼女は出て行った。

二、三秒たつと、扉はまた開いて、彼女の鮮麗な顔が扉の間からも一度現われた。彼女はふたりに叫んだ。

「ほんとに怒っていますよ。」

扉は再び閉ざされ、室へやの中は影のようになった。

彼女が現われたのは、あたかも道に迷った太陽の光が、自ら気づかないで突然闇夜を過ぎつつがよくなものだった。

マリユスは扉が固く閉ざされたのを確かめた。

「かわいそうに！」と彼はつぶやいた、「コゼットがやがて知ったら……。」

その一言にジャン・ヴァルジャンは全身を震わした。彼は昏迷した目でマリユスを見つめた。

「コゼット！ そう、なるほどあなたはコゼットに話されるつもりでしょう。ごもつともです。だが私はそのことを考えていませんでした。人は一つの事には強くても、他の事にはそうゆかない場合があります。私はあなたに懇願します、哀願します、どうか誓って下さい、彼女には言わないと。あなたが、あなただけが、知っている、というので充分ではないでしょうか。私は他から強いられなくとも自らそれを言うことができず。宇宙に向かつて、世界中に向かつて、公言し得るでしょう。私には結局どうでもいいことです。しかし彼女は、彼女には、それがどんなことだかわかりますまい。どんなにおびえるでしょう。徒刑囚、それが何であるかも説明してやらなければなりませんまい。徒刑場にはいつていた者のことだ、とも言ってやらなければなりませんまい。彼女は、かつて――鎖

の囚人らが通るのを見たことがあります。ああ！」

彼はひしか肱掛すけ椅子すに倒れかかり、両手で顔をおおうた。声は聞こえなかったが、肩の震えを見れば、泣いてるのが明らかだった。沈黙のていきゆう涕ゆう、痛烈な涕泣だった。

むせび泣きのうちには息のできないことがある。彼は一種のけいれん痙攣れんにとらえられ、息をするためのように椅子の背に身をそ反らせ、両腕をたれ、涙にぬれた顔をマリユスの前にさらした。そしてマリユスは、底のない深みに沈んでるかと思われる声で、彼が低くつぶやくのを耳にした。

「おお死にたい！」

「御安心なさい、」とマリユスは言った、「あなたの秘密は私だけでだれにももらしません。」

そしてマリユスは、おそらく読者が想像するほど心を動かされてはいなかったであろうが、一時間ばかり前から意外な恐ろしいことにもなれてこざるを得なかったし、目の前で一徒刑囚の姿が徐々にフォーシユルヴァン氏の姿に重なってくるのを見、痛むべき現実にしだいにとらえられ、その場合の自然の傾向として、相手と自分との間にできたへだたりを認めざるを得ないようになって、こう言い添えた。

「私は、あなたが忠実にまた正直に返して下さった委託金について、一言も言わないでおられないような気がします。それは実に清廉な行ないです。あなたはその報酬を受けられるのが正当です。どうかあなたから金額を定めて下さい、それだけ差し上げますから。いかほど多くとも御遠慮にはおよびません。」

「御親切は感謝します。」とジャン・ヴァルジャンは穏やかに答えた。

彼はしばらく考え込んで、人差し指で親指の爪つめを機械的にこすっていたが、やがて口を開いた。

「もうほとんど万事すんだようです。そして最後にも一つ残っています……。」

「何ですか。」

ジャン・ヴァルジャンはこれを最後というように躊躇ちゅうちよしながら、声という声も出さず、ほとんど息もしないで、言った、というよりむしろ口ごもった。

「すべてを知られた今となつては、御主人としてあなたは、私がもうコゼットに会つてはいけないとお考えになるでしょうか。」

「その方がいいだろうと思います。」とマリユスは冷ややかに答えた。

「ではもう会いますまい。」とジャン・ヴァルジャンはつぶやいた。

そして彼は扉とびらの方へ進んでいった。

彼はとつ手に手をかけ、門かど子こははずれ、扉は少し開いた。ジャン・ヴァルジャンは通れるくらいにそれを開き、ちよつと立ち止まり、それからまた扉をしめて、マリユスの方へ向き直った。

彼はもう青ざめてるのではなく、ほとんど色を失っていた。目にはもう涙もなく、ただ悲壮な一種の炎が宿っていた。その声は再び不思議にも落ち着いていた。

「ですが、」と彼は言った、「もしおよろしければ、私は彼女に会いにきたいのです。私は実際それを非常に望んでいます。もしコゼットに会いたくないのでしたら、あなたにこんな自白はしないで、すぐにどこかへ行つてしまつたはずです。けれども、コゼットのいる所に留まつており、やはり続けて会いたいと思えますから、すべてを正直にあなたに申さなければならなかつたのです。私の考えの筋はおわかりでしょう、容易にわかることです。私は九カ年以上も彼女といつしよにいたのです。私どもは初めは大通りの破家あばらやに住み、それから修道院に住み、次にリユクサンブルの近くに住んでいました。あなたが始めて彼女に会われたのはリユクサンブルですね。彼女の青いペルシの帽を覚えておいでですか。それから私どもは、アンヴァリード街区に行きました。鉄門と庭とのある家で

す。プリューメ街です。私は小さな後庭の離れに住んでいて、そこからいつも彼女のピアノを聞いていました。それが私の生命でした。私どもは決して別々になったことはありませんでした。九年と何カ月か続いたのです。私は実の親のようであり、彼女は実の娘のようでした。あなたにもよくおわかりかどうか知りませんが、ポンメルシーさん、今立ち去ってしまった、もう彼女に会わず、もう彼女に言葉もかけず、まったく彼女を失ってしまったのは、実にたえ難いことです。もし悪いとお考えになりませんでしたら、私は時々コゼットに会いにきたいのです。たびたびは参りません。長居もいたしません。表の小さな室へやにきめていただいてもよろしいです。階下したの室でもよろしいです。召し使い用の裏門から出入りしてもかまいません。しかしそれではかえって怪しまれましょう。やはり普通の表門からはいった方がよろしいでしょう。まったくのところ私は、なおコゼットに会いたいのです。どんなにまれにでもよろしいです。私の地位になって考えて下さい。私はそれ以外に何の望みもありません。それにまたもちろん用心もしなければなりません。私がまったくこなくなれば、かえって悪いことになり、人から不思議に思われるでしょう。で最も都合よくするには、夕方参った方がいいでしょう、夜になろうとする頃。」

「毎晩こられてもよろしいです。」とマリユスは言った。「コゼットにお待ちさせます。」

「御親切はありがたく思います。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

マリユスはジャン・ヴァルジャンにお辞儀をし、幸福は絶望を扉とびらの所まで送り出し、そしてふたりは別れた。

二 語られし秘密の中の影

マリユスの心は転倒してしまった。

コゼットのそばについてるその男に対して、彼がいつも感じていた一種のへだたりは、今や彼にも了解できた。その男の身には何となく謎なぞのような趣があつて、彼は本能からそれに気づいていたのである。謎というのは、最も忌まわしい汚辱、徒刑場だった。あのフオーシユルヴァン氏は徒刑囚ジャン・ヴァルジャンであつた。

幸福の最中に突然そういう秘密を知ることが、あたかも鳩はとの巢さそりの中に蠍を見いだすがよ
うなものだつた。

マリユスとコゼットとの幸福は、今後かかるものと隣となりしなければならぬように定められていたのか。それはもう動かし難い事実だったのか。成立した結婚の一部としてその男

を受け入れなければならなかったのか。もはやいかんともする道はなかったのか。

マリユスは徒刑囚ともまた離れ難い関係となつたのか。

いかに光明や喜悅の冠をいただこうとも、人生の紅の時期を、幸福な愛を、いかに味わおうとも、それを忍ぶことができようか。かかる打撃は、恍惚こうこつたる大天使をも、光榮に包まれたる半神をも、必ずや戦慄せんりつさせるであろう。

かかる限界の激變の常として、マリユスは自ら責むべき点はないかを顧みてみた。洞どうき察つの明を欠いてはいなかったか。注意の慎重さを欠いてはいなかったか。いつとなくうつかりしてはいなかったか。おそらく多少その氣味があつたかも知れない。ついにコゼツトとの結婚に終わつたその恋愛事件のうちに、まず周囲のことを明らかにしないで、不注意にふみ込んでゆきはしなかったか。およそ吾人が生活から少しづつ改善されてゆくのは、吾人が自ら自身に対してなす一連の認定によつてであるが、彼も今、自分の性質の空想夢幻的な一面を自認した。そういう一面は、多くの者が有する一種の内心の雲であつて、熱情や悲哀の激発のうちにはひろがつてゆき、魂の気温に従つて変化し、その人全体を侵し、その本心を霧に包んでしまうものである。われわれは前にしばしば、マリユスの個性のこの独特な要素を指摘しておいた。マリユスは今になつてようやく思い起こした、自分の恋

に酔いながらプリューメ街で、無我夢中になっていた六、七週間の間、あのゴルボーの破あばちや家における活劇のことを、争闘の間沈黙して次に逃げ出すという不思議な行動を被害者が取ったあの活劇のことを、コゼットに一口も語らなかつたのを。その事件を少しもコゼットに話さなかつたというのは、どうしたことだろうか。ごく最近のことだったのに！ テナルデイエという名前をさえ口外しなかつたのは、ことにエポニーヌに会った日ですえ口をつぐんでいたのはどうしたことだったろうか。今となってみれば、彼はその当時の自分の沈黙をほとんど自ら説明に苦しむほどだった。けれどもいろいろ理由も考えられた。自分のそそっかしいこと、コゼットに酔ってしまったこと、すべてが恋にのみつくされていたこと、互いに理想の天地に舞い上がっていたこと、またおそらく、その激越ぼくせんな楽しい心の状態にほとんどわからぬくらいの理性が交じって、ために漠然ぼくせんたる鋭い本能から、あの触れることを恐れていた恐怖すべき事件について、何らの役目もつとめたくなく、ただのがれようとばかり欲していて、その話をしまたは証人となるには同時に告訴者とならざるを得ない地位に自分が立つてるあの事件を、記憶のうちに隠して埋滅いんめつさしてしまおうとしていたこと。それにまた、その数週間は電光のようであつて、ただ愛し合うのほか何の余裕もなかつた。それからまた、すべてを考量し、すべてをひっくり返

してみ、すべてを調べて、ゴルボー屋敷の待ち伏せのことをコゼットに話し、テナルディエという名前を彼女に言ったところで、その結果はどうなったろうか。ジャン・ヴァルジャンが徒刑囚であることを発見したところで、彼マリユスの心が変わり、またコゼットの心が変わったであろうか。それで彼は退いたであろうか。彼女を愛しなくなったであろうか。彼女と結婚しなくなったであろうか。否。何かが今と違うようになったであろうか。否少しも。それでは何も後悔し、何も自責することはなかったではないか。すべていいようになつたのだ。恋人と呼ぶる酩酊者めいていしやにとつては一つの神があるものである。マリユスは盲目でありながら、洞察どうさつの明をそなえていたのと少しも変わらない道をたどつたのである。恋は彼の目をおおつていた。しかしそれはどこへ導かんがためにか。楽園へ導かんがためにはなかつたか。

しかし今後は、その楽園は傍かたわらに地獄を引き連れてゆくことになつたのである。

あの男に対して、ジャン・ヴァルジャンとなつたフォーシユルヴァンに対して、元からマリユスがいていたへだたりの感じは、今は嫌悪けんおの情を交じうるに至つた。

あえて言うが、その嫌悪の情の中にはまた、あわれみの念があり、ある驚きの念さえも含まれていた。

その盗人は、その再犯の盗人は、委託金をそのまま返した。しかもいくらであるかと言えば、実に六十万フランである。彼ひとりしかその秘密を知ってる者はなかった。そしてすべてを自分のものとなし得るのだった。しかも彼はそっくり返してしまった。

その上、彼は自ら進んで身分を打ち明けた。しかも何からも強いられただけではない。彼がいかなる者であるかを人に知られたとすれば、それは彼自身の言葉によってである。その自白はただに屈辱を甘受するばかりではなく、また危険をも甘受するものであった。罪人にとっては、仮面は単なる仮面でなく、また一つの避難所である。彼はその避難所を自ら捨ててしまった。偽名は一身の安全を得さるものである。彼はその偽名を自ら投げ捨ててしまった。徒刑囚たる彼も正しい家庭のうちに長く身を隠し得たのであるが、彼は自らその誘惑に抵抗した。そしてそれらはいかなる動機からかと言え、ただ良心の懸念からである。彼は偽りだとはどうしても思えない強い調子でそれを自ら説明した。要するにこのジャン・ヴァルジャンなる者がいかなる男であったにせよ、確かに目ざめたる一つの良心であった。そこには神秘的な再生が始まっていた。そして外からながめたところによれば、彼は既に長い以前から謹直の僕しもべとなっていた。かかる正と善との発動は下賤げせんな性格者にはあり得べからざることである。良心の覚かくせい醒、それは魂の偉大さを示すものである。

ジャン・ヴァルジャンは誠実であつた。その誠実さは、目に見えるものであり、手に触れられるものであり、否定し得べからざるものであり、そのために彼が自ら受けた悲痛の情によつても明らかに知らるるものであつて、真実か否かの穿鑿せんさくを不用ならしめ、彼が言つたすべてに権威を与えていた。かくてマリユスは不思議な地位にはさまれた。フォーシウルヴァン氏の口から出てくるものは、すべて不誠実であり、ジャン・ヴァルジャンの口から発するものは、すべて誠実であつた。

マリユスは種々考慮してジャン・ヴァルジャンに対する不思議な貸借表を作つてみ、その貸しと借りとを調べ上げ、一つの平均点に達せんとつとめた。しかしそれらはすべてあたかも暴風雨の中にあるがようだった。マリユスはその男に対して明確な観念を得ようとして、つとめ、言わばジャン・ヴァルジャンの思想の奥底まで見きわめようとしたが、彼の姿はいかんともし難い靄もやの中に出没してとらえ難かつた。

正直に返された委託金、誠実になされた告白、それは善良なることであつた。それはあたかも雲の中にひらめく光のようなものだった。が次にまた雲は暗くなつた。

マリユスの記憶はいかにも混乱していたが、多少の影は浮かんできた。

ジョンドレットの陋屋ろうおくにおけるあの事件は果たしてどういうことであつたらうか。警

官がきた時、なぜあの男は訴えることをせずに逃げ出してしまったのか。そのことについてはマリユスも答えを見いだし得た。すなわちその男は脱走の身で法廷から処刑されていたからである。

次に第二の疑問が起こってきた。なぜあの男は防寨ぼうさいにやってきたのか。というのは、今やマリユスは炙あぶりだ出しインキのように、記憶が激しい情緒のうちに再び現われてくるのを明らかに認めたからである。あの男は防寨にいた。しかも戦ってはいなかった。いったい何をしにきたのであるか。その疑問に対して、一つの幻が浮かんできて答えた、ジャヴェルと。ジャン・ヴァルジャンが縛られてるジャヴェルを防寨の外へ連れてゆくすごい光景を、マリユスは今明らかに思い起こした、そしてモンデトゥール小路かどの角かどの向こうに恐ろしいピストルの音がしたので、今なお耳にするがように覚えた。おそらくあの間諜スパイとあの徒刑囚との間には、憎悪ぞうおの念があつたに違いない。互いに邪魔になつていたのであろう。それでジャン・ヴァルジャンは復讐ふくしゅうをしに防寨ぼうさいへきたのだ。彼は遅くやってきた。たぶんジャヴェルが捕虜になつてることを知つてきたのかも知れない。コルシカのいわゆるヴェンデッタ（訳者注　コルシカの閥族間に行なわれる猛烈な復讐）はある種の下層社会にはいりこんで一つの法則となつている。半ば善の方へ向かつてる者でもそれを至当だ

と思うほど普通のことになっている。彼らは悔悟の途中において窃盗は慎むとしても、復讐には躊躇しない。それでジャン・ヴァルジャンはジャヴェルを殺したのだ。あるいは少なくとも殺したらしい。

最後になお一つの問題が残っていた。そしてこれには何らの解答も得られなかった。マリユスはあたかも釘抜きにはさまれたように感じた。すなわち、ジャン・ヴァルジャンとコゼットとあれほど長く生活を共にしてきたのは、どうしてだったろうか。この少女をあの男といつしよに置いた痛ましい天の戯れは、何の意味だったろうか。天上には二重鍛えの鎖もあるもので、神は天使と悪魔とをつなぎ合わせて喜ぶのであろうか。罪悪と潔白とが悲惨の神秘的な牢獄において室を同じゆうすることもあるのか。人間の宿命と呼ぶる一連の囚徒のうちにおいて、二つの額が、一つは素朴であり、一つは獐猛であり、一つは曙の聖い白色に浸り、一つは劫火の反映で永久に青ざめている、二つの額が、相並ぶこともあるのか。その説明し難い配合をだれが決定し得たのか。いかにして、いかなる奇跡によつて、この天の少女と地獄の老人との間に共同の生活が立てられたのか。何者が子羊を狼に結びつけ得たのか。そして更に不可解なことには、何者が狼を子羊に愛着させ得たのか。なぜならば、その狼は子羊を愛していたではないか、凶猛なる者がか弱い者を慕つ

ていたではないか、また九カ年間、天使は怪物によりかかつて身をささえていたではないか。コゼットの幼年および青年時代、世の中への顔出し、生命と光明との方への潔い生育、それらは皆この不思議な献身によつてまもられていたのである。ここに問題は、言わば数限りない謎なぞに分かれ、深淵しんえんの下に更に深淵が開けてきて、マリユスはもはや眩暈げんうんを感じずにはジャン・ヴァルジャンの方をのぞき込むことができなかつた。その深淵のごとき男はそもそも何者であつたらうか。

創世紀の古い比喻ひゆは永久に真なるものである。現在のごとき人間の社会には、将来大なる光によつて変化されない限り、常に二種の間人が存在する。一つは高きにある者であり、一つは地下にある者である。一つは善に従う者、すなわちアベルであり、一つは悪に従うもの、すなわちカインである。しかるに今、このやさしい心のカインは、そもそもいかなるものであつたらうか。処女に対して、敬虔な心を傾けて愛し、彼女を監視し、彼女を育て、彼女をまもり、彼女を敬い、自ら不潔の身でありながら、純潔をもつて彼女をおおい包むこの盗賊は、そもそもいかなるものであつたらうか。無垢むくなる者を尊んで、それに一つの汚点をもつけさせなかつたこの汚泥おでいは、そもそもいかなるものであつたらうか。コゼットを教育したこのジャン・ヴァルジャンは、そもそもいかなるものであつたらうか。上

りゆく一つの星をしてあらゆる影と雲とを免れさせんとのみつとめた、この暗黒の男は、
そもそもいかなるものであつたらうか。

そこにジャン・ヴァルジャンの秘密があつた。またそこに神の秘密があつた。

その二重の秘密の前にマリユスはたじろいだ。ある意味において、一つは他を確実ならしめていた。この一事の中に、ジャン・ヴァルジャンの姿とともにまた神の姿も見られた。神はおのれの道具を持つている。神は欲するままの道具を使用する。神は人間に対しては責任を持たない。吾人はいかにして神の意を知り得ようぞ。ジャン・ヴァルジャンはコゼットののために力を尽した。彼はある程度まで彼女の魂を作り上げた。それは争うべからざる事実だつた。しかるに、その仕事をした者は恐るべき男であつた。しかしなされた仕事はみごとなものであつた。神はおのれの心のままに奇跡を行なつた。神は美しいコゼットを作り上げ、その道具としてジャン・ヴァルジャンを使った。神は好んでこの不思議な共同者を選んだ。それはどういふつもりであつたかを、吾人は神に尋ねべきであらうか。肥料が春に手伝つて薔薇の花を咲かせるのは、別に珍しいことでもないではないか。

マリユスはそういう答えを自ら与えて、自らそれをよしと思つた。上に指摘したあらゆる点に関して、彼はあえてジャン・ヴァルジャンに肉迫してゆかなかつた。あえて肉迫し

得ないでいるのは自ら気づかなかつた。彼はコゼットを鍾愛^{しようあい}し、コゼットを所有し、そしてコゼットは純潔に光り輝いていた。それでも彼には充分だった。この上いかなる説明を要しようぞ。コゼットは光輝そのものであつた。光輝を更に明らかにする要があるうか。マリユスはすべてを持っていた。更に何を望むべきことがあるう。まつたく、それで十分ではないか。ジャン・ヴァルジャン一身のことなどは、彼の関することではなかつた。その男のいかんともし難い影をのぞき込みながら、彼はそのみじめなる男の莊重な斷言にすがりついた。「コゼットに対して私は何の關係がありません。十年前までは彼女が世にいることすらも知りませんでした。」

ジャン・ヴァルジャンはただ通りがかりの者にすぎなかつた。それは彼が自ら言つたことである。そして彼は今通りすぎようとしていた。彼がいかなる者であつたにせよ、その役目はもう終わつていた。今後コゼットのそばで保護者の役目をする者はマリユスとなつていた。コゼットは蒼天^{そうてん}のうち、自分と似寄つた者を、恋人を、^{おつと}夫を、天国における男性を、見いだしたのである。翼を得姿を変えたコゼットは、空虚な醜い脱殻たるジャン・ヴァルジャンを、地上に残してきたのだつた。

かくてマリユスは種々考え回したが、いつも終わりには、ジャン・ヴァルジャンに対す

る一種の恐怖に落ちていった。おそらくそれは聖なる恐怖であつたらう。なぜなら彼は、その男のうちに天意的なものを感じていたからである。けれどもとにかく、いかに考えてみても、またいかに事情を酌^くんでやつても、常にこういう結論に落ちゆかざるを得なかつた。すなわち、彼は徒刑囚である。換言すれば、社会の最も下の階段よりも更に下において、自分の立つべき階段を有しない者である。最下等の人間の次が、徒刑囚である。徒刑囚は言わば生きた人間の仲間にはいる者ではない。徒刑囚は法律から、およそ奪われ得る限りの人間性を皆奪われた者である。マリユスは民主主義者であつたが、刑法上の問題については厳格な社会組織の味方であつて、法律に問わるる者に対してはまったく法律と同じ精神で臨んでいた。彼もまだあらゆる進歩をしたとは言えなかつた。人間によつて書かれたものと神によつて書かれたものとを、法律と権利とを、彼はまだ区別し得なかつた。人力にて廃しまたは回復し得ざるものをも処断するの権利を人が有するか否かを、少しも精査し考察していなかつた。刑罰という語に少しも反感を持っていなかつた。成文律を犯した者が永久の罰を被るのは、きわめて至当なことであると考え、文明の方法として、社会的永罰を承認していた。彼は天性善良であり、根本においては内心の進歩をもなし遂げていたので、必ずや将来更に進んだ考えを持つには違ひなかつたが、現在においてはまだ右の

ような地点にしかいなかった。

そういう思想状態にあつたので、彼にはジャン・ヴァルジャンがいかに醜いとうべきものに見えた。それは神に見棄て^すられたる男だつた。徒刑囚だつた。この徒刑囚という一語は、彼にとつては、審判のラツパの響きのように思えた。そして長くジャン・ヴァルジャンをながめた後、彼が最後に取つた態度は顔をそむけることだつた。退け（訳者注サタンよ退け）であつた。

あえて実際のところを言うならば、マリユスはジャン・ヴァルジャンにいろいろ尋ねて、ついにジャン・ヴァルジャンをして「あなたは私にすべてを打ち明けてくれと言われる」と言わしめた程であつたが、それでも重要な二、三の疑問は避けたのだけだつた。それらの疑問が頭に浮かばないではなかつたが、彼はそれを尋ねることを恐れた。すなわち、ジョン・ドレットの陋屋^{ろうおく}のこと、防寨^{ぼうさい}のこと、ジャヴェルのこと。それらの疑問からはいかなる事実が現われてくるか見当がつかなかつた。ジャン・ヴァルジャンは自白を躊躇^{ちゆうちよ}するような男とは思われなかつた。そしてマリユスは、強^しいて彼の口を開かせた後、また中途で、彼の口をつぐませたくなるかも知れなかつた。ある非常な疑念の場合において、一つの問いを發した後、その答えが恐ろしくなつて耳をふさぐとするようなことは、だれ

にでもあるものである。そういう卑怯ひきょうな念は、恋をしてる場合にことによく起こつてくる。いとうべき事情を極度に聞きただすのは、賢明なことではない。自分の生命と分かつべからざる方面が必ずや関係してくるような場合には、ことにそうである。ジャン・ヴァルジャンが我を捨ててかかった説明からは、いかなる恐ろしい光が出て来るかわからなかつたし、その忌むべき光がコゼットの身にまでおよぶかも知れなかつた。その天使の額にも、地獄の光が多少残つてるかも知れなかつた。電光の飛沫ひまつもなお雷である。人の宿命にも一種の連帯性があるもので、潔白それ自身といえどもなお、他物をも染める反射の痛ましい法則によつて罪惡の印が押されてることがある。最も純潔なるものにも、忌むべきものと隣した反映の跡がなお残つてることがある。正當か不當かは別として、とにかくマリユスは恐れをいだいた。彼は既にあまりあるほどのことを聞かされていた。その上深入りすることよりもむしろ心を転ずることを求めていた。彼は我を忘れて、ジャン・ヴァルジャンに対しては目を閉じながら、コゼットを両腕に抱き去つた。

その男は闇夜やみであつた。生きてる恐ろしい闇夜であつた。いかにしてその奥底を探ることをなし得よう。闇に向かつて問いを発するのは恐怖すべきことである。いかなる答えが出てくるかわかつたものではない。そのために曙あけぼのまでも永久に暗くされるかも知れない。

そういう精神状態にあつたから、以来その男がコゼットと何らかの接触を保つということは、マリユスにとつては思うもたえ難いことだった。自ら躊躇してなし得なかつたその恐ろしい問い、動かすべからざる決定的な解決が出て来るかも知れなかつたその恐ろしい問い、それをあえて発しなかつたことを、彼は今となつてほとんど自ら責めた。彼は自分があまりに善良で、あまりにおだやかで、更に言えば、あまりに弱かつたのを知つた。その弱さのために彼は、不注意な譲歩をするに至つたのである。彼はその感傷に乗せられた。彼は誤つた。きつぱりと簡単にジャン・ヴァルジャンを拒絶すべきであつた。ジャン・ヴァルジャンはむしろ火に与うべき部分であつて、彼はそれを切り捨てて自分の家を火災から免れさせるべきであつた。彼は自ら自分を恨み、また自分の耳をふさぎ目をふさいで巻き込んでいつたその情緒の突然の旋風を恨んだ。彼は自分自身に不満だつた。

今はいかにしたらいいか。ジャン・ヴァルジャンの訪問は彼のはなはだしくいとうところだつた。あの男を家に入れて何の役に立つか。どうしたらいいか。そこまで考えてきて彼は迷つた。彼はそれ以上掘り下げることが欲せず、それ以上深く考慮することを欲しなかつた。彼は自ら自分を測ることを欲しなかつた。彼は約束を与えていた、言わゆるままに約束してしまつた。ジャン・ヴァルジャンは彼の誓約を得ていた。徒刑囚に対しても、

否徒刑囚に対してであるからなおさら、約束は守らなければならぬ。とは言え彼の第一の義務はコゼットに対するものだった。要するに彼は、何よりもまず嫌悪けんおの念に揺すられた。

マリユスは、頭の中にあるあらゆる観念を一々取り上げ、そのたびごとに心を動かされながら、雑然たる全体のことを持ちあぐんだ。その結果深い惑乱に陥った。またその惑乱をコゼットに隠すのは容易なことではなかった。しかし愛は一つの才能である。マリユスはついにそれを隠し遂げた。

その上彼は、鳩はとの白きがように率直であつて何らの疑念をもいだいていないコゼットに、それとなくいろいろなことを尋ねてみた。彼女の子供の時のこと、彼女の若い時のこと、それについて彼女と話をしてみた。そしてあの徒刑囚がコゼットに対して、およそあり得る限り善良で慈悲深くりっぱに振る舞つてきたことを、しだいに確認するに至つた。マリユスが推察し仮定していたことはすべて事実だった。その気味悪い蕁麻いらくさはこの百合ゆりを愛して保護してきたのであつた。

第八編 消えゆく光

一 下の室^{へや}

翌日、夜になろうとする頃、ジャン・ヴァルジャンはジルノルマン家を表門から訪れた。彼を迎えたのはバスクだった。バスクはちようど中庭に出ていて、何か言いつけを受けてでもいるがようだった。誰^{だれ}某^{それ}さんがこられるから気をつけておいでと召し使いに言うと、ちようどその人がやってくる、そういうことも時々あるものである。

バスクはジャン・ヴァルジャンが近寄るのも待たないで、彼に言葉をかけた。

「二階^{した}がおよろしいか階下^{した}がおよろしいか伺うようにと、男爵様の仰せでございます。」

「階下^{した}にしよう。」とジャン・ヴァルジャンは答えた。

バスクはもとよりきわめて恭^{うやうや}しい態度で、低い室の扉^{とびら}を開いて、そして言った。「ただ今奥様に申し上げます。」

ジャン・ヴァルジャンが通されたのは、丸天井のついたじめじめした階下の室で、時々物置きに使われ、街路に面し、赤い板瓦が舗いてあり、鉄格子のついた窓が一つあるきりで、中は薄暗かった。

それははたきやブラシや箒でいじめられる室ではなかった。ほこりは静かに休らつていた。蜘蛛は何らの迫害も受けないでいた。りっぱな蜘蛛の巣が一つ、まっ黒に大きくひろげられ蠅の死体で飾られて、窓ガラスの上に車輪のようにかかつていた。室は狭くて天井も低く、一隅には空罎が積まれていた。石黄色の胡粉で塗られた壁は、所々大きく剥落していた。奥の方に黒塗りの木の暖炉が一つあって、狭い棚がついていた。中には火が燃えていた。それは「階下にしよう」というジャン・ヴァルジャンの返事が既に予期されてたことを、明らかに示すものだった。

二つの肱掛け椅子が暖炉の両すみに置かれていた。椅子の間には、毛よりも糸目の方がよけいに見える古い寝台敷きが、絨毯の代わりにひろげられていた。

室の中は暖炉の火の輝きと窓からさす薄明りとで照らされてるのみだった。

ジャン・ヴァルジャンは疲れていた。数日来食も取らず眠ってもいかなかった。彼は肱掛け椅子の一つに身を落とした。

バスクが戻ってきて、点火した蠟燭を一本暖炉の上に置き、また出て行った。ジャン・ヴァルジャンは首をたれ、頤を胸に埋めて、バスクにも蠟燭にも目を向けなかった。突然彼は飛び上がるようにして身を起こした。コゼットが彼のうしろに立っていた。

彼は彼女がはいってくるのを見はしなかったが、その気配を感じたのだった。

彼は振り向いて彼女をながめた。彼女はいかにもあでやかな美しさだった。しかし彼のその深い眼眸でながめたのは、その美ではなくて魂であった。

「まあ、」とコゼットは叫んだ、「何というお考えでしょう！ お父様、私あなたが変わったお方だとは知っていました、こんなことをなさろうとは思いませんでしたわ。ここで私に会いたいとおっしゃるのだと、マリユスが申すのですよ。」

「そう、私から願ったことだ。」

「そうおっしゃるだろうと思っていました。ようございます。仕返しをしてあげますから。でもまあ最初のことからしましょう。お父様、私を接吻して下さいな。」

そして彼女は頬を差し出した。

ジャン・ヴァルジャンは不動のままだった。

「お動きなさいませぬのね。わかりますよ。罪人のようですよ。でもとにかく許してあげ

ます。イエス・キリストも言われました、他の頬をもめぐらしてこれに向けよと。さあここにございます。」

そして彼女は他の頬を差し出した。

ジャン・ヴァルジャンは身動きもしなかった。あたかもその足は床に釘付けくぎにされてるがようだった。

「本気でそうしていらつしやるの。」とコゼットは言った。「私あなたに何かしましたかしら。ほんとに困ってしまいますわ。私あなたに貸しがありますのよ。今日は私どもといっしょに御飯を召し上がって下さらなければいけません。」

「食事は済んでいる。」

「嘘うそですわ。私ジルノルマン様にあなたをしかつていただきますよ。お祖父様じいさまならお父様を少ししたしなめることができます。さあ、私といっしょに客間にいらつしやいよ、すぐに。」

「いけない。」

それでコゼットは多少地歩を失った。彼女は上手うわてに出るのをやめて、こんどはいろいろ尋ねるようになった。

「どうしてでしょう！ 私に会うのに家で一番きたない室^{へや}をお望みなさるなんて。ここはほんとにひどいではありませんか。」

「お前も知っ……。」

ジャン・ヴァルジャンは言い直した。

「奥さんも御存じのとおり、私は変人だ、私にはいろいろ変わった癖がある。」

コゼットは小さな両手をたたいた。

「奥さん！ 御存じのとおり！……それもまた変だわ。どういうわけでしょう？」

ジャン・ヴァルジャンは時々ごまかしにやる例の悲痛なほほえみを彼女に向けた。

「あなたは奥さんになることを望んだ。そして今奥さんになっている。」

「でもあなたに対してはそうではありませんわ、お父様。」

「もう私を父と呼んではいけない。」

「まあ何をおっしゃるの？」

「私をジャンさんと呼ぶなければいけない、あるいはジャンでもいい。」

「もう父ではないんですって、私はもうコゼットではないんですって、ジャンさんですって。いったいどうしてでしょう。大変な変わりようではありませんか。何か起こったので

すか。まあ私の顔を少し見て下さいな。あなたは私どもといっしょに住むのをおきらいなさるのね。私の室をおきらいなさるのね。私あなたに何をしまして！ 何をしましたでしょう。何かあるのでございましょう。」

「いや何にも。」

「それで？」

「いつもと少しも変わりはない。」

「ではなぜ名前をお変えなさるの。」

「あなたも変えている。」

彼はまた微笑をして言い添えた。

「あなたはポンメルシー夫人となつてゐるし、私はジャンさんとなつても不思議ではない。」

「私にはわけがわかりませんわ。何だかばかげてるわ。あなたをジャンさんと言つてよいおとつと
か夫に聞いてみましょう。きつと許してはくれないでしょう。あなたはほんとに、大變私に心配をさせなさいますのね。いくら変わった癖があるからといって、この小さなコゼツトを苦しめてはいけません。悪いことですわ。あなたは親切な方だから、意地悪をなすつ

てはいけません。」

彼は答えなかった。

彼女は急に彼の両手を取り、拒む間を与えずそれを自分の顔の方へ持ち上げ、頤あごの下の首元に押しあてた。それは深い愛情を示す所作だった。

「どうか、」と彼女は言った、「親切にして下さいな。」

そして彼女は言い進んだ。

「私が親切というのはこういうことですわ。意地っ張りをなさらないで、ここにきてお住みになって、またちよいちよいつしよに散歩して下すって、プリユーム街のようにここにも小鳥がいますから、私どもといっしよにお暮らしなすって、オンム・アルメ街のひどい家をお引き払いになり、私たちにいろんな謎なぞみたいなことをなさらず、普通のとおりにしていらつして、私どもといっしよに晩餐ばんさんもなされば、私どもといっしよに昼御飯もお食べになり、私のお父様になつて下さることですわ。」

彼は取られた手を離した。

「あなたにはもう父はいらない、夫おつとがあるから。」

コゼットは少し気を悪くした。

「私に父がいらないんですって！ そんな無茶なことをおっしゃるなら、もう申し上げる言葉もありません。」

「トウ・サンだったら、」とジャン・ヴァルジャンは考えの拠り所を求めて何でも手当たりしだいにつかもうとしてるかのようにつつた、「私にはまったくいつも自己一流のやり方があることを、一番に認めてくれるだろう。何も変わったことが起こったのではない。私はいつも自分の薄暗い片すみを好んでいた。」

「でもここは寒うございます。物もよく見えません。そしてジャンさんと言ってくれとおっしゃるのも、あまりひどすぎます。私にあなたなんておっしゃるのもいやです。」

「ところで、さつきここへ来る途中、」とジャン・ヴァルジャンはそれに答えて言った、「サン・ルイ街で私の目についた道具が一つある。道具屋の店先に置いてあった。私もしきれいな女だったらあの道具をほしがったに違いない。ごくりっぱにできてる新式の化粧台だった。たしかあなたが薔薇ばらの木と言っていたあの道具だった。籐はめきざいく木細工も施してあった。鏡もかなり大きかった。引き出しもいくつかついていた。実にきれいなものだった。」

「ほんとに人をばかにしていらつしやるわ！」とコゼットは答え返した。

そしてこの上もなにかわいい様子で、齒をくいしばり、脣くちびるを開いて、ジャン・ヴァルジヤンに息を吹きかけた。それは猫のまねをした美の女神だった。

「私はもう腹が立つてなりません。」と彼女は言った。「昨日きのうから、みんなで私にひどいことばかりなさるんですもの。私はほんとに怒っています。私にはわけがわかりません。マリユスが何か言ってもあなたは私をかばって下さらないし、あなたが何かおっしゃってもマリユスは私の味方になってくれません。私はひとりぼっちです。私はおとなしく室へやまで用意しています。もし神様にでもはいつていただけるのでしたら、ほんとに喜んでお入れたいくらいです。だれもその室にはいつて下さる人もありません。室の借り手がないので私は破産してしまいます。ニコレットに少しごちそうのしたくをさしても、どなたも食べて下さりません。そして私のフォーシユルヴァンお父様はジャンさんと言えとおっしゃるし、また、壁には髯ひげがはえていて、玻璃器はりきの代わりには空罎あきびんが並んでおり、窓掛けの代わりには蜘蛛の巣が張っているような、恐ろしい古いきたないじめした窖あなぐらのような所で、私に会ってくれとおっしゃるんですもの。あなたが一風変わった方だとは私も承知しています。あなたのいつものことですから。けれども結婚したばかりの者には、少し気を休ませてやるものですわ。あとでまたすぐ変わったこともできるではありませんか。

あなたはあのオンム・アルメ街のひどい家がいいとおっしゃいますの。私はもういやでたまりません。いったい私に何を怒っていらつしやいますの。私心配でなりませんわ。ああ！

そして急にまじめになって、彼女はジャン・ヴァルジャンをじっと見つめ、こう言い添えた。

「あなたは、私が幸福であるのをおもしろく思っただけいらつしやらないんですか。」

無邪気も時には自ら知らないで深くつき込むことがある。右の疑問は、コゼットにとってはごく単純なものだったが、ジャン・ヴァルジャンにとっては深くつき込んだものだった。コゼットはちよつとひつかくつもりだったが、実は深い傷を相手に与えた。

ジャン・ヴァルジャンは顔色を変えた。彼はしばらく返事もせずじっとしていたが、次に自ら自分に話しかけるような何とも言えない調子でつぶやいた。

「その幸福は私の生涯の目的であった。今神は私が去るべきを示して下さい。コゼット、お前は幸福だ。私の日は終わったのだ。」

「ああお前と呼んで下すつたのね！」とコゼットは叫んだ。

そして彼女は彼の首に飛びついた。

ジャン・ヴァルジャンは我を忘れて、彼女を惘然ぼうぜんと自分の胸に抱きしめた。彼はほとんど彼女をまた取り戻したような心地になった。

「ありがとう、お父様。」とコゼットは言った。

その感情の誘惑はジャン・ヴァルジャンにとつて痛烈なものとなり始めた。彼は静かにコゼットの腕から身を退け、そして帽子を取り上げた。

「どうなさるの。」とコゼットは言った。

ジャン・ヴァルジャンは答えた。

「奥さん、お別れします。皆様が待つていられますようから。」

そして扉とびらの闕しきの上で彼は言い添えた。

「私はあなたにお前と言いました。しかしもうこれからそんなことはしないと御主人に申し上げて下さい。ごめん下さい。」

ジャン・ヴァルジャンはコゼットをあとにして出て行った。コゼットはその謎なぞのような別れの言葉に茫然ぼうぜんとしてしまった。

二 更に数歩の退却

翌日、同じ時刻に、ジャン・ヴァルジャンはやってきた。

コゼットはもう何にも尋ねもせず、不思議がりもせず、寒いとも言わず、客間のことも口に出さなかった。彼女はお父様ともまたはジャンさんとも言わなかった。そして自分はあなたと言われるままにしておいた。奥さんと言われるままにしておいた。ただ喜びの情が少し減じてるのみだった。もし悲しみが彼女にも可能であるとすれば、彼女はいくらか悲しんでいた。

愛せられる男は、好き勝手なことを語って、何にも説明せず、しかもそれで愛せられている女を満足させるものであるが、おそらくコゼットもマリユスとそういう談話をかわしたのであろう。恋人らの好奇心は、自分らの愛より以外に遠くわたるものではない。

下の室は多少取り片づけられた。バスあきびんクは空罎くもを取り除け、ニコレットは蜘蛛の巣を払った。

その後毎日同じ時刻に、ジャン・ヴァルジャンはやってきた。彼はマリユスの言葉を文字どおりに解釈して日々こざるを得なかったのである。マリユスはジャン・ヴァルジャンがやって来る時刻には、いつも外出するようにしていた。一家の人々は、フォーシユルヴ

アン氏の一風変わったやり方になれてきた。それにはトゥーサンのおかげもよほどあった。

「旦那様はいつもあんなでございました」と彼女は繰り返した。祖父も、「あの人は変わり者だ」と断言した。そしてすべてはきまった。その上九十歳にもなれば、もう交際などということはできなくて、ただいっしょに並ぶというだけである。そして新来の者は皆一つのわずらいとなってくる。もう他人を入れる余地はない。日常の習慣がすっかりでき上がっている。ジルノルマン老人には、フォーシユルヴァン氏とかトランシユルヴァン氏とかいう「そんな人」はこない方がよかつたのである。彼は言い添えた。「ああいう変わり者は何をするかわかつたものではない。ずいぶん奇抜なことをやる。と言つてその理由は何もない。カナブル侯爵はもつとひどかつた。りっぱな邸宅を買い入れて、自分はその物置きに住んでいた。ああいう人たちは表面うわべだけ変なことをしてみたがるものだ。」

だれもその凄せい惨さんな裏面には気づく者はなかつた。第一どうしてそんなことが推察し得られたらう？ 印度にはそういう沼がいくらもある。異様な不思議な水がたたえていて、風もないのに波を立て、静穏であるべきなのが荒れている。人はただその理由もない混乱の表面だけをながめる。そして底に水みず蛇へびがのたうつていることを気づかない。

多くの人もそういう秘密な怪物を持つている、心中にいだいている苦惱を、身をかりゆう嘯ゆうむ竜

を、内心の闇やみの中に住む絶望を。かかる人も普通の者と同じようにして暮らしている。彼のうちに無数の歯を持つて恐ろしい苦悶が寄生し、みじめなる彼のうちに生活し、彼の生命を奪いつつあることは、だれからも知られない。その男が一つの深淵しんえんであることは、だれからも知られない。その淵ふちの水は停滞しているが、きわめて深い。時々、理由のわからぬ波が表面に現われてくる。不思議なうねりができ、次に消えうせ、次にまた現われる。底から泡あわが立ちのぼつてきては、消えてゆく。何でもないことのようなのであるが、実は恐ろしいことである。それは人に知られぬ獣の吐く息である。

ある種の妙な習慣、たとえば、他の人が帰る頃にやってくるとか、他の人が前に出てる間うしろに隠れてるとか、壁色のマントをつけるとでも言い得るような態度をあらゆる場合に取るとか、寂しい道を選ぶとか、人のいない街路を好むとか、少しも会話の仲間入りをしないと、人込みやにぎわいを避けるとか、のんきそうにして貧乏な暮らしをしようと、金があるのにいつも鍵かぎをポケットに入れ蝋燭ろうそくを門番の所に預けておくとか、潜くぐり門もんから出入りするとか、裏の階段から上つてゆくとか、すべてそういう何でもなさそうな特殊の癖、表面に現われたる波紋や泡やとらえ難い皺しわは、しばしば恐るべき底から発してくることがある。

かくて数週間過ぎ去つていった。新しい生活はしだいにコゼットをとらえていった。結婚のために生じた交際、訪問、家政、遊樂、それらの大事件が起こつてきた。コゼットの楽しみは費用のかかるものではなかつた。それはただマリユスといつしよにいるということだけだつた。彼と共に出かけ、彼と共に家にいる、それが彼女の一番大事な仕事だつた。互いに腕を組み合ひ、白昼街路を公然と、人通りの多い中をただふたりで歩くこと、これは彼らにとって常に新しい喜びだつた。コゼットが氣を痛めたことはただ一つきりなかつた。すなわち、年取つたふたりの独身女は融和し難いけれど、祖父は達者であり、マリユスは時々何かの弁論に出廷し、ジルノルマン伯母おばは新家庭のそばに差し控えた日々を送りつつ満足していた。ジャン・ヴァルジャンも毎日訪れてきた。

お前という呼び方は消えうせてしまい、あなたとか奥さんとかジャンさんとかいうことになつて、彼はコゼットに対してまったく別人のようになった。彼女の心を自分から離そうとした彼の注意は、うまく成功した。彼女はますます快活になり、ますますやさしみが減じてきた。それでもなお彼女はよく彼を愛してい、彼もそのことを感じていた。ある日彼女は突然彼に向かつて言つた。「あなたは私のお父様でしたが、今はそうでなくなり、あなたは私の伯父様おじさまでしたが、今はそうでなくなり、あなたはフォーシユルヴァン様でし

だが、今はジャン様となられたのですね。するとあなたは、いったいどういふ方なんでしょう。私そんなこといやですわ。もしあなたがごくいい方だということを知らなかったら、私はあなたをこわがるかも知れません。」

彼はなおオンム・アルメ街に住んでいた。以前コゼットが住んでいた街区を去るに忍びなかったのである。

初めのうち彼は、数分間しかコゼットのそばにいないで、すぐ帰っていった。

ところがしだいに、彼は長居をするようになってきた。あたかも日が長くなるのに乗じた形だった。彼は早くきては遅く帰っていった。

ある日、コゼットはふと「お父様」と言ってしまった。すると喜びのひらめきが、ジャン・ヴァルジャンの陰鬱いんうつな老年の顔に輝いた。彼は彼女をとらえた。「ジャンと言って下さい。」彼女は笑い出しながら答えた。「ああそうでしたわね、ジャンさん。」「それでよろしいです、」と彼は言った。そして彼は顔をそむけて、彼女に見えないように目をぬぐった。

三 プリユーム街の庭の思い出

それが最後であった。その最後のひらめき以来、光はまったく消えうせてしまった。もはや親しみもなく、抱擁をもつて迎えられることもなく、お父様！ という深いやさしみの言葉もなくなった。彼は自ら命じ自ら行なつて、自分のあらゆる幸福を相次いで卻けてしまった。一日にしてコゼットをすべて失つた後、次に再び彼女を少しずつ失うという、悲惨な目に彼は出会つた。

目もついには窖あなぐらの明るみになれてくるものである。結局コゼットの姿を毎日見るというだけで彼には充分だった。彼の全生命はその時間に集中されていた。彼は彼女のそばにすわり、黙つて彼女をながめ、あるいはまた、昔のこと、彼女の子供の折りのこと、修道院にいた頃のこと、当時の小さなお友だちのこと、などを彼女に話した。

ある日の午後——それは四月のはじめであつて、既に暖かくなつてゐるがまださわやかであり、日の光はきわめてうららかなで、マリユスとコゼットとの窓のほとりの庭は春の目ざめの氣に満ち、山さんざしは芽ぐみ、丁子は古壁の上に寶石を飾り、薔薇色の金魚草は石の割れ目に花を開き、草の間にはひな菊や金鳳花きんぼうげがかわいく咲きそめ、年内の白い蝶ちようは始めて飛び出し、永遠の婚礼の楽手たる春風は、古い詩人らが一陽來復と呼んだ黎明れいめいの大交

響曲の最初の譜を樹木の間奏に奏していた——そのある日の午後、マリユスはコゼットに言った。「プリューメ街の庭にまた行ってみようといつか話したね。今すぐに行こう。恩を忘れてはいけない。」そしてふたりは、二羽の燕つばめのように春に向かつて舞い上がった。プリューメ街の庭は曙あけぼののような気を彼らに与えた。愛の春とも言うべき何物かを彼らは過去に持っていた。プリューメ街の家はまだ借受期限内で、コゼットのものになっていた。ふたりはその庭に行き、その家に行った。そして昔に返って、我を忘れてしまった。その夕方いつもの時刻に、ジャン・ヴァルジャンはフィユ・デュ・カルヴェール街にやってきた。バスクは彼に言った。「奥様は旦那様だんなさまと御いっしょにお出かけになりました、まだお帰りになっていません。」彼は黙って腰をおろし、一時間ばかり待った。コゼットは帰ってこなかった。彼はうなだれて帰っていった。

コゼットは「自分たちの庭」を散歩したことに気を奪われ、「過去のうちに一日を過ごした」ことを非常に喜んで、翌日もそのことばかり言っていた。ジャン・ヴァルジャンに会わなかったことなんかは念頭になかった。

「どうしてあそこまで行きましたか？」とジャン・ヴァルジャンは彼女に尋ねた。

「歩いて。」

「そして帰りには？」

「辻馬車つじばしゃで。」

しばらく前からジャン・ヴァルジャンは、若夫婦がごくつましい生活をしてるのに気づいていた。そのために彼は心をわずらわされた。マリユスの儉約は嚴重で、ジャン・ヴァルジャンに向かって彼が言った言葉は絶対的な意味を持っていた。彼は思い切つて尋ねてみた。

「なぜあなたは自分の馬車を備えないのですか。小ぎれいな箱馬車なら月に五百フランもあればいいでしょう。あなた方は金持ちではありませんか。」

「私にはわかりません。」とコゼットは答えた。

「トウーサンについてもそうでしょう。」とジャン・ヴァルジャンは言った。「いなくなつたままで、代わりも雇つてないのは、なぜですか。」

「ニコレットだけで充分ですから。」

「しかしあなたには小間使いがひとりいるでしょう。」

「マリユスがいてくれますもの。」

「あなた方は自分の家を持ち、自分の召し使いを持ち、馬車を一つ備え、芝居の席も取つ

ておいていいはずですよ。あなた方には何でもできません。なぜ金持ちのようにしないのですか。金を使えばそれだけ幸福も増すわけです。」

コゼットは答えなかつた。

ジャン・ヴァルジャンの訪問の時間は決して短くはならなかつた。否かえつて長くなつた。心がすべつてゆく時には、人は坂の途中で足を止めることはできない。

ジャン・ヴァルジャンは訪問の時間を長引かし、時のたつのを忘れさせようと思う時には、いつもマリユスのことをほめた。マリユスは美しく気高く勇気があり才があり雄弁であり親切であるとした。コゼットは更にマリユスをほめた。ジャン・ヴァルジャンは何度も繰り返し返した。そして言葉の尽きることはなかつた。マリユスという一語は無尽蔵な言葉だつた。その四字の中には幾巻もの書籍が含まつていた。そういうふうにして、ジャン・ヴァルジャンは長く留まることができた。コゼットをながめそのそばですべてを忘れることは、彼にとつてはいかに楽しいことであつたらう。それは自分の傷口を結わえることだつた。バスクが二度もきて、「食事の用意ができたことを奥様に申し上げてこいと、大おおだ旦那様んなさまが仰せられました。」と告げるようなことも、幾度かあつた。そういう日ジャン・ヴァルジャンは、深く思いに沈みながら戻つていった。

マリユスの頭に浮かんだあの脱殻のたとえには、何か真実な点が含まっていたであろうか。ジャン・ヴァルジャンは果たして一つの脱殻であつて、自分から出た蝶ちようを執拗しつように訪れて来る身であつたらうか。

ある日、彼はいつもより長座をした。するとその翌日は暖炉に火がはいっていないかつた。「おや、火がない、」と彼は考えた。そして自らその説明を下した。「なに当然のことだ。もう四月だ。寒さは済んでしまったのだ。」

「まあ、寒いこと！」とコゼットははいつてきながら叫んだ。

「寒くはありません。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

「では、バスクに火を焚たくなどおっしゃつたのはあなたですか。」

「ええ。もうすぐ五月です。」

「でも六月までは火を焚くものです。こんな低い室へやでは一年中火がいらいます。」

「私はもう火はむだだと思つたのです。」

「それもあなたの一風変わったところですね。」とコゼットは言った。

翌日はまた火がはいっていた。しかし二つの肱掛ひしかけ椅子いすは、室の端の扉とびらの近くに並んでいた。「どういうわけだろう？」とジャン・ヴァルジャンは考えた。

彼はその肱掛け椅子を取りにゆき、いつものとおり暖炉のそばに並べた。

それでも再び火が焚かれたので彼は元氣を得た。彼はいつもより長く話した。帰りかけて立ち上がった時、コゼットは彼に言った。

「主人は昨日きのう変なことを私に言いました。」

「どういうことですか。」

「こうなんです。コゼット、僕たちには三万フランの年金がはいつてくる、二万七千は前の方から、三千はお祖父じいさんから下さるので、というんです。それで三万ですわと私が答えますと、お前には三千フランで暮らしてゆく勇氣があるかってききます。私は、ええあなたといっしよなら一文なしでも、と答えました。それから私は、なぜそんなことをおっしゃるの、と尋ねてみますと、ただ聞いてみたのだ、と答えたのですよ。」

ジャン・ヴァルジャンは一言も発し得なかった。コゼットはたぶん彼から何かの説明を待っていたのであろう。しかし彼は沈鬱ちんうつな無言のまま彼女の言葉に耳を傾けた。彼はオナム・アルメ街に戻っていった。彼は深く考え込んでいたので、入り口をまちがえて、自分の家にはいらず、隣の家にはいり込んだ。そしてほとんど三階まで上って行ってからようやく、まちがったことに気づいて、またおりていった。

彼の精神は種々の推測に苦しめられた。マリユスがあので六十万フランの出所について疑いをいただき、何か不正な手段で得られたものではないかと恐れてるのは、明らかだった。おそらく彼は、その金がジャン・ヴァルジャンから出たものであることを発見したのかも知れなかったし、その怪しい財産に不安の念をいただき、それを自分の手に取ることを好まず、コゼットとふたりでうしろ暗い金持ちとなるよりむしろ貧しい暮らしをしようと思つてるのかも知れなかった。

その上漠然とジャン・ヴァルジャンは、自分が排斥されてるのを感じ始めた。

翌日、例の下の室にはいつてゆくと彼は一種の戦慄を感じた。肱掛椅子は二つともなくなっていた。普通の椅子さえ一つもなかった。

「まあ、椅子がない！」とコゼットはいつてきて叫んだ。「椅子はどこにあるんですよ？」

「もうありません。」とジャン・ヴァルジャンは答えた。

「あんまりですわ！」

ジャン・ヴァルジャンはつぶやいた。

「持ってゆくように私がバスクに言いました。」

「なぜです。」

「今日はちよつとの間しかいないつもりですから。」

「長くないからと言つて、立つたままでいる理由にはなりません。」

「何でも客間に肱掛け椅子がいるとかバスクが言つていたようです。」

「なぜでしょう。」

「たしか今晚お客があるのでしよう。」

「いえだれもきはしません。」

ジャン・ヴァルジャンはそれ以上何とも言うことができなかつた。

コゼットは肩をそびやかした。

「椅子を持つてゆかせるなんて！ こないだは火を消さしたりして、ほんとにあなたは変な方ですわ。」

「さようなら。」とジャン・ヴァルジャンはつぶやいた。

彼は「さようなら、コゼット」とは言わなかつた。しかし「さようなら、奥さん」と言う力もなかつた。

彼は気力もぬけはてて出て行つた。

こんどは彼もよく了解した。

翌日彼はもうこなかった。コゼットは晩になってようやくそれに気づいた。

「まあ、」と彼女は言った、「ジャンさんは今日いらっしやらなかった。」

彼女は軽い悲しみを覚えたが、すぐにマリユスの脣^{くち}づけにまぎらされて、ほとんど自ら気にも止めなかった。

その翌日も彼はこなかった。

コゼットは別にそれを気にもせず、いつものとおりの晩を過ごし、その夜を眠り、目をさました時ようやくそのことを頭に浮かべた。彼女はそれほど幸福だったのである。彼女は朝すぐにジャン氏のもとへニコレットをやつて、病気ではないか、また昨日はなぜこなかったかと尋ねさせた。ニコレットはジャン氏の答えをもたらししてきた。少しも病気ではない。ただ忙しかった。すぐにまた参るだろう、できるだけ早く。それにまたちよつと旅をしようとしている。奥さんは自分がいつも時々旅する習慣になつてゐるのを覚えていられるはずである。決して心配されないように。自分のことは考えられないように。

ニコレットはジャン氏の家へ行つて、奥様の言葉をそのまま伝えたのだつた。「昨日ジャン様はなぜおいでにならなかったか」を尋ねに奥様からよこされたのだと。「私が参ら

ないのはもう二日になります、」とジャン・ヴァルジャンは静かに答えた。

しかしその注意はニコレットの気に止まらなかつた。彼女はそのことについては一言もコゼットに復命しなかつた。

四 牽けん引いん力りよくと消滅

一八三三年の晩春から初夏へかけた数カ月の間、マレーのまばらな歩行者や店頭にいる商人や門口にぼんやりしてゐる人などは、さつぱりした黒服をまとつてゐるひとりの老人を見かけた。老人は毎日日暮れの頃同じ時刻に、オンム・アルメ街からサント・クロア・ド・ラ・ブルトンヌリ街の方へ出てきて、ブラン・マントー教会堂の前を通り、キュルテュール・サント・カトリヌ街へはいり、エシャルプ街まできて左に曲がり、そしてサン・ルイ街へはいるのだつた。

そこまで行くと、彼は足をゆるめ、頭を前方に差し出し、何にも見ず何にも聞かず、目を常に同じ一点にじつととらえていた。その一点は、彼にとつては星が輝いてゐるのかと思われたが、実はフィユー・デュ・カルヴェール街の角かどにほかならなかつた。その街路に近

づくに従つて、彼の目はますます輝いてきた。内心の曙あけぼののように一種の喜悅の情がその眸ひとこみに光っていた。そして魅せられ感動されるような様子をし、脣くちびるはかすかに震え動き、あたかも目に見えない何者かに話しかけてるがようで、ぼんやり微笑を浮かべて、できるだけゆつくり足を運んだ。向こうに行きつくことを願ひながら、それに近寄る瞬間を恐れるとでもいうようだった。彼を引きつけるらしいその街路からもはや家の四、五軒しかへだたらない所まで行くと、彼の歩調は非常にゆるやかになって、時とするともう歩いてるのではないとさえ思われるほどだった。その震える頭とじつと定めた瞳ひとみとは、極を求める磁石はりの針を思わせた。かくていくら到着を長引かしても、ついには向こうへ着かなければならなかった。彼はフイーユ・デュ・カルヴェール街に達した。すると、そこに立ち止まり、身を震わし、最後の人家の角かどから、一種沈痛な臆病さで頭を差し出し、その街路をのぞき込んだ。その悲愴ひそそうな眼まなざし差の中ちゅうには、不可能事から来る眩暈めまいと閉ざされたる樂園とに似た何かがあった。それから一滴の涙が、徐々に眼瞼まぶたのすみにたまってきて、下に落ちるほど大きくなり、ついに頬ほおをすべり落ち、あるいは時とすると口もとに止まった。老人はその苦にがい味を感じた。彼はそのまましばらく石のようになつてたたずんだ。それから、同じ道を同じ歩調で戻つていった。その角から遠ざかるに従つて、目の光は消えていった。

そのうちしだいに、老人はフィュー・デユ・カルヴェール街の角まで行かないようになった。彼はよくサン・ルイ街の中ほどに立ち止まった、あるいは少し遠くに、あるいは少し近くに。ある日などは、キュルテール・サント・カトリーヌ街の角に止まって、遠くからフィュー・デユ・カルヴェール街をながめた。それから彼は何かを拒むがように、黙って頭を左右に振り、そして引き返していった。

やがて彼は、もうサン・ルイ街までも行かなくなつた。パベ街までしか行かないで、頭を振って戻つていった。次にはトロア・パヴィヨン街より先へは行かなくなつた。その次にはもうブラン・マントー教会堂から先へ出なくなつた。ちようど、もう撥条ばねを巻かれなくなつた振り子が、しだいに振動を狭めてせばついに止まってしまおうとしてるのによく似ていた。

毎日、彼は同じ時刻に家をいで、同じ道筋をたどつたが、向こうまで行きつくことができなかつた。そしておそらく自分でも気づかないで、行く距離を絶えず縮めていた。彼の顔にはただ一つの観念が浮かんでいた、すなわち、何の役に立とう？ と。眸ひとみの光は消えうせて、もう外に輝かなかつた。涙もまた涸かれて、もう眼瞼まぶたのすみにたまらなかつた。その思い沈んだ目はかわいていた。彼の頭はいつも前方に差し出されていた。時々その頤あご

震え動いていた。やせた首筋のしわは見るも痛ましいほどだった。時としては、天気の良い時など、腕の下に雨傘あまがさを抱えていたが、それを開いてることはなかった。その辺の上かみさんたちは言った、「あの人はおばかさんですよ。」子供たちは笑いながらそのあとについていった。

第九編 極度の闇、極度の曙^{あけぼの}一 不幸者をあわれみ幸福者を恕^{ゆる}すべし

幸福であるのは恐るべきことである。いかに人はそれに満足し、いかにそれをもって足れりとしていることか！ 人生の誤れる目的たる幸福を所有して、真の目的たる義務を、いかに人は忘れていることか！

けれどもあえて言うが、マリユスを非難するのは不当であろう。

マリユスは前に説明したとおり、結婚前にもフォーシユルヴァン氏に向かって問い糺^{ただ}すことをせず、結婚後にもジャン・ヴァルジャンに向かつて問い糺すことを恐れた。彼は心ならずも約束するに至ったことを後悔した。望みなきあの男にそれだけの譲歩をなしたのは誤りだったと、彼は幾度も自ら言った。そして今は、しだいにジャン・ヴァルジャンを家から遠ざけ、できるだけ彼をコゼットの頭から消してしまおうと、ただそれだけをはか

つていた。コゼットとジャン・ヴァルジャンとの間にいつも多少自分をはさんで、彼女がもう彼のことを気づかず彼のことを頭に浮かべないようにと、願っていた。それは消し去ること以上で、蝕しよくし去ることであつた。

マリユスは必要であり正当であると判断したことを行なつてゐるに過ぎなかつた。彼は苛酷なこともせずしかも弱々しい情も動かさないうでジャン・ヴァルジャンを排斥し去らうとしていたが、それには、彼の考えによれば、読者が既に見てきたとおりの重大な理由があり、また次に述べる別の理由もあつた。彼は自ら弁論することになつたある訴訟事件において、偶然にも昔ラフィット家に雇われていた男と出会い、何も別に尋ねたわけではないが、不思議な話を聞かされた。もとより彼は秘密を厳守すると約束した手前もあり、ジャン・ヴァルジャンの危険な地位をも考えてやつて、その話を深く探ることはできなかつた。ただ彼はその時、果たすべき重大な義務があることを感じた。それはあの六十万フランを返却するということで、彼はその相手をできるだけひそかにさがし求めた。そしてその間金に手をつけることを避けた。

コゼットに至つては、それらの秘密を少しも知らなかつた。しかし彼女を非難するのもまたあまり苛酷であらう。

一種の強い磁力がマリユスから彼女へ流れていて、そのために彼女は、本能的にまたほとんど機械的に、マリユスの欲するままになっていた。「ジャン氏」のことについても、彼女はマリユスの意志に感応して、それに従っていた。夫は彼女に何も言う必要はなかった。彼女は夫の暗黙の意向から漠然たるしかも明らかな圧力を感じて、それに盲従した。彼女の服従はここではただ、マリユスが忘れてることは思い出すまいというのにあつた。そのためには何ら努力の要はなかつた。彼女は自らその理由を知らなかつたし、また彼女にとがむべきことでもないが、彼女の魂はまったく夫の魂となり了せて、マリユスの考えの中で影に蔽われてるものは皆、彼女の考えの中でも暗くなるのであつた。

けれどもそれはあまり強く言えることではない。ジャン・ヴァルジャンに關することでは、その忘却と消滅とはただ表面的のものに過ぎなかつた。彼女は忘れやすいというよりもむしろうつかりしていた。心の底では、長く父と呼んできたその男をごく愛していた。しかし夫の方をなおいつそう愛していた。そのために彼女の心は、多少平衡を失つて一方に傾いたのである。

時々、コゼットはジャン・ヴァルジャンのことを言い出して怪しむこともあつた。するとマリユスは彼女をなだめた。「留守なんだろう。旅に出かけるといふことだったじやな

いか。「それでコゼットは考えた。「そうだ。あの人はいつもこんなふうになくなるこ
とがあった。それにしてもこう長引くことはなかったが。」二、三度彼女はニコレットを
オンム・アルメ街にやって、ジャン氏が旅から帰られたかと尋ねさせた。ジャン・ヴアル
ジャンはまだ帰らないと答えさせた。

コゼットはそれ以上尋ねなかった。この世でなくてはならないものは、ただマリユスばか
りだったから。

なお言っておくが、マリユスとコゼットの方でもまた不在になった。彼らはヴェルノン
へ行った。マリユスはコゼットを父の墓へ連れて行った。

マリユスはコゼットをしだいにジャン・ヴアルジャンからのがれさせた。コゼットはさ
れるままになっていた。

それにまた、子供の忘恩などある場合にはあまりきびしく言われてることも、実は人
が考えるほど常にとがむべきことではない。それは自分自身の忘恩である。他の所で言っ
ておいたように、自然は「前方を見て」いる。自然は生きてるものを、来る者と去る者と
に分かっている。去る者は闇やみの方へ向き、来る者は光明の方へ向いている。ここにおいて
か乖離かいりが生じてきて、老いたる者にとっては宿命的なものとなり、若い者にとっては無意

識的なものとなる。その乖離かいりは初めは感じ難いほどであるが、木の枝が分かれるようにしだいに大きくなる。小枝はなお幹についたまま遠ざかってゆく。それは小枝の罪ではない。青春は喜びのある所へ、にぎわいの方へ、強い光の方へ、愛の方へ、進んでゆく。老衰は終しゆうえん焉んの方へ進んでゆく。両者は互いに姿を見失いはしないが、もはや抱擁はしなくなる。若き者は人生の冷ややかさを感じ、老いたる者は墳墓の冷ややかさを感じる。そのあわれなる子供らをとがめてはいけない。

二 油尽きたるランプの最後のひらめき

ある日、ジャン・ヴァルジャンは階段をおりてゆき、街路に二、三步ふみ出して、ある標石の上に腰をおろした。それは、六月五日から六日へかけた晩、ガヴローシュがやってきた時、彼が考えふけりながら腰掛けていたのと、同じ石であった。彼はそこにしばらくじつとしていたが、やがてまた階上うへへ上っていった。それは振り子の最後の振動だった。翌日、彼はもう室へやから出なかつた。その翌日には、もう寢床から出なかつた。

門番の女は、キャベツや馬鈴薯ばれいしょに少しの豚肉をまぜて、彼の粗末な食物をこしらえて

やっていたが、その陶器皿の中を見て叫んだ。

「まああなたは、昨日きのうから何も召し上がらないんですね。」

「いや食べたよ。」とジャン・ヴァルジヤンは答えた。

「お皿はまだいっぱいですよ。」

「水差しを見てごらん。空からになつてゐるから。」

「それは、ただ水を飲んだというだけで、なにも食べたことにはなりません。」

「でも、」とジャン・ヴァルジヤンは言った、「水だけしかほしくなかつたのだとしたら？」

「それは喉のどがかわいたというもんです。いっしょに何にも食べなければ、熱ですよ。」

「食べるよ。明日あしたは。」

「それともいつかは、でしょう。なぜ今日召し上がらないんです。明日は食べよう、なんていうことがありますか。私がこしらえてあげたのに手をつけないでおくなんて！ この煮物はほんとおいしかったですのに！」

ジャン・ヴァルジヤンは婆さんの手を取った。

「きつと食べるよ。」と彼は親切な声で言った。

「あなたはわからずやです。」と門番の女は答えた。

ジャン・ヴァルジャンはその婆さんよりほかにはほとんどだれとも顔を合わせなかった。パリーのうちにはだれも通らない街路があり、だれも訪れてこない家がある。彼はそういう街路の一つに住み、そういう家の一つにはいつていた。

まだ外に出かけた頃、彼はある鋳物屋の店で、五、六スー出して小さな銅の十字架像を買い、それを寝台の正面の釘くぎにかけて置いた。そういう首つり台はいつ見ても快いものである。

一週間過ぎたが、その間ジャン・ヴァルジャンは室へやの中さえ一步も歩かなかつた。彼はいつも寝たままだつた。門番の女は亭主に言った。「上のお爺じいさんは、もう起きもしなければ、食べもしないんだよ。長くはもつまない。何かひどく心配なことがあるらしい。私の推察じゃ、きつと娘が悪い所へかたづいたんだよ。」

亭主は夫おつととしての威厳を含んだ調子でそれに答えて言った。

「もし金があれば、医者にかかるさ。金がなければ、医者にかからないさ。医者にかからなければ、死ぬばかりさ。」

「医者にかかったら？」

「やはり死ぬだろうよ。」と亭主は言った。

女房は自ら自分の舗石しきいしと言つてゐる所にはえかかつてる草を、古ナイフで掻き取りはじめたが、そうして草を取りながらつぶやいた。

「かわいそうに。きれいな爺さんなのに。雛鶏ひよっこのようにまっ白だが。」

彼女は街路の向こう端に、近所の医者がひとり通りかかるのを見た。そして自分ひとりできめて、その医者にきてもらうことにした。

「三階でございますよ。」と彼女は医者に言った。「かまわずにはいつて下さい。お爺さんはもう寢床から動けないので、鍵かぎはいつも扉とびらについています。」

医者はジャン・ヴアルジャンに会い、彼に話をしかけた。

医者がおりてくると、門番の女は彼に呼びかけた。

「どうぞございましょう?」

「病人はだいぶ悪いようだ。」

「どこが悪いんでございましょうか。」

「どこと言つて悪い所もないが、全体がよくない。見たところどうも大事な人でも失つたように思われる。そんなことで死ぬ場合もあるものだ。」

「あの人はあなたに何と言いましたか。」

「病気ではないと言っていた。」

「またあなたにきていただけますでしょうか。」

「よろしい。」と医者は答えた。「だが私よりもほかの人にきてもらわなければなるまい。」

三 今是一本のペンも重し

ある晩ジャン・ヴァルジャンは、辛うじて^{ひじ}肱で身を起こした。自ら手首を取ってみると、脈が感ぜられなかった。呼吸は短くて時々止まった。彼は今まで知らなかったほどひどく弱つてゐるのに気づいた。すると、何か最期の懸念に駆られたのであろう、彼は努力をして、そこにすわり、服をつけた。自分の古い労働服を着た。もう外にも出かけないので、またその服を取り出し、それを好んでつけたのだった。服をつけながら何度も休まなければならなかった。上衣の袖に^{そで}手を通すだけでも、額から汗が流れた。

ひとりになつてから彼は、控え室の方に寝台を移していた。寂しい広間にはできるだけ

いたくなかったからである。

彼は例の鞆かばんを開いてコゼットの古い衣裳を取り出した。

彼はそれを寢床の上にひろげた。

司教の二つの燭しよくだい台は元のとおり暖炉の上ののつていた。彼は引き出しから二つの蠟ろうそく燭を取って、それを燭しよくだい台に立てた。それから、夏のこととてまだ充分明るかったが、その蠟燭ろうそくに火をともした。死人のいる室へやの中にそんなふうには昼間から蠟燭がともされるのは、時々見られることである。

一つの道具から他の道具へと行く一步一步に、彼は疲れきって腰をおろさなければならなかった。それは力を費やしてはまた回復するといふ普通の疲労ではなかった。ある限りの運動の残りだった。二度とはやれない最後の努力のうちにしたたり落ちてゆく、消耗し尽した生命であった。

彼が身を落とした椅子いすの一つは、ちょうど鏡の前になっていた。その鏡こそは、彼にとつては宿命的なものであり、マリユスにとつては天意的なものであつて、すなわち彼がコゼットの逆の文字を吸い取り紙の上に読み得たその鏡だった。彼は鏡の中に自分の顔をのぞいたが、自分とは思えないほどだった。八十歳にもなるかと思われた。マリユスの結婚

前には、ようやく五十歳になるかならないくらいに思えたが、この一年の間に三十ほども年を取ってしまっていた。今額にあるものは、もはや老年の皺しわではなくて、死の神秘な標しるしだった。無慈悲な爪つめの痕あとがそこに感ぜられた。両の頬ほおはこけていた。顔の皮膚は、既に土をかぶったかと思われるような色をしていた。口の両すみは、古人がよく墓の上に刻んだ多くの面に見るように、下にたれ下がっていた。彼は非難するような様子で空くうをながめた。だれかをとがめずにはいられない悲壮な偉人のひとりかと思われた。

彼はもはや悲哀の流れも涸かれつくしたという状態に、疲憊ひはいの最後の一段にあった。悲しみも言わば凝結してしまっていた。人の魂についても、絶望の凝塊けい塊とでも言うべきものがある。

夜になった。彼は非常な努力をして、テーブルと古い肱掛ひしか椅子いすとを暖炉のそばに引き寄せ、テーブルの上にペンとインキと紙とをのせた。

それがすんで、彼は気を失った。意識を恢復すると、喉のどがかわいていた。水差しを持ち上げることができないので、それをようやく口の方へ傾けて、一口飲んだ。

それから彼は寢床の方を振り向き、立っておれないのでやはりすわったまま、小さな黒い長衣とその他の大事な品々とをながめた。

そういう観照は、数分間と思つてゐるうちにはや幾時間にもなるものである。突然彼は身震いをし、寒氣さむけに襲おそわられるのを感じた。彼は司教の燭しよくだい台だいにともつてる蠟燭ろうそくに照らされたテーブルに肱ひじをかけて、ペンを取り上げた。

ペンもインキも長く使わないままだったので、ペンの先は曲がり、インキはかわいていた。彼は立ちあがつて数滴の水をインキの中に注がなければならなかつた。それだけのことをするにも二、三回休んで腰をおろした。それにまたペンは背の方でしか字が書けなかつた。彼はときどき額を拭ぬぐいた。

彼の手は震えていた。彼はゆつくりと次のような数行を認めた。

コゼット、私はお前を祝福する。私はここにちよつと説明しておきたい。お前おつとの夫が、私に去るべきものであることを教えてくれたのは、至当なことである。けれども、彼が信じていることのうちには少し誤りがある。しかしそれも彼が悪いのではない。

彼はりつぱな人である。私が死んだ後も、常に彼をよく愛しなさい。ポンメルシー君、私の愛児を常に愛して下さい。コゼット、私はここに書き残しておく。これは私がお前に言いたいと思つてゐることである。私にまだ記憶の力が残っていたら、数字も出て

くるであろうが、よく聞きなさい。あの金はまったくお前のものである。そのわけはこうである。白飾玉はノールウエーからき、黒飾玉はイギリスからき、黒ガラス玉はドイツから来る。飾り玉の方が軽くて貴とくて価も高い。その擬まがい玉はドイツでできるが、フランスでもできる。二寸四方の小さな鉄かなしき礎ろうと鐵ろうを溶かすアルコールランプとがあればよい。その鐵ろうは、以前は樹脂と油煙とで作られていて、一斤四フランもしていた。ところが私は漆うるしとテレピン油とで作ることを考え出した。価はわずかに三十一で、しかもずっと品がよい。留め金は紫のガラスでできるのだが、右の鐵ろうでそのガラスを黒い鉄の小さな輪縁につける。ガラスは鉄の玉には紫でなければいけないし、金きんの玉には黒でなければいけない。スペインにその需要が多い。それは飾り玉の国で

……

そこで彼は書くのをやめ、ペンは指から落ち、時々胸の底からこみ上げてくる絶望的なすすり泣きがまた襲つてき、あわれな彼は両手で頭を押さえ、そして思いに沈んだ。

「ああ、万事終わった。」と彼は心の中で叫んだ（神にのみ聞こえる痛むべき叫びである）。「私はもう彼女に会うこともあるまい。それは一つのほほえみだったが、もう私の上

を通りすぎてしまった。彼女を再び見ることもなく、私はこのまま闇夜のうちにはいつてゆくのか。おお、一分でも、一秒でも、あの声をきき、あの長衣にさわり、あの顔を、あの天使のような顔をながめ、そして死ねたら！ 死ぬのは何でもない。ただ恐ろしいのは、彼女に会わないで死ぬことだ。彼女はほほえんでくれるだろう、私に言葉をかけてくれるだろう。そうしたとてだれかに災いをおよぼすだろうか。いやいや、もう済んでしまった、永久に。私はこのとおりただひとりである。ああ、私はもう彼女に会えないだろう。」

その時だれか扉とびらをたたく者があつた。

四 物を白くするのみなる墨壺すみつぼ

ちやうどその時、なおよく言えばその同じ夕方、マリユスが食卓を離れ、訴訟記録を調べる用があつて、自分の事務室に退いた時、バスケットが一通の手紙を持ってきて言った。

「この手紙の本人が控え室にきております。」

コゼットは祖父の腕を取つて、庭を一回りしていた。

手紙にも人間と同じく、気味の悪いものがある。粗末な紙、荒い皺しわ、一目見ただけでも

不快の氣を起こさせるものがある。バスクが持つてきた手紙はそういう種類のものだった。マリユスはそれを手に取った。煙草たばこのにおいがしていた。およそにおいほど記憶を呼び起こさせるものはない。マリユスはその煙草のにおいに覚えがあつた。彼は表をながめた。「御邸宅にて、ポンメルシー男爵閣下。」煙草のにおいに覚えがあるために、彼は手跡にも覚えがあることがわかつた。驚きの情にも電光があると言つても不当ではない。マリユスはそういう電光の一つに照らされたようだった。

記憶の神秘的な助手であるにおいは、彼のうちに一世界をよみがえらした。紙といい、たみ方といい、インキの青白い色といい、また見覚えのある手跡といい、ことに煙草のにおいといい、すべてが同じだった。ジョンドレットの陋屋ろうおくが彼の目の前に現われてきた。偶然の不思議なる悪戯よ！ かくて、彼があれほどぎがしていた二つの踪跡そうせきのうちの一つ、最近更に多くの努力をしたがついにわからずもう永久に見いだせないと思つていた踪跡そうせきは、向こうから彼の方へやつてきたのである。彼は貪るむさぼように手紙を披ひらいて読み下した。

男爵閣下

もし天にして小生に才能を与えたまいしならんには、小生は学士院（科学院）会員テナル男爵となり得候（そうら）いしものを、ついにしからずして終わり候（そうらう）。小生はただその名前のみを保有し居候が、この一事によつて閣下の御好意に浴するを得ば幸甚に御座候。小生に賜わる恩恵は報いらるべき所これ有り候。と申すは、小生はある個人に関する秘密を握りおり、その個人は閣下に関係ある男に候。小生はただ閣下の御ためを計るの光榮を希望する者にて、おぼしめしこれ有り候わばその秘密を御伝え申すべく候。男爵夫人閣下は素性高き方に候えば、小生はただ閣下の貴き家庭より何ら権利なきその男を追い払い得る、きわめて簡単なる方法を御知らせ申すべく候。高德の聖殿も長く罪悪と居を共にする時は、ついには汚るるものに御座候。

小生は控え室にて、閣下の御さし図を相待ち居候。敬具。

手紙にはテナルと署名してあつた。

その署名は必ずしも偽りではなかつた。ただ少し縮めただけのものだつた。

その上、その冗文と文字使いとは事実を明らかに語っていた。出所は充分明瞭（めいりよう）だつた。疑問をはさむの余地はなかつた。

マリユスは深く心を動かされた。そして驚駭きょうがいの後に喜びの念をいだいた。今はもはや、搜索しているもうひとりの男を、自分を救つてくれた男を、見いだすのみであつて、それができればもう他に望みはなくなるわけだつた。

彼は仕事机の引き出しを開き、中からいくばくかの紙幣を取り出し、それをポケットに入れ、机をまた閉ざし、そして呼鈴ベルを鳴らした。バスクが扉とびらを少し開いた。

「ここに通してくれ。」とマリユスは言つた。

バスクは案内してきた。

「テナル様でございます。」

ひとりの男がはいつてきた。

マリユスは新たな驚きを覚えた。はいつてきたのはまったく見知らぬ男だつた。

その男は、と言つてももう老人だが、大きな鼻を持ち、頤あごを首飾りの中につき込み、目には緑色の琥珀こはくぎぬ絹ぬで縁覆おほいした緑色の眼鏡めがねをかけ、髪は額の上に平らになでつけられて眉毛まゆの所まで下がり、イギリスの上流社会の御者がつけてる鬘かつらのようだつた。その髪は半ば白くなつていた。頭から足先まで黒ずくめで、その黒服はすり切れてはいるが小ぎれいだつた。一ふさの飾り玉が内隠しから出ていて、時計がはいつてゐることを示していた。手

には古い帽子を持っていた。前かがみに歩いていて背中が曲がっているために、そのお時儀はいつそう丁寧らしく見えた。

一目見ても不思議なことには、その上衣はよくボタンがかけられているのにだぶだぶして、彼のために仕立てられたものではなさそうだった。

ここにちよつと余事を述べておく必要がある。

当時パリーには、ポートルレイ街の造兵廠ぞうへいしょうの近くの古い怪しい小屋に、ひとりの伶俐いりなユダヤ人が住んでいて、不良の徒を良民に変装してやるのを仕事としていた。長い時間を要しなかつたので、悪者らにとっては、至って便利だった。日に三十スー出せば、一日か二日の約束で、見るまに服装を変えてくれて、できるだけうまくあらゆる種類の良民に仕立ててくれた。衣裳を貸してくれるその男は、取り替え人と呼ばれていた。それはパリーの悪者らが見つけた名前前で、別の名前は知られていなかった。彼はかなりそろつた衣服室を持っていた。人々を変装してやる衣服は相当な品だった。彼は特殊な才能を持ち、種々の方法を心得ていた。店の釘くぎにはそれぞれ、社会のあらゆる階級の擦れ切れた皺しわだらけの衣裳がかかっていた。こちらに役人の服があり、あちらに司祭の服があり、一方に銀行家の服があり、片すみに退職軍人の服があり、他のすみには文士の服があり、向こうに

は政治家の服がある、という具合になっていた。その男はバリーで演ぜられる大きな泥坊芝居うしばいの衣裳方だった。その小屋は詐偽窃盗の出入りする楽屋だった。ぼろをまとつてるひとりの悪漢が衣服室にやってき、三十スー出し、その日演じようとする役目に従つて適当な服装を選び、そして再び階段をおりてゆく時には、まったく相当な人間に変わつていた。翌日になると、その衣服は正直に返却された。盗賊らをすっかり信用してる取り替え人は、決して品物を盗まれることがなかった。ただその衣服には一つ不便な点があった。すなわち「うまく合わない」ということだった。着る人の身体に合わせて作られたものでなかつたから、甲の者には小さすぎ、乙の者には大きすぎるといふ具合に、だれにもきつちり合わなかつた。普通の者より小さいか大きいかが常である悪者らは、取り替え人の衣服にははなはだ具合が悪かつた。またあまりふとついてもあまりやせていてもいけないかつた。取り替え人は普通の人間をしか頭に入れていなかった。ふとつてもいらずやせてもいらず、背が高くも低くもない、始めてぶつつかつた奴の身体に合わせて、標準をきめていた。そのために着換えをすることが困難な場合もしばしば起こつて、顧客らはできるだけの手段を尽してその困難を切りぬけようとしていた。並みはずれの体格を持つてる者には、気の毒なわけだった。たとえば、政治家の服装はすっかり黒ずくめで、従つて適宜なもので

あつたが、ピットにはあまり広すぎ、カステルシカラにはあまり狭すぎた。この政治家の服は、取り替え人の目録の中には次のように指定されていた。それをここに書き写してみよう。「黒ラシヤの上衣、黒の厚ラシヤのズボン、絹のチョッキ、靴、およびシヤツ。」欄外に、前大使としてあつて、注がついていた。その注をも写してみよう。「別の箱にあり、程よき巻き髪かつらの鬘、緑色の眼鏡、時計の飾り玉、および、綿にくるみたる長さ一寸の小さな羽軸二本。」それだけで前大使たる政治家ができ上がるのだつた。その服装は言わば衰弱しきつていた。縫い目は白ばんでおり、一方の脇ひじにはボタン穴くらの破れ目があり、きかかつていた。その上、上衣の胸にボタンが一つ取れていた。しかしそれは何でもないことだつた。政治家の手はいつも上衣の中に差し込まれて胸を押さえてるものであるから、ボタンが一つ足りないのを隠す役目をもするわけだつた。

もしマリユスが、パリーのそういう隠密な制度に通じていたならば、今バスクが案内してきた客の背に、取り替え人の所から借りてきた政治家の上衣を、すぐに見て取り得たはずである。

マリユスは予期していたのと違った男がはいつてくるのを見て失望し、失望の念はやがて新来の客に対する嫌悪けんおの情となつた。そして男が低く頭を下げてる間、彼はその頭から

足先までじろじろながめて、きつぱりした調子で尋ねた。

「何の用ですか。」

男は鰐わにの媚こび笑いとでも言えるように、歯をむき出して愛相笑いをしながら答えた。

「閣下には方々でお目にかかる光栄を得ましたように覚えております。ことに数年前、バグラシオン大公夫人のお邸やしきや、上院議員ダンブレー子爵のお客間などで、お目にかかったように存じております。」

まったく初対面の人にもどこかで前に会ったような様子をするのは、卑劣な男の巧みな慣用手段である。

マリユスは男の話に注意していた。しかしいくらその声の調子や身振りに目をつけても、失望は大きくなるばかりだった。鼻にかかった声であって、予期していた鋭いかわいた声こ音わねとはまったく異なっていた。彼はまったく推定に迷わされた。

「僕は、」と彼は言った、「バグラシオン夫人もダンブレー氏も知りません。まだどちらの家にも足をふみ入れたことはかつてありません。」

その答えは無愛想だった。それでもなお男は慇いんぎん懃ぎんに言い続けた。

「ではお目にかかりましたのは、シャトールブリアン氏のお宅でしたでしょう。私はシャト

「ブリアン氏をよく存じております。なかなか愛想のよいお方です。どうだテナル、いっしょに一杯やろうか、などと時々申されます。」

マリユスの顔はますます険しくなつた。

「僕はまだシャトーブリアン氏の宅に招かれたことはありません。つまらないことはぬきにしめしよう。結局どういう用ですか。」

男はいっそうきびしくなつたその声の前に、いっそう低く頭を下げた。

「閣下、まあどうかお聞き下さい。アメリカのパナマに近い地方にジョヤという村がございます。村と申しましても、家は一軒きりございません。堅い煉瓦作りの四階建てになっている大きな四角な家でありまして、その四角の各辺が五百尺もあります。中央が中庭で、食料十二尺ほど引つ込んで、それだけがぐるりと平屋根になっています。中央が中庭で、食料や武器が納められています。窓はなくてみな銃眼になり、戸はなくてみな梯子はしごになっています。すなわち地面から二階の平屋根へ上れる梯子、次は二階から三階へ、三階から四階へとなつていまして、また中庭におりられる梯子もあります。室へやには扉とびらがなくてみな揚げ戸になり、階段がなくてみな梯子になっています。晩になると、揚げ戸をしめ、梯子を引き上げ、トロンブロン銃やカラビン銃を銃眼に備えます。内へはいることは到底できません。

ん。昼間は住家で、夜は要塞ようさいで、住民は八百人というのがその村のありさままでございませぬ。なぜそんなに用心をするかと申せば、ごく危険な地方だからであります。食人人種がたくさんおります。ではなぜそんな所へ行くかと言いますれば、実に素敵な土地でありまして、黄金が出るからであります。」

「結局どういうことになるんですか。」と失望から性急に変わってマリユスは話をさえぎった。

「こういうことでございます、閣下。私はもう疲れはてた古い外交官であります。古い文明のために力を使い果たしてしまいました。それで一つ野蛮な仕事をやってみようと思つているのでございます。」

「だから？」

「閣下、利己心は世界の大法であります。日傭稼ひようかせぎの貧乏な田舎女いなかおんなは、馱馬車だばしやが通れば振り返つて見ますが、自分の畑の仕事をしる地主の女は、振り向きもいたしません。貧乏人の犬は金持ちに吠ほえかかり、金持ちの犬は貧乏人に吠えかかります。みな自分のためばかりです。利益、それが人間の目的であります。金は磁石であります。」

「だから？ 結局何ですか。」

「私はジョヤに行つて住みたいと思つております。家族は三人で、私の妻に娘、それもごく美しい娘でございます。旅は長くて、金もよほどかかります。私は金が少しいるのでございます。」

「それが何で僕に關係があるんですか。」とマリユスは尋ねた。

男は首飾りから首を差し出した。禿鷹はげたかのよくやる身振りである。そして彼はいつそう笑顔を深めて答えた。

「閣下は私の手紙を御覧になりませんでしたでしょうか。」

それはほとんどそのとおりであつた。實際、手紙の内容にマリユスはよく気を止めなかつた。彼は手紙を読んだというよりむしろその手跡を見たのだった。何が書いてあつたかはほとんど覚えていなかった。けれどもちよつと前から新しい糸口が現われてきた。彼は「私の妻に娘」という一事に注意をひかれた。そして鋭い目を男の上に据えていた。予審判事といえどもそれにおよぶまいと思われるほど、じつと目を注いでいた。ほとんど待ち伏せをしてるようなありさまだった。それでも彼はただこう答えた。

「要点を言つてもらいましよう。」

男は二つの内隠しに両手をつき込み、背筋をまつすぐにせずただ頭だけをあげて、こん

どはこちらから緑色の眼鏡越しにマリユスの様子をうかがった。

「よろしゅうございます、閣下。要点を申し上げましょう。私は一つ買っていたきたい秘密を手にしております。」

「秘密！」

「秘密でございます。」

「僕に關しての？」

「はい少しばかり。」

「その秘密とはどういうことですか？」

マリユスは相手の言うことに耳を傾けながら、ますます注意深くその様子を觀察していた。

「私はまず報酬を願わないでお話しいたしましょう。」と男は言った。「私がおもしろい人物である事もおわかりでございましょう。」

「お話しなさい。」

「閣下、あなたはお邸やしきに盗賊と殺人犯とをおいれになっております。」

マリユスは慄然りっぜんとした。

「僕の宅に？ いや決して。」と彼は言った。

男は平然として、^{ひじ}脇で帽子の塵^{ちり}を払い、言い進んだ。

「人殺しでかつ盗賊であります。よくお聞き下さい、閣下。私が今申し上げますのは、古い時期おくれの干からびた事実ではありません。法律に対しては時効のために消され、神に対しては悔悟のために消されたような、そういう事実ではありません。最近の事実、現在の事実、今にまだ法廷から知られていない事実、それを申しているのであります。続けてお話しいたしますが、その男がうまくあなたの信用を得、名前を変えて御家庭には入り込んでおります。その本名をお知らせ申しましょう。しかもただでお知らせいたしましたでしょう。」

「聞きましょう。」

「ジャン・ヴァルジャンという名でございます。」

「それは知っています。」

「なお私は報酬も願わないで、彼がどういう人物だかを申し上げましょう。」

「お言いなさい。」

「元は徒刑囚だった身の上です。」

「それは知っています。」

「私が申し上げましたからおわかりになりましたのでしょう。」

「いや。前から知っていたのです。」

マリユスの冷然たる調子、それは知っていますという二度の返事、相手に二の句をつがせないような簡明さ、それらは男の内心を多少激げつこう昂こうさした。彼は憤激した目つきをちらとマリユスに投げつけた。そのまなざしはすぐに隠れて、一瞬の間にすぎなかつたが、一度見たら忘れられないようなものだった。マリユスはそれを見のがさなかつた。ある種の炎はある種の魂からしか発しない。思想の風窓である眸ひとみは、そのために焼かれてしまう。眼鏡めがねもそれを隠すことはできない。地獄にガラスをかぶせたようなものである。

男はほほえみながら言った。

「私は何も男爵閣下のお言葉に逆らうつもりではございません。がとにかく、私がよく秘密を握っているということは認めていただきたくないのでございます。これからお知らせ申し上げますことは、ただ私ひとりしか承知していません。それは男爵夫人閣下の財産に関することでございます。非常な秘密でありまして、金に代えたいつもりでいます。でまず最初閣下にお買い上げをお願いいたします。お安くいたしましょう。二万フラン

に。」

「その秘密というのも、他の秘密と同様に私は知っています。」とマリユスは言った。男はその価を少しく下げる必要を感じた。

「閣下、一万フラン下されば申し上げましょう。」

「繰り返し言うが、君は僕に何も教えるものはないはずです。君が話そうという事柄を僕は皆知っています。」

男の目には新しいひらめきが浮かんだ。彼は声を高めた。

「それでも私は今日の食を得なければなりません。まったくそれは非常な秘密です。閣下、お話しいたしましょう。お話しいたしましょう。二十フラン恵んで下さい。」

マリユスは彼をじつと見つめた。

「僕も君の非常な秘密を知っています。ジャン・ヴァルジャンの名前を知っていると同様に、君の名前も知っています。」

「私の名前を？」

「そうです。」

「それはわけもないことでしょう、閣下。私はそれを手紙に書いて差し上げましたし、ま

た自分で申し上げました、テナルと。」

「デイエ。」

「へえ！」

「テナルデイエ。」

「それはだれのことでございますか。」

危険になると、豪猪やまあらしは毛を逆立て、甲虫かぶとむしは死んだまねをし、昔の近衛兵は方陣

を作るが、この男は笑い出した。

それから彼は上衣の袖そでを指で弾はじいてほこりを払った。

マリユスは続けて言った。

「君はまたそのほか、労働者ジョンドレット、俳優ファバントウー、詩人ジャンフロー、スペイン人ドン・アルヴァレス、およびバリザールの家内とも言う。」

「何の家内で？」

「なお君は、モンフェルメイユで飲食店をやっていた。」

「飲食店？ いえ、どうしまして。」

「そして君の本名はテナルデイエというのだ。」

「さようなことはありません。」

「そして君は悪党だ。そら。」

マリユスはポケットから一枚の紙幣を取り出して、相手の顔に投げつけた。

「ありがとうございます。ごめん下さい。五百フラン！ 男爵閣下！」

男は狼狽して、お時儀をし、紙幣をつかみ、それを調べた。

「五百フラン！」と彼は茫然として繰り返した。そして半ば口の中でつぶやいた、「いい代物だ！」

それから突然彼は叫んだ。

「これでいいでしょう。楽にしましょう。」

そして猿のような敏捷さで、髪をうしろになで上げ、眼鏡をはずし、二本の羽軸を鼻から引き出してしまい込んだ。その羽軸は上に述べておいたもので、また本書の他の所でも読者が既に見てきたものである。かくて彼は、あたかも帽子でも脱ぐようなふうに仮面をはいでしまった。

その目は輝き出した。所々でこぼこして上の方に醜い皺の寄ってる変な額が出てきた。鼻は嘴のようになってしまった。肉食獣のような獐猛狡猾な顔つきが現われた。

「男爵の申されるとおりです。」と彼は全く鼻声がなくなつた明らかな声で言った。「私はテナルデイエです。」

そして彼は曲がつていた背をまつすぐにした。

まさしくその男はテナルデイエだったので以後そう呼ぶが、テナルデイエは非常に驚かされた。もし惑乱し得るとしたら、惑乱するところだった。彼は向こうを驚かすつもりできて、かえつて反対に驚かされた。その屈辱は五百フランで償われた。そして結局彼はそれを受け取つてしまった。しかしそれでもやはり惘然ぼうぜんとさせられたには違いなかつた。

彼はそのポンメルシー男爵とは初対面だった。そして彼が仮装していたにかかわらず、ポンメルシー男爵は彼を見破り、しかもその奥底までも見て取つた。その上男爵は、ただテナルデイエのことをよく知つてるのみでなく、またジャン・ヴァルジャンのこともよく知つてるらしかつた。かく冷然としてしかも寛厚なるまだ青二才にすぎないこの青年は、そもそもいかなる人物だろうか、人の名前を知つており、その名前をみな知つており、しかも財布の口を開いてくれ、裁判官のように悪人をいじめつけ、しかも欺かれた愚人のように金を出してくれるとは？

読者の記憶するとおり、テナルデイエはかつてマリユスの隣の室に住んでいたけれども、

彼を見たことは一度もなかった。そういうことは、パリーでは別に珍しくはない。彼は以前に自分の娘たちから、マリユスというごく貧しい青年が、同じ家に住んでるとぼんやり聞かされた。そしてその顔も知らないで、読者が知るとおりの手紙を彼に書いた。そのマリユスとこのポンメルシー男爵とを結びつけることは、彼の頭の中ではどうていできなかつた。

ポンメルシーという名前については、読者の記憶するとおり、彼はワートルローの戦場で、ただその終わりの三字（訳者注　メルシとはまたありがとうという意味である）と解釈しただけであつて、ただ一つの感謝の言葉としてあまり注意も払わなかつたのは、無理ならぬことである。

ところで彼は、娘のアゼルマを使って、二月十六日の婚礼の跡を探らせ、また自分でも種々穿鑿せんさくして、ついに多くのことを知るに至り、自分は暗黒の底にしながら、秘密の糸口を数多つかみ得た。そしてある日大溝渠こうきよの中で出会つた男がいかなる人物であつたかを、狡智こつちによつて発見した、あるいは少なくとも帰納的に察知得た。その名前までも容易に推察した。また、ポンメルシー男爵夫人はコゼットであることをも知つていた。そしてこの方面では、慎重に差し控えた方がいいと思つた。コゼットは何者であるか？ それ

は彼にもよくわからなかった。私生児であることは漠然とわかっていた。がフアンテイーヌの話にはどうも怪しいふしがあるように思われた。それを話して何の役に立とう、その口止め料をもらうためにか？ 否彼は、それよりも更により売物を持っていて、あるいは持つてると思っていた。それに、何らの証拠もなくただ推察だけで、「あなたの夫人は私生児です」とポンメルシー男爵に告げたところで、それはただ夫の激怒を買うに過ぎなかつたろう。

テナルデイエの考えでは、マリユスとの会話はまだ始まったとも言えないものであった。もとより彼は、一旦退却し、戦略を改め、陣を撤し、方向を変えなければならなかつた。けれども、大事な点はまだ先方に知られていないし、ポケットには五百フランせしめていた。その上、いざとなれば言うべきことも持つていたので、深い知識といふ武器とをそなえてるポンメルシー男爵に対してもなお、自分の方に強味があると感じていた。テナルデイエのような者にとつては、一々の会話が皆戦闘である。さて今始めんとする戦闘においては、彼の地位はどういうものであつたか？ 彼は相手がいかなる人物であるかを知らなかつた、しかし問題がいかなるものであるかを知つていた。彼はすみやかに、自分の武力を心の中で調べてみて、「私はテナルデイエです」と言つた後、先方の様子を待つてみた。

マリユスは考えに沈んでいた。彼はついにテナルデイエを捕つかまえたのである。あれほど見つけ出したいと思つていた男が、今日の前にいるのだつた。彼はポンメルシー大佐の要求を果たすことができるのだつた。あの英雄がこの悪漢に多少なりとも恩を受けていること、墓の底から父が彼マリユスに向かつて振り出した手形は今にまだ支払われていないこと、それに彼は屈辱を感じていた。そしてまた、テナルデイエに対して複雑な精神状態の中にありながら彼は、大佐がかかると悪漢に救われた不幸について、返報してやる所がなければならぬように考えられた。しかしそれはとにかく、彼は満足であつた。今や、かかる賤いやしい債権者から大佐の影を解き放してやる時がきたのだつた。負債の牢ろうごく獄から父の記憶を引きぬいてしまう時がきたのだつた。

そういう義務のほかには、彼にはも一つなすべきことがあつた。もしできるならばゴゼツトの財産の出所を明らかにすることだつた。今ちようどその機会がきたように思われた。テナルデイエはおそらく何か知つてゐるに違ひなかつた。この男を底まで探りつくしたら何かの役に立つかも知れなかつた。で彼はまずそれから始めた。

テナルデイエはその「いい代物しろもの」を内隠しにしまい込んで、ほとんど媚こびるようになしなくマリユスをながめていた。

マリユスは沈黙を破った。

「テナルデイエ、僕は君の名前を言つてやった。そして今また、君のいわゆる秘密、君が僕に知らせようと思つてきたものを、僕から言つてもらいたいのか？ 僕もいろいろ知つてることがある。君よりもくわしく知つてるかも知れない。ジャン・ヴァルジャンは、君が言うとおり、人殺しで盗人だ。マドレーヌ氏という富有な工場主を破滅させてその金を盗んだから、盗人である。警官ジャヴェルを殺害したから、人殺しである。」

「何だかよくわかりかねますが、男爵。」とテナルデイエは言つた。

「ではよくわからしてあげよう。聞きなさい。一八二二年ごろ、パ・ド・カレー郡に、ひとりの男がいた。彼は以前少しく法律に問われたことのある者だったが、マドレーヌ氏という名前で身を立て名誉を回復していた。まったく一個の正しい人間となつていた。そしてある工業で、黒ガラス玉の製造で、全市を繁昌させた。自分の財産もできたが、それは第二の問題で、言わば偶然にできたのである。それから彼は貧しい人たちの養い親となつた。病院を建て学校を開き、病人を見舞い、娘には嫁入じたくをこしらえてやり、寡婦やもめには暮らしを助けてやり、孤児は引き取つて育ててやった。ほとんどその地方の守り神だった。彼は勲章を辞退したが、ついに市長に推された。ところがひとりの放免囚徒が、その

人の旧悪の秘密を知っていて、その人を告発し捕縛させ、その捕縛に乗じてパリ―にやつてき、偽署をしてラフィット銀行から——この事実はその銀行の出納係から直接に聞いたことだ——マドレーヌ氏のものである五十万以上の金額を引き出してしまった。そのマドレーヌ氏の金を奪った囚人というのが、すなわちジャン・ヴァルジャンである。またも一つの事実についても、僕は何も君から聞く必要はない。ジャン・ヴァルジャンは警官ジャヴェルを殺した。ピストルで殺した。かく言う僕がその場にいたのだ。」

テナルデイエは厳然たる一瞥^{いちべつ}をマリユスに投げた。あたかも一度打ち負けた者が再び勝利に手をつけ、失っていた地歩を一瞬間のうちに取り戻したかのようなようだった。しかしまたすぐに例の微笑が現われた。上位の者に対しては、下位の者はただ気兼ねした勝利をしか持ち得ないものである。テナルデイエはただこれだけマリユスに言った。

「男爵は、何だか筋道が違っていますようですが。」

そう言いながら彼は、時計の飾り玉を意味ありげにひねくってそれに力を添えた。

「なに！」とマリユスは言った、「君はそれに抗弁するのか。それは実際の事実だ。」

「いえ、謙言^{うわごと}言みたいなものです。男爵も打ち明けて言われましたから、私の方でも打ち

明けて申しませう。何よりもまず真実と正義とが第一です。私は不正な罪を被ってる者

を見るのを好みません。男爵、ジャン・ヴァルジャンはマドレーヌ氏のを盗んではい
ません。ジャン・ヴァルジャンはジャヴエルを殺してはいません。」

「何だと！ それはどうしてだ？」

「二つの理由からです。」

「どういう理由だ？ 言ってみなさい。」

「第一はこうです。彼はマドレーヌ氏のを盗んだというわけにはなりません、ジャン
・ヴァルジャン自身がマドレーヌ氏であるからには。」

「何を言うんだ。」

「そして第二はこうです。彼はジャヴエルを殺したはずはありません、ジャヴエルを殺し
たのはジャヴエル自身であるからには。」

「と言うと？」

「ジャヴエルは自殺したのです。」

「証拠があるか、証拠が！」とマリユスは我を忘れて叫んだ。

テナルデイエはあたかも古詩の句格めいた調子で言った。

「警官……ジャヴエルは……ポン・トー・シャンジュの橋の……小船の下に……おぼれて

……いました。」

「それを証明してみなさい！」

テナルデイエは腋わきのポケットから、大きな灰色の紙包みを取り出した。種々の大きさにたたんだ紙が中にはいつているらしく見えた。

「私は記録を持っています。」と彼は落ち着いて答えた。

そしてまた言い添えた。

「男爵、私はあなたのために、このジャン・ヴァルジャンのことをすっかり探り出そうと思いました。私はジャン・ヴァルジャンとマドレーヌとは同一人であると申しましたし、ジャヴェルを殺したのはジャヴェル自身にほかならないと申しましたが、そう申すにはもとより証拠があつてのことです。しかも手で書いた証拠ではありません。書いたものは疑うこともでき、またどうにでもなるものです。けれども私が持つてるのは、印刷した証拠物であります。」

そう言いながらテナルデイエは、黄ばみがかつて色が褪あせてしかも強い煙草たばこのおいがする二枚の新聞紙を、包みの中から引き出した。そのうちの一枚は、折り目が破れて四角な紙片に切れており、も一枚のよりずっと古いものらしかった。

「二つの事実と二つの証拠です。」とテナルデイエは言った。そして彼はひろげた二枚の新聞紙をマリユスに差し出した。

その二枚の新聞は、読者の知ってるものである。古い方のは、一八二三年七月二十五日のドラポー・ブラン紙の一枚であつて、その記事は本書の第二部第二編第一章で読者が見たとおり、マドレーヌ氏とジャン・ヴァルジャンとが同一人である事を証明するものだった。もう一枚は、一八三二年六月十五日の機関紙であつて、ジャヴェルの自殺を証明し、なおジャヴェルが自ら警視總監に語つた口頭の報告が添えてあつた。その報告によれば、ジャヴェルはシャンヴルリー街の防^{ぼうさい}寨で捕虜になつたが、ひとりの暴徒がピストルをもつて彼を手中のものにしながら、彼の頭を射貫^ぬかないで空に向けて発射し、その寛大なほからのために一命を助かつたといふのだつた。

マリユスは読んだ。その中には明らかな事実があり、確かな日付けがあり、疑うべからざる証拠があつた。その二枚の新聞紙は、テナルデイエが自説を支持するためにことさら印刷したものではなかつた。機関紙に掲げられた記事は、警視庁から公^{おちやけ}に発表したものだった。マリユスも疑う余地を見いださなかつた。銀行の出納係が伝えた話はまちがつていて、彼自身も誤解をしていたのだつた。ジャン・ヴァルジャンはにわかに偉大なものと

なつて、雲の中から現われてきた。マリユスは喜びの叫びを自らおさえることができなかつた。

「それでは、あのあわれむべき男は、驚くべきりっぱな人物だったのか！ あの財産はまったく彼自身のものだったのか！ 一地方全体の守護神たるマドレーヌであり、ジャヴェルの救い主たるジャン・ヴァルジャンであるとは！ 実に英雄だ、聖者だ！」

「いえあの男は、聖者でも英雄でもありません。」とテナルデイエは言った。「人殺しで盗賊です。」

そして彼は自らある権威を感じ始めたような調子で付け加えた。「落ち着いてお話ししましょう。」

盗賊、人殺し、もはや消え去つたと信じていたらそれらの言葉が再び現われて落ちかかつてきたので、マリユスは氷の雨に打たれるような思いがした。

「それでもやはり！」と彼は言った。

「そうですとも。」とテナルデイエは言った。「ジャン・ヴァルジャンはマドレーヌのものを盗みはしませんでしたが、やはり盗賊です。ジャヴェルを殺しはしませんが、やはり人殺しです。」

「君はあの、」とマリユスは言った、「四十年前の盗みを言うのだろう。あれならば、その新聞にもあるとおり、悔悟と克己と徳操との生涯で贖あがなわれている。」

「男爵、私は殺害と窃盗と申すのです。しかも繰り返して言いますが、現在の事実です。あなたにこれからお知らせいたしますことは、まったくだれも知らないことであります。まだ世間に発表されていないことであります。そしてたぶんあなたは、ジャン・ヴァルジャンから巧みに男爵夫人へ贈られた財産の出所も、それでおわかりになりますでしょう。私は特に巧みにと申しますが、実際そういう種類の寄贈によって、名誉ある家にもぐり込み、その安楽にあずかり、同時にまた、自分の罪悪を隠し、盗んだものをおもしろく使い、名前を包み、家庭の人となるのですから、まあまずいやり方ではありません。」

「そう言うなら、僕にも言うべきことがある。」とマリユスは口を入れた。「だがまあ続けて話してみなさい。」

「男爵、私はあなたにすべてを包まず申しませう。報酬の方は、あなたの寛大なおぼしめしにお任せいたします。その秘密は黄金こがねの山を積んでもよろしいものです。こう申しますと、なぜジャン・ヴァルジャンの方へ行かないのかと言われるかも知れませんが、それはごく簡単な理由からであります。彼がすっかり金を出してしまったことを、しかもあな

たのために出してしまったことを、私は存じております。そのやり方は実に巧いものだと思います。ところで彼はもう一文も持つてはいませんので、ただ私に空つぽの手を開いて見せるほかはありますまい。それに私は、ジョヤまで行くのに少し金がいりますので、何も持たない彼の所よりも、何でも持つておいでになるあなたの方へ参つたのであります。ああ少し疲れましたから、どうか椅子にすわることを許して下さい。」

マリユスは腰をおろし、彼にもすわるように身振りをした。

テナルデイエはボタン締めいすの椅子に腰をおろし、二枚の新聞紙を取り、それを包み紙の中にまたたみ込みながら、ドラポー・ブラン紙を爪つめではじめてつぶやいた、「こいつ、手に入れるのにずいぶん骨を折らせやがった。」それから彼は膝ひざを重ね、椅子の背によりかかった。自分の語ろうとする事に対して安心してきつてる者が取る態度である。そしてよいよ、落ち着き払い一語一語力を入れて、本題にとりかかった。

「男爵、今からおおよそ一年ばかり前、一八三二年六月六日、あの暴動のありました日、パリーの大下水道の中に、アンヴァリード橋とイエナ橋との間のセーヌ川への出口の所に、ひとりの男がいました。」

マリユスにはわかに自分の椅子を、テナルデイエの椅子に近寄せた。テナルデイエはそ

の動作に目を注いで、相手の心をとらえ一語一語に相手の胸のとどろきを感じずる弁士のよ
うに、おもむろに続けていった。

「その男は、政治とは別なある理由のために身を隠さなければならぬので、下水道を住
居として、そこへはいる鍵かぎを持っていました。重ねて申しますが、それは六月六日でした。
晩の八時ごろだったでしょう。その男は、下水道の中に物音を聞いて、非常に驚き、身を
潜めて待ち受けました。物音というのは人の足音で、何者かが暗闇くらやみの中を歩いて、彼の
方へやってきました。不思議なことに、彼以外にもひとり下水道の中にいたのです。下水
道の出口の鉄格子てつこうしは遠くありませんでした。それからもれて来るわずかな光で、彼は新
らしくきた男が何者であるかを見て取り、また背中に何かかかっているのを知りました。そ
の男は背をかがめて歩いていました。それは前徒刑囚で、肩に担になっているのは一つの死体で
した。でまあ言わば、殺害の現行犯です。窃盗の方はそれから自然にわかることです。人
はただで他人を殺すものではありません。その囚徒は死体を川に投げ込むつもりだったの
です。なお一つ注意までに申しますと、出口の鉄格子てつこうしの所までたどりつく前に、下水道
の中を遠くからやってきたその囚徒は、恐ろしい泥濘孔どろあなに必ず出会ったはずで、そこに死
体をほうり込んで来ることもできたわけです。しかし、明日あすにも下水人夫がその泥濘孔を

掃除に来れば、殺された男を見つけ出すかも知れません。殺した方ではそんなことをいやがったのです。そしてむしろ泥濘孔を、荷をかついだまま通りぬけて来ることにきめたのです。どれほど大変な努力をしたかは察しられます。それくらい危険なことはまたとあるものではありません。よく死なずに通りぬけてこられたのが不思議なほどです。」

マリユスの椅子は更に近寄った。テナルデイエはそれに乗じて長く息をついて、言い続けた。

「閣下、下水道は広い練兵場とは違います。隠れる物は何もなく、身を置く所さえないくらいです。そこにふたりの男がいれば、互いに顔を合わさないわけにはゆきません。そのふたりも出会いました。そこに住んでいる男とそこを通りぬけようとしている男とは、互いに困ったとは思いますが、あいさつをかわさないわけにはゆきませんでした。通りぬけようとしている男は、そこに住んでる男に言いました。『お前には俺の背中のものが何だかわかるだろう。俺は出なけりやならねえ。お前は鍵を持つてようだから、それを俺に貸してくれ。』ところで、その囚徒は恐ろしく強い奴でした。拒むわけにはゆきません。けれども鍵を持つてる男は、ただ時間を延ばすためにいろんなことをしゃべりました。彼はその死んだ男をよく見ましたが、ただ年が若く、りっぱな服装をして金持ちらしく、また

血のために顔の形もわからなくなつてるといふほかは、何にもよくわかりませんでした。それで、しゃべつてゐるうちに彼は、人殺しの男に気づかれぬように、そつとうしろから、殺された男の上衣の端を裂き取りました。言うまでもなく証拠品としてです。それによつて事件を探索し犯罪者にその犯罪の証拠品をつきつけてやるためです。彼はその証拠品をポケットにしまいました。それから彼は、鉄格子を開き、相手の男をその背中の厄介物と共に外へ送り出し、鉄格子をまた閉ざし、そして逃げてしまいました。事件にそれ以上関係したくないと思ひ、ことに被害者がその被害者を川に投げ込む時その近くにいたくないと思つたからでした。で、これまでお話し申せばもう充分おわかりでしょう。死体をおつかひでいたのはジャン・ヴァルジャンです。鍵かぎを持つていたのは、現にかく申し上げる私です。そして上衣の布片きれは……。」

そしてテナルディエは、一面に黒ずんだ汚点のついてゐる引き裂けた黒ラシヤの一片を、ポケットから取り出し、両手の親指と人差し指とでつまんでひろげながら、それを目の所まで上げて、物語の結末とした。

マリユスは色を変えて立ち上がり、ほとんど息もつけないうで黒ラシヤの一片を見つめ、一言も発せず、その布片から目を離しもせず、壁の方へ退さがつてゆき、うしろに差し出した

右手で壁の上をなでながら、暖炉のそばの戸棚の錠前についていた一本の鍵をさがした。そしてその鍵を探りあて、戸棚とだなを開き、なおテナルデイエがひろげてる布片から驚きの眸ひとみを離さず、後ろ向きのまま戸棚の中に腕を差し伸ばした。

その間テナルデイエは言い続けていた。

「男爵、その殺された青年は、ジャン・ヴァルジャンの罫わなにかかったどこかの金持ちで、大金を所持していたものだと思える理由が、いくらもあります。」

「その青年は僕だ、その上衣はこれだ！」とマリユスは叫んだ。そして血に染そんだ古い黒の上衣を床ゆかの上に投げ出した。

彼はテナルデイエの手から布片を引ったくり、上衣の上に身をかがめ、裂き取られた一片を裂けてる据すての所へあててみた。裂け目はきっかり合って、その布片のために上衣は完全なものとなった。

テナルデイエは茫然ぼうぜんとした。「こいつはやられたかな、」と彼は考えた。

マリユスは身を震わし、絶望し、また驚喜して、すつくとつつ立った。

彼はポケットの中を探り、恐ろしい様子でテナルデイエの方へ進み寄り、五百フランと千フランとの紙幣をいっぱい握りつめた拳こぶしを差し出し、彼の顔につきつけた。

「君は恥知らずだ！ 君は嘘つきで、中傷家で、悪党だ！ 君はあの人に罪を着せるためにやってきて、かえってあの人を公明なものにした。あの人を破滅させようとして、かえってあの人をりっぱな者にした。そして君こそ盗賊だ。君こそ人殺しだ。おいテナルデイエ・ジョンドレット、君がオピタル大通りの破家あばらやにいた所を、僕は見て知っている。君を徒刑場へ送るだけの材料を、いやそれよりもっと以上の所へ送るだけの材料を、僕は握っている。さあ、悪者の君に、千フランだけ恵んでやる。」

そして彼は一枚の千フラン紙幣をテナルデイエへ投げつけた。

「おいジョンドレット・テナルデイエ、卑劣きわまる悪漢、これは君にいい見せしめだ、秘密を売り歩き、内密なことを商売にし、暗闇くらやみの中を漁りあさ回る、みじめな奴やつ！ この五百フランもくれてやる。拾ったらここを出ていっちなまえ！ それもワーテルローのお陰だ。」

「ワーテルロー！」とテナルデイエは五百フランを千フランと共にポケットにしまいながらつぶやいた。

「そうだ、人殺しめが！ 君はそこで……大佐の命を救った。」

「將軍ので。」とテナルデイエは頭を上げながら言った。

「大佐だ！」とマリユスは憤然として言った。「將軍なら一文もやりはしない。それから君は、また悪事をしにここへきた。君は既にある限りの罪悪を犯している。どこへなりと行くがいい、姿を消してしまふがいい。ただ樂に暮らすようと、それだけ僕は希望しておく。さあ、ここにまだ三千フランある。それを持ってゆけ。明日あしたからでもアメリカへ行くがいい、娘といっしょに。君の妻はもう死んでいる、けしからん嘘うそつきめが！ 出発の時には僕が見届けてやる、そしてその時二万フランは恵んでやる。どこへなりと行つてくたばつてしまえ！」

「男爵閣下、」とテナルデイエは足下まで頭を下げながら答えた、「御恩は長く忘れません。」

そしてテナルデイエは何にもわけがわからず、黄金の袋で打ちのめされ、頭の上に紙幣をまき散らす雷電に打たれ、ただあつけに取られたまま狂喜して、そこを出て行つた。

彼はまったく雷に打たれたと同じだったが、しかしまた満足でもあつた。もしその雷に対して避雷針を持っていたならば、かえつて不満な結果となつたであらう。

ここにすぐ、この男のことを片づけておこう。今述べてる事件から二日の後、彼はマリユスの世話によつて、名前を変え、娘のアゼルマを連れ、ニューヨークで受け取れる二万

フランの手形を持ち、アメリカへ向かつて出発した。一度踏みはずしたテナルデイエのみじめな徳性は、もはや矯正すべからざるものになっていた。彼はアメリカへ行つても、ヨーロッパにいる時と同様だった。悪人が手を触れる時には、善行も往々にして腐敗し、それから更に悪事が出てくるようになる。マリユスからもらった金で、テナルデイエは奴隷売買を始めた。

テナルデイエが出てゆくや否や、マリユスは庭に走っていった。コゼットはまだ散歩していた。

「コゼット！ コゼット！」と彼は叫んだ。「おいで、早くおいで！ すぐに行くのだ。バスク、辻馬車つじばしやを一つ呼んでこい。コゼット、おいで。ああ、僕の命を救ってくれたのはあの人だった。一刻も遅らしてはいけない。すぐ肩掛けをつけるんだ。」

コゼットは彼が気でも狂ったのかと思つたが、その言葉どおりにした。

彼は息もつけないで、胸に手をあてて動悸どうきを押ししずめようとしていた。彼は大膽おおまたに歩き回つた。コゼットを抱いて言つた。

「ああ、コゼット、僕は実にあわれむべき人間だ！」

マリユスは熱狂していた。彼はジャン・ヴァルジャンのうちに、高いほの暗い言い知れ

ぬ姿を認め始めた。非凡な徳操の姿が彼に現われてきた。最高にしてしかもやさしい徳であり、広大なるためにかえつて謙讓なる徳であった。徒刑囚の姿はキリストの姿と変わった。マリユスはその異変に眩惑げんわくした。彼は自分の今ながめているものがただ偉大であるというほか、何にもはつきりとわからなかった。

間もなく一台の辻馬車が門前にやってきた。

マリユスはそれにコゼットを乗せ、次に自分も飛び乗った。

「御者、」と彼は言った、「オンム・アルメ街七番地だ。」

馬車は出かけた。

「まあうれしいこと！」とコゼットは言った、「オンム・アルメ街なのね。私は今まで言い出しかねていましたのよ。私たちはジャンさんに会いに行くんですわね。」

「お前のお父さんとうだ、コゼット、今こそお前のお父さんだ。コゼット、僕にはもうすつかりのみ込めた。お前はガヴローシユに持たしてやった僕の手紙を受け取らなかったと言ったね。きつとあの人の手に落ちたに違いない。それで僕を救いに防寨ぼうさいへきて下すつたのだ。そして、天使となるのがあの人の務めでもあるように、ついでに他の人たちをも救われたのだ。ジャヴェルをも救われた。僕をお前に与えるために、あの深淵しんえんの中から僕を

引き出して下すつた。僕を背中にかついで、あの恐ろしい下水道を通られた。ああ僕は実に恐ろしい恩知らずだ。コゼット、あの人はお前の守り神だった後、僕の守り神になられた。まあ考えてもごらん、恐ろしい泥濘孔どろあながあつたのだ、必ずおぼれてしまうような所が、泥の中におぼれてしまうような所が、コゼット、それをあの人は僕をつれて渡られた。僕は氣を失つていた。何にも見えず、何にも聞こえず、自分がどんなことになつてゐるか知ることができなかつたのだ。僕たちはあの人を連れ戻し、否でも応でも家に引き取り、もう決して離すことではない。ああ家について下さればいいが、すぐ会えればいいが！僕はこれから一生あの人を敬い通そう。そうだ、そうしなければいけない、そうだろう、コゼット。ガヴローシユが僕の手紙を渡したのは、あの人へだつたに違いない。それですつかりわかる。お前にもわかつたろう。」

コゼットには一言ひとこともわからなかつた。

「おつしやる通りですわ。」と彼女は言つた。

馬車はそのうちにも駛はせつていた。

五 背後に昼を有する夜

扉をたたく音を聞いてジャン・ヴァルジャンは振り向いた。

「おはいり。」と彼は弱々しく言った。

扉は開かれた。コゼットとマリユスが現われた。

コゼットは室の中に飛び込んできた。

マリユスは扉の框によりかかつて、闕の上にとたずんだ。

「コゼット！」とジャン・ヴァルジャンは言った。そして蒼白な昏迷した凄惨な様子で、目には無限の喜びを浮かべ、震える両腕を開いて、椅子の上に身を起こした。

コゼットは激しい感動に息もふさがって、ジャン・ヴァルジャンの胸に身を投げた。

「お父様！」と彼女は言った。

ジャン・ヴァルジャンは心転倒して、ようやくにつぶやいた。

「コゼット！ 彼女！ あなた、奥さん！ お前だったか！ ああ！」

そしてコゼットの腕に抱きしめられて、彼は叫んだ。

「お前だったか！ きてくれたか！ では私を許してくれるんだね。」

マリユスは涙を落とすまいとして眼瞼を下げながら、一歩進み出て、泣き声をおさえよ

うとしてびくびく震えてる脣の間からつぶやいた。

「お父さん！」

「おおあなたも、あなたは私を許して下さるのですね！」とジャン・ヴァルジャンは言った。

マリユスは一言も発し得なかった。ジャン・ヴァルジャンは言い添えた。「ありがとう。」

コゼットは肩掛けをぬぎ捨て、帽子を寝台の上に投げやった。

「邪魔だわ。」と彼女は言った。

そして老人の膝ひざの上うへにすわりながら、得も言えぬやさしい手つきで彼の白髪を払いのけ、その額くちに脣くちづけをした。

ジャン・ヴァルジャンは惘然ぼうぜんとして、されるままになっていた。

コゼットはただ漠然ぼくぜんとしか事情を了解していなかったが、あたかもマリユスの負い目を払ってやりたいと思ってるかのように、いつそう親愛の度を強めていた。

ジャン・ヴァルジャンは口ごもりながら言った。

「人間というものは実に愚かなものです。私はもう彼女に会えないと思っていました。考

えてもごらんなさい、ポンメルシーさん、ちょうどあなたがはいつてこられる時、私はこう自分で言っていました。万事終わった、そこに彼女の小さな長衣がある、私はみじめな男だ、もうコゼットにも会えないのだ、と私はそんなことを、あなたが階段を上つてこられる時言っていました。実に私はばかではありませんか。それほど人間はばかなものです。しかしそれは神を頭に置いていないからです。神はこう言われます。お前は人から見捨てられるだろうと思うのか、ばかな、いや決して、そんなことになるものではないと。ところで、天使をひとり必要とするあわれな老人がいます。すると天使がやってきます。コゼットにまた会います。かわいいコゼットにまた会います。ああ、私は実に不幸でした。

彼はそれからちよつと口がきけなかつた。がまた言い続けた。

「私は実際、ごく時々でもコゼットに会いたかつたのです。人の心は嘸^かみしめるべき骨を一つほしがるものです。けれどもまた、自分はよけいな者だと私は感じていました。あの人たちにはお前はいらぬ、お前は自分の片すみに引つ込んでいるがよい、人はいつでも同じようにしてゐることはできないものだ、そう私は自分で自分に言いきかせました。ああしかし、ありがたいことには、私はまた彼女に会つた！ ねえコゼット、お前の夫^{おつと}は実に

りっぱだ。ああお前はちようど、刺繡したきれいな襟えりをつけているね。私はその模様が好きだ。夫から選んでもらったのだろうね。それからお前にはカシミヤがよく似合うから是非買ってごらん。ああポンメルシーさん、私に彼女をお前と呼ばして下さい。わずかの間ですから。」

コゼットは言い出した。

「あんなに私共を見限つてしまうなんて、何という意地悪でしょう。いったいどこへいらしたの、何でこう長く行っていらしたの？ 昔は、旅はいつも三、四日だけだったではありませんか。私はニコレットをやりましたが、いつもきまってお留守だという答えきりだったんですもの。いつからお戻りになっていましたの。なぜお知らせなさいませんでしたの。ほんとに様子も大変お変わりになっていきますよ。まあ、悪いお父様ね！ 御病氣だったのでしょう、そして私どもにお知らせなさらなかったのでしょう。マリユス、この手にさわってみてごらんなさい、冷たいこと！」

「こうしてあなたもきて下すつたのですね、ポンメルシーさん、あなたは私を許して下さいのですね！」とジャン・ヴァルジャンは繰り返した。

ジャン・ヴァルジャンが二度言ったその言葉に、マリユスの心にいつぱいたまっていた

ものが出口を得て、彼は急に言い出した。

「コゼット、聞いたか、この方はいつもこうだ、いつも僕に許しを求めなさる。しかも僕にどんなことをして下すったか、お前は知ってるか、コゼット。この方は僕の命を救って下すった。いやそれ以上をして下すった。お前を僕に与えて下すった。そして、僕を救って下すった後、お前を僕に与えて下すった後、コゼット、自分をどうされたか？ 自分の身を犠牲にされたのだ。実にりっぱな方だ。しかも、その恩知らずの僕に、忘れっぽい僕に、無慈悲な僕に、罪人の僕に、ありがとうと言われる。コゼット、僕は一生涯この方の足下にひざまずいても、なお足りないのだ。あの防塞ぼうさい、下水道、熱火の中、汚水の中、それを通してこられたのだ、僕のために、お前のために、コゼット！ あの死ぬばかりの所を通して僕を運んできて下すった。僕を死から助け出し、しかも御自分は甘んじて生命を危険にさらされた。あらゆる勇氣、あらゆる徳、あらゆる勇壯、あらゆる高潔、それらをすべて持つていられる。コゼット、この方こそ実に天使だ！」

「ま、まあ！」とジャン・ヴァルジャンは低く言った。「なぜそんなことを言われるのです。」

「だがあなたこそ、」とマリユスは崇敬の念のこもった奮激をもって叫んだ。「なぜそれ

を言われなかったのです？ あなたも悪い。人の命を助けておいて、それを隠すなんて！
その上になお、自分の素性を語るといふ口実の下に、自分自身を誹謗ひぼうなすった。実にひどいことです。」

「私は真実を申したのです。」とジャン・ヴァルジャンは答えた。

「いや、」とマリユスは言った、「真実はすべてでなければいけません。あなたはすべてを申されなかつた。あなたはマドレーヌ氏であつたのに、なぜそれを言われませんでした。あなたはジャヴェルを救つたのに、なぜそれを言われませんでした。私はあなたに命の恩になつてゐるのに、なぜそれを言われませんでした。」

「なぜと云つて、私もあなたと同じように考えたからです。あなたの考えはもつともだと思ひました。私は去らなければいけなかつたのです。もしあの下水道のことを知られたら、私をそばに引き止められたに違いありません。それで私は黙つていなければなりませんでした。もしそれを私が話したら、まったく困ることになつたでしょう。」

「何が困るのです、だれが困るのです！」とマリユスは言った。「あなたはここにこのままおられるつもりですか。私どもはあなたをお連れします。ああ、偶然ああいうことを知つた時のことを考えると！ 是非とも私どもはあなたを連れてゆきます。あなたは私ども

の一部です。あなたは彼女の父で、また私の父です。もう一日もこのひどい家で過ごされてはいけません。明日もここにいるなどと考えられてはいけません。」

「明日は、」とジャン・ヴァルジャンは言った。「私はもうここにいますまい、しかしあなたの家にもいますまい。」

「それはどういうことですか？」とマリユスは答え返した。「ああそうですか、いやもう旅もお許ししません。もう私どものそばを離れられてはいけません。あなたは私どものものです。決してあなたを離しません。」

「こんどこそ是非そうします。」とコゼットも言い添えた。「下に馬車も待たしてあります。私あなたを連れてゆきます。やむを得なければ力づくでもかっいでゆきます。」

そして笑いながら彼女は、老人を両腕に持ち上げるような身振りをした。

「あなたのお室は、まだ私どもの家にそのままになっています。」と彼女は言い進んだ。

「この頃はまあどんなに庭がきれいになったでしょう！ 躑躅が大変みごともになりました。

道には川砂を敷きましたし、葦色の小さな貝殻も交じっています。私の苺も食べていただきますよ。私がそれに水をやっていますのよ。そしてもう、奥さんというのもやめ、ジャンさんというのもやめ、私どもは共和政治になり、みんなお前と言うことにしましよ

う、ねえ、マリユス。番付けが変わったのよ。それからお父様、私はほんとに悲しいことがありましたの。壁の穴の中に駒こまどり鳥が一匹巢をこしらえていましたが、それを恐ろしい猫ねこが食べてしまいました。巢の窓から頭を差し出していつも私を見てくれた、ほんとにかわいい小さな駒鳥でしたの！ 私泣きましたわ。猫を殺してやりたいほどでしたの。でもこれからは、もうだれも泣かないことにしましょう。みんな笑うんですわ、みんな幸福になるんですわ。あなたは私どもの所へいらつしやいますでしょうね。お祖父じい様もどんなに御満足なさるでしょう。庭に畑を差し上げますから、何かお作りなさいませよ。あなたの母が私の母の相手になれるかどうか、競争をしてみませよ。それからまた、私は何でもあなたのお望みどおりにいたしましょう。そしてまた、あなたも私の言うことを聞いて下さいますのよ。」

ジャン・ヴァルジャンはそれをよく聞かないでただぼんやり耳にしていた。その言葉の意味よりむしろその声の音楽を聞いていた。魂の沈痛な真珠である大きな涙の一滴が、しだいに彼の目の中に宿ってきた。彼はつぶやいた。

「彼女がきてくれたことは、神が親切であらるる証拠だ。」

「お父様！」とコゼットは言った。

ジャン・ヴァルジャンは続けて言った。

「いつしよに住むのは楽しいことに違いない。木には小鳥がいっぱいいる。私はコゼットと共に散歩する。毎日あいさつをかわし、庭で呼び合う、いきいきした人たちの仲間にはいる、それは快いことだろう。朝から互いに顔を合わせる。めいめい庭の片すみを耕す、彼女はその苺を私に食べさせ、私は自分の薔薇を彼女につんでやる。楽しいことだろう。ただ……。」

彼は言葉をとぎらして、静かに言った。

「残念なことだ。」

涙は落ちずに、元へ戻ってしまった。ジャン・ヴァルジャンは涙を流す代わりにほほえんだ。

コゼットは老人の両手を自分の両手に取った。

「まあ！」と彼女は言った、「お手が前よりいつそう冷たくなっています。御病気ですか。どこかお苦しくって？」

「私？ いや、」とジャン・ヴァルジャンは答えた、「私は病気ではない。ただ……。」
彼は言いやめた。

「ただ、何ですか？」

「私はもうじきに死ぬ。」

コゼットとマリユスとは震え上がった。

「死ぬ！」とマリユスは叫んだ。

「ええ、しかしそれは何でもありません。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

彼は息をつき、ほほえみ、そしてまた言った。

「コゼット、お前は私に話をしていたね。続けておくれ。もっと話しておくれ。お前のかわいい駒鳥こまどりが死んだと、それから、さあお前の声を私に聞かしておくれ！」

マリユスは石のようになって、老人をながめていた。

コゼットは張り裂けるような声を上げた。

「お父様、私のお父様！ あなたは生きておいでになります。ずっと生きられます、私が生かしてあげます、ねえお父様！」

ジャン・ヴァルジャンはかわいくてたまらないような様子で彼女の方へ頭を上げた。

「そう、私を死なないようにしておくれ。あるいはお前の言うとおりになるかも知れない。お前たちがきた時私は死にかかっていた。ところがお前たちがきたのでそのままになって

いる。何だか生き返つたような気もする。」

「あなたにはまだ充分力もあり元氣もあります。」とマリユスは叫んだ。「そんなふうで死ぬものだと思つていられるのですか。いろいろ心配もあられましたでしょうが、これからもうなくなります。お許しを願うのは私の方です、膝ひざについてお願いします！ お生ぎになれます、私どもといっしょに、そして長く、お生ぎになれます。あなたにまたきていただきます。私たちふたりが、あなたの幸福という一つの考えしかもう持つていない私たちふたりが、ここについております。」

「おわかりでしょう、」とコゼットは涙にまみれながら言った、「お死にはなさらないとマリユスも言っています。」

ジャン・ヴァルジャンはほほえみ続けていた。

「あなたが私をまた引き取つて下さつても、ポンメルシーさん、それで私はこれまでと変わった者になるでしょうか。いや、神はあなたや私と同じように考えられて、決してその意見を変えられはしません。私が逝いつてしまふのはためになることです。死はよい処置です。神は、私どもがどうなればよいかを私どもよりよく知つていられます。あなたが幸福であられること、ポンメルシー氏がコゼットを得ること、青春は朝めとを娶めとること、あなた方

ふたりのまわりにはライラックの花や鶯うぐいすがいること、あなた方の生活は日の輝いた芝生のようであること、天の喜びがあなた方の魂を満たすこと、そして今、もう何の役にも立たない私は、死んでゆくこと、すべてそれらは正しいことに違いありません。まあよく考えてみて下さい、今はもう何にもなすべきことはありません。私は万事終わったのだとはつきり感じていますが、一時間前に、私は一時気を失いました。そしてまた昨晚、私はそこにある水差しの水をみな飲みました。コゼット、お前の夫は実おっとにいい方だ、お前は私といっしょにいるよりはずっと仕合わせだ。」

扉の音がした。はいつてきたのは医者だった。

「お目にかかつて、またすぐお別れです、先生。」とジャン・ヴァルジャンは言った、

「これは私の子供たちです。」

マリユスは医者に近寄った。彼はただ、「先生？……」と一言言いかけた。その調子には充分な問いが含まいちべつっていた。

医者は意味深い一いちべつ瞥でその問いに答えた。

「万事が望みどおりにならないからといって、」とジャン・ヴァルジャンは言った、「それで神を恨んではいけない。」

沈黙が落ちてきた。皆の胸はおき圧えつけられていた。

ジャン・ヴァルジャンはコゼットの方を向いた。彼は永久に失うまいとするように彼女をながめ始めた。彼は既に深い影の底に沈んではいたが、なおコゼットをながめて恍惚こうこうたることができた。彼女のやさしい顔の反映が彼の蒼白な面を照らおもてしていた。墳墓にもその歓喜の情があり得る。

医者みは彼の脈を診た。

「ああ御病人に必要なのはあなた方でした。」と彼はコゼットとマリユスとをながめながらつぶやいた。

そして彼はマリユスの耳元に身をかがめてごく低く言い添えた。

「もう手おくれです。」

ジャン・ヴァルジャンはなおほとんどコゼットをながめることをやめないで、心朗らかな様子をしてマリユスと医者とをじろりと見た。そして彼の口から聞き分け難い次の言葉がもれた。

「死ぬのは何でもないことだ。生きられないのは恐ろしいことだ。」

突然彼は立ち上がった。かくにわかにかが戻ってくるのは、時によると臨終くもんの苦悶の徴

候である。彼はすっかりした足取りで壁の所まで歩いてゆき、彼を助けようとしたマリユスと医者とを払いのけ、壁にかかつてる小さな銅の十字架像をはずし、また戻ってきて、健全な者のように自由な動作で腰をおろした。そして十字架像をテーブルの上に置きながら、高い声で言った。

「実に偉大な殉教者だ。」

それから、彼の胸は落ちくぼみ、頭は震え動き、あたかも死に酔わされたかのようになつて、りようひざ両膝の上に置かれた両手はズボンの布に爪つめを立てはじめた。

コゼットは彼の肩をささえ、すすり泣きながら、彼に何か言おうとつとめたが、それもできなかつた。ただ、涙の交じつた痛ましい唾液だえきとともに出て来る単語のうちに、次のような言葉がようやく聞き取られた。「お父様！ 私たちのもとを離れて下さいませ。せつかくお目に掛かつたままお別れになるなどということが、あるものでございませうか。」

臨終くもんの苦悶うよは紆余曲折うよすると言ひ得る。あるいは行き、あるいはきたり、あるいは墳墓の方へ進み、あるいは生命の方へ戻つてくる。死んでゆくことのうちには暗中模索の動作がある。

ジャン・ヴァルジャンはその半ば失神の状態の後、再び気を取り直し、あたかも暗黒の影を払い落とそうとするように額を振り立て、ほとんどまったく正気に返った。彼はコゼットの袖の一襲を取り、それに唇をあてた。

「回復してきました、先生、回復してきました！」とマリユスは叫んだ。

「あなた方はふたりともいい人だ。」とジャン・ヴァルジャンは言った。「今私の心を苦しめてる事は何であるか、言ってみましょう。私の心を苦しめる事は、ポンメルシーさん、あなたがあの金に手をつけようとされないことです。あの金は、まさしくあなたの奥さんのものです。そのわけを今ふたりに言っかけてあげます。私がある方に会ったのを喜ぶのも、一つはそのためです。黒い飾り玉はイギリスからき、白い飾り玉はノールウエーからきます。それらのことは皆この紙に書いてありますから、それをお読みなさい。腕環には、鑑付けにしたブリキの自在環の代わりに、はめ込んだブリキの自在環をつけることを発明しました。その方がきれいで、品もよく、価も安いのです。それでどれくらい金が儲けられるかわかるでしょう。コゼットの財産はまったく彼女のものです。私がこんな細かな事を話すのも、あなたの心を安めようと思うからです。」

門番の女は、階段を上がつてき、少し開いてる扉の間から中をのぞき込んでいた。医者

はそこを去るように知らせたが、その心の篤い^{あつ}婆さんは、立ち去る前に臨終の人に向かつてこう言わないではおられなかつた。

「牧師様をお呼びしましょうか。」

「牧師様はひとりおられる。」ジャン・ヴァルジャンは答えた。

そして彼は指で、頭の上の一点を指し示すようなふうをした。おそらく彼の目には、ここに何者かの姿を見ていたのであろう。

実際ミリエル司教がその臨終に立ち会っていられたかも知れない。

コゼットは静かに彼の腰の下に枕をさし入れた。

ジャン・ヴァルジャンはまた言った。

「ポンメルシーさん、どうか気使わないで下さい。あの六十万フランはまさしくコゼットのものです。もしあなたがあれを使われなければ、私の生涯はむだになってしまふでしょう。私どもはそのガラス玉製造に成功したのでした。ベルリン玉と言われているのと対抗しました。ドイツの黒玉も到底かきません。ごくよくできた玉の千二百もはいつてる大包みが、わずかに三フランしかしないのです。」

大事な人がまさに死なんとする時には、人はその人にしがみついて引き止めようとする

目つきで、それを見つめるものである。ふたりとも、心痛の余り黙然として、死に対して何と言うべきかを知らず、絶望し身を震わしながら、コゼットの方はマリユスに手を取られ、ふたりで彼の前にじつと立っていた。

刻々にジャン・ヴァルジャンは弱つていった。彼はしだいに沈んでいって、暗黒な地平に近づきつつあった。呼吸は間歇的かんけつてきになり、わずかな残喘ざんぜんにも途切らされた。もはや前腕の位置を変えるのも容易でなくなり、両足はまったく動かなくなり、そして手足のみじめさと身体の疲憊ひはいが増すとともに、魂の莊嚴さが現われてきて、額の上にひろがってきた。他界の光は既にその眸ひとみの中に明らかに宿っていた。

彼の顔は蒼白そうはくになり、同時にまたほほえんでいた。もはやそこには生命の影はなくて、他のものがあつた。呼吸は微弱になり、目は大きくなっていた。それは翼が感ぜらるる死骸がいであつた。

彼はそばに来るようにコゼットに合い図をし、次にマリユスに合い図をした。明らかに臨終の最後の瞬間だつた。そして彼は、遠くから来るかと思われるような声で、ふたりと彼との間には既に壁ができてるかと思われるような声で、ふたりに話しかけた。

「近くおいで、ふたりとも近くおいで。私はお前たちふたりを深く愛する。ああ、こ

うして死ぬのは結構なことだ。コゼット、お前もまた私を愛してくれるね。私は、お前がいつもお前の老としより人に愛情を持つていてくれたことを、よく知っていた。私の腰の下にこの括くくり蒲ふしん団を入れてくれるとは、何というやさしいことだろう。お前は私の死を、少しは泣いてくれるだろうね。あまり泣いてはいけけない。私はお前がほんとに悲しむことを望まない。お前たちふたりはたくさん楽しまなければいけない。それから私は、あの締金のない金環で何よりもよく儲もつかったことを、言い忘れていた。十二ダース入り的大包みが十フランでできるのに、六十フランにも売れた。まったくよい商売だった。だから、ポンメルシーさん、あの六十万フランも驚く程のことではありません。正直な金です。安心して金持ちになってよろしいのです。馬車も備え、時々芝居の棧さしき敷も買い、コゼットは美しい夜会服も買うがいいし、それから友人たちにごちそうもし、楽しく暮らすがいい。私はさつきコゼットに手紙を書いておいた。どこかにあるはずだ。それから私は、暖炉の上にある二つの燭しよく台だいを、コゼットにあげる。銀であるが、私にとっては、金きんでできると言ってもいいし、金剛石でできるといってもいい品である。立てられた蠟ろうそく燭を聖きよい大蠟燭ろうそくに変える力のある燭台だ。私にあれを下すった人が、果たして私のことを天から満足の目で見て下さるかどうかは、私にもわからない。ただ私は自分でできるだけのことはした。

お前たちはふたりとも、私が貧しい者であるということを忘れないで、どこかの片すみに私を葬って、ただその場所を示すだけの石を上に入れて下さい。それが私の遺言である。石には名前を刻んではいけない。もしコゼットが時々きてくれるなら、私は大変喜ぶだろう。あなたもきて下さい、ポンメルシーさん。私は今白状しなければなりません、私はいつもあなたを愛したというわけではなかった。それは許して下さい。けれど今は、彼女とあなたとは、私にとつてただひとりの者です。私はあなたに深く感謝しています。私はあなたがコゼットを幸福にして下さることはつきり感じています。ああ、ポンメルシーさん、彼女の美しい薔薇色の頬は私の喜びでした。少しでも色が悪いと、私は悲しかったものです。それから、戸棚とだなの中に五百フランの紙幣が一枚はいつています。私はそれに手をつけないでいます。それは貧しい人たちにやるためのものです。コゼット、その寝台の上にお前の小さな長衣があるでしょう。お前はあれを覚えていますか。まだあの時から十年にしかならない。時のたつのは実に早いものだ。私たちはごく幸福だった。がもうすべて済んでしまった。ふたりとも泣くにはおよばない。私はごく遠くへ行くのではない。向こうからお前たちの方を見ていよう。お前たちは夜になってただながめさえすればよい、私がほほえんでいるのがわかるだろう。コゼット、お前はモンフェルメイユを覚えていま

すか。お前は森の中にいて、大変恐こわがつていた。私が水みず桶おけの柄を持ってやった時のことを、まだ覚えていますか。私がお前の小さな手に触さわったのは、それが始めてだった。ほんとは冷たい手だった。ああ、その頃、その手はまつかだだったが、今では大変白くなっている。それから大きな人形、あれも覚えていますか。お前はあれにカトリーヌという名前をつけていた。あれを修道院に持つていかなかったことを、お前は残念がつていたものだ。お前は幾度私を笑わしたことだろう。雨が降ると、溝みぞの中に藁わら屑くずを浮かべて、それが流れてゆくのを見ていた。ある時私は、柳編みの羽は子ね板いたと、黄や青や緑の羽毛はねのついた羽子はねとを、お前に買ってやったことがある。お前はもう忘れているでしょう。お前はごく小さい時はほんとにいたずらだった。いろんなわるさをしていた。自分の耳に桜ん坊を入れてしまったこともある。しかしそれはみな過去のことだ。人形を抱いて通った森、歩き回った木立ちの中、身を隠した修道院、いろんな遊びごと、他愛もない大笑い、それらはみな影にすぎなくなっている。私はそういうものがみな自分のものだと思つていた。しかし私のばかげた考えだった。またあのテナルディエ一家の者は、みな悪者だった。しかしそれは許してやらなければいけない。コゼット、今ちようどお前の母親の名前を言つてきかせるときがきた。お前の母親は、ファンテーヌという名前である。その名前をよく覚えてお

きなさい、ファンティヌだ。それを口にするとびごとひざまずかなくてはいけない。あの人は非常に難儀をした。お前を大変かわいがっていた。お前が幸福な目にあつたのと、ちようど同じくらい不幸な目に会つた。それが神の配剤である。神は天にあつて、われわれ皆の者を見られ、大きな星の間にあつて自分の仕業しわざを知つていられる。私はもう逝いつてしまふ。ふたりとも、常によく愛し合ひなさい。世の中には、愛し合うということよりほかにほとんど何も無い。そして時々は、ここで死んだあわれな老人の事を考えて下さい。おおコゼットや、この頃お前に会わなかつたといつても、それは私の罪ではない。そのために私はどんなに苦しんだらう。私はよくお前が住んでいる街路の角かどまで出かけて行つた。私を通るのを見た人たちは、きつと變に思つたに違ひない。私は氣ちがいのようになっていた。ある時などは帽子もかぶらないで出かけて行つたものだ。おお私のふたり、私ともよい。ただ私のことを少し考えておくれ。お前たちは祝福された人たちだ。私はもう自分で自分がよくわからない。光が見える。もつと近くにおいて。私は楽しく死ぬ。お前たちのかわいい頭をかして、その上にこの手を置かして下さい。」

コゼットとマリユスとは、そこにひざまずき、我を忘れ、涙にむせび、ジャン・ヴァル

ジャンの両手に各々すがりついた。そのおごそかな手はもはや動かなかつた。

彼はあおむけに倒れた。二つの燭台しよくだいから来る光が彼を照らしていた。その白い顔は天の方をながめ、その両手はコゼットとマリユスとの脣くちつけのままになっていた。彼は死んでいた。

夜は星もなく、深い暗さだった。必ずやその影の中には、ある広大なる天使が、魂を待ちながら翼をひろげて立っていたであろう。

六 草は隠し雨は消し去る

パール・ラシエーズの墓地の、共同埋葬所のほとり、その墳墓の都のりつぱな一郭から遠く離れ、永遠の面前に死の醜い様式をひろげて見せている種々工夫を凝らされた石碑の、立ち並んでる所から遠く離れ、寂しい片すみの、古い壁の傍そば、旋花ひるがおのからんだ一本の大きな水松いちいの下、茅草かやくさや苔こけのはえている中に、一基の石がある。その石もまた、他の石と同じく、長い年月の傷害や苔かびや鳥の糞ふんなどを免れてはいない。水のために緑となり、空気のために黒くなっている。近くには小道もなく、草が高く茂っていてすぐに足をぬら

すので、その方へ踏み込んでみようとする人もない。少し日がさす時には、とかげ蜥蜴がやつてくる。あたりには、野生の燕えんばく麦がそよいでいる。春には、木の間にほおしろ頬白がさえざる。その石には何らの加工も施してない。ただ墓石に用うるということだけを考えて切られたものであり、ただ人をひとりおおうだけの長さで幅としようということだけを注意されたものである。

何らの名前も見られない。

ただ、既にもう幾年か前に、だれかが四行の句を鉛筆で書きつけていたが、それも雨やほこりに打たれてしだいに読めなくなり、今日ではおそらく消えてしまったであろう。その句は次のとおりであった。

彼は眠る。数奇なる運命にも生きし彼、

おの己が天使を失いし時に死したり。

さあそれもみな自然の数ぞ、

昼去りて夜の来るがごとくに。

青空文庫情報

底本：「レ・ミゼラブル（四）」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年5月18日改版第1刷発行

※「橙花《オレンヂ》と橙花《オレンジ》」、「挺（何挺《なんちよう》）と挺（一挺）」、「大燭台《だいしよくだい》と大燭台《おおしよくだい》」、「イブとイヴ」、「撥条《ばね》と発条《ばね》」の混在は底本通りにしました。

※誤植の確認に「レ・ミゼラブル（六）」岩波文庫、岩波書店1960（昭和35）年8月30日第12刷、「レ・ミゼラブル（七）」岩波文庫、岩波書店1961（昭和36）年12月10日第13刷を用いました。

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2007年2月17日作成

2013年4月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

レ・ミゼラブル

LES MISERABLES

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 第五部 ジャン・ヴァルジャン

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>